

# 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 V

— 谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3) —

1986

日本道路公団東京第一建設局  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県北西部にあって、南流する江戸川を臨む流山市は、その恵まれた自然的環境から、古来より人々の居住に適しており、市内には数万年前からの人々の生活の跡が発見されています。

ところで、首都圏を中心とした交通網の整備の一環として流山市を横断するようにして、首都圏と常総地域、東北地方南部を結ぶ常磐自動車道が建設されることになり、千葉県教育委員会では、路線内の埋蔵文化財の取扱いについて日本道路公団と度々重なる協議を行ってまいりました。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、やむなく発掘調査を実施し記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会の指導により実施することとなり、昭和55年度から昭和57年度までの3ヵ年に8遺跡の調査を実施しました。その後、これらの遺跡の調査結果について整理を行ってまいりましたが、ここにその成果を「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」として刊行することとなりました。

各遺跡の内容については、報文中に詳述されていますが、先土器時代・縄文時代・古墳時代の人々の生活の跡や、中世あるいは近世の墓・塚など、さらに、近世の牧の一部である馬土手堀などが発見されました。このような歴史的遺産は、その地域に生きる人々の精神的なうらおいやゆとり、また、誇りを育むものであり、かつ、千葉県や流山市の歴史を学ぶうえで重要なものでもあります。残された唯一の記録である本報告書が、学術研究や教育資料として、また、文化財保護思想の普及と涵養に役立つことを願ってやみません。

最後となりましたが、風雨寒暑の過酷な中で発掘調査の現場作業に従事された地元の流山市及び柏市の皆様、また、膨大な出土品の整理に苦闘された皆様に心から御礼申し上げます。その他、調査並びに整理業務の遂行に当たり御指導・御協力を賜った千葉県教育庁文化課、日本道路公団東京第一建設局・同柏工事事務所・流山市教育委員会・流山市立博物館の関係諸機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和60年9月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

# 例 言

1. 本報告書は、日本道路公団による、常磐自動車道建設工事に伴う、千葉県流山市谷（センターコード、220-001）、上貝塚（220-002）、若葉台（220-003）、塚(1)（220-004）、馬土手(1)（220-005）、馬土手(1)（220-005）、馬土手(2)（220-006）、塚(2)（220-007）、馬土手(3)（220-008）、各遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書所収 8 遺跡の(1)所在地、(2)調査面積、(3)調査期間は下記のとおりである。

## 谷 遺 跡

- (1) 流山大字谷字入谷津501ほか
- (2) 2,000㎡
- (3) 昭和56年1月7日～昭和56年3月3日

## 上貝塚遺跡

- (1) 流山市大字桐ヶ谷字東割47-2ほか
- (2) 16,000㎡
- (3) 昭和56年1月7日～昭和56年3月3日（第1次）：2,000㎡  
昭和56年10月1日～昭和57年3月31日（第2次）：8,400㎡  
昭和57年4月1日～昭和57年7月31日（第3次）：5,600㎡

## 若葉台遺跡

- (1) 流山市大字桐ヶ谷南割144ほか
- (2) 30,000㎡
- (3) 昭和56年10月1日～昭和57年3月31日（第1次）：14,000㎡  
昭和57年4月1日～昭和57年7月31日（第2次）：16,000㎡

## 塚

- (1) 流山市西初石2丁目229-1
- (2) 400㎡
- (3) 昭和57年8月1日～昭和57年9月21日

## 馬土手(1)

- (1) 流山市大字上新宿字宿後333
- (2) 750㎡
- (3) 昭和57年8月1日～昭和57年9月21日

## 馬土手(2)

- (1) 流山市駒木台505ほか
- (2) 1,200㎡
- (3) 昭和57年8月1日～昭和57年9月21日

塚 (2)

- (1) 流山市青田69ほか
- (2) 1,000㎡
- (3) 昭和57年9月1日～昭和57年9月30日

馬土手(3)

- (1) 流山市大字青田69ほか
- (2) 1,500㎡
- (3) 昭和56年3月9日～昭和56年3月31日

3. 発掘調査から、本報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、千葉教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
4. 発掘調査に関する組織、担当職員は下記のとおりである。

昭和55年度

調査部長 白石竹雄  
部長補佐 栗本佳弘  
班長 天野努  
調査研究員 石倉亮治 杉崎茂樹 郷堀英司

昭和56年度

調査部長 白石竹雄  
部長補佐 天野努  
班長 清藤一順  
調査研究員 田中豪 郷堀英司 鈴木文雄 萩原恭一 石井ひろみ

昭和57年度

調査部長 白石竹雄  
部長補佐 天野努  
班長 清藤一順  
調査研究員 田中豪 郷堀英司 鈴木文雄 萩原恭一 海老原充

5. 報告書の作成は下記の組織、担当職員があたった。

昭和59年度

調査部長 鈴木道之助  
部長補佐 根本弘  
班長 鈴木定明



主任調査研究員 橋本勝雄

調査研究員 郷堀英司 田井知二

### 昭和60年度

調査部長 鈴木道之助

部長補佐 岡川宏道

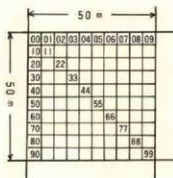
班長 矢戸三男

主任調査研究員 田村隆

調査研究員 原田昌幸

6. 原稿執筆は、田村、郷堀、原田の共同討議を経て、分担執筆としたが、各文末に最終的な文責の所在を明示した。編集は田村が担当した。
7. 第1図には、国土地理院著作発行、2万5千分の1地形図「流山」を使用している。
8. 本書に掲載した図面の方位は座標北とした。
9. 各遺跡の遺構番号は、発掘調査時に付された番号を踏襲しているが、先土器時代のブロックはこの限りではない。
10. 第6編は、第1章を当センター主任調査研究員（昭和60年度）小宮 孟に執筆を依頼したが、第2章以下はバリノ・サーヴェイ株式会社の委託研究の成果となっている。
11. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏の御指導を賜りました。ここに謝意を表します。

日本道路公団東京第一建設局及び同柏工事事務所、千葉県教育庁文化課、流山市教育委員会、安斉正人、新井和之、大竹憲昭、大塚達朗、小川静夫、織笠明子、織笠 昭、金山喜昭、栗島義明、齋藤幸恵、佐藤宏之、西井幸雄、武藤康弘、山崎和巳（敬称略）



大グリッド(2,500m<sup>2</sup>)内の小グリッド(25m<sup>2</sup>)配置

# 本文目次

序文	
例言	
序説	1
第1篇 谷遺跡	
第1章 調査の概要	9
A 調査の経過	9
B 調査の方法	9
C 遺構の概要	9
第2章 遺構と遺物	11
第3章 縄文時代の遺物	20
第4章 小結	25
A 古墳時代	25
B 平安時代	25
第2篇 上貝塚遺跡	27
第1章 先土器時代	29
A 概要	29
B ブロックとその遺物	29
C 小結	41
第2章 縄文時代	44
A 遺構・遺物の概要	44
B 竪穴住居跡とその出土遺物	51
C 炉穴	71
D 土坑	71
E 遺構外出土の土器	76
F 石器・石製品	96
G 遺物分布の特色に見る上貝塚遺跡の動態	108
第3章 古墳時代	110
A 概要	110
B 遺構各説	110

C 小結 .....	153
第4章 中・近世以降 .....	154
A 概要 .....	154
B 遺構各説 .....	154
C 小結 .....	170
第3篇 若葉台遺跡 .....	171
第1章 先土器時代 .....	173
A 概要 .....	173
B ブロックとその遺物 .....	173
C 小結 .....	209
第2章 縄文時代 .....	210
A 遺構・遺物の概要 .....	210
B 竪穴住居跡とその出土遺物 .....	211
C 土坑とその出土遺物 .....	259
D 溝出土の土器 .....	266
E 遺構外出土の土器 .....	272
F 石器・石製品 .....	305
G 遺物分布の特色に見る若葉台遺跡の動態 .....	327
第3章 中・近世以降 .....	329
A 概要 .....	329
B 遺構各説 .....	329
C 小結 .....	331
第4篇 塚(1)・塚(2) .....	335
第1章 塚(1) .....	337
第2章 塚(2) .....	340
第3章 小結 .....	341
第5篇 馬土手(1)・馬土手(2)・馬土手(3) .....	345
第1章 馬土手(1) .....	347
第2章 馬土手(2) .....	347
第3章 馬土手(3) .....	358
第4章 小結 .....	362

付篇 塚・馬土手出土の縄文時代遺物 .....	363
第6篇 自然科学的研究 .....	367
第1章 若葉台遺跡009住居跡出土の貝類・甲殻類 .....	369
第2章 若葉台遺跡の古環境復原 .....	376
第3章 上貝塚遺跡001住居跡の炭化材樹種同定 .....	386
第7篇 綜括・黒浜期の諸問題 .....	389

# 挿 図 目 次

## 序 説

- 第1図 遺跡の位置

## 第1編 谷遺跡

- 第2図 谷遺跡地形図・グリッド設定図  
 第3図 谷遺跡遺構配置図  
 第4図 002住居跡  
 第5図 002住居跡出土遺物(1)  
 第6図 002住居跡出土遺物(2)  
 第7図 002住居跡出土遺物(3)  
 第8図 003住居跡  
 第9図 003住居跡出土遺物  
 第10図 グリッド出土の遺物  
 第11図 谷遺跡出土の古銭  
 第12図 谷遺跡出土の縄文土器(1)  
 第13図 谷遺跡出土の縄文土器(2)  
 第14図 谷遺跡出土の石器(1)  
 第15図 谷遺跡出土の石器(2)

## 第2編 上貝塚遺跡

- 第16図 上貝塚遺跡全体図  
 第17図 上貝塚遺跡先土器時代全体図  
 第18図 第1ブロック遺物出土状況  
 第19図 第2ブロック(上)、第3ブロック(下)遺物出土状況  
 第20図 第4ブロック(上)、第5ブロック(下)遺物出土状況  
 第21図 第6ブロック遺物出土状況  
 第22図 第1～第6ブロック出土石器  
 第23図 第7ブロック遺物出土状況(同石器部)  
 第24図 上貝塚遺跡出土縄文土器時期別数量比  
 第25図 上貝塚遺跡遺構時期別分布図(縄文時代)  
 第26図 上貝塚遺跡グリッド別遺物分布図(1)  
 第27図 上貝塚遺跡グリッド別遺物分布図(2)  
 第28図 005住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第29図 005住居跡出土遺物(1)  
 第30図 005住居跡出土遺物(2)  
 第31図 006住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第32図 006住居跡出土遺物  
 第33図 007住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第34図 007住居跡出土土器個別接合図  
 第35図 007住居跡出土遺物(1)  
 第36図 007住居跡出土遺物(2)  
 第37図 007住居跡出土遺物(3)  
 第38図 007住居跡出土遺物(4)  
 第39図 013住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第40図 013住居跡出土遺物  
 第41図 016住居跡平面図及び遺物分布図

- 第42図 016住居跡断面図  
 第43図 016住居跡出土土器個別接合図  
 第44図 016住居跡出土遺物(1)  
 第45図 016住居跡出土遺物(2)  
 第46図 016住居跡出土遺物(3)  
 第47図 016住居跡出土遺物(4)  
 第48図 208炉穴平・断面図  
 第49図 202、203、205土坑平・断面図  
 第50図 206、207、223土坑平・断面図  
 第51図 229、234土坑平・断面図  
 第52図 早期前半の土器(1)  
 第53図 早期前半の土器(2)  
 第54図 早期後半の土器・前期前半の土器(1)  
 第55図 前期前半の土器(2)  
 第56図 前期前半の土器(3)  
 第57図 前期前半の土器(4)  
 第58図 前期前半の土器(5)  
 第59図 前期前半の土器(6)・前期前半の土器(1)  
 第60図 前期前半の土器(2)  
 第61図 前期前半の土器(3)  
 第64図 前期前半の土器(4)  
 第63図 前期前半の土器(7)・前期前半の土器(5)  
 第64図 前期前半の土器(6)  
 第65図 中期前半～後期前半の土器  
 第66図 後期前半～後期後半の土器  
 第67図 後期後半～晩期前半の土器  
 第68図 晩期の土器・土鏃・土製円板  
 第69図 石 器(1)  
 第70図 石 器(2)  
 第71図 石 器(3)  
 第72図 石 器(4)  
 第73図 石 器(5)  
 第74図 石 器(6)  
 第75図 石 器(7)  
 第76図 石 器(8)  
 第77図 石 器(9)・土製品  
 第78図 001住居跡  
 第79図 001住居跡炭化材及び味噌遺物出土状況  
 第80図 001住居跡カメラ  
 第81図 001住居跡出土遺物(1)  
 第82図 001住居跡出土遺物(2)  
 第83図 001住居跡出土遺物(3)  
 第84図 002住居跡  
 第85図 002住居跡カメラ  
 第86図 002住居跡出土遺物  
 第87図 003住居跡  
 第88図 003住居跡出土遺物(1)  
 第89図 003住居跡出土遺物(2)

- 第90図 008住居跡  
 第91図 008住居跡カマド  
 第92図 008住居跡出土遺物  
 第93図 009住居跡  
 第94図 009住居跡カマド  
 第95図 009住居跡出土遺物  
 第96図 010住居跡  
 第97図 010住居跡カマド  
 第98図 010住居跡出土遺物  
 第99図 011住居跡出土遺物  
 第100図 011住居跡  
 第101図 014住居跡  
 第102図 014住居跡カマド  
 第103図 014住居跡出土遺物 (1)  
 第104図 014住居跡出土遺物 (2)  
 第105図 015住居跡  
 第106図 015住居跡出土遺物 (1)  
 第107図 015住居跡出土遺物 (2)  
 第108図 004竪穴状遺構  
 第109図 土埴全体図  
 第110図 201・218土埴  
 第111図 216・217土埴  
 第112図 219・220・221土埴  
 第113図 224・225・226土埴  
 第114図 227土埴  
 第115図 201土埴出土石器  
 第116図 55年度調査区001～004遺構平・断面図  
 第117図 55年度調査区005・007～009遺構平・断面図  
 第118図 101溝平・断面図  
 第119図 103溝平・断面図  
 第120図 磁器  
 第121図 55年度調査区出土陶磁器  
 第122図 上貝塚遺跡出土古銭 (1)  
 第123図 上貝塚遺跡出土古銭 (2)

### 第3編 若葉台遺跡

- 第124図 若葉台遺跡全体図  
 第125図 若葉台遺跡先土器時代全体図  
 第126図 第1ブロック遺物出土状況  
 第127図 第1ブロック石器  
 第128図 第2ブロック遺物出土状況  
 第129図 第3ブロック遺物出土状況  
 第130図 第3ブロック石器 (1)  
 第131図 第3ブロック石器 (2)  
 第132図 第4ブロック遺物出土状況  
 第133図 第4ブロック石器  
 第134図 第5ブロック遺物出土状況  
 第135図 第5ブロック石器 (1)  
 第136図 第5ブロック石器 (2)  
 第137図 第5ブロック石器 (3)  
 第138図 第6ブロック遺物出土状況  
 第139図 第6ブロック石器 (1)  
 第140図 第6ブロック石器 (2)  
 第141図 第7ブロック遺物出土状況  
 第142図 第7ブロック石器  
 第143図 ブロック外表面採集の石器 (1)  
 第144図 ブロック外表面採集の石器 (2)  
 第145図 若葉台遺跡出土縄文土器時期別数量比  
 第146図 若葉台遺跡遺構時期別分布図(縄文時代)及びグリッド別遺物分布図 (1)  
 第147図 若葉台遺跡グリッド別遺物分布図 (2)  
 第148図 若葉台遺跡グリッド別遺物分布図 (3)  
 第149図 001住居跡平・断面図  
 第150図 001住居跡遺物分布図  
 第151図 001住居跡出土遺物  
 第152図 002住居跡平・断面図  
 第153図 002住居跡遺物分布図及び伊勢岡辺遺物出土状況図  
 第154図 002住居跡出土土器個別接合図 (1)  
 第155図 002住居跡出土土器個別接合図 (2)  
 第156図 002住居跡出土遺物 (1)  
 第157図 002住居跡出土遺物 (2)  
 第158図 002住居跡出土遺物 (3)  
 第159図 003住居跡平・断面図  
 第160図 003住居跡遺物分布図及び住居内土埴断面図  
 第161図 003住居跡出土遺物 (1)  
 第162図 003住居跡出土遺物 (2)  
 第163図 004住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第164図 004住居跡出土遺物  
 第165図 005住居跡平・断面図  
 第166図 005住居跡遺物分布図  
 第167図 005住居跡出土遺物 (1)  
 第168図 005住居跡出土遺物 (2)  
 第169図 006住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第170図 006住居跡出土遺物  
 第171図 007住居跡平・断面図  
 第172図 007住居跡・伊勢断面図及び遺物分布図  
 第173図 007住居跡出土遺物  
 第174図 008住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第175図 008住居跡出土遺物  
 第176図 009住居跡平・断面図  
 第177図 009住居跡遺物分布図及び貝ブロック断面図  
 第178図 009住居跡出土土器個別接合図 (1)  
 第179図 009住居跡出土土器個別接合図 (2)  
 第180図 009住居跡出土土器個別接合図 (3)  
 第181図 009住居跡出土遺物 (1)  
 第182図 009住居跡出土遺物 (2)  
 第183図 009住居跡出土遺物 (3)  
 第184図 009住居跡出土遺物 (4)  
 第185図 009住居跡出土遺物 (5)  
 第186図 009住居跡出土遺物 (6)  
 第187図 009住居跡出土遺物 (7)  
 第188図 010住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第189図 010住居跡出土遺物

- 第190図 011住居跡平・断面図及び遺物分布図  
 第191図 011住居跡遺物分布図  
 第192図 011住居跡出土遺物 (1)  
 第193図 011住居跡出土遺物 (2)  
 第194図 201～203・205土坑平・断面図  
 第195図 206・207土坑平・断面図  
 第196図 208～211土坑平・断面図  
 第197図 212～216土坑平・断面図  
 第198図 201・202・207・208・210～214土坑出土遺物  
 第199図 215土坑出土遺物  
 第200図 108溝出土遺物  
 第201図 早期前半の土器 (1)  
 第202図 早期前半の土器 (2)・早期後半の土器  
 第203図 前期前半の土器 (1)  
 第204図 前期前半の土器 (2)  
 第205図 前期前半の土器 (3)  
 第206図 前期前半の土器 (4)  
 第207図 前期前半の土器 (5)  
 第208図 前期前半の土器 (6)  
 第209図 前期前半の土器 (7)  
 第210図 前期前半の土器 (8)  
 第211図 前期前半の土器 (9)  
 第212図 前期前半の土器 00  
 第213図 前期前半の土器 01  
 第214図 前期前半の土器 02  
 第215図 前期前半の土器 03  
 第216図 前期前半の土器 04  
 第217図 前期前半の土器 05  
 第218図 前期前半の土器 06  
 第219図 前期前半の土器 07  
 第220図 前期後半の土器 (1)  
 第221図 前期後半の土器 (2)  
 第222図 前期後半の土器 (3)・中期前半の土器  
 第223図 中期前半～中期後半の土器  
 第224図 中期後半～後期前半の土器  
 第225図 後期後半の土器 (1)  
 第226図 後期後半の土器 (2)  
 第227図 晩期前半の土器  
 第228図 晩期の土器・土鏃・土製円板  
 第229図 若葉台遺跡遺構出土の石器・石製品  
 第230図 石 器 (1)  
 第231図 石 器 (2)  
 第232図 石 器 (3)  
 第233図 石 器 (4)  
 第234図 石 器 (5)  
 第235図 石 器 (6)  
 第236図 石 器 (7)  
 第237図 石 器 (8)  
 第238図 石 器 (9)  
 第239図 石 器 00  
 第240図 石 器 01  
 第241図 石 器 02

- 第242図 石 器 03  
 第243図 石 器 04  
 第244図 石 器 05  
 第245図 石製品と土製品  
 第246図 101～107溝平・断面図  
 第247図 108溝・217～221土坑平・断面図  
 第248図 217～221土坑平・断面図  
 第249図 若葉台遺跡出土古銭

#### 第4篇 塚(1)・(2)

- 第250図 塚 (1) 平面図  
 第251図 塚 (1)・塚 (2) 断面図  
 第252図 塚 (1) 出土石塔  
 第253図 塚 (1) 出土土器  
 第254図 塚 (1) 出土石器  
 第255図 塚 (1) 出土古銭  
 第256図 塚 (2) 及び土坑群平・断面図

#### 第5篇 馬土手(1)・(2)・(3)

- 第257図 馬土手 (1) 平面図  
 第258図 馬土手 (1) 断面図  
 第259図 馬土手 (1) 出土陶磁器 (1)  
 第260図 馬土手 (1) 出土陶磁器 (2)  
 第261図 馬土手 (1) 出土陶磁器 (3)  
 第262図 馬土手 (1) 出土陶器 (1)  
 第263図 馬土手 (1) 出土陶器 (2)  
 第264図 馬土手 (2) 平面図  
 第265図 馬土手 (2) 断面図  
 第266図 馬土手 (2) 出土陶磁器  
 第267図 馬土手 (3) 平・断面図  
 第268図 馬土手 (3) 出土陶磁器  
 第269図 馬土手 (1)・(2)・(3) 出土古銭

#### 付 篇

- 第270図 馬土手 (1)・(2)・(3) 出土土器  
 第271図 馬土手 (1)・(2)・(3) 出土石器

#### 第6篇 自然科学

- 第272図 Dブロック出土ハマグリ殻長分布  
 第273図 Dブロック出土シオフキ殻長分布  
 第274図 Eブロック出土ハマグリ殻長分布  
 第275図 Eブロック出土シオフキ殻長分布  
 第276図 若葉台遺跡重鉱物・花粉分析結果

#### 第7篇 総括・果浜期の諸問題

- 第277図 若葉台遺跡縄文時代前期黒浜期の竪穴住居跡出土土器の文様組成比



# 目 次

## 第1篇 谷遺跡

- 表1 002住居跡出土遺物一覽  
表2 003住居跡出土遺物一覽  
表3 銭貨計測値表

## 第2篇 上具塚遺跡

- 表4 石器集計表  
表5 第1ブロック石器属性表  
表6 第2ブロック石器属性表  
表7 第3ブロック石器属性表  
表8 第4ブロック石器属性表  
表9 第5ブロック石器属性表  
表10 第6ブロック石器属性表  
表11 第7ブロック石器属性表  
表12 上具塚遺跡遺構出土石器一覽  
表13 001住居跡出土遺物一覽  
表14 002住居跡出土遺物一覽  
表15 003住居跡出土遺物一覽  
表16 006住居跡出土遺物一覽  
表17 009住居跡出土遺物一覽  
表18 010住居跡出土遺物一覽  
表19 011住居跡出土遺物一覽  
表20 014住居跡出土遺物一覽  
表21 015住居跡出土遺物一覽  
表22 銭貨計測値表

## 第3篇 若葉台遺跡

- 表23 石器集計表  
表24 第1ブロック石器属性表  
表25 第2ブロック石器属性表  
表26 第3ブロック石器属性表  
表27 第4ブロック石器属性表  
表28 第5ブロック石器属性表  
表29 第6ブロック石器属性表  
表30 第7ブロック石器属性表  
表31 若葉台遺跡遺構出土石器一覽  
表32 銭貨計測値表

## 第4篇 塚 (1)・塚 (2)

- 表33 銭貨計測値表

## 第5篇 馬土手 (1)・馬土手 (2)・馬土手 (3)

- 表34 銭貨計測値表

## 第6篇 自然科学的研究

- 表35 009住居跡出土の動物遺存体  
表36 Bブロックにおける同定結果  
表37 Cブロックにおける同定結果

- 表38 Dブロックにおける同定結果  
表39 009住居跡Dブロック出土ハマグリ殻長計測値(左殻)  
表40 009住居跡Dブロック出土シオフキ殻長計測値(左殻)  
表41 009住居跡Eブロック出土ハマグリ殻長計測値(左殻)  
表42 009住居跡Eブロック出土シオフキ殻長計測値(左殻)  
表43 Eブロックにおける同定結果  
表44 Gブロックにおける同定結果  
表45 各ブロックにおける出土具類集計結果  
表46 若葉台遺跡分析資料一覽  
表47 若葉台遺跡花粉分析結果  
表48 古植生と古気候の関係  
表49 上具塚遺跡炭化材同定結果



# 目 次

## 第1篇 谷遺跡

- PL. 1 遺跡全景・調査状況  
PL. 2 002住居跡・003住居跡

## 第2篇 上貝塚遺跡

- PL. 3 遺跡全景・調査状況  
PL. 4 001住居跡・002住居跡  
PL. 5 003住居跡・004住居跡  
PL. 6 005住居跡・006住居跡  
PL. 7 007住居跡・008住居跡  
PL. 8 009住居跡・010住居跡  
PL. 9 014住居跡・015住居跡  
PL. 10 016住居跡・202土坑  
PL. 11 203土坑・205土坑  
PL. 12 206土坑・208炉穴  
PL. 13 遺構内出土土器(005・007)  
PL. 14 遺構内出土土器(016)  
PL. 15 遺構内出土土器(005)  
PL. 16 遺構内出土土器(006・007)  
PL. 17 遺構内出土土器(007)  
PL. 18 遺構内出土土器(007)  
PL. 19 遺構内出土土器(013)  
PL. 20 遺構内出土土器(016)  
PL. 21 遺構内出土土器(016)  
PL. 22 グリッド出土の土器(前期前半・前期後半)  
PL. 23 グリッド出土の土器(早期前半)  
PL. 24 グリッド出土の土器(早期前半・早期後半・前期前半)  
PL. 25 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 26 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 27 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 28 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 29 グリッド出土の土器(前期前半)

## 第3篇 若葉台遺跡

- PL. 30 遺跡全景・調査状況  
PL. 31 先土器No.5・No.6ブロック  
PL. 32 001住居跡・002住居跡  
PL. 33 003住居跡・005住居跡  
PL. 34 006住居跡・007住居跡  
PL. 35 008住居跡・009住居跡  
PL. 36 010住居跡・011住居跡  
PL. 37 202土坑・205土坑  
PL. 38 206土坑・207土坑  
PL. 39 208土坑・210土坑  
PL. 40 215土坑・216土坑  
PL. 41 遺構内出土土器(002)  
PL. 42 遺構内出土土器(002)

- PL. 43 遺構内出土土器(005・006・009)  
PL. 44 遺構内出土土器(009)  
PL. 45 遺構内出土土器(009)  
PL. 46 遺構内出土土器(009)  
PL. 47 遺構内出土土器(009)  
PL. 48 遺構内出土土器(009・011)  
PL. 49 遺構内出土土器(001)  
PL. 50 遺構内出土土器(002)  
PL. 51 遺構内出土土器(002)  
PL. 52 遺構内出土土器(003)  
PL. 53 遺構内出土土器(005)  
PL. 54 遺構内出土土器(005・007)  
PL. 55 遺構内出土土器(007・008)  
PL. 56 遺構内出土土器(008・009)  
PL. 57 遺構内出土土器(009)  
PL. 58 遺構内出土土器(009)  
PL. 59 遺構内出土土器(009)  
PL. 60 遺構内出土土器(009)  
PL. 61 遺構内出土土器(011)  
PL. 62 遺構内出土土器(011)  
PL. 63 遺構内出土土器(108・201~210)  
PL. 64 遺構内出土土器(211~214・215)  
PL. 65 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 66 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 67 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 68 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 69 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 70 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 71 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 72 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 73 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 74 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 75 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 76 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 77 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 78 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 79 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 80 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 81 グリッド出土の土器(前期前半)  
PL. 82 グリッド出土の土器(後期)  
PL. 83 グリッド出土の土製品・土器(補遺)

## 第4篇 塚(1)・(2)

- PL. 84 塚(1) 調査前全景・全景  
PL. 85 塚(1) 遺するべ  
PL. 86 塚(1) 庚申塚・出土遺物  
PL. 87 塚(1) 出土遺物  
PL. 88 塚(2) 調査前全景・全景

**第5篇 馬土手(1)・(2)・(3)**

PL. 89 馬土手 (1) 調査前全景・調査状況

PL. 90 馬土手 (2) 調査前・調査状況

**石 器**

PL. 91 上貝塚・若葉台遺跡先土器時代の石器

PL. 92 若葉台遺跡先土器時代の石器

PL. 93 若葉台遺跡縄文時代の石器

PL. 94 若葉台遺跡縄文時代の石器

PL. 95 若葉台遺跡縄文時代の石器

**第6篇 上貝塚遺跡001住居跡出土炭化材**

PL. 96 資料No.1・No.3

PL. 97 資料No.4・No.5

PL. 98 資料No.6・No.7

PL. 99 資料No.8・No.9

PL. 100 資料No.10・No.11

序

說

これから報告しようとする8遺跡は、千葉県流山市の中央部を東西に連絡するように分布している。

流山市は千葉県の北端に近く、江戸川をへだてて、埼玉県北葛飾郡吉川町、同三郷市に面している。市街地は、この江戸川に沿う狭い沖積地に南北に長く発達しているが、その東側は標高20m程の下総台地に接している。流山市と、その東側に位置する柏市の周辺は、三角洲状をしている下総台地の収縮部にあたり、台地の幅も7km～8km程度であり、野田市、東葛飾郡閑宿町と北上するにつれ、その幅員も漸減し、閑宿町三軒家において、消滅する。利根川と江戸川との分岐点である。

この江戸川に臨む台地上には、先土器時代以降のおびただしい遺跡が残されているが、それは特に台地縁辺に濃く、主要河川は言うまでもないが、そこから枝分かれした支谷沿いにもまた、点々と祖先の足跡を追うことができる。本報告書で扱った谷、上貝塚、若葉台と言った諸遺跡も、そのような遺跡立地の典型を示している。

また、本地域は、慶長十九年に江戸幕府により創設された上野牧の所在地としても知られ、それに関連する遺構の調査をも収録することができた。なお、上野牧は、享保七年に分割整理されており、今回の調査に係る遺構は高田台牧の関連遺構と言うのが正確なところであろう(松下、昭和57年)。

次に、谷、上貝塚、若葉台の3遺跡について、それらの立地、環境に就いて検討してみよう。第1図を見ると、谷、上貝塚の両遺跡は、現在の江戸川に沿う台地上にあり、南北に走る支谷によって若葉台遺跡とへだてられている。この支谷は下花輪支谷と呼ばれ(竹内、昭和54年)、その湧水点近くには、縄文時代後晩期の馬蹄形貝塚である上新宿貝塚があり、上貝塚遺跡の南には、やはり馬蹄形貝塚として知られる上貝塚貝塚が位置する他に、ナイフ形石器や小型石槍の一括資料を出した桐ヶ谷新田遺跡、縄文早期から歴史時代に及ぶ大複合遺跡である下花輪第2遺跡等がある。

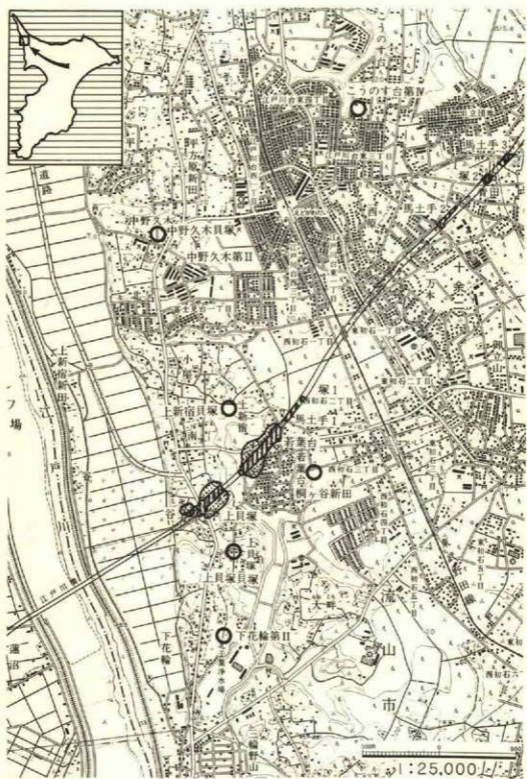
このように、下花輪支谷を一瞥しただけでも、この地域が縄文時代の貝塚地帯であることが窺われる。事実、この度の調査においても、若葉台遺跡で縄文前期の貝ブロックを調査する機会を得たが、奥東京湾と地域区分される本地域の特質をよく示している。奥東京湾東岸に貝塚の形成され初めた時期は、草創期末、松戸市谷ッロ貝塚とも考えられるが、確実とは言えないようであり(堀越、昭和58年)、松戸市幸田貝塚以降とするのが一般的であろう。幸田貝塚は、花積下層式に貝層が伴い、関山式に続くが、この地域を全般的に見ると、やはり、黒浜式段階の貝塚が圧倒的に多い。

最後に、各遺跡の立地に就いて簡単に触れておこう。谷遺跡と上貝塚遺跡とは、共に江戸川と下花輪支谷とはさまれた、狭い台地上に隣接しており、良く似た環境下に形成されているが、若葉台遺跡の場合、若葉台団地の造成工事の為に、旧地形が大きく変更を受け、かつ遺跡南半分が破壊されるなどして、立地状態が把握し難い。おそらく、遺跡北端にある金刀比羅神社のあたりの湧水点から下花輪支谷に注ぐ谷津に南面する台地上に位置することは確かだろうが、この谷津に派生し、遺跡足下に入り込む股谷も存在したと推定される。そしてこの場合、先土器時代のブロック群、黒浜式期の住居跡群は、この股谷の谷頭を取り巻くように分布していたことが予測される。(田村)

#### 第1図記載遺跡に関する主要文献

- 中野久木貝塚 酒舘伸男 日本貝塚地名表 昭和34年  
流山市教育委員会 流山の遺跡 昭和56年

- 中野久木第Ⅱ遺跡 中山吉秀ほか 中野久木遺跡調査報告書 昭和49年
- 上新宿貝塚 上川名昭ほか 千葉県上新宿貝塚略報(日本大学第3高等学校年報11) 昭和41年  
上川名昭 千葉県流山市上新宿貝塚(日本考古学年報19) 昭和46年
- 桐ヶ谷新田遺跡 朝比奈竹男ほか 桐ヶ谷新田遺跡 昭和54年
- 上貝塚貝塚 酒詰伸男 日本貝塚地名表 昭和34年  
流山市教育委員会 流山の遺跡 昭和56年
- 下花輪第Ⅱ遺跡 下津谷達男 流山市大畔台下花輪第2遺跡調査報告書 昭和48年
- こうのす台第Ⅳ遺跡 流山市教育委員会 流山の遺跡 昭和56年  
川根正教・増崎仁 こうのす台第Ⅳ遺跡 昭和58年



第1図 道跡の位置 (縦横部調査区域)

第1篇 谷 遺 跡

# 第1章 調査の概要

## A. 調査の経過

谷遺跡（センターコードNo220-001）は、流山市大字谷入谷津50地に所在し、江戸川左岸の標高約18mの台地上とその南側の緩斜面に位置している。

地形測量及び基準点測量は、調査に先立って、測量業者に委託し実施した。

現地における調査は昭和56年1月12日から実施し、環境整備終了後、土層の堆積状況などを確認するためにトレンチ発掘を行なった。この結果、遺跡の大部分においてソフトローム層中まで削平が及ぶことが判明し、遺物の出土量も僅少であったため、1月下旬より重機による表土除去作業を行った。

2月12日から本格的に遺構の精査に取り掛かり、2月下旬までに、すべての遺構の精査を終了した。また、この間に併行して先土器時代のトレンチ調査も行ない、3月6日には撤収作業を済ませ、現場における調査を終了した。

## B. 調査の方法

発掘にあたっては、国土方眼座標（第9座標系）の基準点（X=-13,600、Y=6,500）を基点に置き、10m方眼のグリッドを設定した。

グリッドの呼称は東西方向で、西から順にA・B・C……、南北方向に北から順次1・2・3……と付して、その組合せでD-9、G-7のように表記している。

なお、後述する上貝塚、若葉台の高遺跡の調査にあたっては、谷遺跡も内包する形でグリッドを設定しており、今回の報告において、すべての遺跡でのグリッド呼称が統一した形でなされるべきであったが、整理作業時における混乱や複雑さを避けるために本遺跡だけは現場でのグリッド設定に従っている。ちなみに本遺跡の基点としたA-1は上貝塚、若葉台遺跡のグリッド設定ではA4-04に対応している。

## C. 遺構の概要

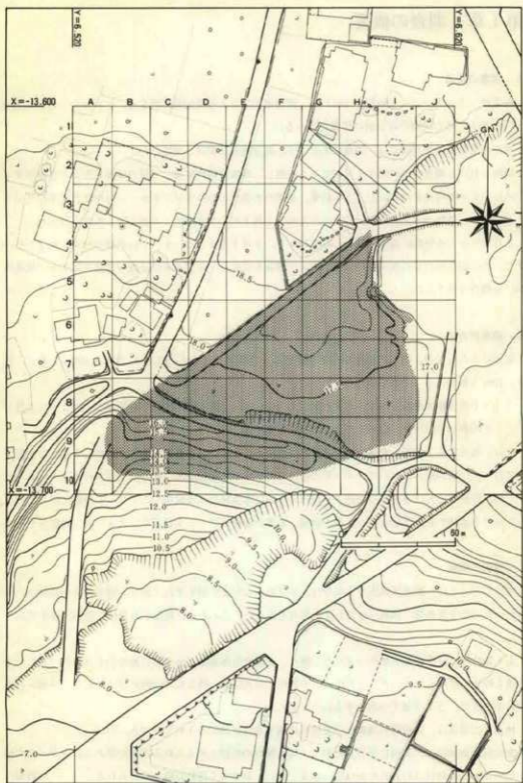
前述したように、調査区域内の大部分は、ソフトローム中まで削平されており、削平の深い部分はハードロームの第2黒色帯（VII層）までおよぶ地点もあった。このため、検出した遺構、遺物は僅かであった。

先土器時代では遺物集中箇所はまったく無く、遺構検出作業中に出土した割片が1点のみである。また縄文時代の遺構もなく、グリッド出土の土器片で型式認定し得るものは99点だけであり、早期から晩期に至るまで、ごく少量ずつ出土するにとどまった。

検出した遺構は、古墳時代後期と平安時代に属する住居跡が各1軒だけであった。

調査区の南側には、斜面に平行した形で、地山整形の痕跡と考えられる段差が認められるが、この地山整形がいつの時代に行われたかははっきりしない。おそらく近世以降と考えられる。（郷嶽）





第2図 谷遺跡地形図・グリッド設定図 (1/1,000)

## 第2章 遺構と遺物

### 古墳時代

谷遺跡(220-001)で検出した古墳時代の遺構は僅かに002住居跡1軒だけである。検出地点は調査区域の北西端に近く、台地の平坦部から斜面部に移行し始める境界部に構築されている。

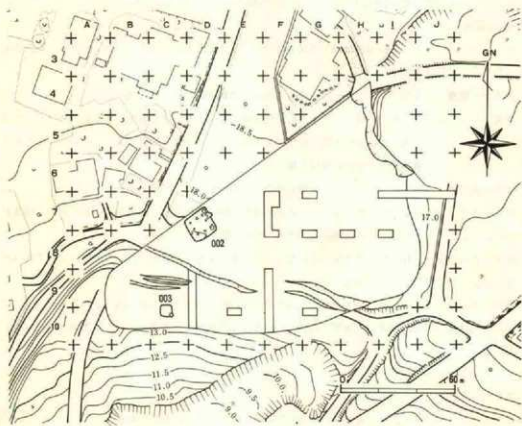
### 002住居跡

D-7・8グリッド(上貝塚遺跡56年度調査時のグリッド配置に従えばB3-30・40グリッドを中心とした地点)に位置する。

プラン・規模 正方形を呈し、一辺6.9mを測る。主軸方向 N-33°-W

所見 調査前の現状は、舗装道路になっており、この道路建設の際にIII層(ソフトローム層)中まで削平が及んでいたものと考えられる。このため、住居跡の壁高の遺存状態は良好といえず、最も遺存の良い所で、現存壁高20cm程度である。また南西隅には五角形を呈し、床面からの深さ20cm程の掘り込みを検出した。この掘り込みは攪乱となっている様子は全くなく、この掘り込みの床面も、住居跡本来の壁面で立ち上がりを見せるところから、この住居跡に伴うものと考えられる。

カマドのある東壁側の両端には貯蔵穴(P1・P2)が各1基設けられる。P1は1×0.9mの長方形



第3図 谷遺跡遺構配置図(1/1,000)

を呈し、深さ47cmを測る。またP2は柱穴P3の掘方と接して設けられているため正確な形状は不明だが、0.75×1.0mの長方形を呈したものとされる。深さは37cmで床面は平坦になっている。

柱穴(P3～P10)は8本検出しており、掘方の深さは、P3=39cm、P4=39cm、P5=70cm、P6=25cm、P7=38cm、P8=27cm、P9=40cm、P10=34cmを測る。

カマドは東壁の北側寄りに構築されているが、遺存状態は悪く、構築材である粘土と山砂に、焼土粒が混入した状態で崩壊していた。袖部の幅は現存する部位で1.2mを測り、壁への掘り込みは幅1.15m、外方へ45cmで弧を描いている。

住居の覆土は次のようになっている。1層：黒色土層。焼土粒を少量含む。2層：暗褐色土層。ロームブロックを少量含む。

遺物は住居の南半分にかけて多く出土するが、住居跡周辺部の資料と接合するものもあり、周辺部で出土した管玉(24)も、本住居に伴う資料と考え、この項で掲載している。土師器は坏、高坏、甕、甑などがある。10は大形の器形で、皿とも呼ぶべきものであろうか。11の高坏はカマド内、13の甕は貯蔵穴P1からの出土である。これらの土器の他に、土玉(17～20)、刀子(21)、碧玉製管玉(23・24)、滑石製白玉(25～28)、有孔円盤の未製品(29)や、不明石製品(22)がある。

#### 平安時代

平安時代の遺構は003住居跡1軒のみで、調査区西側の南下りの斜面部で検出した。

#### 003住居跡

C-9・10グリッド(上貝塚遺跡56年度調査時のグリッド配置に従えばA3-78・88グリッドを中心とした地点)に位置する。

プラン・規模 不整形を呈し、一辺2.95mを測る。主軸方向 N-87-E

所見 斜面部の黒色土層中で検出された小形の住居跡であり、覆土層も黒色土であるためプランの確認は困難であったが、覆土層には粒土粒、炭化物を多量に含み、全体に粘性の強い、やわらかな土層であったので、この土層の範囲で住居の規模を推定した。

壁は床面から、なだらかに立ち上がり、現存壁高は遺存の良い所で20cmを測る。

カマドは東壁の南寄りの所に構築されているが、遺存状態は極めて悪く、僅かに粘土や山砂の構築材が散在していた。壁への掘り込みは幅67cm、外方へ40cmで弧を描いている。

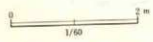
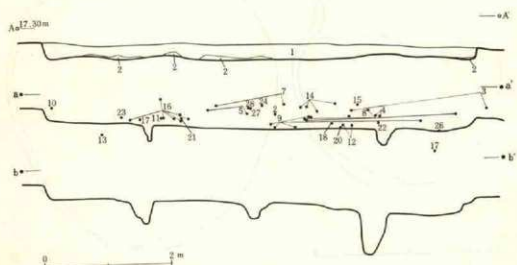
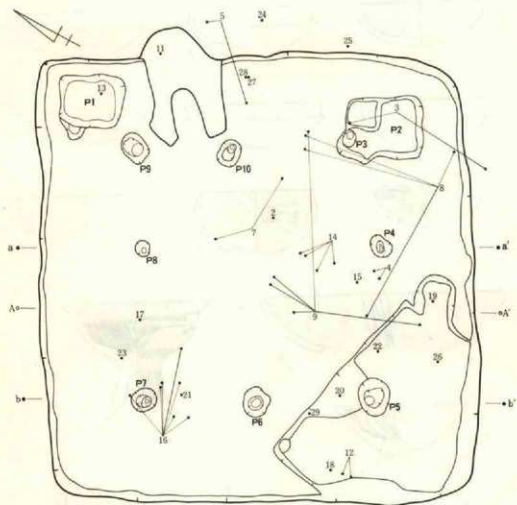
床面は軟弱であり、柱穴や周溝は検出されなかった。また床面から僅かに浮いた状態で、厚さ10cm程の焼土が、広い範囲にわたって堆積していた。

遺物の出土量は少なく、ほとんどがカマド内とその周辺からの出土である。図示し得たものはすべて坏で、1の体部内外面には多量の油煙が付着している。また底部には墨書とみられる墨痕が認められたが判読はできなかった。

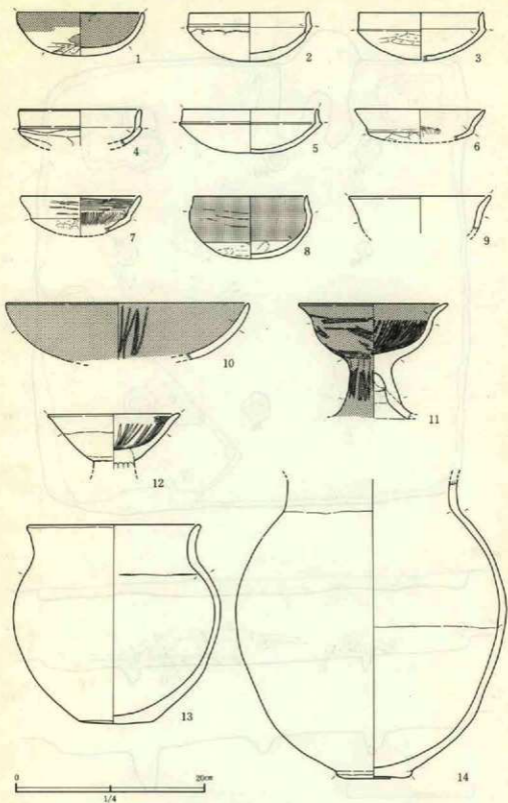
#### 古墳時代以降のグリッド出土遺物

ここで図示したグリッド出土の遺物は、古墳時代以降に属する時代のものである。

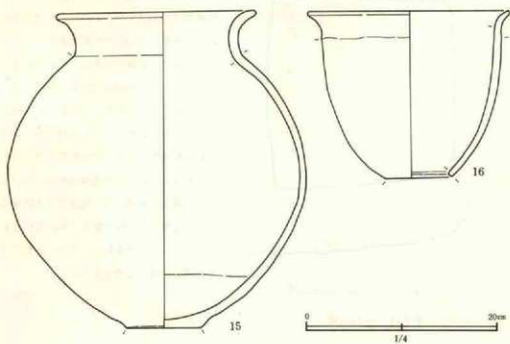
1～3の土師器と7～9の土玉は古墳時代の所産で002住居跡の位置するグリッドと、その北側のグリ



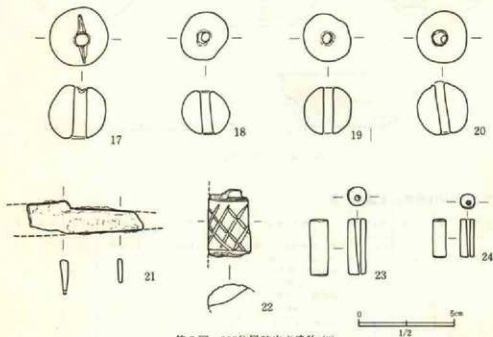
第4图 002住居跡



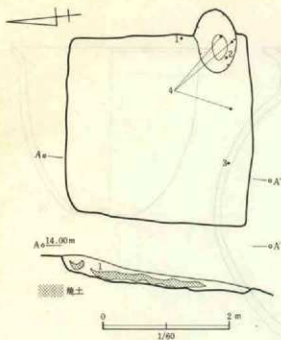
第5图 002住居跡出土遺物(1)



第6图 002住居跡出土遺物(2)



第7图 002住居跡出土遺物(3)



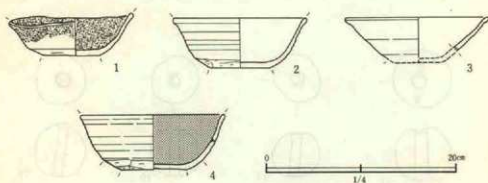
第8図 003住居跡

ッドから出土したものである。

4は口縁部を欠失した土師器環で、003住居跡周辺から出土したものであり、003住居跡出土土器と同時代の所産である。

5・6は本遺跡内の東側に位置する1-7グリッド出土の陶器である。5の上軸は灰色を呈した、いわゆる鼠志野、6は淡白色を呈した長石軸をかけた志野であり、共に17世紀前半に位置づけられるものであろう。本遺跡では近世の遺構は検出していないが、調査区東側には、後述する上貝塚遺跡に中近世の土壇等が数多く検出されており、図示した近世遺物も、これらの土壇等との関連が強いものであろう。

(郷堀)

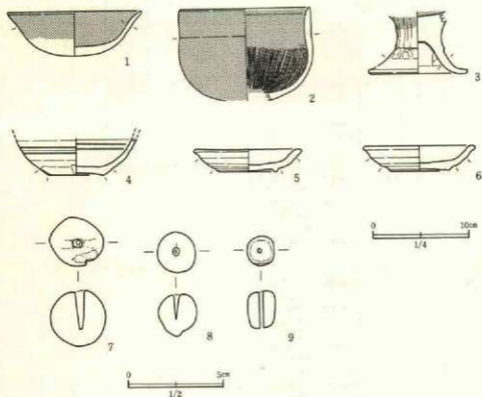


第9図 003住居跡出土遺物

表1 002住居跡出土遺物一覧

神田番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロ・ワロ 回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	環 (土師器)	13.3 4.6	3/4	内面-放射状のヘラ磨キ (巾1~2mm) 口縁部外面-横方向のヘラ 削り 環部外面-ヘラ削り(巾1 cm前後)		中粒砂-多	乳白色	良	赤彩
2	環 (土師器)	12.7 5.1	口縁部を おすかに 欠く	口縁内外-ヨコナテ 環部内面-放射状のヘラ磨 キ(巾-2mm) 環部外面-ヘラ削り		中粒砂、雲母 -多	暗褐色	良	





第10図 グリッド出土の遺物

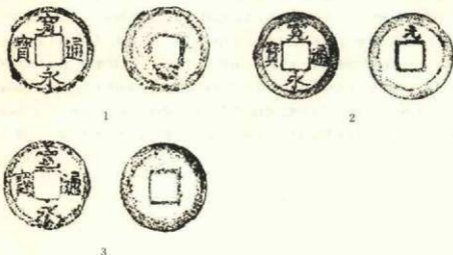
神田番号	器種	法量	遺存状態	文・彫刻手法	コナコ 面周向	胎土	色調	焼成	備考
3	坏 (土師器)	(13.0) < 5.0 >		口縁内外-ヨコナテ後、横 方向のヘラ磨キ (巾1~2mm) 坏部内面-ヘラ磨キ(巾1 ~2mm) 坏部外面-ヘラ磨り		中粒砂-多	黒褐色	良	
4	坏 (土師器)	(13.0) < 3.85 >	口縁 1/6	粘土経つみ上げ 口縁内外-横方向のヘラ磨 キ 坏部内面-放射状のヘラ磨 キ 坏部外面-ヘラ磨り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂-多	淡黄褐色	良好	全面黒色処理
5	坏 (土師器)	(14.4) 4.6	1/4	内面-ヨコナテ後、横方向 のヘラ磨キ 口縁部外面-ヨコナテ 坏部外面-ヘラ磨り		中粒砂、酸化鉄 粒-少	淡褐色	良 堅緻	
6	坏 (土師器)	(13.6) < 3.3 >		口縁内外-ヨコナテ後、横 方向のヘラ磨キ 坏部内面-放射状のヘラ磨 キ(巾2cm) 坏部外面-ヘラ磨り		中粒砂-多 酸化鉄粒-少	褐色 (赤彩か ?)	良	
7	坏 (土師器)	(12.6) < 3.9 >	1/6	口縁内外-ヨコナテ後、横 方向のヘラ磨キ (1~2mm) 坏部内面-放射状のヘラ磨 キ 坏部外面-ヘラ磨り		中粒砂-少 密	明褐色	良	



神田 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロノウ 回転方向	如 土	色 調	焼成	備 考
8	环 (土師器)	12.0 6.7		口縁内外一様方向のナデ 环部内面→ヘラナデ 环部外面→ヘラ削り		中粒砂→多	暗褐色 →赤褐色	良	赤彩 最大径は縁直下 にあり、13.0cm を測る
9	环 (土師器)	15.0 (3.7) —	底部欠損	粘土紐つみ上げ 内面→ヨコナデ後、ヘラ磨 キ 口縁部外面→ヨコナデ 体部外面→ヘラ削り後、ナ デ		中粒砂→多	暗茶褐色	良	
10	皿形土器 (土師器)	(25.6) < 5.9 )	口縁 1/8損	粘土紐つみ上げ 口縁内外→ヨコナデ後、朝 く裏いへラ磨キ 环部内面→ナデ後、軽く放 射状に細いへラ 磨キ 环部外面→ヘラ削り後、軽 いへラ磨キ		中粒砂→やや多	淡黄褐色	良好	赤彩
11	高 环 (土師器)	15.8 ~16.2 11.9	胴部欠損	粘土紐つみ上げ 口縁内外→ヨコナデ後、横 へラ磨キ 环部内面→ヘラ削り後、ナ デ後、放射状の へラ磨キ 环部外面→ヘラ削り後、へ ラ磨キ 胴部内面→ナデ 胴部外面→ヘラ削り後、へ ラ磨キ 胴部内面→ヘラ削り 胴部外面→ヨコナデ		中粒砂→多	淡褐色	良	赤彩
12	高 环 (土師器)	(14.0) < 5.4 )	环部 1/4	粘土紐つみ上げ 口縁部内面→ヨコナデ後、 横へラ磨キ 口縁部外面→ヨコナデ 环部内面→ナデ後、放射状 噴文 环部外面→ヘラ削り後、ナ デ		中粒砂→多	明褐色	良	
13	甗 (土師器)	18.3 20.9 7.5	完形	粘土紐つみ上げ 口縁内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→底物→ナデ		石英、長石、細 礫→多	暗褐色	甘	
14	甗 (土師器)	— (31.2) 8.0 胴最大径 28.6	口縁部欠 損	粘土紐つみ上げ 胴部内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→ヘラ削り後、ナ デ後、へラ磨キ 底部一本葉板をナデ滑す		長石、石英、細 礫→多 雲母→少	暗褐色	やや甘	
15	甗 (土師器)	21.2 22.7 7.7 胴最大径	胴部 1/6欠損	粘土紐つみ上げ 口縁内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→ナデ後、下部に へラ磨キ 底部→へラ磨キ		長石、石英、細 礫→多	暗黄褐色	良	
16	瓶 (土師器)	21.1 (22.5) 6.8	3/5	粘土紐つみ上げ 口縁内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ後、下 部に斜めへラ磨 キ 胴部外面→ヘラ削り後、口 縁下部ナデ 胴下端→ヘラ削り		中粒砂→多	黄褐色 内面→赤 褐色	良好	

表2 003住居跡出土遺物一覧

神田番号	部 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	コロボロ 目録分類	加 土	色 調	焼成	備 考
1	杯 (土師器)	13.0 -13.5 3.2 -4.1 5.8 -6.2	定形	体部内外面-ヨコナデ 体部下端一回へう割り 底部一回へう割り		中粒砂-多 酸化鉄粒-少 粗	暗赤褐色	良	体部内外面に油 煙が多量に付着 黒書 全体に焼きひず みが多い
2	杯 (土師器)	14.0 5.1 6.4	1/5	体部内面へう割り 体部外面-ヨコナデ 体部下端一手へう割り 底部-切り離し不明、手へ う割り		中粒砂-少 密	暗褐色	良	内面は一箇黒色 になる
3	杯 (土師器)	14.3 <4.3> -	体部2/3 底部を欠 く	体部内外-ヨコナデ		中粒砂-少	乳白色	良	
4	杯 (土師器)	15.0 5.5 6.7	1/3	体部内面へう割り 体部外面-ヨコナデ 体部下端一手へう割り 底部-切り離し不明、二方 向への手へう割り		粗粒砂-少 密	黄褐色	良	底部から体部に かけて黒炭 内黒



第11図 谷遺跡出土の古銭 (1/1)

表3 銭貨計測値表

番号	銭貨名	OD (mm)	ID (mm)	OG (mm)	IG (mm)	T (mm)	t (mm)	W (g)	出土地点	備 考	%	%
1	北条丁平厚銭・ 勘水	22.97	20.00	7.83	6.68	1.85	0.67	1.90	D・8	新寛永	2.83	1.15
2	北文高津新地銭・ 磨輪	22.65	17.83	7.95	6.35	0.91	0.42	1.65	C・8	新寛永	2.85	1.27
3	寛永通宝・不明	23.15	(19.25)	8.00	6.68	1.82	0.74	1.85	C・8	新寛永		

● OD = 外縁外径平均値

ID = 外縁内径平均値

OG = 内郭外長平均値

IG = 内郭内長平均値

T = 外縁厚平均値

t = 文字面厚平均値

### 第3章 縄文時代の遺物 (第12～15図)

縄文時代の遺物は、いずれもその原位置をとどめず、混在した状態で出土した。時間的には早期前半から晩期までの断片的な資料であるが、後期後半及び晩期の土器が目立つ。出土遺物の内訳は、早期前半3点、前期前半17点、中期前半1点、同後半6点、後期前半7点、同後半34点、晩期31点の土器片で、他に型式判別不明な土器小片若干がある。

1・2は早期前半、燃糸文系土器第3様式(夏島式)で、1には口唇部に僅かながら縄文施文が残存する。3～5は胎土に繊維を含む前期前半黒浜式土器、6は同後半の浮島Ⅱ式土器前後の波状貝殻紋文が施されたものである。7は結節沈線文を特徴とした中期前半阿玉台Ⅰb式、8は同後半微隆起線文様を描く加曾利EⅣ式土器。9～12は後期前半堀之内Ⅰ、Ⅱ式、13～16は同後半の加曾利B式土器である。特に14は、所謂注口土器の把手部分と思われる。17～20は同じく後期後半の、安行Ⅰ式前後の粗製深鉢、21・22は太い沈線文を特徴とする晩期前半前浦式土器である。23～31は晩期前半安行Ⅲc式土器で、細い列点文や曲線的沈線文によりモチーフが描かれる。32は晩期後半の、外面に燃糸文を施す粗製深鉢であるが、全体の器形は、復元図よりも細長であるかも知れない。

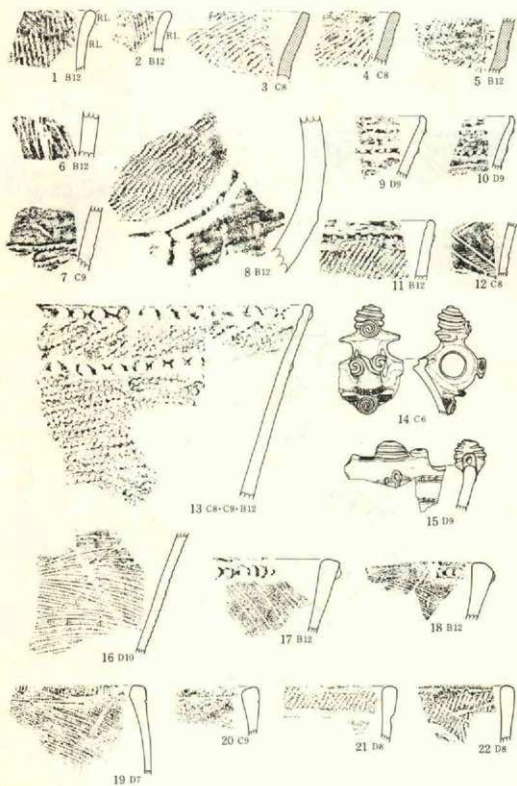
縄文土器に混じって少量の石器、礫片が採集されている。そのうち代表的なものを第14・15図に掲げた。1と2は縦長の剥片で、1がチャート製、2は泥岩製。2の背面右側縁には刃こぼれが著しい。2例共に、あるいは先土器時代の所産であるのかもしれない。3～6は石鏃、7～9は不定型な石器、10は石核である。11は石刻の胴部破片と見られる。石斧は3点あり、12・13が磨製、14は打製の分銅型石斧である。大型の礫を加工しないで使うものとして、15～18に示した諸例がある。15は礫の側縁に帯状敲打痕のあるもの、16は石砧、17は表裏に磨痕、中央に打痕、側縁にも打痕を留めるもの。18は石皿の一種であろう。これらの燻属時期はほとんど不明であるが、後期以降のものが多く見られる。

(田村・原田)

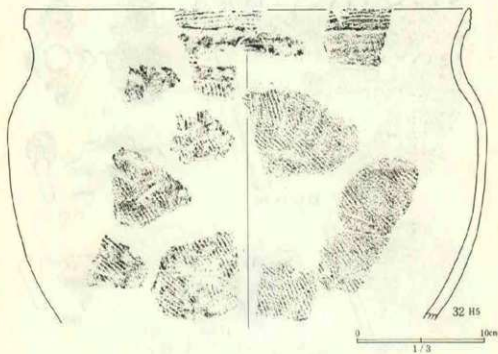
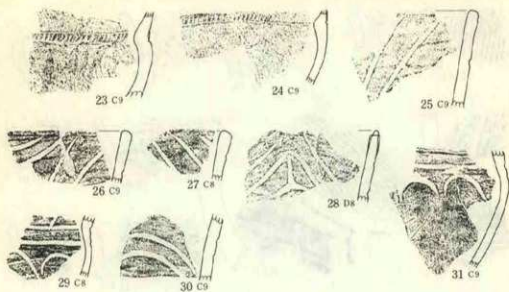


図14 縦長の剥片(1・2)

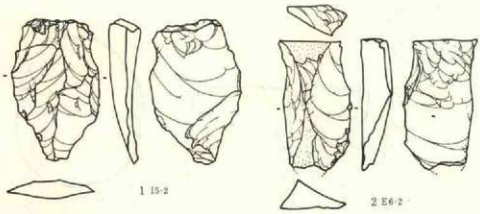




第12図 谷道跡出土の縄文土器 (1)



第13図 谷遺跡出土の縄文土器 (2)



1 IS-2

2 E6-2



3 C9-1



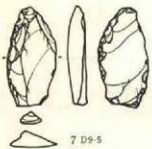
4 D7-10



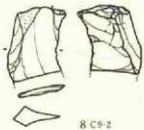
5 C8-7



6 E9-4



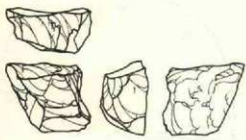
7 D9-5



8 C9-2



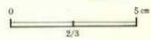
9 C8-7



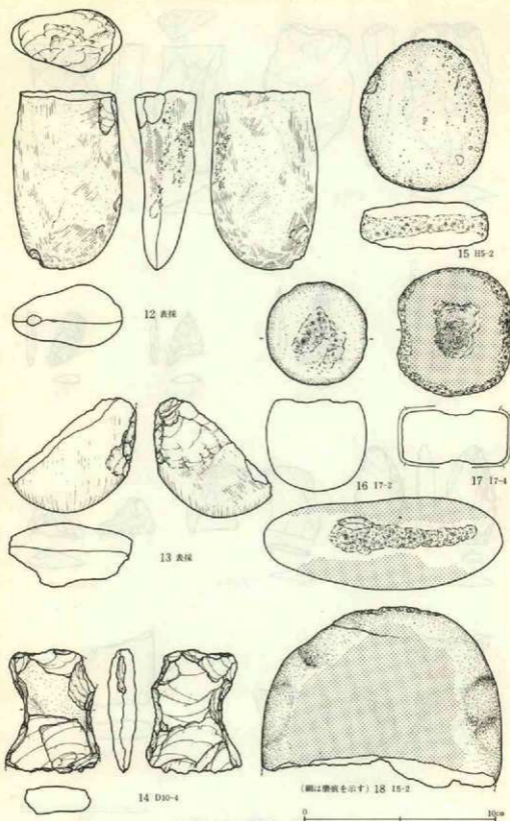
10 G6-4



11 D9-1



第14図 谷遺跡出土の石器 (1)



第15図 谷遺跡出土の石器 (2)



## 第4章 小 結

### A. 古墳時代

検出した遺構は、古墳時代後期の鬼高期に位置付けられる住居跡1軒だけであるが、ここから出土する一括土器は比較的良好なセット関係を提示している。この資料だけで判断を下すのは難しいが、後述する上貝塚遺跡の001住居跡出土の資料と類似したものである。この上貝塚001住居跡では、カマド内から6世紀中頃と考えられる須恵器環を共伴することから、谷遺跡002住居跡も年代的にはこの時期を考えたい。

また、管玉、白玉の他に、格子文を施した不明石製品も出土しているが、これらについては、類例の増加を待ち、今後の検討の課題としたい。

### B. 平安時代

平安時代の遺構は003住居跡1軒のみであり、グリッド出土の遺物にも、平安時代と考えられる遺物は少なく、本遺跡での当該期の遺構、遺物は希薄である。

003住居跡出土土器は、すべて土師器環であり、良好なセットとは言いがたい。しかし研究の深化が著しい奈良、平安時代土器研究に従えば、これらは、9世紀末～10世紀前半にかけての所産と言えるであろう。

検出された住居は1軒だけであり、遺跡全体での遺物出土状況から見ても、他に何らかの同時代の遺構が存在した可能性は無く、単独で検出された住居跡の性格等について、今後、検討しなければならないであろう。

(郷堀)

(追記) 谷遺跡をはじめ、本書収録の各遺跡出土の古銭に関しては、当センター調査研究員、今泉 潔氏より全般に亘る御指導と御教示を受けた。多謝。



第2篇 上貝塚遺跡

# 第1章 先土器時代

## A. 概 要

上貝塚遺跡から発見された先土器時代のブロックは合計7箇所であった。先土器時代の遺物総数が87点であるから、何れも規模の小さなものばかりである。

ローム層の層相は、下総台地の一般的特徴を保持しており、通例のとおり

III層 ソフトローム層

IV層 ハードローム層

V層 第1黒色帯

VI層 始良 Tn 火山灰を含むハードローム層

VII層 第2黒色帯

VIII層 立川ローム層最下層

の如く分けられている。堆積は各層共に良好であり、特にV層が明瞭に看取されたことは特筆されるが、VII層は細分されていない。

## B. ブロックとその遺物

**第1ブロック** F5-60区から検出された。規模は、南北1.4m、東西2.4mであり、III層中位から下位にかけて遺物が出土している。遺物は6点で、分布は疎である。ナイフ形石器1、剥片3、削片2という組成で、4種の母岩から構成されている(表5)。

第22図1に本ブロックのナイフ形石器を掲げた。頁岩製の縦長剥片を用いているらしいが、欠損のため基部圖の様子が分からない。

**第2ブロック** E6-66区において、約1.2mの距離を置いて2点のナイフ形石器が出土している。1点はIV層、もう1点はV層最下部からの出土であり、本来の地層層準はどのあたりだったのだろう。ナイフ形石器は2点とも同一母岩の黒曜石製である。

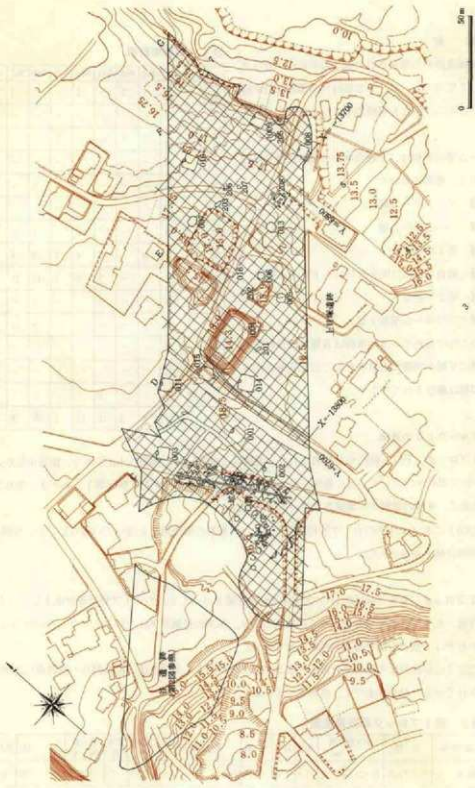
第22図2は縦長剥片の側縁部に部分的な2次加工痕がある。同図3は、折断剥片の折断面に2次加工が施されている。刃部は水平で、台形をしている。

表5 第1ブロック石器属性表

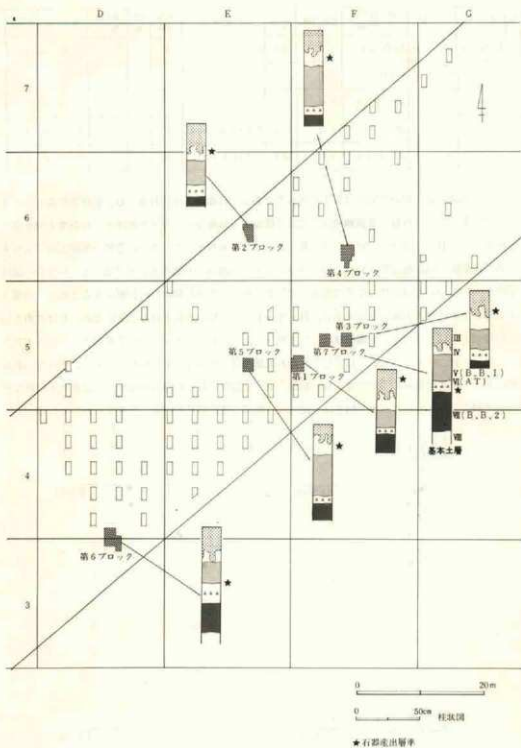
No.	遺物No.	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No.	打面	背面構成	水蝕 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No.
1	E5-60 2	ナイフ形石器	19×21×4	1.4	-1	-	H-1	F	-	t-M	頁 岩	1-1

表4 石器集計表

分類	No1	No2	No3	No4	No5	No6	No7	小計
ナイフ形石器	1	2	-	1	-	-	1	5
尖頭器	-	-	-	-	-	-	-	0
角錐状器	-	-	-	-	-	-	-	0
石錐	-	-	-	1	-	-	-	1
削片	-	-	-	-	-	1	-	1
形器	-	-	-	-	-	-	-	0
複形石器	-	-	-	-	-	1	-	1
剥片	3	-	6	4	2	10	4	29
削片	2	-	2	5	1	15	21	46
石核	-	-	1	-	-	2	-	3
石斧	-	-	-	-	-	-	-	0
礫器	-	-	-	-	-	-	-	0
敲き石	-	-	-	-	-	-	-	0
礫	-	-	1	-	-	-	-	1
小計	6	2	10	11	3	29	26	87



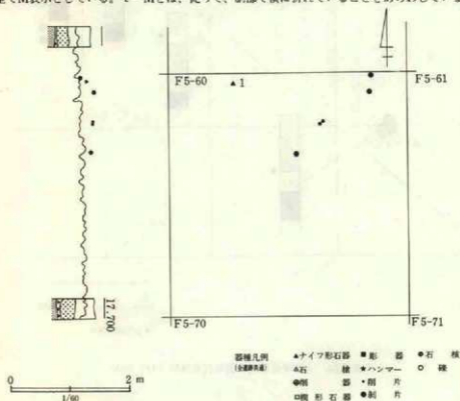
第16圖 上員線跡全体圖



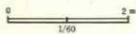
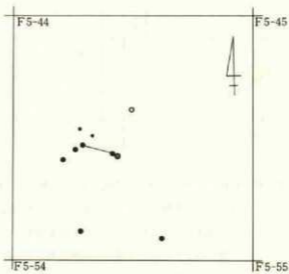
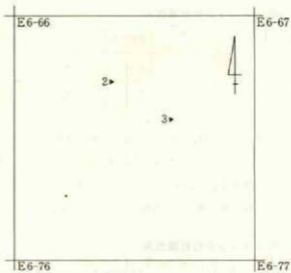
第17図 上貝塚遺跡先土器時代全体図 (1/1,500)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
2	E5-60 4	剥片	3×13×3.4	1.3		1-0	C→H-4	F	-		黒曜石	1-2
3	E5-60 5	削片	13×12×0.9	2.0							頁岩	1-1
4	E5-60 5	削片	17×16×2.9	0.9							玄武岩	1-3
5	E5-60 6	剥片	19×2×4.5	1.2		1-0	B-1→H-4	F	-		頁岩	1-1
6	E5-60 7	剥片	25×34×8.3	4.7		2-0	R-1→L-1→R-1	H	-		頁岩	1-4

(注) 石器属性表に用いた略語は以下のとおりである。打面は、自然打面：C、剥離面枚数—そのうちバルブをもつものの枚数、背面構成は、背面を構成する剥離面のバルブを基準とした剥離方向を識別し、頭部から：H、尾部から：B、右位：R、左位：Lを基本として、さらに背稜と垂直方向に交叉する場合、背面側：Va、腹面側：Veとした。なお、これに剥離面の枚数をあわせて表示し、切り合い関係の明瞭なものについては矢標にてその新旧を示した。例えば背面左側からの剥離による2面が、頭部よりの剥離による3面の剥離面を切る場合、H-3→L-2の如く表記されることになる。Cは打面と同様に原礫面を意味している。末端形状は、フェザーエンド：F、ステップフラクチャー—、ヒンチフラクチャー—、H、ワトルパッセ：Oとした。折れ面部位は、横割り：tと縦割り：vに、折れ面の剥片長軸における位置関係を示す頭部側：H、胴部：M、尾部側：Bとを組み合わせたが、位置の不明な例では全てM表示としている。t-Mとは、従って、胴部で横に折れていることをあらわしている。



第18図 第1ブロック遺物出土状況



第19図 第2ブロック(上)、第3ブロック(下)遺物出土状況

表6 第2ブロック石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	E6-66	3 ナイフ形石器	22×12×5	1.3	-	-	R-1→L-2	H	-		黒曜石	2-1
2	E6-66	4 ナイフ形石器	27×16×3.7	1.4	-	1-0	L-1→H-2	F	-		黒曜石	2-1

第3ブロック F5-44区、IV層最上部から検出された。南北2.3m、東西1.8mの範囲内から10点の遺物が出土した。石器組成は、石核1、剥片6、削片2からなり、他に流紋岩の円礫の破片が1点含まれている。石器の構成母岩は7種もあり、また、石核と同一母岩の資料として、剥片が2点あるが、接合関係も無く、石核自体も最終的な残核であるなど、廃棄ブロックとしての様相が濃い。

表7 第3ブロック石器属性表

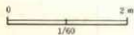
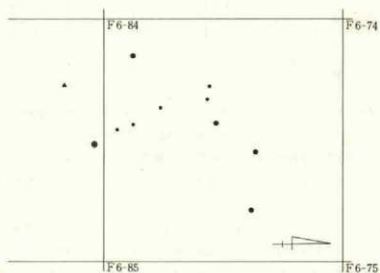
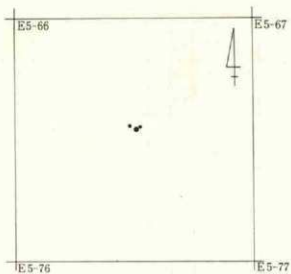
No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	F5-44	2 礫	31×18×6.6	4.0							流紋岩	3-1
2		3 石 核	3×37×19.2	2.6							玄武岩	3-2
3		4 剥 片	56×53×26.7	6.7		C	H-4	O	-		玄武岩	3-2
4		5 削 片	15×15×2.6	0.5							チャート	3-3
5		6 削 片	8×11×1.7	0.1							黒曜石	3-4
6		7 剥 片	49×19×11.8	10.7		C	H-1	F	-		玄武岩	3-2
7		8 剥 片	25×7×3	0.8		1-0	(L-1+Va-1)→H-3	F	-		黒曜石	3-5
8		9 剥 片	18×19×3.5	1.2		C	H-1	-	-	t-B	玄武岩	3-6
9		10 剥 片	17×24×5.6	2.1		-	H-1→L-1	F	-	t-H	チャート	3-7
10		11 剥 片	22×28×5.4	2.6		1-0	H-2	H	-		頁 岩	3-8

第4ブロック F6-84・85区にある。南北3.4m、東西2.7mの範囲から11点の遺物が出土された。産出層準はIV層の下部であり、V層には及んでいない。石器組成は第3表のとおり、剥片類が中心であるが、ナイフ形石器1、石錐1が含まれている。母岩は6種ある。

第22図4～6に主要石器を示した。4はナイフ形石器。頁岩製で、石核側面を残す縦長剥片を素材とする。素材剥片の打面を基部側に残し、背面左側縁に直線的なブランディングが加えられている。5は頭部、尾部両端を折り取られた折断剥片だが、頭部寄りの折断面に2次加工が加えられている。良質の青灰色をしたチャート製。6は乳白色を呈する玉髓製横長剥片の一端に尖頭部を作出した石錐である。

表8 第4ブロック石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	F6-74	2 削 片	9×9×2.6	0.2							頁 岩	4-1



第20図 第4ブロック(上)、第5ブロック(下)遺物出土状況



No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
2	4	剥片	31.8×26.8× 8.3	7.5	-5	-	H-3	-	-	t-H+t-B		
3	5	剥片	18×19×9.2	1.3		2-0	Va-3→Ve-1→H-1	F	-		玄武岩	4-2
4	6	剥片	22×24×4	1.3		1-0	L-1→H-2	F	-		頁岩	4-3
5	7	剥片	34×27×7.3	7.4		-	H-3	-	-	t-H+t-B	玄武岩	4-2
6	8	削片	7×16×2.4	0.3							頁岩	4-4
7	9	削片	13×10×2	0.2							頁岩	4-4
8	12	削片	11×10×1.9	0.2							頁岩	4-4
9	13	削片	7×8×1.7	0.1							頁岩	4-4
10	F6-84	3	石 鏃	5.1×3.6×11.2	17.1	-6	1-0	B-1→R-2	F		玄武岩	4-2
11	4	ナイフ形石器	45×15.5×10.8	5.4	-4	1-0	B-1→H-3	-	-		頁岩	4-5

第5ブロック E5-66区、IV層下部から、剥片2点、削片1点が近接して出土した。3点共に黒曜石製で、同一母岩と見られる。

表9 第5ブロック石器属性表

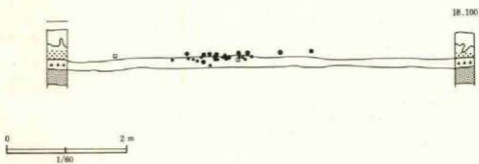
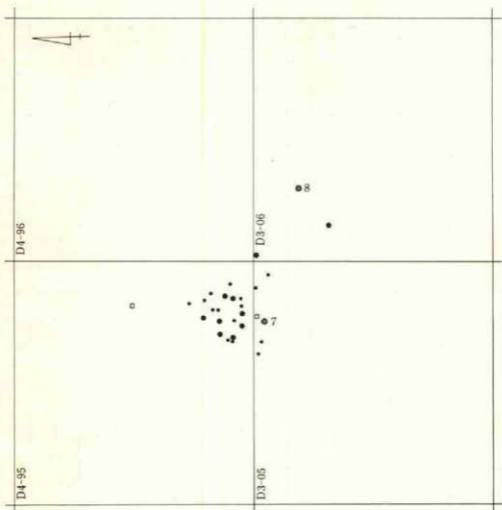
No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	E5-66	4	削片	9×11×3.3	0.2						黒曜石	5-1
2		5	剥片	14×19×6	1.4		B-3→H-2	F	-	t-B	黒曜石	5-1
3		6	削片	4×5×0.85	<0.1						黒曜石	5-1

第6ブロック D3-06ポイントを中心に、南北3.5m、東西2.8mの範囲内から29点の石器が出土した。産出層準はV層下部からVI層上部であり、VI層上面に集中している。剥片類が中心であるが、石核が2点、削器と楔形石器が各1点含まれている。構成母岩の状況を見ると、同一母岩の玄武岩が21点(72%)を占め、石核、剥片、削片の3者を含むところから、同母岩の剥片剥離を反映したブロックと言えよう。

第22図7・8に本ブロックの石核を示した。7が玄武岩の資料。背面に確皮を残す大型厚な剥片を素材にしている。剥片長軸に直交する状態で打点を左右に振って、横に長い剥片が生産されている。8は頁岩製の石核。単一剥離面からなる平坦打面をもち、石核を半周するように剥離がすすめられているが、良く実体が把握できない。接合しないが、同一母岩の剥片が1点ある。なお、残余の剥片中にも、石刃技法の存在を示す資料は含まれていない。

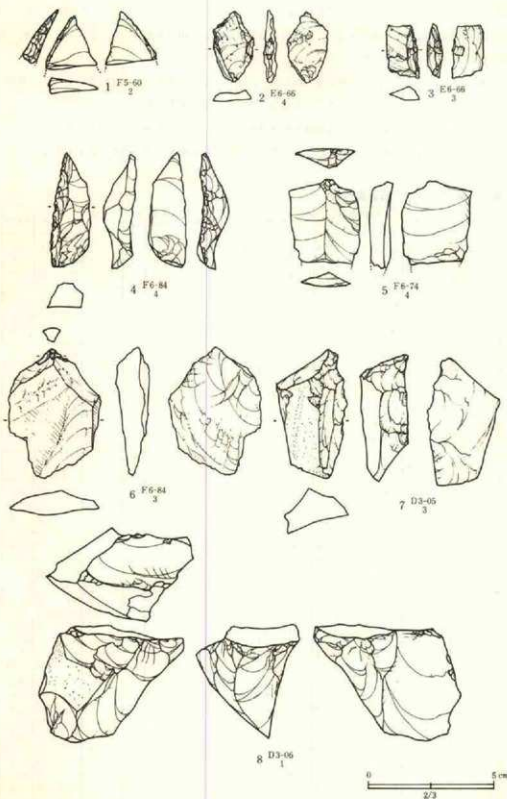
表10 第6ブロック石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	D4-95	3	剥片	13×14×4	0.8		1-0	不明+L-1→H-4	F	-	玄武岩	6-1



第21図 第6ブロック遺物出土状況

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	区No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	割出面 部位	石 材	母岩No
2	4	剥片	14×11×4.6	1		1-0	不明-2→L-2	H	-		玄武岩	6-1
3	5	剥片	11×22×2.9	0.9		1-0	R-1→H-1	O	-		玄武岩	6-1
4	6	削片	10×12×3	0.3							玄武岩	6-1
5	7	剥片	20×30×6.4	3.4		2-1	R-1→L-2	H	-		玄武岩	6-1
6	8	削片	24×11×5.3	1.1							玄武岩	6-1
7	9	削片	4×5×3.2	0.5							玄武岩	6-1
8	10	削片	12×8×4	0.4							玄武岩	6-1
9	11	剥片	13×10×3.6	0.5		-	不明-2	-	-	t-B	細粒砂岩	6-2
10	12	削片	12×20×3	0.5							玄武岩	6-1
11	13	削片	粉片								細粒砂岩	6-2
12	14	削片	6×3×1.6	<0.1							玄武岩	6-1
13	15	削片	9×6×3.5	0.1							玄武岩	6-1
14	16	剥片	21×13×8.9	2.2		1-0	Ve-1→L-4→H-1	F			玄武岩	6-1
15	17	端削器	38×38×9.4	13.3		1-0	C-H-2	O	-		玄武岩	6-1
16	19	剥片	16×8×5.2	0.9		-	不明-2	-	-	t-II+t-B	玄武岩	6-1
17	20	削片	7×6×2.2	<0.1							細粒砂岩	6-2
18	21	削片	5×5×0.9	<0.1							細粒砂岩	6-2
19	22	剥片	11×11×2	0.2		1-0	H-4	F	-	v-M	頁 岩	6-3
20	23	削片	12×13×4.7	0.7							玄武岩	6-1
21	D3-05	1 削片	15×15×6.6	1.3							玄武岩	6-1
22	2	削片	12×17×4.6	0.7							玄武岩	6-1
23	3	石 核	49×28×17.4	22.8	-7						玄武岩	6-1
24	4	剥片	9×5×3.5	0.1							玄武岩	6-1
25	5	削片	14×12×5.4	0.1							玄武岩	6-1
26	6	模形石器	14×19.4×5.2	1.3							細粒砂岩	6-2
27	D3-06	1 石 核	47×53×18	61.0							頁 岩	6-4
28	2	剥片	18×28×6	6.7		1-0	L-1→不明-1→H-1	O	-		頁 岩	6-4
29	3	剥片	3×26×9.7	6.9		1-0	H-2	-	-	t-M	玄武岩	6-1



第22図 第1～第6ブロック出土石器

第7ブロック F5-42区にある。南北3.1m、東西2.8mの規模をもつが、ブロック北側の半径約0.5mの円形の部分の遺物散布密度が濃い。産出層準はV層下部からVII層上部に及び、遺物の上下移動の幅は最大0.47mもあり、確定は難しいが、ATよりは下位となろう。

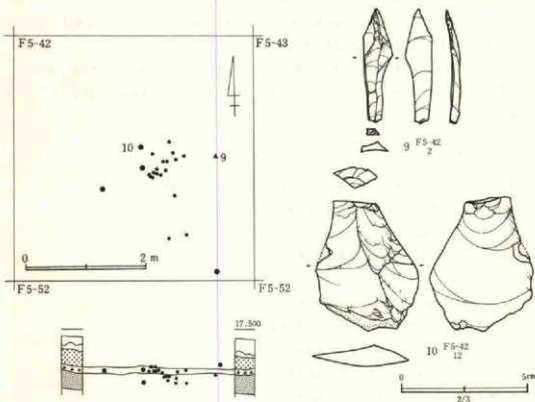
石器組成は、ナイフ形石器1、剥片4、削片21、計26点となり、第6ブロックに次いで豊富な遺物を検出できた。全て頁岩製であるが、ナイフ形石器以外は全て同一個体である。

第23図9はナイフ形石器。石刃の打面部を折り取ると共に、背面左側縁尖頭部寄りに部分的なブランディングが認められる。同図60は剥片のうち大型のもので、打面調整、頭部調整は認められない。

表11 第7ブロック石器属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	遺物No
1	F5-42	2 ナイフ形石器	45×11×3.2	1.6	-9	2-0	H-6+不明-1	F	-		頁 岩	7-1
2		3 削 片	13×18×2	0.3							頁 岩	7-2
3		4 削 片	6×8×0.6	<0.1							頁 岩	7-2
4		5 削 片	14×11×2	0.2							頁 岩	7-2
5		6 削 片	6×4×1.5	<0.1							頁 岩	7-2
6		7 削 片	24×12×2	0.6							頁 岩	7-2
7		8 削 片	8×7×0.8	<0.1							頁 岩	7-2
8		9 削 片	23×14×3.9	0.9							頁 岩	7-2
9		10 削 片	10×6×2.2	0.2							頁 岩	7-2
10		10 削 片	14×8×1.2	0.2							頁 岩	7-2
11		11 剥 片	32×11×4.2	0.9		-	C→(B-1→L-3→R-2)+(R-1→H-1)	O	-	t-H	頁 岩	7-2
12		12 剥 片	52×40×8.5	17.0	-10	1-0	C→H-3	F	-		頁 岩	7-3
13		13 削 片	15×15×1.3	0.3							頁 岩	7-2
14		14 削 片	21×17×2.7	0.9							頁 岩	7-2
15		15 削 片	8×7×0.8	<0.1							頁 岩	7-2
16		16 剥 片	24×15×2	0.8		-	H-3	-	-	t-H+t-B	頁 岩	7-2
17		17 剥 片	22×0.9×2.4	0.5		-	C→H-1	F	-	t-H	頁 岩	7-2
18		18 削 片	11×16×1.4	0.2							頁 岩	7-2
19		19 削 片	5×7×0.8	<0.1							頁 岩	7-2
20		20 削 片	12×12×3.3	0.3							頁 岩	7-2
21		22 削 片	11×19×2.2	0.3							頁 岩	7-2
22		23 削 片	8×13×1.2	0.1							頁 岩	7-2

No	遺物No	分類	長×幅×厚 [mm]	重量	面No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
23	24	削 片	9×15×2	0.2							頁 岩	7-2
24	25	削 片	13×9×1.6	0.2							頁 岩	7-2
25	26	削 片	11×8×1.4	0.1							頁 岩	7-2
26	NO.なし	削 片	11×8×1	0.1							頁 岩	7-2



第23図 第7ブロック遺物出土状況(左)同石器(右)

### C. 小 結

以上、上貝塚遺跡から発見された7ブロックに関する概要を述べた。全体にブロックの規模が小さく、そこに含まれる石器の種類も少ないという印象を受けるが、最後に若干の問題点をとりまとめておきたい。

初めに、石器の産出層単から見た、7ブロックの前後関係を確認しておこう。既に、前項で指摘したように、各ブロックの産出層単は次の如くである。

- Ⅲ層 第1ブロック
- Ⅳ<sub>上</sub>層 第3ブロック
- Ⅳ<sub>下</sub>層 第4・第5ブロック
- Ⅴ<sub>下</sub>層 第6ブロック

## VII<sub>上</sub>層 第7ブロック

第2ブロックは、資料が少ないので、何とも言えないが、多分、IV<sub>上</sub>層であろう。石器を見ると、東京都前原遺跡IV<sub>上</sub>石器文化（小田ほか編 昭和51年）が想起される。これ以外のブロックに関しては、極端に定型的な石器が少なく、他遺跡との比較は困難である。

次に、各ブロックの性格について検討する。ナイフ形石器2点のみからなる第2ブロックは、その性格が特殊であるので除外し、残りの6ブロックを見ると、その母岩構成の上で、2通りのあり方が指摘される。(1)極めて単純な母岩構成を示すもの。ブロックを構成する母岩が少数で、そのうち特定の母岩に大半の資料が帰属する場合で、第5・第6・第7ブロックがこれに該当している。(2)複雑な母岩構成を示すもので、ブロックを構成する母岩数が多く、帰属資料が特定母岩に集中せず、分散する場合で、第1・第3・第4ブロックがこれに該当している。

(1)の場合、3点しか遺物の出土しなかった第5ブロックを別にすれば、第6ブロックでは、母岩No 6-1：玄武岩の、そして、第7ブロックでは、母岩No 7-2：頁岩の剥片剝離を背景に成立したことが考えられる。

(2)の場合の解釈は難しい。該当する3ブロックの内容を振り返ると、

### 第1ブロック (N=6)

母岩No 1-1：頁岩（ナイフ形石器1、剥片1、削片1）総重量4.6g

母岩No 1-2：黒曜石（剥片1）総重量1.3g

母岩No 1-3：玄武岩（削片1）総重量0.9g

母岩No 1-4：泥岩（剥片1）総重量4.7g

### 第3ブロック (N=10)

母岩No 3-1：流紋岩（礫1）総重量4.0g

母岩No 3-2：玄武岩（石核1、剥片2）総重量15.0g

母岩No 3-3：チャート（削片1）総重量0.5g

母岩No 3-4：黒曜石（削片1）総重量0.1g

母岩No 3-5：黒曜石（剥片1）総重量0.8g

母岩No 3-6：玄武岩（剥片1）総重量1.2g

母岩No 3-7：チャート（剥片1）総重量2.1g

母岩No 3-8：頁岩（剥片1）総重量2.1g

### 第4ブロック (N=11)

母岩No 4-1：頁岩（削片1）総重量0.2g

母岩No 4-2：玉髄（石錐1、剥片1）総重量18.4g

母岩No 4-3：頁岩（剥片1）総重量1.3g

母岩No 4-4：頁岩（削片4）総重量0.8g

母岩No 4-5：頁岩（ナイフ形石器1）総重量5.4g

という構成になり、また、各ブロックは別のブロックと母岩を共有せず、独立している。このことから、各ブロックはどのように位置づけられるのだろうか。

まず、剥片のあり方を見ると、1枚のみの場合が多い。第3ブロックには、石核と共に2枚の剥片の認められる例があるが(母岩No3-2)、接合しないし、石核は所謂残核である。このことから、別ブロックで生産された剥片の極一部が搬入されていることが分る。製品に就いても同様に、本ブロック内で作出された根拠は無く、別地点からの搬入である。削片のうちには、ブロック内での補修あるいは刃付けの工程を想わせるものもあるが(母岩No4-4)、単独の場合も多い。

このように、ブロックに形成する石器の大半が別な地点に予測されるブロックで生産されたものであることに、これらの3ブロックの特徴がある。更に、各母岩の個体数、総重量共に小さい。ところで第3ブロックのように、ほとんどが異種母岩であるようなあり方は、本来、そのブロックを形成した主体が、多量かつ多種の母岩を保有するブロックをも経過的に形成した主体でもあることを暗示している。

しかし、これには異論があり、単一集団の季節的往還によって、ある特定の地点が一過的に反覆利用された結果、多種の母岩が少量ずつ廃棄、蓄積されたとも考えられよう。この場合、ブロックは微妙な時間差をもつ石器の地点分布の重複と解釈される。時代は異なるが、縄文早期の炉穴の切り合いに比較されよう。

(田村)



## 第2章 縄文時代

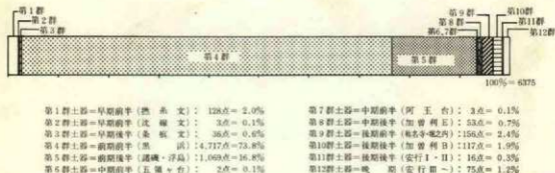
### A. 遺構・遺物の概要

上貝塚遺跡からは、縄文時代早期後半：炉穴1基（炉部5か所）、前期前半：竪穴住居跡2基、前期後半：竪穴住居跡3基及び覆土内からの出土遺物を欠き時期不明の土坑8基が検出された。これらは、台地上に営まれた一般的な縄文時代前期の集落遺跡の特色を、良く表わしたものである。調査によって出土した資料も、その全てについて時期細別と総量把握を進めた結果、早期から晩期までの各時期を網羅する6375点の土器片と石器・礫756点が確認されたが、前期前半特に黒浜式期の遺物が全出土土器の73.8%と他の各期を圧倒する。なお、早期前半の沈線文系土器及び中期前半の土器は、その出土量が僅少で、当遺跡における空白期の存在を示している（第24図）。

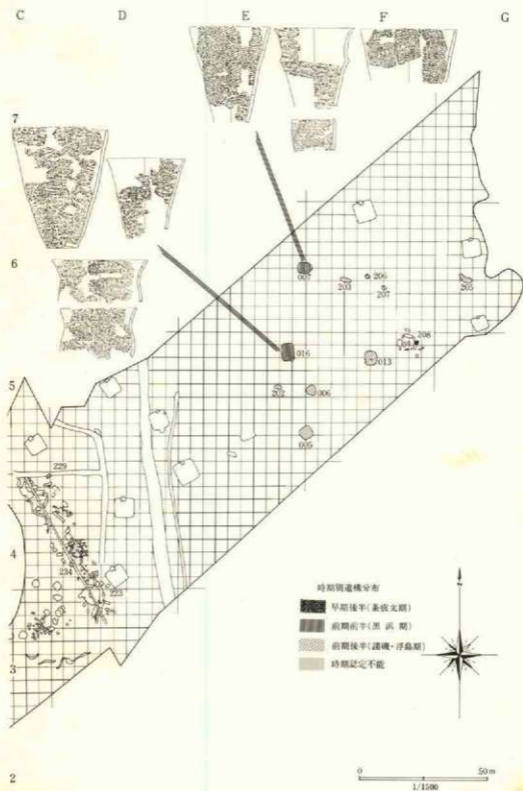
報告は、遺構及びその出土遺物を、調査時に付した遺構番号の順で行い、その後遺構外出土の遺物について、時代順に古いものから呈示した。なお、各遺構の遺物分布図中の遺物番号は、全て当該住居跡出土土器拓影・実測図の番号と一致させてあるが、平面分布図上に出土地点がプロットされていないものが多いため、必ずしも分布図中に全ての報告資料の番号が示されているとは限らない。

また、黒浜式土器の時期・段階細分については、新井和之氏の一連の業績（新井 昭和57年）に準拠して呈示し、説明を加えた。

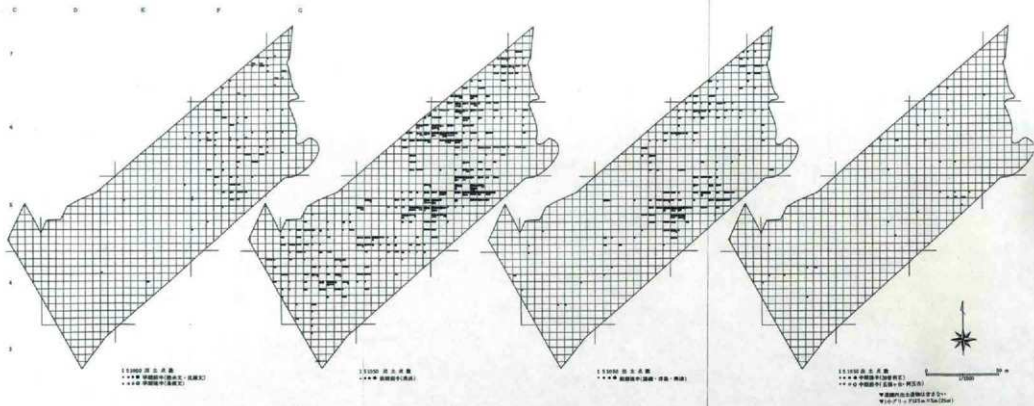
なお、序説文中でも述べたように、本遺跡は、学史的にも著名な「上貝塚貝塚」の北側に位置する別の集落遺跡であり、今回の調査でも貝層・貝ブロックの検出はみえていない。名称が同じ小字名に由来するため、混乱が生じることを憂慮し、ここに再度明示しておく。（原田）



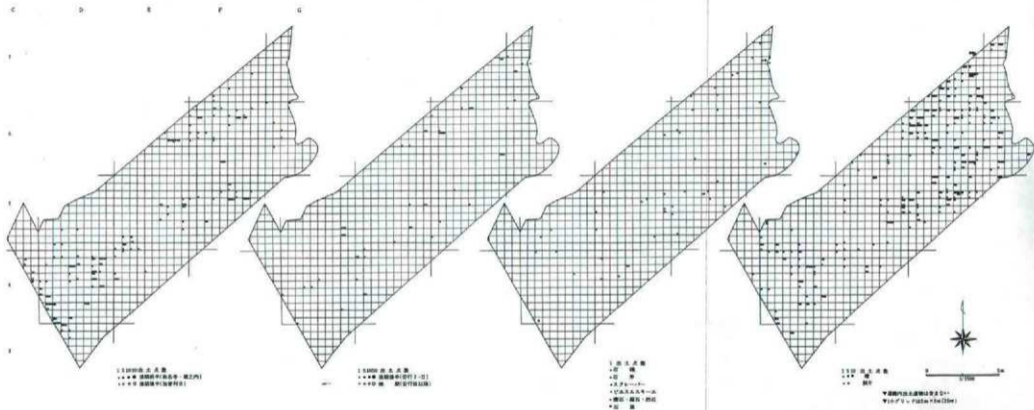
第24図 上貝塚遺跡出土縄文土器時期別数量比



第25圖 上貝塚遺跡遺構時期別分布圖(繩文時代)



第20図 上兵庫遺跡グリッド製遺物分布図 (1)



第17図 上野原遺跡グループの遺跡分布図(四)

## B. 竪穴住居跡とその出土遺物

### 005 竪穴住居跡 (第28～30区=PL. 6・PL. 13・PL. 15)

**遺構:** 台地中央部 E 5・E 6 区境界上に位置する。長径500cm、短径470cm、長軸方向を N-18°-W にとり、隅丸方形を呈す。床面南東隅に地床炉が設けられ、床面は中央部が若干窪む。壁の立ち上がりは緩やかで、現存壁高38cmを測る。床面上に柱穴4本が不規則に検出され、また炉跡に近接して浅い土坑状落ち込みを伴うが、本来的な付属施設かどうかは不明。

**遺物:** 覆土上部から中位にかけて、万遍なく出土した。接合関係を示す個体は少ない。前期前半75点、同後半120点、合計195点の土器片と、凹石・剥片各1点の石器がある。

前期前半の土器は、軸縄LRにRLの細い原体4条を巻きつけた付加条縄文1・2、L燃糸2条を付加した5、燃糸或いは単節縄文を施す6～8の他、貝殻条痕文の9～12、貝殻背任痕文の13がある。いずれも黒浜式土器である。

前期後半の土器は、波状口縁に貼付文を加える15、浮線文を有する16～18と共に、幅広い竹管状工具によって連続爪形文、有節沈線文、三角形刺突文を施す19～27、有段口縁及び波状貝殻腹線文の32・33等がある。15～18は諸磯b式土器中段階、19～34は浮島II、III式土器の範疇で捉えられる。

**時期:** 住居跡の構造と、出土土器の在り方から、前期後半浮島II式期前後に位置づけられる遺構である。

### 006 竪穴住居跡 (第31・32区=PL. 6・PL. 16)

**遺構:** 台地中央部、F 5 区の東寄りに位置する。長径375cm、短径370cm、長軸方向をほぼN-Sにとり、不整楕円形を呈す。床面南寄りに、80cmの間隔で地床炉2基が設けられているが柱穴は無い。現存壁高は15cm前後と浅く、壁もなだらかに立ち上がる。2か所の炉跡の存在から、2期に亘る重複利用の可能性を持つ。

**遺物:** 覆土中から少量の土器片が出土したが、接合資料は無い。前期前半29点、同後半21点、合計50点の土器片と、石鉄未成品の残欠1点がある。

前期前半の土器は、縦位沈線、コンパス文、横位の集合条線文を施す1・2、燃糸文Rを2条付加した付加条縄文4・5、単節縄文のみのもの6～8がある。総合的に見て、黒浜式土器古段階(新井分類第II段階)の資料が多く含まれる。

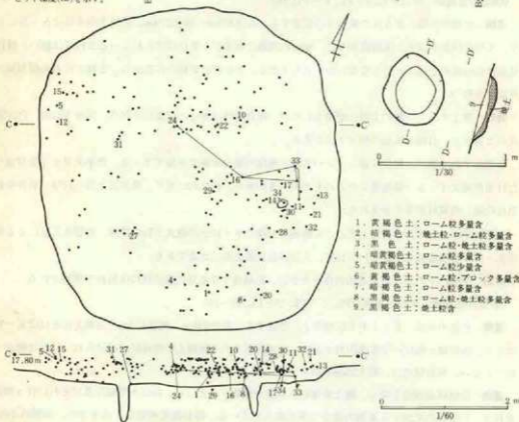
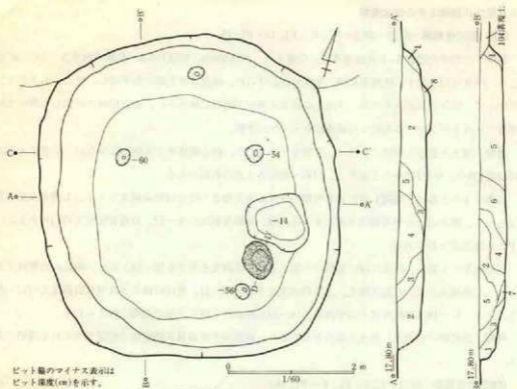
前期後半の土器は、竹管状工具による曲線文を描く9・10が諸磯式土器中段階、竹管状工具による刺突文・波状貝殻腹線文を描く11～15が、大旨浮島II式土器に比定できる。

**時期:** 遺構の平面形、出土遺物の在り方から、前期後半浮島II式期前後の住居跡と理解される。

### 007 竪穴住居跡 (第33～38区=PL. 7・PL. 13・PL. 16～18)

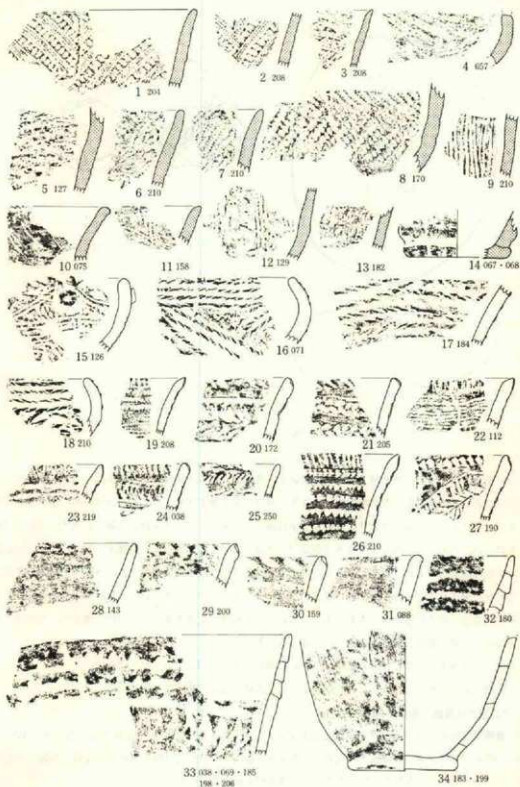
**遺構:** 台地中央部、E 6・F 6 区境界上に位置する。長径495cm、短径420cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、西側縁が幅広い不整楕円形を呈す。床面西寄りの中軸線上に地床炉が設けられ、柱穴は検出されていない。現存壁高は、最大25cmを測る。

**遺物:** 住居跡南西部を除く、覆土全体から多量の遺物が出土した。特に大型破片及びそれに伴う接合資料は、住居跡の北側から東側の部分で多く出土している。器形復元可能な7点を含め、前期前半660点、前期後半19点、合計679点の土器片と、土製円板が1点、及び横長剥片・凹石・石皿片各1点の石器



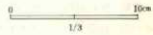
1. 黄褐色土：ローム粒多層含
2. 暗褐色土：焼土粒・ローム粒多層含
3. 黒色土：ローム粒・焼土粒多層含
4. 暗黄褐色土：ローム粒多層含
5. 暗黄褐色土：ローム粒少層含
6. 黄褐色土：ローム粒・ブロック多層含
7. 暗褐色土：ローム粒多層含
8. 黒褐色土：ローム粒・焼土粒多層含
9. 黒褐色土：焼土粒含

第28図 005住居跡 平・断面図及び遺物分布図

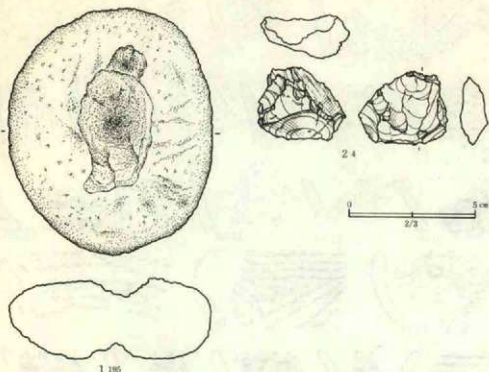


和形番号欄の小数字は資料の注記を示す。

第29図 005住居跡出土遺物(1)







第30図 005住居跡出土遺物(2)

がある。

前期前半の土器は、無節縄文Lを施す深鉢1、撚り戻しの縄文RRを施し、胴部が段状に張り出す2、撚りの強い単節縄文RLを羽状施文した3及び単節縄文を施す深鉢4～7が、ほぼ器形の全体を知り得るが、他は破片である。竹管状工具による平行線文8・9、コンパス文10、乱雑な斜格子文と縦位沈線文11～18、刺突文19・20と文様要素は豊富で、沈線文は竹管の内側を使って施文したものが目立つ。21は貝殻背圧痕文である。縄文・撚糸文のみで飾られる土器は、付加条縄文の22～27、単節縄文が羽状・菱形状に施されるもの28・33・47、原体末端にループ文を持つもの37・40・44、結節のあるもの42、竹管文刺突が加飾される29等、多彩である。これらの資料は、文様要素の在り方から考えて、黒浜式土器古段階（新井分類第II段階）のものが主体を占める。

他に前期後半の土器も出土したが、これらは細片であり、図示するに耐え得ない。

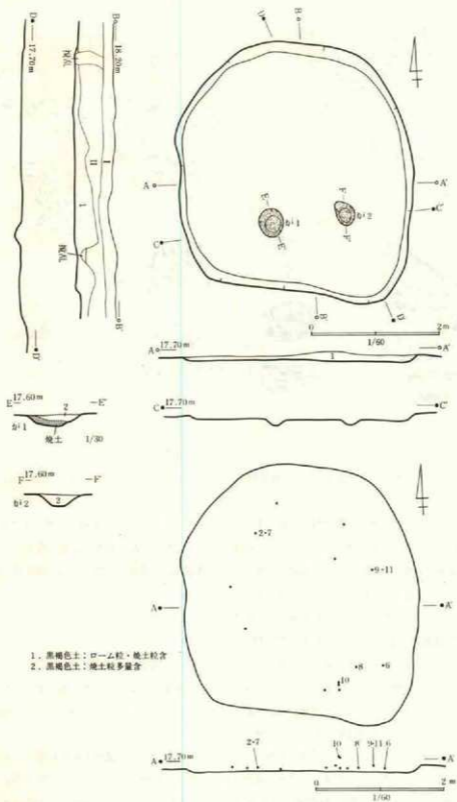
時期：出土土器の在り方から、前期前半、黒浜式期古段階の住居跡と思われる。

013竪穴住居跡（第39・40図＝PL, 19）

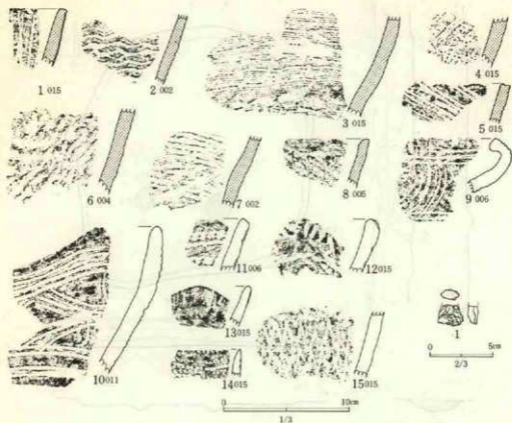
遺構：台地中央部、F5区の西部に位置する。長径545cm、短径463cm、長軸方向をN-8°-Wにとり、隅丸方形を呈す。長軸線上の北寄りに地床炉を設けるが、柱穴は検出されていない。床面は比較的凹凸が激しく、壁はなだらかに立ち上がる。現存壁高最大27cmを測る。

遺物：炉跡付近及びその周辺から散漫に出土した。遺物分布図の不備から、実際の出土遺物のうち、その出土位置を特定できるものは僅かである。接合資料も十分な把握ができていない。前期前半155点、





第31図 006住居跡 平・断面図及び遺物分布図



第32図 006住居跡出土遺物

同後半59点の土器片の他、早期後半1点、後期後半1点の土器片が混入している。出土土器は合計216点を数える。

前期前半の土器は、燃糸2条の付加条縄文1・3・7・8・10・12の他、単節縄文を施す4・6・9・13等がある。いずれも黒浜式土器であるが、文様要素に乏しいため、段階細分には耐え得ない。

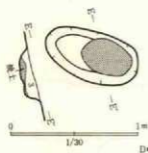
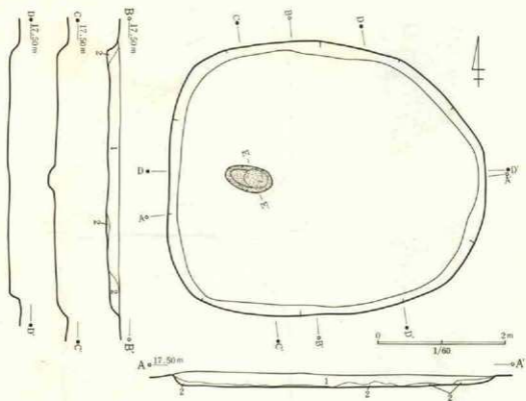
前期後半の土器は、外面丹彩の小型鉢形土器片15が諸磯b式に比定される他、有段口縁を持つ16、三角形刺突文が充填される17・19等、浮島II、III式土器が主体を占める。

時期：出土土器の在り方から、前期後半、浮島II式期の住居跡と考えることができる。

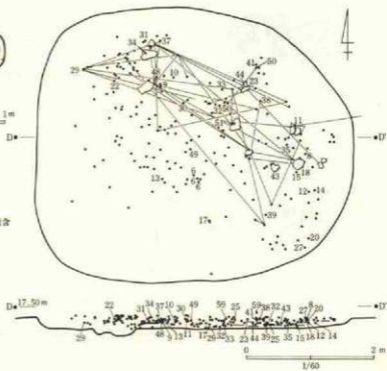
#### 016竪穴住居跡（第41～47図＝PL, 10・PL, 14・PL, 20・21）

遺構：台地中央部、E5区北東部に位置する。長径715cm、短径475cm、長軸方向をはばN-Sにとり、長方形を呈す。長軸線上の中央及び北側に、地床が設け、床面上には柱穴21本が散在する。本来6本主柱の住居が、2期以上に亘って重複、構築された可能性が高い。現存壁最大13cmと浅く、壁の立ち上がりもなだらかで、北側は特に掘り込みが僅かである。

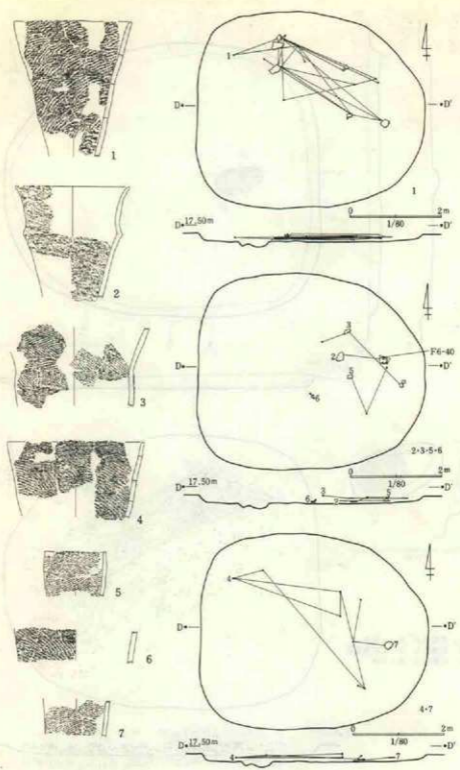
遺物：住居跡の南東部を中心に多量の遺物が出土した。床面直上出土の遺物も見られるが、多くは覆土中位からの出土である。大形破片及びその接合資料は、特定の場所に集中した出土状態を示す。器形復元可能な7点を含め、前期前半662点、同後半26点、及び早期後半2点、合計690点の土器片と、磨製石斧片・凹石各1点の石器が出土した。



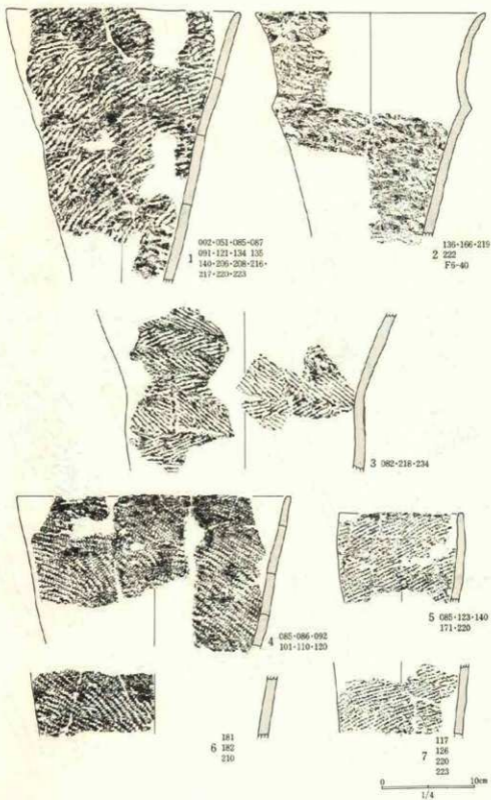
1. 黒褐色土：ローム粒含有
2. 黄褐色土：ローム粒多量含有
3. 暗褐色土：焼土粒含有



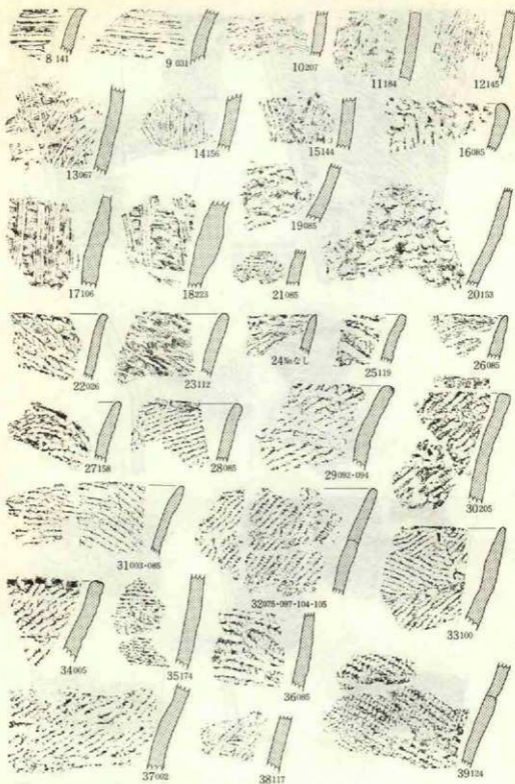
第33图 007住居跡 平・断面図及び遺物分布図



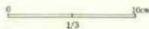
第34图 007住居跡出土土器個体別接合図

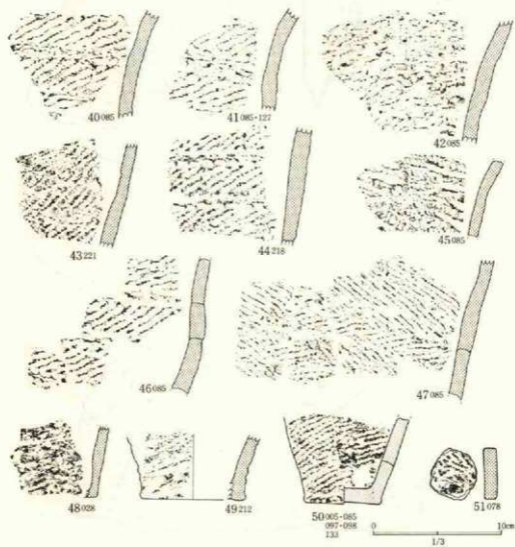


第35图 007住居跡出土遺物 (1)

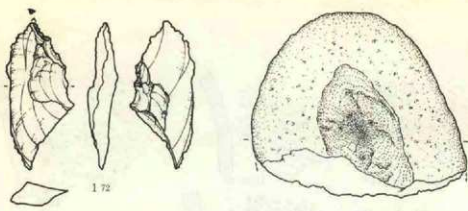


第36図 007住居跡出土遺物(2)



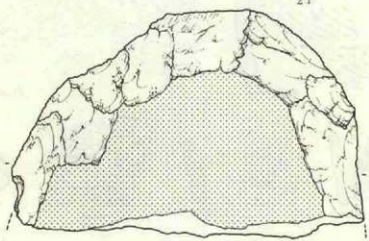


第37图 607住居跡出土遺物(3)

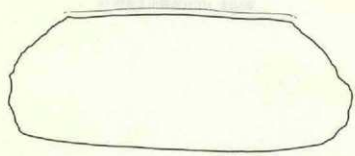


172

21

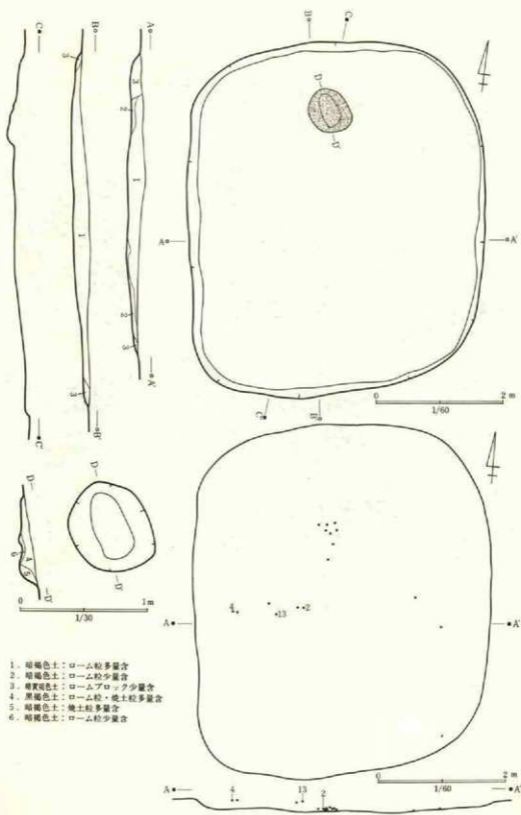


322

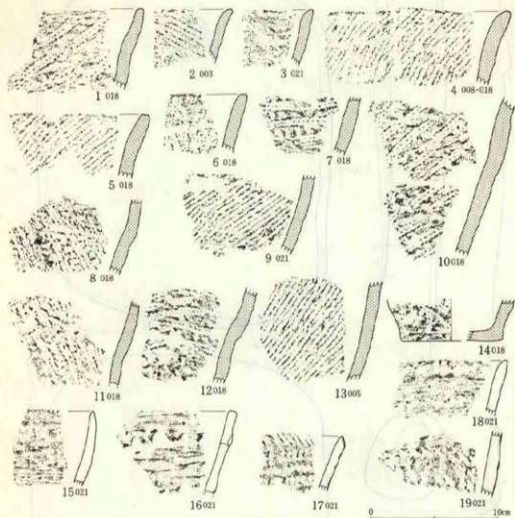


第38图 007住跡出土遺物(4)

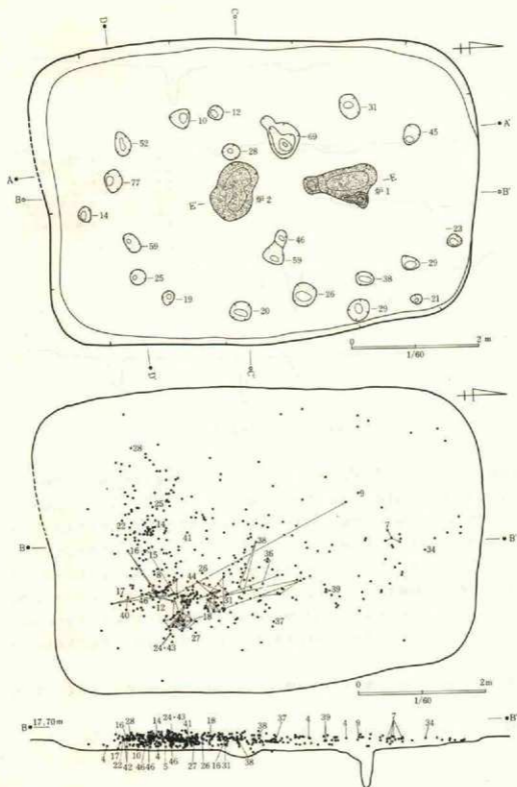




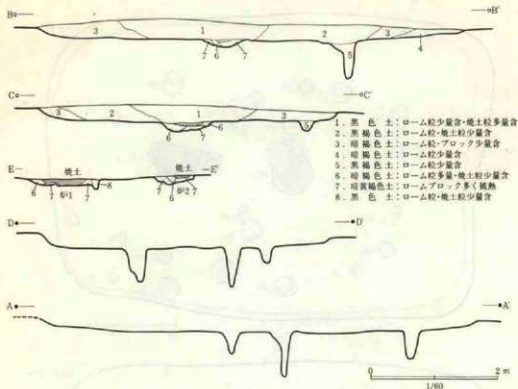
第39図 013住居跡 平・断面図及び遺物分布図



第40图 013住居跡出土遺物



第41図 O16住居跡 平面図及び遺物分布図

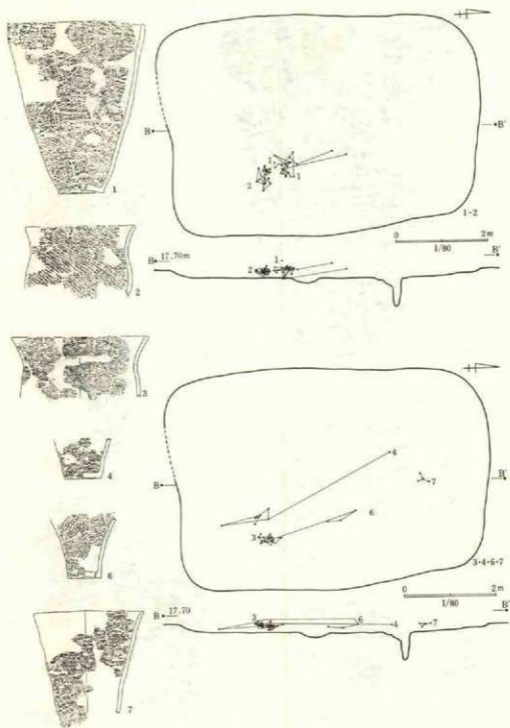


第42図 O16住居跡断面図

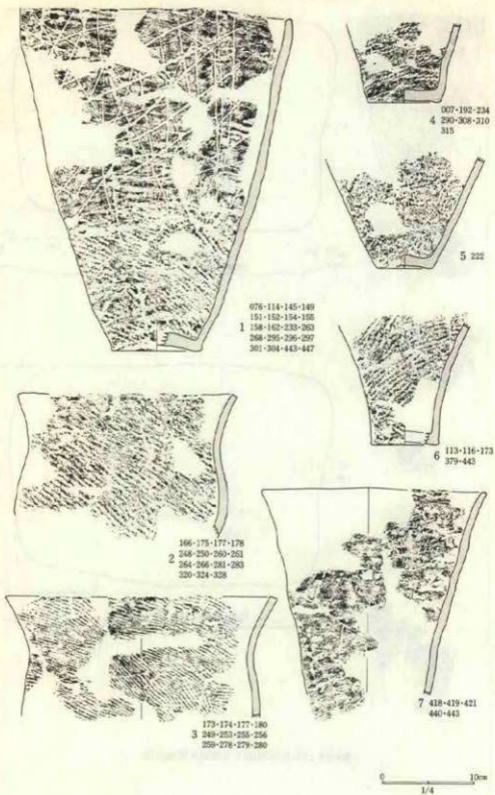
前期前半の土器は、胴部上半に乱雑な斜格子目状沈線文、下半に単節縄文R Lが施された深鉢1、燃糸文Rを2条付加した付加条縄文の深鉢4の他、単節縄文のみで器面を飾る3～6、及び貝殻背圧痕文が全面に充満された7が復元可能な他は、いずれも破片である。間隔の長い連続爪形文で文様を描く8～16、口縁部直下に内面からの焼成前穿孔を行った17、貝殻条痕文18、貝殻背圧痕文19～22がある。また、地文のみで器面を飾るものは、燃糸文Rを2条使用した付加条縄文23・24、無節縄文を使用した付加条縄文27、網目状の軸縄縄文28等、多様な原体を使用している。単節縄文を施した土器には、28のようにループ文を併用するものも含まれる。42～48は、付加条、単節、無節を含む縄文地文の土器胴部片である。これらは文様要素の特徴から、黒浜式土器古段階（新井分類第2段階）に比定できるものが多数を占める。

前期前半の土器は、浮線文を施す50～54を諸磯b式中段階に比定できる他、燃糸文を地文とした浮島I式土器55がある。

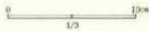
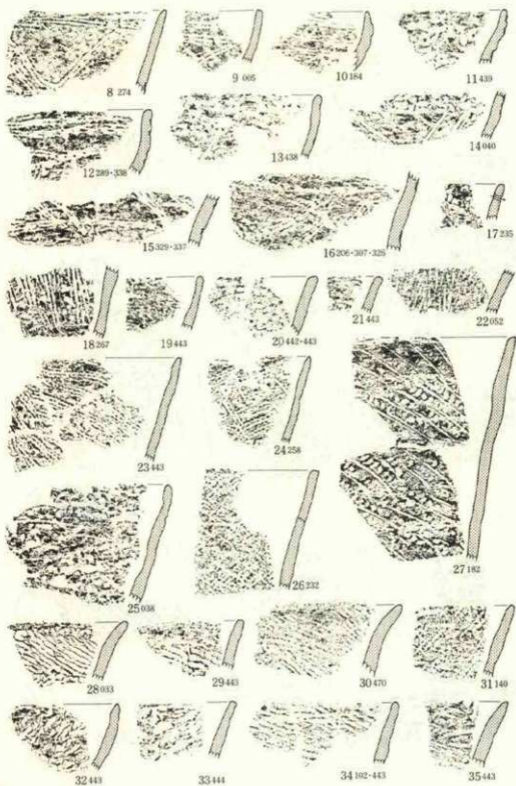
**時期：**住居跡の構造、及び出土遺物の在り方から、前期前半黒浜期古段階の遺構と考えられる。



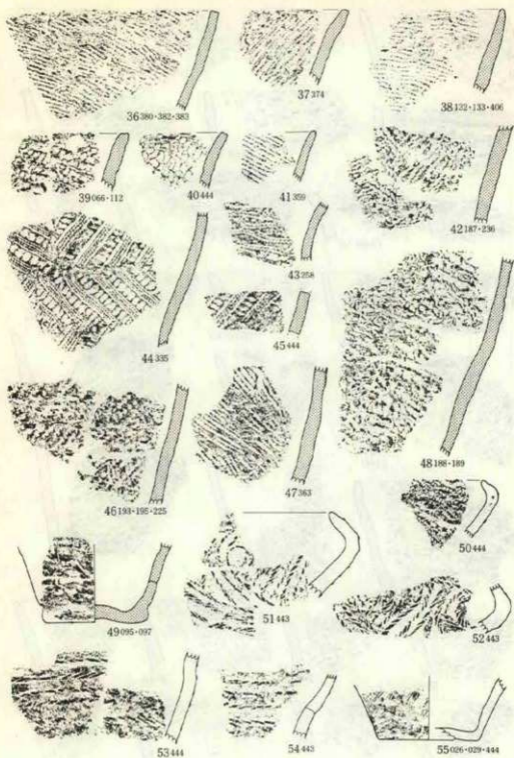
第43圖 016住居跡出土土器個体別接合図



第44图 016住居跡出土遺物(1)

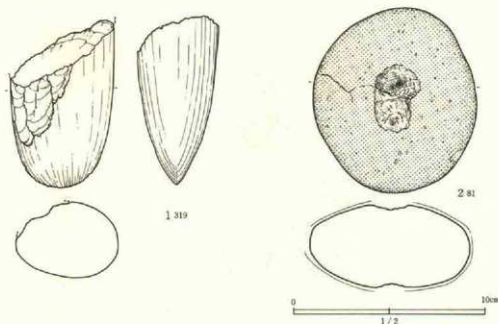


第45图 016住居跡出土遺物(2)



第46図 016住居跡出土遺物(3)





第47図 016住居跡出土遺物(4)

### C. 炉 穴

#### 208炉穴(第48図=PL, 12)

台地中央部、F 5 区に位置する。最大径262cm、検出面から最深22cmを測り、5か所に炉部を持つ。ほぼN-Sに長軸方向を持つ3基の炉穴と、ほぼE-Wに長軸方向を持つ2基の炉穴が、足場を一部共有しながら重複する。相互の新旧関係は不明。出土遺物はないが、その典型的な構造から早期後半、条痕文期の所産と考えられる。

### D. 土 坑

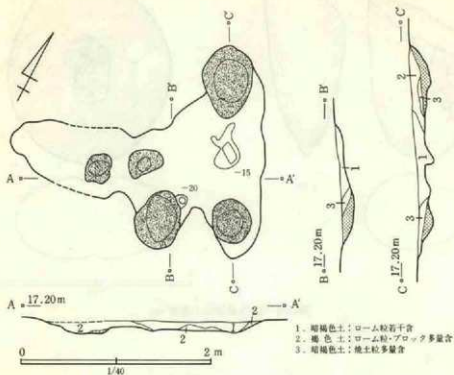
#### 201土坑：欠番

202土坑(第49図=PL, 10)：E 5 区に位置する。長径194cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、不整形円形を呈す。南側に一段と深い掘り込みがあり、壁はなだらかに立ち上がる。遺物の出土は無く、時期・性格ともに不明。

203土坑(第49図=PL, 11)：F 6 区に位置する。長径200cm、短径90cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、底面は長軸方向に張り出す長楕円形を呈す。検出面からの深度148cmを測り、壁は中段以下垂直に落ち込み、底面は平坦。出土遺物は無く、時期不明だが、所謂「Tビット」と呼称される陥穴状土坑である。

#### 204土坑：欠番

205土坑(第49図=PL, 11)：G 6 区に位置する。長径382cm、短径128cm、長軸方向をN-52'-Wにとり、弓なりに彎曲した長楕円形を呈す。底面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりは不均一で、人為的な遺構とは認め難い要素を残す。出土遺物は無く、時期・性格は不明。



第48図 208号穴 平・断面図

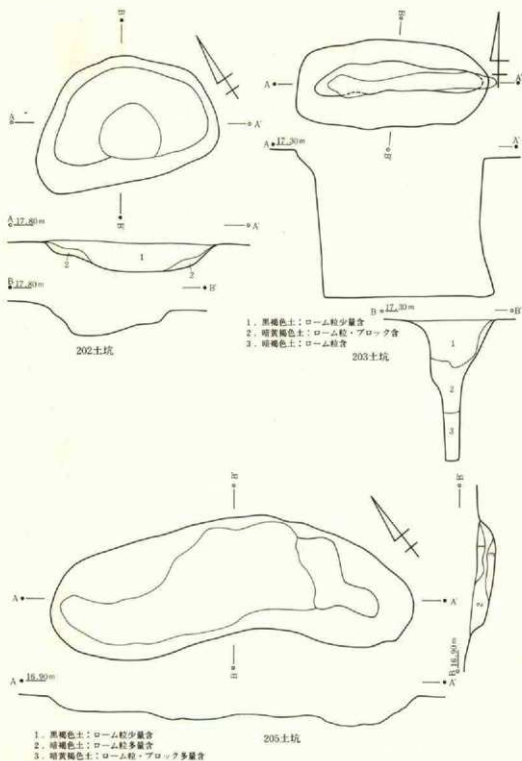
206土坑(第50図=PL.12): F 6区に位置し、最大径168cmの不整形を呈す。底面は中央に浅い掘込みを持ち、壁は比較的明瞭に立ち上がる。検出面からの深度は最大35cmを測る。出土遺物は無く、時期・性格は不明。

207土坑(第50図): F 6区に位置し、最大径122cmの不整形を呈す。底面に一段深い掘込みを有し、壁の立ち上がりは明瞭である。検出面からの深度は最大45cm、出土遺物は無く、時期・性格は不明。

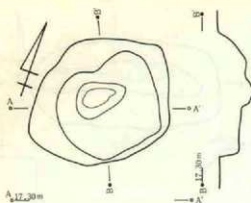
223土坑(第50図): D 3区に位置する。長径210cm、短径112cm、長軸方向をN-58°-Eにとり、底面が長軸方向に張り出した長楕円形を呈す。壁の立ち上がりは急角度で底面は平坦、検出面からの深度は最大194cmを測る。出土遺物無く、時期不明だが、所謂「Tビット」と呼ばれる陥穴状土坑である。

229土坑(第51図): C 4区北東隅に位置する。長径270cm、短径100cm、長軸方向をN-48°-Eにとり、底面が長軸方向に張り出した不整形長楕円形を呈す。壁の立ち上がりは急で、底面には若干の凹凸がある。検出面からの深度は最大130cm。出土遺物は無く、時期不明だが、所謂「Tビット」と呼ばれる陥穴状土坑である。

234土坑(第51図): D 4区に位置し、最大径188cmの略円形を呈す。底面は平坦に整えられ、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。検出面からの深度最大200cmを測る。出土遺物は無く、時期不明だが、所謂円形の陥穴状土坑である。(原田)



第49図 202・203・205土坑 平・断面図



A-A' 30m

1. 黒色土：ローム粒少量含
2. 褐色土：ローム粒・ブロック多量含
3. 明褐色土：ロームブロック多量含

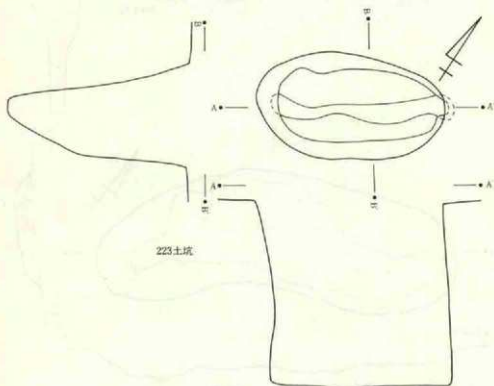
206土坑



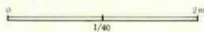
A-A' 30m

1. 黒色土：ロームブロック少量含
2. 暗褐色土：ローム粒少量含
3. 暗褐色土：ローム粒多量含

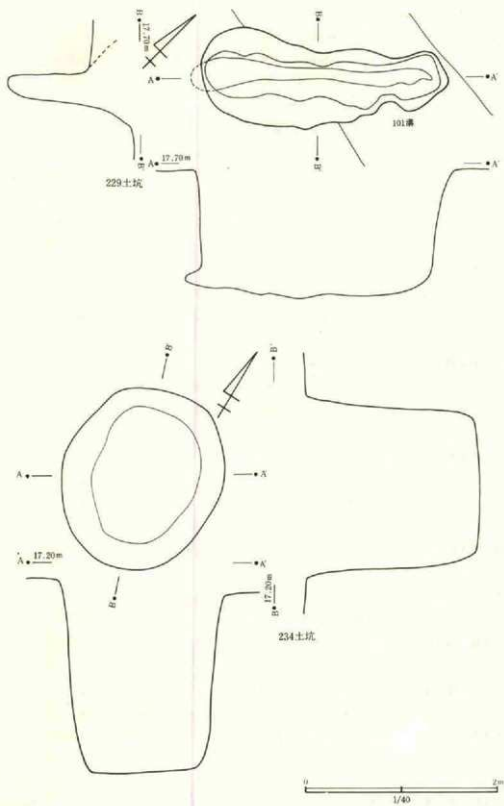
207土坑



223土坑



第50図 206・207・223土坑 平・断面図



第51图 229·234土坑 平·断面图

## E. 遺構外出土の土器

### 第1群土器 (第52・53図: 1-54=PL, 23-24)

早期前半の燃糸文系土器である。時期別出土土器分布図に示されるように、F5・F6区を中心に散漫ながら比較的まとまった出土状態を示す。分布の在り方から、小規模な廃棄ブロック1か所を、ほぼ完掘したものと考えて良いだろう。総出土数128点。

1が口唇上面にも縄文施文帯を有する第2様式(井草II式)J型の他は、いずれも第3様式(夏島式)に属する。このうち2-4は口縁外面上端にも、痕跡的な縄文施文を残すが、文様帯として意識されたものとは言い難い。口縁部片40点を対象とした文様組成比は、縄文施文型<J型>25点(RL20点、LR3点、不明2点)、燃糸文施文型<Y型>6点(R2点、Y4点、不明2点)、無文型<M型>9点で、典型的なJ型施文優位(62.5%)を示す。なお、52・53は小型な丸底形深鉢片であり、該期の型式組成中に散見される。

### 第2群土器 (第53図: 55-56=PL, 24)

早期前半の沈線文系土器である。出土総数3点のうち、図示した2点は同一個体で、太い凹線の上下に細沈線文、さらに貝殻腹縁文が加飾される。内外面に丁寧なミガキが施された、典型的な田戸下層式土器である。

### 第3群土器 (第54図: 57-62=PL, 24)

早期後半、条痕文系土器を本群とした。出土総数36点、遺跡内での分布はF7・G7区と、調査区の北部に片寄りを見せる。いずれも条痕文のみが施された、所謂「飾られない土器」片である。型式細別は難しい。

### 第4群土器 (第54-59・63図: 63-226・348=PL, 24-29)

前期前半、黒浜式土器である。竪穴住居跡出土の資料を含め総数4717点と、上貝塚遺跡で最も多量に出土した。その平面分布も、該期の竪穴住居跡2基の周辺に、より濃密な集中を示す。文様要素が複雑なため、以下10期に細別して報告を行う。

第4群1類土器(63-69): 竹管状工具による平行沈線文を主体とした文様を描くもの。横位平行線文の63・64、曲線状モチーフの65、連続波状文を描く66-69がある。

第4群2類土器(70-76): 竹管状工具による連続刺突文を施すもの。刺突文による山形モチーフを表出する70・71、地文に付加条縄文が施された74・76等が含まれる。

第4群3類土器(77-82): 竹管状工具により、コンパス文が施されたもの。いずれも波状間隔が大きく、崩れた感じの施文特徴が共通するが、81・82はむしろ単に波状文と言うべきものかも知れない。

第4群4類土器(83-92): 沈線による集合条線文が充塞されるもの。83・91が比較的鋭利な竹管状工具を用いて施文するのに比べ、84・85は条痕文的な、90・92は歯状条線文的な雰囲気に近い。

第4群5類土器(93-100・218・348): 沈線による格子目状文93-96、或いは魚骨文97-100・218が施された土器。後者は特に、内外面の調整が丁寧で、同一個体と思われる。口縁部直下には、97に見るようにコンパス文が加飾される。

第4群6類土器(101-103): 貝殻文が施された土器。101・102は、いずれも貝殻背瓦痕文が施された胴部破片、103は貝殻腹縁文が施された土器である。

第4群7類土器(104~123・168~194)：摺糸文の施文効果を表出するもの。その大部分が、軸襷摺糸文成るいは付加条縄文と思われるが、詳細な施文原体の分析は未了である。摺糸文が4条単位で施された106・107、軸襷の圧痕が文様効果を表出する111~113、さらに綱目状付加条縄文119・121・123と施文原体のパラエティーに富み、個体によっては菱形・羽状施文も普遍的に行われる。

第4群8類土器(124~167・195~215)：無面及び単節縄文により器面を飾るもの。口唇上面に刻目が施された124・125、縄文を菱形羽状に施す165、原体の施文単位を示すように、ミミズ腫れ状の縦微隆起の残る132・160、さらに原体末端が他繩他縛された155・164等がある。また164は、波状口縁を呈する深鉢片である。

第4群9類土器(217)：所謂有孔土器。217は単節縄文を地文とし、焼成前に外面から穿孔が行われる。丹彩の痕跡は無い。

第4群10類土器(216)：無文の土器。216は比較的小型・薄手の深鉢形土器である。

第4群土器底部(218~226)：底部が外に張り出した平底様の224が目立つが、他はいずれも揚底状を呈し、底部への縄文施文の痕跡は観察されない。

黒浜式土器は、多くの文様要素を持ち、その型式組成・器種組成に時間的・空間的に連続する変化が認められる。最近ではこれを5段階に細分し、各段階毎に特徴的な文様要素の消長を追求する作業が進められ、一定の成果を示している(新井、昭和57年)。本遺跡で主体的に出土した黒浜土器も、この段階細分の中で位置づけを行った場合、先に報告した遺構出土土器と同様、大旨第Ⅱ段階(黒浜式古段階)を中心とした一群として理解される。もとより、こうした一土器型式内における段階細分は、多量な出土土器群中から、文様要素を持つ土器を抽出し、その特徴から総合的な段階比定を進める作業であり、これが必ずしも土器型式の細別そのものではない点に留意する必要がある。しかし上貝塚遺跡の資料を見る限り、黒浜式土器第Ⅲ段階にその導入が認められるコンパス文(第4群3類土器)は未だそのみで確立した文様構成を持たず、また第Ⅰ段階に盛行するより古い文様としての連続爪形文(第4群2類土器)の減少、さらに新しい文様要素としての格子目状沈線文(第4群5類土器)の存在等は、段階細別のマルクマールとなる要素と言えよう。なお、他に、黒浜式土器第4段階に盛行した魚骨文を持つ土器97~100も、1個体分出土しているが、この資料は胎土が緻密で、器面調整や焼成等、他の土器とは異なる顔つきを示すものである。

#### 第5群土器(第59~64図：227~347・349~351=PL.22)

前期後半の諸磯式、浮島式及びそれに後続する前期末葉の土器を一括した。出土総数1069点で、前期前半の第4群土器に次ぐ、まとまった出土量を示す。遺跡内における平面分布は、該期の006・013竪穴住居跡周辺に極度の集中を示し、またF6・F7区境界付近にも散漫ながら分布の中心が認められ、前代の第4群土器とは明確な差異がある。文様要素により、以下16類に分けて報告する。

第5群1類土器(227~230・351)：竹管状工具による平行沈線で、直線・曲線モチーフを描くもの。227は所謂入組的なモチーフを持ち、口縁部に突起が付される。351は扇状の大形波状口縁を呈する深鉢形土器で、口縁部直下には沈線文間に縄文が施された低隆帯を有し、浮線文の発生過程を示す例かも知れない。229は崩れた木葉状文。これらはいずれも諸磯b式土器中段階に比定される土器である。

第5群2類土器(231~238)：所謂浮線文が貼付された土器。縄文を地文に、浮線文上を斜めの刻目で

充填するもの231～236が一般的だが、曲線状モチーフを描き、刻目を有さない238もある。諸磯b式土器中段階の土器である。

第5群3類土器(239・240)：同一個体片で、横位の連続爪形文が重畳し、その間隙を斜位の刻目文で埋めるもの。諸磯b式土器で、中段階でもより古手の文様要素を残している。

第5群4類土器(241)：大波状口縁を呈し、綾杉状の沈線文で文様を表出するもの。口縁部が大きく外反した深鉢形土器で、諸磯b式土器の範疇で捉えられる。

第5群5類土器(242～249・252・288)：地文に斜位の摺糸文が施されたもの。地文上に平行沈線、連続爪形文で、直線・曲線状のモチーフを描く。浮島I式土器であるが、文様モチーフは諸磯b式土器古～中段階のもの共通する。

第5群6類土器(250～251・253～269)：竹管状工具による平行沈線文を主要な文様要素とするもの。波状沈線文と連続爪形文を加飾する250、幅広の連続爪形文が併用される263・265・268・269と、文様パリエティーは豊富である。253・254のように、波状口縁を持つ土器も含まれる。いずれも、横位沈線文が文様モチーフの基調を成しており、浮島II式土器の範疇で把握できる。

第5群7類土器(270～287)：強く外反する口縁部に、比較的深い密な刻目を施すもの。体部文様に平行沈線文のみが施された270、列点状の連続竹管状刺突文が施された274～279、波状貝殻腹線文が施された280～284の他、幅広い波状竹管文が施された286等、複数の文様要素が組み合わせられる。浮島II式土器の範疇で理解される。

第5群8類土器(289・290)：口縁下に貝殻による連続爪形状の刺突文が施されるもの。289は口唇断面が尖頭状を呈し、290は口縁部が強く外反、肥厚する。浮島II式或いはIII式土器の資料であろうか。

第5群9類土器(291～298)：所謂有段口縁を持つ深鉢形土器。その多くは土器成形時の輪積痕を残し、その上に刺突文を施した段を1～3段重畳させる。一部に貝殻腹線文を加飾した291や、刺突文等が全く施されない298が含まれる。浮島II式土器以降、前期末まで普遍的に継続する特徴ある土器群である。

第5群10類土器(299～301)：所謂有段口縁を持ち、さらに集合沈線文によって加飾される土器。3点とも同一個体かも知れない。浮島III式土器の文様組成中に組み込まれる土器であろう。

第5群11類土器(302～318・334)：波状貝殻腹線文を主要な文様とする土器。有段口縁を呈する302～304、貝殻背圧痕文が併用される305、有節線文が加飾される318・319があり、また地文自体も、肋脈の発達したアナガラ属の貝殻を利用したものから、肋脈の無いハマグリ・サルボウ属を利用したもので、変化に富む。大旨、浮島II式からIII式の資料として理解できる。

第5群12類土器(320～322・349)：竹管状工具による、所謂三角形刺突文が施されたもの。文様要素の上から、浮島III式土器のメルクマルとされる土器である。

第5群13類土器(323～333)：強く口縁部が外反する深鉢形土器で、繊細な波状貝殻腹線文に、単沈線による区画文を加えるもの。口縁部に葡萄状沈線文を加える324・325と、刺突文を加える323がある。浮島III式土器に続く、興津式土器である。

第5群14類土器(335～344)：縄文により器面が飾られるもの。口唇部上面に、刻目のある貼付粘土紐を持つ335は、先に11類として分類した334と共に、大木2式土器の普遍的な技法が在地化したものと考え



えられる。他に有段口縁を持つ336・337・341、結節縄文を施す340・342等もあるが、比較的単純な単節縄文を施す土器が多い。浮島Ⅲ式土器以降、前期末から中期初頭にかけての土器群である。

**第5群15類土器** (345・350)：無文の土器。器面のミガキが丁寧で、鉢形、浅鉢形を呈する小型品が一般的。諸磯b式期前後に位置づけられようか。

**第5群16類土器** (346・347)：ミミズ腫れ状の貼付文及び条線文によって文様を描くもの。前期末葉、十三菩提式土器の範疇で捉えることができる。

**第6群土器** (第65図：352・353)

中期前半の土器。図示した2点のみが出土した。平行沈線による区画文の間隙に、結節縄文、三角形除刻文等を充満する。五領ヶ台式土器である。

**第7群土器** (第65図：354～356)

中期前半の土器のうち、勝取式及び阿玉台式土器を本群とした。図示した3点が全てで、両型式のうちでもその前半期に属する土器である。

**第8群土器** (第65図：357～364)

中期後半、加曾利E式土器を本群とした。出土総数53点で、調査区内から散漫に出土した。加曾利EⅠ式に属する357、同Ⅲ式に属する358の他は、いずれも加曾利EⅣ式土器である。

**第9群土器** (第65・66図：365～390)

後期前半の土器で、出土総数156点。加曾利EⅣ式土器からの系譜を引く356・357、太い沈線文と細かい縄文を特色とする称名寺式土器368～370の他は、壺之内Ⅰ、Ⅱ式土器が主体を占める。

**第10群土器** (第66図：391～399)

後期後半、加曾利B式及びそれに続く曾谷式土器をまとめた。出土総数117点。いずれも断片的な資料であるが、波状口縁を呈し、胴部で屈曲する鉢形土器393は、器形・形態ともに特異なものである。加曾利BⅡ式土器前後に比定できようか。他の資料は加曾利BⅠ式に属する391、加曾利BⅢ式から曾谷式土器に比定される394・395等。所属時期はまちまちで、出土状況にも特徴は見られない。

**第11群土器** (第66・67図：400～411)

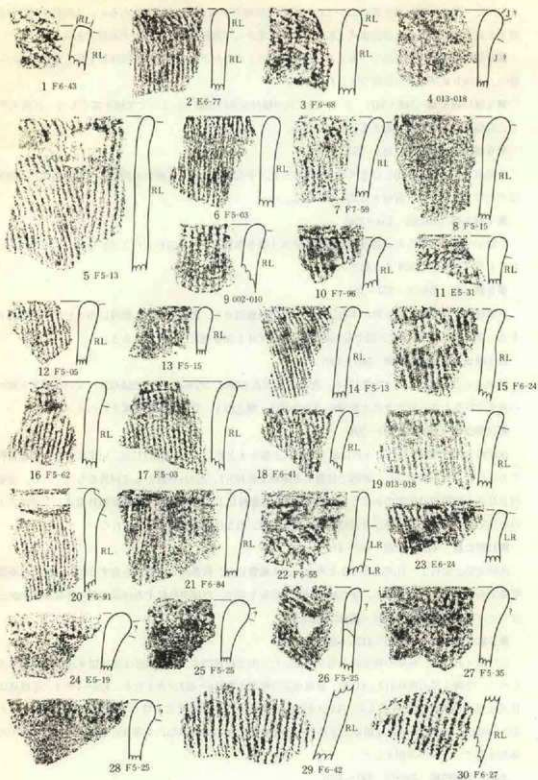
後期後半、安行Ⅰ・Ⅱ式土器をまとめた。出土総数16点。豚鼻状の小突起を有する407・408は、所謂帯縄文系の深鉢形土器である。また400～405は粗製土器で、口縁が外反する紐線文系の深鉢403・405と、直立から内彎気味の400～402・404に大別される。

**第12群土器** (第67・68図：412～445)

安行Ⅲa式以降、晩期の縄文式土器を一括した。出土総数75点。412～427は安行Ⅲa式土器に属するもので、帯縄文系の深鉢412・413や、紐線文系の粗製土器418～427が含まれる。428～430は、所謂純山Ⅱ式土器の範疇に含まれるもの、431・432は太い沈線による曲線文を持つ前涌式土器である。また433～445は、安行Ⅲc式及びⅢd式土器として理解される。446は体部に条線文が施された、晩期後半の鉢形土器で、1点のみ出土した。

**土鏞・土製円板** (第68図：447～450)

447～449は小型の土製円板、450は加曾利E式土器を利用した土器片鏞である。なお、土偶等の特殊遺物は1点も出土していない。なお他に、土製耳飾が3点出土している(第77図)。(原田)

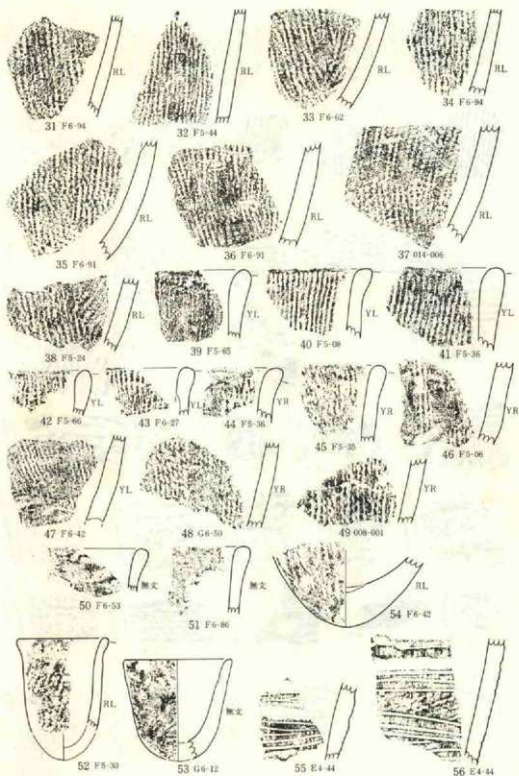


拓影番号の幅の表示は出土グリッドを示す。

0 10cm

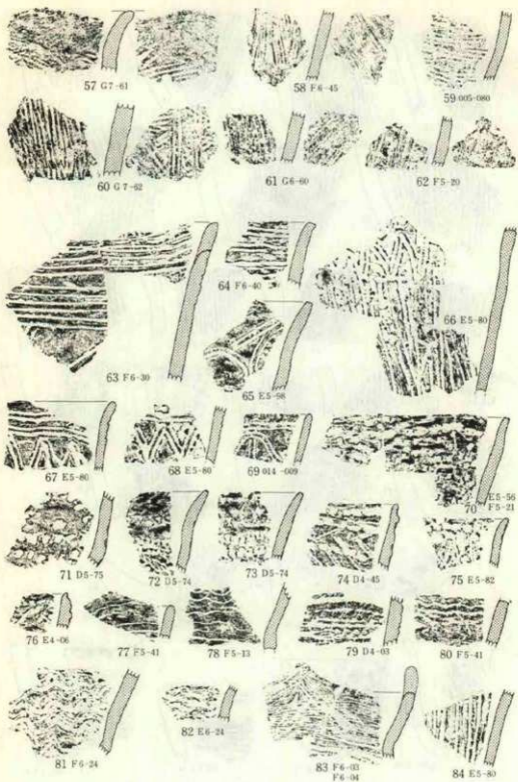
第52図 早期前半の土器 (1)

1/2



第53図 早期前半の土器 (2)

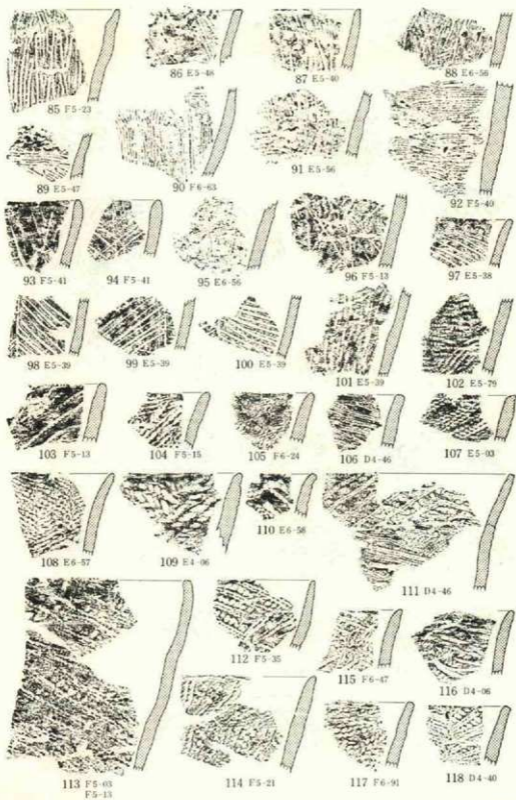
1/2



土器断面の網点は粘土への繊維混入を示す。

第54図 早期後半の土器・前期前半の土器 (1)





第55図 前期前半の土器(2)

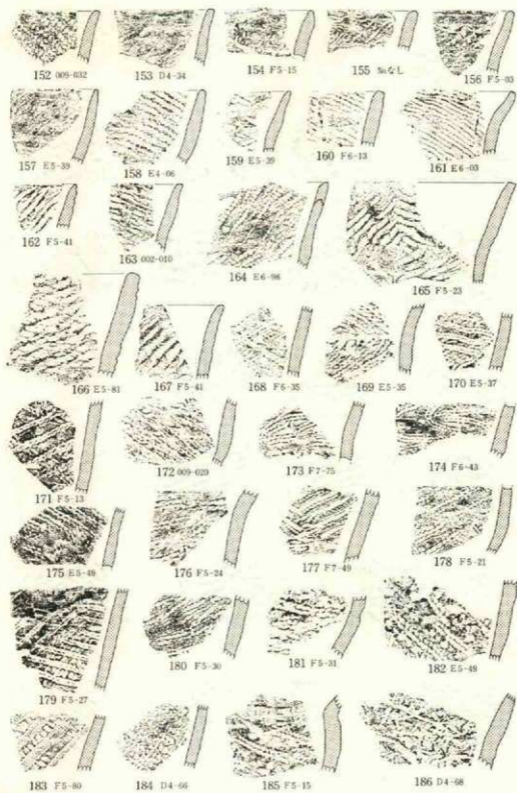




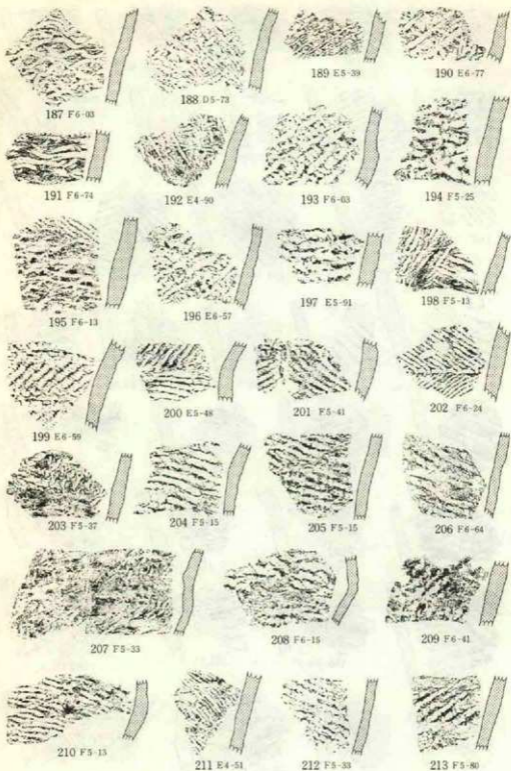
0 10cm

1/3

第56図 前期前半の土器 (3)

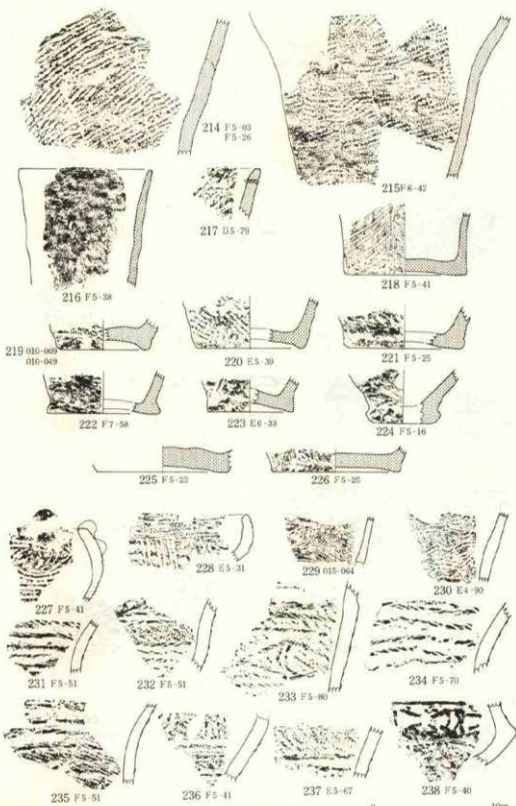


第57図 前期前半の土器 (4)

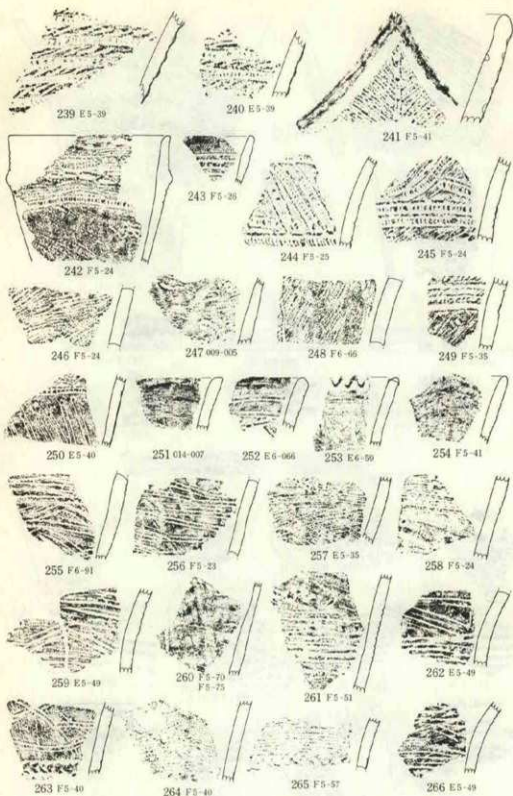


第58図 前期前半の土器 (5)



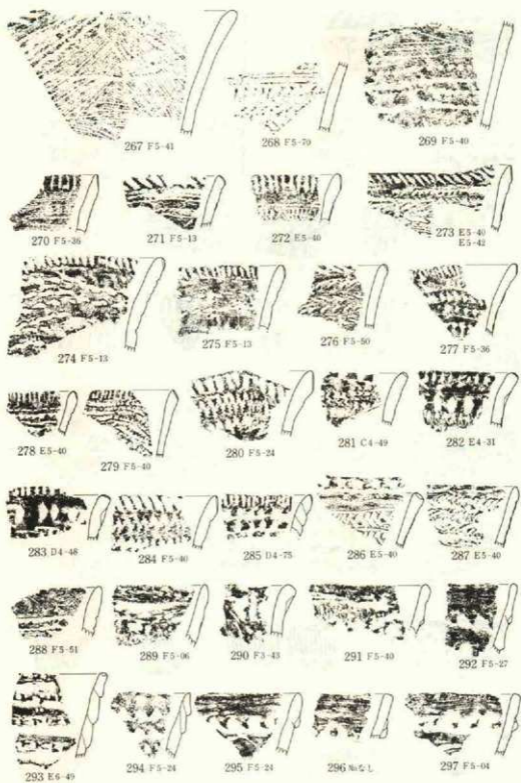


第59図 前期前半の土器 (6)・前期後半の土器 (1)



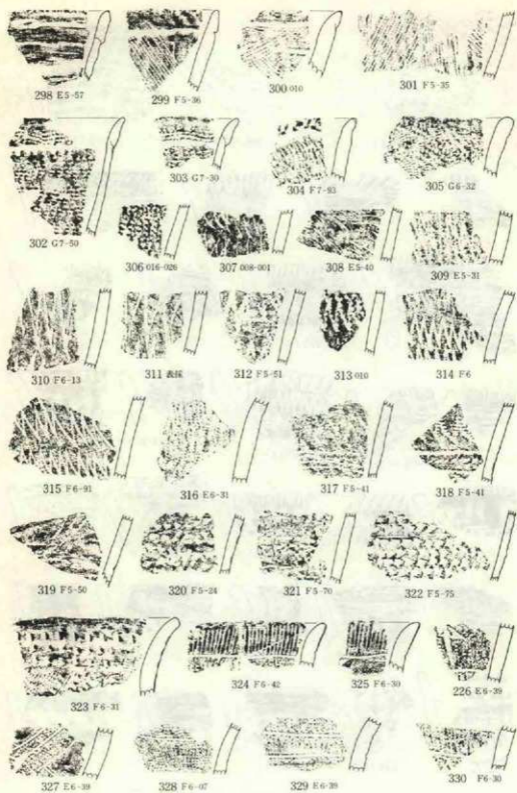
第60図 前期後半の土器 (2)



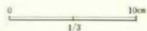


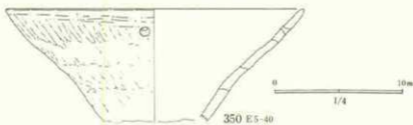
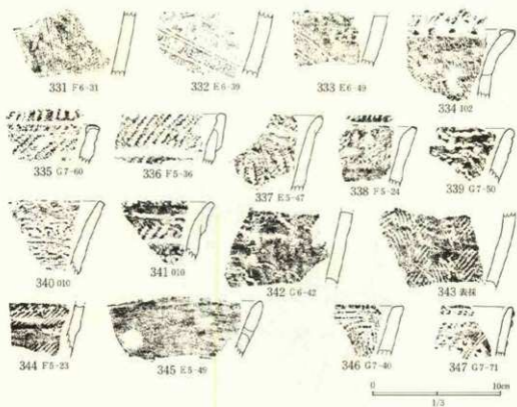
第61図 前期後半の土器 (3)



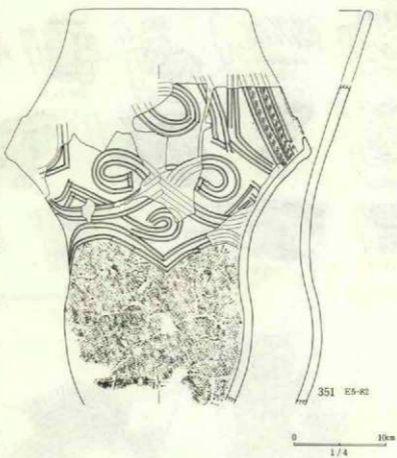


第62図 前期後半の土器 (4)

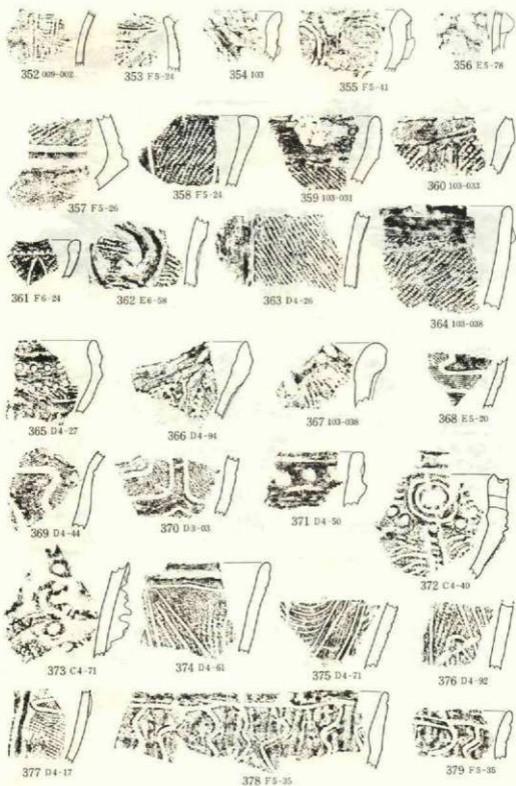




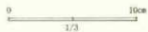
第63図 前期前半の土器 (7)・前期後半の土器 (5)



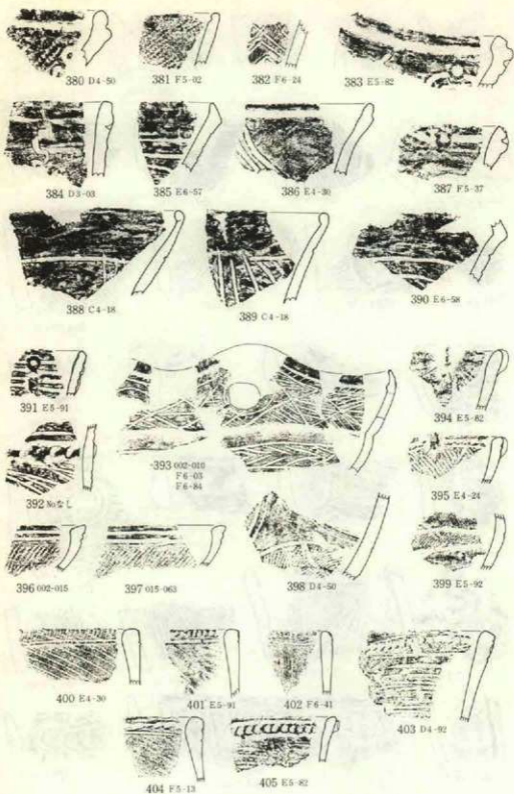
第64図 前期後半の土器 (6)



第65図 中期前半～後期前半の土器

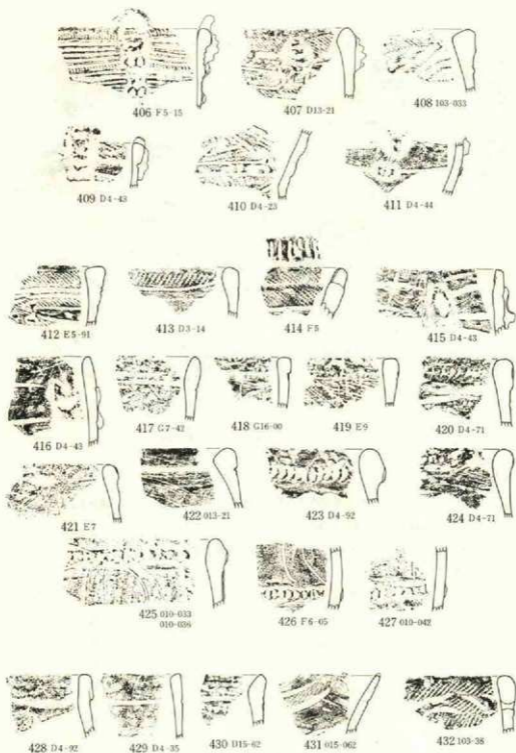




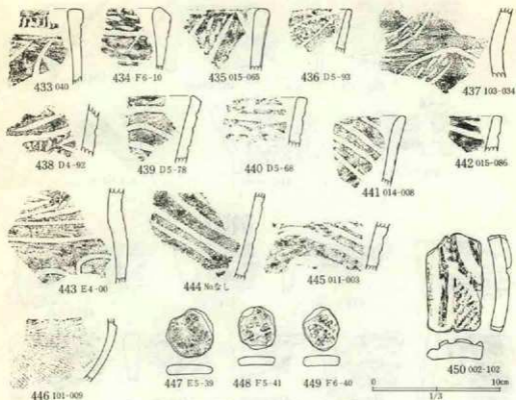


第66図 後期前半～後期後半の土器





第67図 後期後半～晩期前半の土器



第68図 晩期の土器・土錘・土製円板

## F. 石器・石製品

上貝塚遺跡からは、合計756点の縄文時代の石器、礫が出土した。これらの遺構別集計は表12に示した。グリッド出土遺物の内訳と集計結果は以下のとおりである。

石 錘	18 ( 12%)	円礫製品*	9 ( 6%)
削 器	4 ( 2%)	石 皿	3 ( 2%)
楔形石器	3 ( 2%)	玉	1 ( 0.7%)
石 錘	1 ( 0.7%)	石 剣	1 ( 0.7%)
剥 片	78 ( 54%)	砥 石	1 ( 0.7%)
石 杖	8 ( 5%)	軽 石	3 ( 2%)
石 斧	15 ( 10%)	その他	5 ( 3%)
礫 器	1 ( 0.7%)	礫	605

\* 円礫製品：磨石、凹石、敲石等

これらの分布状況は第27図に示した。多量に検出された礫と剥片の分布は、本遺跡の主体を占める黒浜式土器の散布の濃淡と一致するから、大旨、この段階に帰属するものと考えられる。分布は、住居址群の北側及び東側の地点、並びに南西の地点に集中している。土器と共に廃棄されたとも考えられるが、遺跡内に搬入された多くの円礫の用途、機能をつきつめる要があろう。一方、石器の分布状況は、礫や

表12 上貝塚遺跡遺構出土石器一覧

	001	002	003	006	006	007	008	009	010	013	015	016	101	102	103	201	216	218	223	232	小計
石 鏃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
削 器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
楔形石器	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
石 鏃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
石 斧	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	1	1	-	-	-	-	-	6
円礫製品	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	1	1	1	-	4	-	-	-	-	-	10
石 皿	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
軽 石	-	-	5	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	7
砥 石	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	5
玉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
剥 片	1	-	-	3	1	1	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	14
石 核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
礫	1	3	1	4	-	3	2	5	7	7	4	3	7	2	33	-	-	-	-	1	83
小 計	3	3	7	8	1	8	5	7	9	10	7	5	11	2	41	1	1	1	1	1	132

剥片の分布と比較すると散漫であり、特定の土器型式との対応関係を指摘することは困難である。

石器のうち代表的なものを、第69図～第77図に掲げたので、これに従って概観したい。

**尖頭器 (1～3)** 3点あり、古い様相を呈している。1は玄武岩製で、欠損している。剥離面の風化の度合によって、新旧2面が識別され、網をかけた部分の剥離が新しい。尖頭器の破損品を削器として再利用したものであろうか。2も玄武岩製で、両面打製の尖頭器破片である。縄文期とする積極的根拠は無い。3はホルンフェルス製。有茎の槍とも考えられるが、粗製であり、削器とも考えられる。

**石鏃 (4)** 側面を見ると彎曲し、L字状をしているが、石鏃と見られる。両面打製で、断面は紡錘形である。完形で黒曜石製。

**石鏃 (5～19)** (1)凹基無茎鏃 (5～14)、(2)微凹基無茎鏃 (15～17)、(3)有茎鏃 (18、19) の3類に分けられるが、大半がチャート製である。縄文時期は、一般的に言って、(1)が前期、(3)は本遺跡第10群土器以降に比定されるものと思われる。(2)は早期である可能性が高いように思われるが、断定する証拠は無い。

**削器 (20)** チャートの剥片に簡単な打ち欠きを加えた粗製のもの(図省略)と共に、縦型石匙が1例出土している。黒色頁岩かと思われる石材を用いている。縦長剥片の縁辺を両面から剥離し、剥片尾部をつまみの部分にあてている。あるいは、尖頭器の項で触れた3も、この種の石器であるのかもしれない。

**砥石 (21)** 有溝砥石が1例あった。小破片であるために全体の形状が分らないが、狭い表面には8条の浅溝(幅:1.5～4mm、深:1～3mm)が認められる。溝には切り合うものが多く、径の細い骨角器の製作に供せられたものと推定される。

石槌 (22, 23) 両例共にチャート製。打面と作業面との入れかえによる打面転位が認められる。22はチャートの比較的大き目の円礫が用いられている。23は極めて小型の例で、爪先の様な剥片が落とされている。

軽石 (24-26) 浮子の素材として多用されるとも言われている石材だが、3点検出された。24は中央に鋭利な刃物(チャートの剥片だろう)による裁痕があるが、25、26には加工の痕跡がない。軽石は、飯山満東遺跡から多量に検出されているが(古内 昭和50年)、加工されたものは少ないようである。

石斧 (27-38) 通例のとおり、(1)磨製のもの、(2)打製のものに分けられるが、(1)は僅少である。

(1) 磨製石斧 磨製石斧は3類に分けられる。

(a) 部厚くて長手のもの(27, 28)。27は完形で、細長い円礫の全面を研磨するが、側面部には敲打による調整が加えられている。研磨は、体部では縦方向に、刃部周辺では横方向に施されているが、刃部の研磨は特に入念である。頭部には打痕がある。28は破片である為に、全形は不詳だが、やはり礫素材で、全面に研磨痕がある。側面部の研磨は、27よりも念が入り、平坦面を形成する。なお、両例共に、刃部の形成は、石斧長軸と並行する剥離を加え、その後研磨が加えられているらしい。これは、刃部の研磨方向が、石斧長軸と直交、若しくは斜交することの一つの要因ではないかと疑われる。すなわち、加撃によって形成された剥離面の稜を磨りつぶし、刃部を形成するためには、長軸方向に研磨軸を設定するよりも、その方が効率的であると見られる。なお、石質は良く分らない。

(b) 中厚手で細長い形態を示すもの(31)。素材である細長い円礫の形状を大きく変更しないという点では(a)に近いが、厚みがなく、やや偏平な印象を受けるものである。研磨は表裏全面に亘るが、刃部を除くと粗製であり、光沢を生じる程ではない。側面にも軽い磨きが入る。刃部は細かい痕跡が集合し鈍化している。また、刃部の研磨軸が石斧長軸と平行であることも(a)と異っている。一度欠損したと見られるが、欠損面を再研磨している。石質は片岩の一種だが、詳細は不明である。

(c) 全体の形状は不明だが、偏平なもの(29, 30)。29は刃部破片で、表裏側面共に全面が研磨されている。砂岩製でもろい。30は頭部破片。裏面が板状に剥離しているが、表裏、側面、上面全て良好に研磨されている。形態的に、(a)、(b)とは異なり、短冊状の形状を呈するようである。やはり砂岩製である。

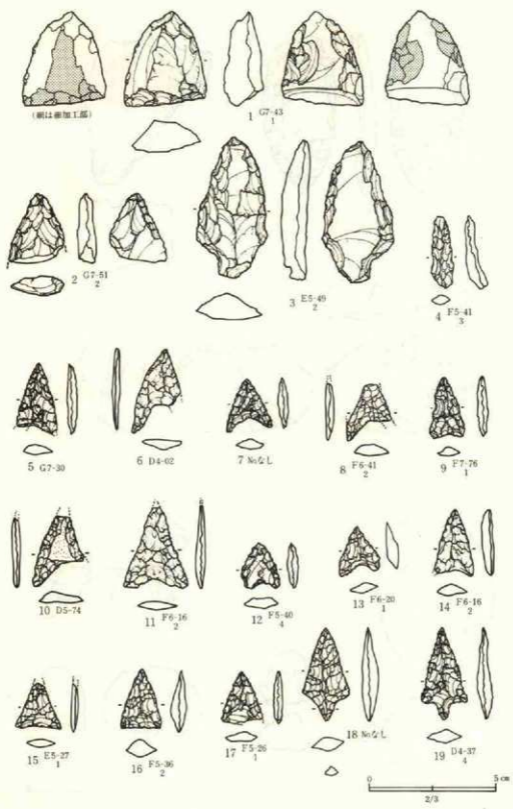
(2) 打製石斧 32-38に示したものが代表例である。2類に分けられる。

(a) 所謂短冊型石斧で、石斧側縁が平行、若しくは直線的に広がるものの両者を含めている(32, 33, 35-38)。製作は粗製のものが多く、表面は原礫面を留めている。特に33などは、円礫の一端を打ち削ったチャッパー状の形態をしているが、石器の長軸と直交して刃部が形成されているので、一応、打製石斧に含めておいた。35も石斧に含めるには問題があるが、刃部の破損例として、便宜的に石斧とした。

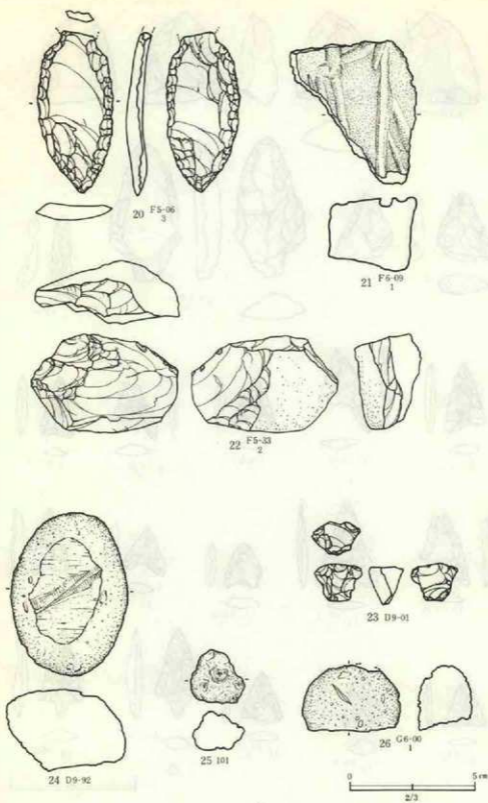
(b) 34の1例であるが、側縁が内彎して、末広がりの刃部が作出されている。擗型石斧に分類されるが、(a)類に比して少数である。

礫器 (39) 偏平な円礫の一部に打ち欠きがある。石斧と比較して、長/幅比が小さいところに特徴がある。

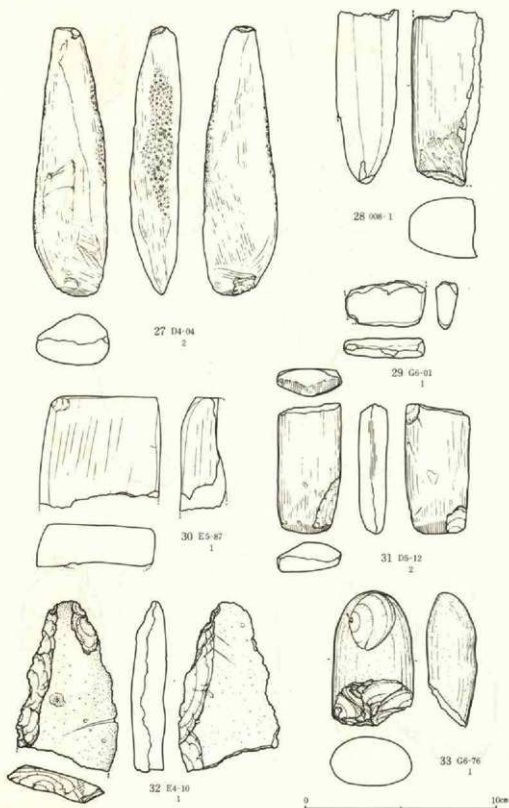
円礫を素材とする各種大型石器 (40-49, 51-54) 一般に磨石、敲き石などと呼ばれているもの



第69图 石 器 (1)

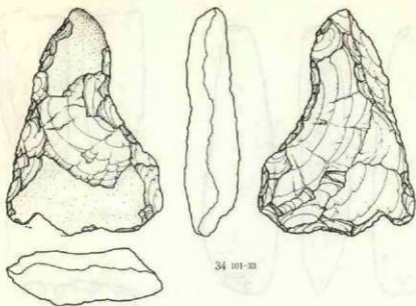


第70圖 石 器 (2)

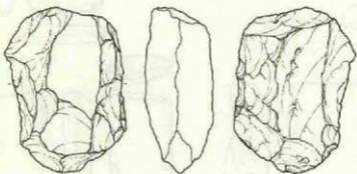


第71圖 石 器 (3)

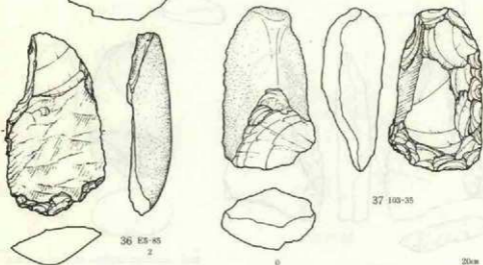




34 101-33



35 001-59

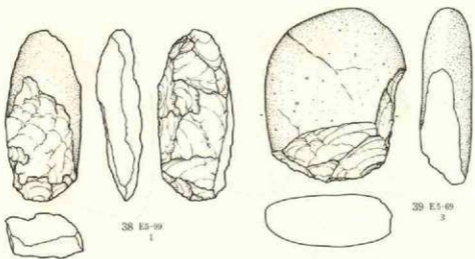


36 E5-85  
2

37 103-35

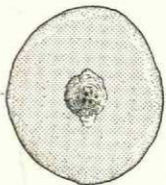
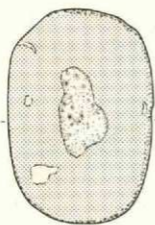
0 1/2 20cm

第72回 石 器 (4)



38 E5-99  
1

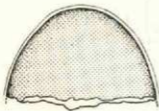
39 E5-69  
3



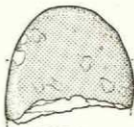
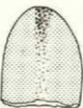
40 E4-30  
1  
(前は磨製土器)



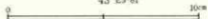
41 F5-24  
4



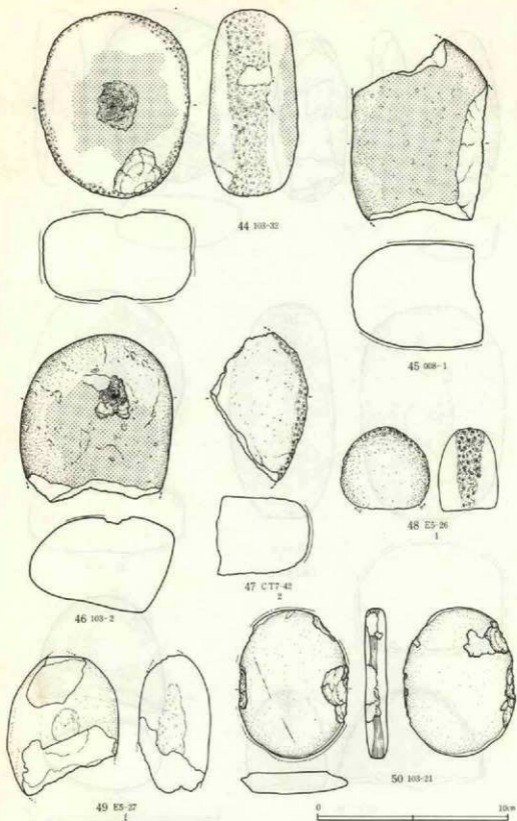
42 I01-28



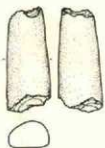
43 E5-61



第73図 石器 (5)



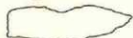
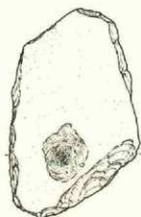
第74图 石器 (6)



51 E5-36  
1



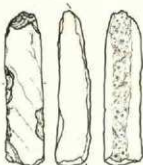
54 015-0016



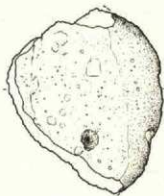
55 F5-24  
2



52 F7-08  
4



53 G7-43  
1



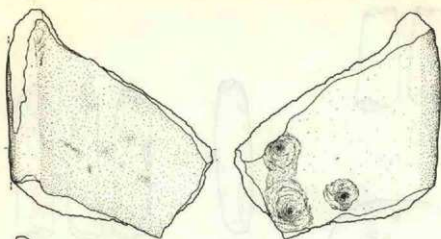
56 012-1



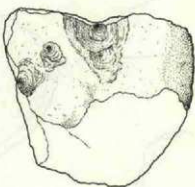
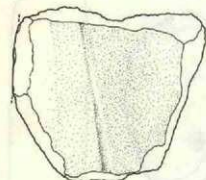
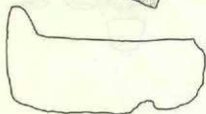
57 C4-39C  
1



第75圖 石 器 (7)

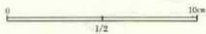


58 D4-92



59 G7-42

1



第76图 石 器 (8)

を一括したが、使用痕を基準に数種に分類される。

(a) 円礫の表裏に磨痕を有するもの(43、45)。

(b) 円礫の表面に磨痕と共に、集中的被加撃痕を有するもの(41、46)。

(c) 円礫の表面に磨痕、集中的被加撃痕を有し、さらに側面に帯状被加撃痕を有するもの(40、44、49)。

(d) この他に、磨痕と帯状被加撃痕の認められるもの(42)、帯状被加撃痕のみ認められるもの(47、48)がある。ただし、42、47は破片であるために、必ずしも使用痕の全てが遺存しているとは限らないだろう。

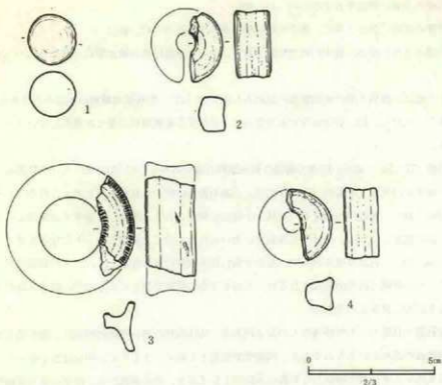
(e) 石槌(51-53)。細長い円礫の端部に被加撃痕の認められるもの(51、52)と、(c)類あるいは(d)類の一部の破片を再利用したもの(53)がある。石器の製作に用いられたものと考えられる。

(f) 石砧(54) 礫表の一面にアバタ状の小潰痕が観察される。潰痕には集中する部分もあるが、その周辺に広く散在している。やはり石器製作に用いられたもので、(c)類とセットになると考えられる。

**石皿(58、59)** 石皿は破片のみで、全形を窺い得る資料に恵まれなかった。多孔質安山岩が素材に選ばれている。全例に凹穴が看取されるが、穴はV字形の断面形態をとるもので、前項(b)類の浅い皿状の穴とは本質的に異なるものである。

**特殊な石器** 石器のうち特殊なものが3例ある。50は板状の薄い円礫の周辺に、部分的な打ち欠きと共に研磨痕の認められるものである。円盤型磨製品とも称すべきもので、用途は良く分らない。岩手県滝ノ沢遺跡から本石器と類似した石器が多数出土しており、その状況から、確実に塊状耳飾の未製品と考えられている(稲野 昭和58年)。57は石棒あるいは石刺の破片である。第77図1は玉の未製品と考えられる球状の石で、全面に研磨が及んでいる。穿孔直前段階であろう。石質は未詳である。(田村)

**土製耳飾(第77図2-4)** 上貝塚遺跡からは、塊状耳飾残欠2点及び滑車形耳飾1点が出土している。このうち前者は2・4で、いずれも全体の約1/2が遺存している。2は切れ込み部が残り、環の断面が四角形に近いが、4は全体的に表面の磨減が激しく、切れ込み部が遺存していない。実測図の推定線は、切れ込み部を欠くが、これは誤りである。2・4ともに赤色塗彩の痕跡は残されていないが、前期後半第5群土器に伴うものと思われる。3は滑車形耳飾の残欠で、外面にのみ細かな刻みが施されている。裏面は素面で、赤色塗彩の痕跡は残されていない。形態から考えて、晩期前半、第12群土器に伴う資料と考えられる。(原田)



第77図 石器(9)・土製月飾

### G. 遺物分布の特色に見る上貝塚遺跡の動態

調査の結果、上貝塚遺跡は縄文時代前期、黒浜期と浮島Ⅱ式期前後の集落遺跡であり、更に縄文時代各時期の遺物包蔵地であることが判明した。縄文時代における当遺跡の動態は、時期別細分が可能な6375点の土器について、時期毎の平面分布を観察すると、ある程度明らかにすることができる(第26・27図)。

時期別に遺物分布を見ると、縄文時代早期前半、撫糸文系土器の分布はF6・F7区付近に弱い集中を見せ、比較的台地中央部に廃棄ブロックが形成されるのに対し、早期後半条痕文期には、調査区北端、谷津に面した傾斜変換点に若干の出土が見られ、調査範囲外、北方に該期の分布が広がる可能性を示唆している。明確に該期に属する遺構は、早期後半の208炉穴のみで、しかも該期の遺物分布には一致しない。あくまでも早期段階では、小規模な遺跡が形成されたのみで、当遺跡が生活拠点とはなり得なかった事を示している。

前期には、前半期の黒浜期及び後半の浮島Ⅱ式期に、各々小規模ながら竪穴住居が数基ずつ営まれる。しかし黒浜期から浮島期までの集落の継続性は稀薄で、遺構出土の資料から見る限り、黒浜期では新井分類の黒浜式Ⅱ段階の、浮島期では少量の諸磯b式土器を伴う浮島Ⅱ、Ⅲ式土器の時期に限られる。また、遺物分布の特性は、黒浜期の土器が遺構を中心に、調査区に広く濃密な分布を示すのに比べ、諸磯・浮島期の土器は、006・013竪穴住居跡を中心とする、該期の遺構付近に集中的な分布を見せる。



縄文時代中期以降、当遺跡からは晩期後半に至る各型式の土器が出土するが、これらは量的にも貧弱で、また伴うべき遺構の存在も見当たらない。

上貝塚遺跡は継続性の乏しい、前期前半と後半の小規模な集落遺跡として、その性格を呈示することができる。

(原田)

## 第3章 古墳時代

### A. 概 要

上貝塚遺跡(220-002)で検出した古墳時代の遺構は住居跡9軒、竪穴遺構1基、溝状遺構1条であり、いずれも古墳時代後期の鬼高期の所産である。各遺構の分布状況は密集することなく、調査区域全体に散在した状態である。しいて言えば調査区中央部に当該期の遺構の空白部が認められる。

なお、古墳時代の遺構は、すべて昭和56年度調査時に検出したものである。

### B. 遺構各説

001住居跡 D4-25・26・35・36グリッドに位置する。

プラン・規模 正方形を呈し、一辺5.5mを測る。主軸方向 N-6°-E

所見 昭和56年度の調査で最初に検出した遺構である。北壁の西側の一部に削平を受けるが、全体に遺存状態の良い住居跡である。現存する壁高は60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅13~20cm、深さ7cmで、カマド部も含んで全周している。

柱穴は住居の対角線上に整然と並び、四本柱となる。各柱穴の規模は、P1(径40cm、深さ50cmの円形)、P2(径40~53cm、深さ55cmの楕円形)、P3(径42~60cm、深さ50cmの楕円形)、P4(径40~50cm、深さ50cmの楕円形)となっている。

貯蔵穴はカマドの東側に設けられ、70×90cmの長方形を呈し、深さ35cmを測る。

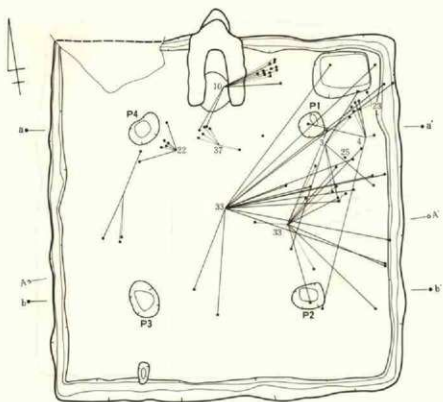
カマドは北壁中央に構築され、掘方は住居外方へ40cm程でV字状に掘り込んでいる。袖部の幅は90cm、煙道部は58°の傾斜で立ちあがる。カマド内の堆積土である1層は焼土粒を含む褐色土層、2層は多量の焼土を含む暗褐色土層、3層は火床となる焼土層、4層は煙道部への流入土と考えられる暗褐色土層となっている。

住居跡の覆土は、自然堆積となっている。1層：黒色土層。炭化物、焼土粒を僅かに含む、しまりのない土層。2層：暗褐色土層。ローム粒を僅かに含む、炭化物、焼土粒を多く含む軟質な土層。3層：暗褐色土層。ローム粒、炭化物、焼土粒を多量に含んだ、しまった土層。

なお、この住居跡は火災によって廃絶したものと考えられ、床面上に多量の炭化材が遺存していた(第79図)。これらの炭化材のうち11点については樹種同定を行っているので別項で後述する。また炭化材については、取上げの際に、柄穴等の加工痕の有無について観察を行ったが、遺存していたものの中には1点も見出すことはできなかった。

遺物は多量に出土しており、良好な資料を提供している。床面で出土した遺物はカマド周辺部に集中しており、また、2個ないし3個体が重なった状態のものもある。

1の須恵器杯はカマド内から出土したもので、陶色TK10号窯に併行する段階の製品かと思われる。27~30の高杯の器形はバラエティに富んでおり、いずれも床面またはカマド内からの出土である。裏は31~38に図示したもので、床面出土のものには胴部球形を呈すもの(34・35)と、口頸部が広いもの(36・37)がある。40の甎には、胴下半部に使用時についたと考えられる擦痕が明瞭に全周する。

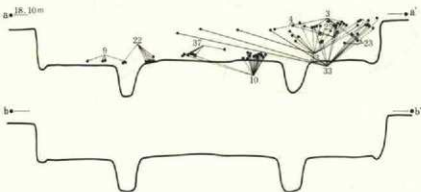


A=18.50m

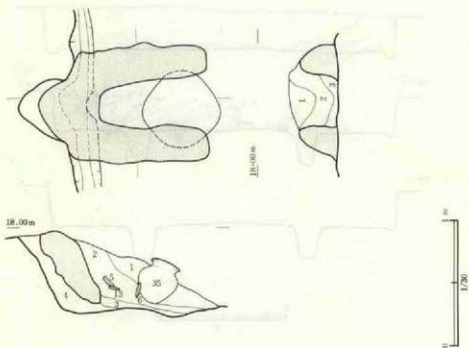
—A'



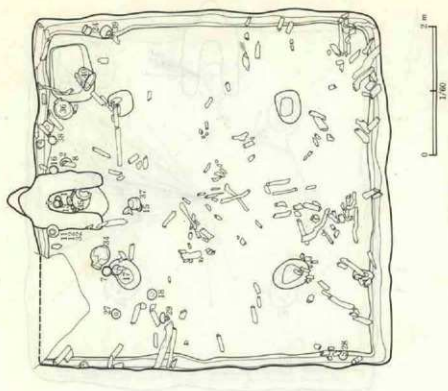
A=18.10m



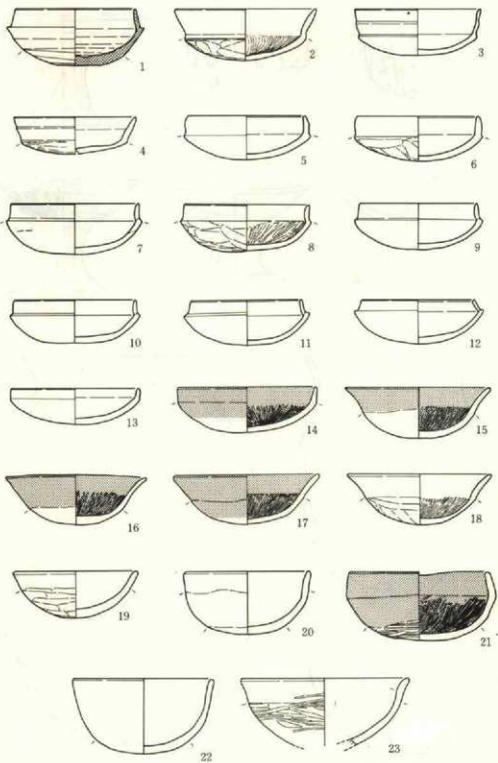
第78圖 001住居跡



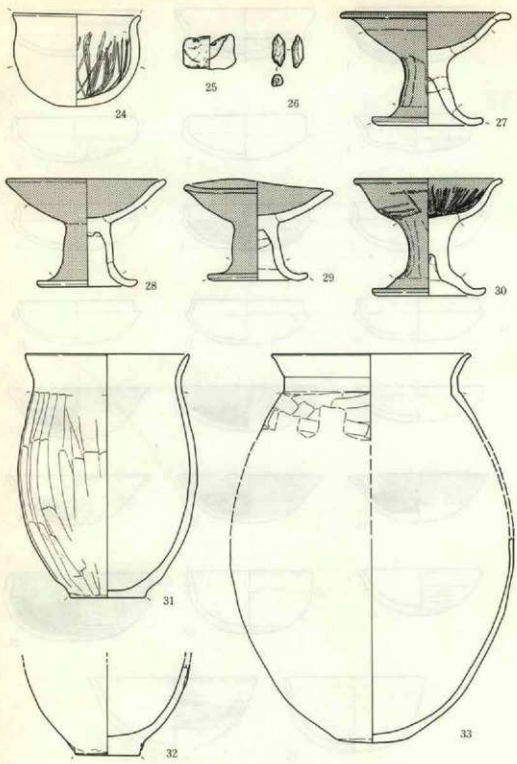
第80図 001住居跡カマド



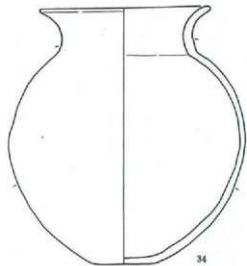
第79図 001住居跡炭化材及び床面遺物出土状況



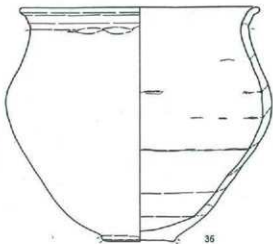
第81图 001住居跡出土遺物(1)



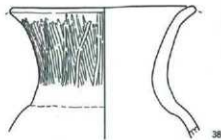
第82図 001住跡出土遺物(2)



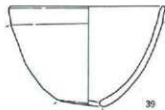
34



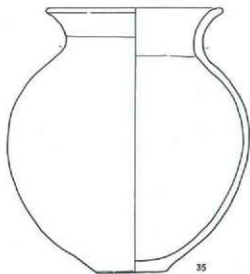
36



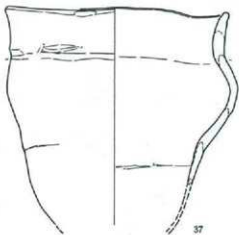
38



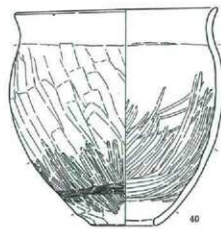
39



35



37



40



第83圖 001住居跡出土遺物(3)



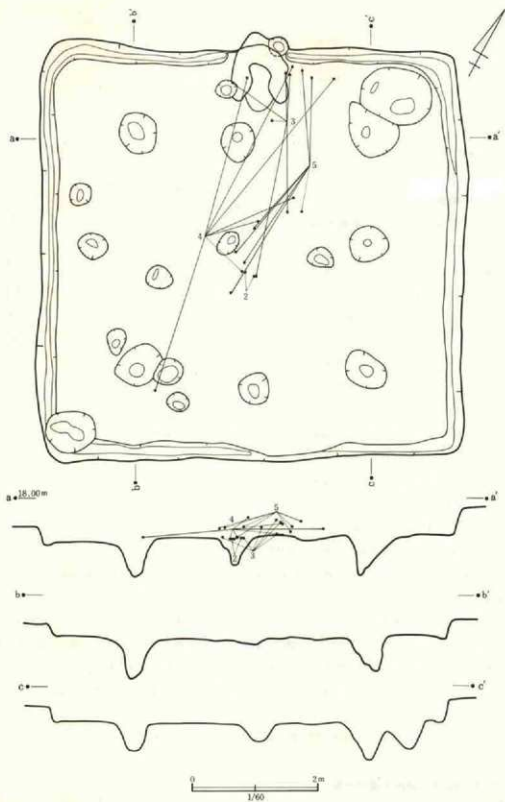
表13 001住居跡出土遺物一覧

神田 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	リフト 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	(須恵器)	12.5 5.8	完形	粘土紐巻き上げ 体部内外-ヨコナテ 底部-回転ヘラ削り	右	中粒砂、粗粒 砂-少	灰色	堅緻	TⅤ-10併行 カマド内出土
2	坏 (土師器)	14.8 6.3	完形	粘土紐つき上げ 体部内面-横方向のヘラ磨 キ 体部外面-横ヘラナテ 底部内面-放射状ヘラ磨キ 底部外面-ヘラ削り		中粒砂-少	茶褐色	堅緻	8の上に重って 出土
3	坏 (土師器)	(13.2) 4.7	2/5	粘土紐つき上げ 体部内外-ヨコナテ 底部-ヘラ削り後、ナテ		中粒砂-多	黒褐色	良好	覆土上層出土
4	坏 (土師器)	12.8 (3.9)	1/2	粘土紐つき上げ 体部内外-ヨコナテ 底部-ヘラ削り		中粒砂-多	黒褐色	良好	覆土上層出土
5	坏 (土師器)	12.3 4.6	完形	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-縦方向のヘラ磨 キ 体部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		粗粒砂-多	茶褐色	堅緻	カマド内出土
6	坏 (土師器)	12.7 4.8	完形	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-ヘラ磨キ 体部外面-ヘラ削り		粗粒砂-多	暗茶褐色	良好	カマド内出土
7	坏 (土師器)	13.3 5.2	完形	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-縦方向のヘラ磨 キ 体部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂-多	暗茶褐色 -黒褐色 (口縁体 内上)	良好	床面出土
8	坏 (土師器)	4.8 13.1	完形	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-放射状ヘラ磨キ 体部外面-ヘラ削り		中粒砂-多	暗褐色	良	体部内面暗茶褐 色ウーボン付着 床面出土 2の下になって 出土
9	坏 (土師器)	4.9 12.1	1/2	口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-ヘラ磨キ 体部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂-少	黒褐色、 暗茶褐色	良	床面出土
10	坏 (土師器)	4.5 12.8	1/2	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-縦方向のヘラ磨 キ 体部外面-ヘラ削り後、炭 いへら磨キ		中粒砂-多	暗褐色	良好	床面出土
11	坏 (土師器)	11.7 4.6	完形	粘土紐つき上げ 口縁部内外-横方向のヘラ 磨キ 体部内面-縦方向のヘラ磨 キ 体部外面-ヘラ削り後、ナ テその後、ヘラ 磨キ		中粒砂-少	茶褐色	良好	32の中に入って 12と一緒に出土

神代 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロタリ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
12	环 (土師器)	11.7 4.6	完形	粘土縫つみ上げ 口縁部内外一横方向のヘラ 磨キ 体部内面一縦方向のヘラ磨 キ 体部外面一ヘラ磨り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂一多	茶褐色	良好	32の中に入って 11と一緒に出土
13	环 (土師器)	13.3 3.7	完形	粘土縫つみ上げ 口縁部内外一横方向のヘラ 磨キ 体部内面一縦方向のヘラ磨 キ 体部外面一ヘラ磨り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂一多 石英一少	茶褐色	良好	ホマド内出土
14	环 (土師器)	14.7 4.7	口縁一部 欠く	粘土縫つみ上げ 口縁部内面一横方向のヘラ 磨キ 口縁部外面一ヨコナテ 体部内面一赤彩の下層文風 ヘラ磨キ 体部外面一ヘラ磨り後、ナ テ		中粒砂一多	茶褐色	良好	黒斑有り
15	环 (土師器)	15.2 5.3	完形	粘土縫つみ上げ 体部内外一ヨコナテ後、横 方向の磨キ 底部内面一放射状磨キ 底部外面一ヘラ磨り後、磨 キ		中粒砂一少	黄褐色一 暗褐色	堅緻	床面出土
16	环 (土師器)	13.5 ~14.5 5.2	完形	粘土縫つみ上げ 体部内外一ヨコナテ後、横 方向のヘラ磨キ 底部内面一放射状磨キ 底部外面一ヘラ磨り後、磨 キ		中粒砂一多	黄褐色	堅緻	床面出土
17	环 (土師器)	15.3 5.1	完形	粘土縫つみ上げ 体部内面一ヨコナテ後、横 方向の磨キ 体部外面一ヨコナテ 底部内面一放射状磨キ 底部外面一ヘラ磨り後、ナ テ		中粒砂一多	黄褐色	堅緻	床面出土
18	环 (土師器)	15.0 5.2	完形	粘土縫つみ上げ 口縁部内外一ヨコナテ後、 横方向の磨キ 体部内面一放射状の磨キ 体部外面一ヘラ磨り後、黄 い磨キ		中粒砂一多	淡茶褐色	良	床面出土
19	环 (土師器)	13.8 4.8	1/4	粘土縫つみ上げ 口縁部外面一横ナテ後、ナ テ 体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヘラ磨り後、軽 いナテ		中粒砂一多	暗茶褐色	良好	
20	鉢 (土師器)	13.3 6.5	完形	粘土縫つみ上げ 口縁部内外一ヨコナテ後横 ヘラ磨キ 体部内面一縦方向のヘラ磨 キ 体部外面一ヘラ磨り後、横 方向のヘラ磨キ 体部下端一底部一ヘラ磨り 後、ナテ		中粒砂一少	黒褐色 底部一茶 褐色	良好	

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・型 形 手 法	コノコ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
21	鉢 (土師器)	14.6 (~13.5) 7.1	完形	粘土つま上げ 口縁内外一横へう磨キ 体部内面一縦方向へのう磨 キ 体部外面へう磨り後、横 方向へのう磨キ 体部下端一底部へうナデ		細粒砂一多	淡茶褐色	良好	底部に黒斑 カマド内出土
22	鉢 (土師器)	14.7 8.0	略完形	粘土つま上げ 口縁内外一横へう磨キ 体部内面一縦へう磨キ 体部外面一横へう磨キ 体部下端一底部へう磨り 後、ナデ		細粒砂一多	褐色一黒 褐色	良好	床面出土
23	鉢 (土師器)	17.6 7.2	1/4	粘土つま上げ 口縁内外一ヨコナデ 体部内面へうナデ 体部外面一ナデ後、黄いへ う磨キ		中粒砂一多	黄褐色	良好	覆土上層出土
24	小型 狭 (土師器)	13.4 9.7	口縁部 1/4欠	粘土つま上げ 口縁部内面一横ナデ後、へ う磨キ 口縁部外面一ヨコナデ 胴部内面へうナデ後端文 胴部外面一ヨコナデ 胴部下端一底部へう磨り 後、ナデ		細粒砂	暗褐色	甘	端文は一部分が 格子目状に重複 床面出土
25	手 抱 ね 土 器 (土師器)	5.0 3.4 5.4	完形	内外面一指筒によるおさえ		中粒砂一多	暗褐色	甘	覆土上層出土
26	不 明 土 製 品	全長 3.4 厚さ 1.2	完形	全面一指筒によるおさえ		中粒砂一多	暗茶褐色	やや甘	
27	高 杯 (土師器)	17.9 11.55	胴部1/3 を欠	粘土つま上げ 口縁部外面一ヨコナデ 杯部内面へうナデ 杯部外面一胴部へう磨り 後、ナデ 胴部内面一ナデ 胴部内外一ヨコナデ		中粒砂、白色針 状物一多	暗褐色	良	赤彩 床面出土
28	高 杯 (土師器)	16.8 11.4	胴部1/3 を欠	粘土つま上げ 口縁部内面一横へう磨キ 口縁部外面へう横ナデ 杯部内面一縦方向へのう磨 キ 杯部外面一胴部へう磨り 後、ナデ 胴部内面一ナデ 胴部内外へう横ナデ		中粒砂、白色針 状物一多	暗黄褐色	良	二次焼成 赤彩 床面出土
29	高 杯 (土師器)	15.8 10.3 10.6	胴部1/4 を欠	粘土つま上げ 杯部内面へう磨キ 杯部外面一胴部へう磨り 後、ナデ 胴部内面一指ナデ 胴部内外一ヨコナデ		中粒砂、白色針 状物一多	黄褐色	良	赤彩 床面出土
30	高 杯 (土師器)	(15.5) 12.0 (12.0)	口部1/2 胴部1/4 を欠	粘土つま上げ 口縁内面一縦方向へのう磨 キ 杯部内面一放射状磨キ 杯部内面底へう磨キ 杯部外面一ナデ後、黄いへ う磨キ		中粒砂、白色針 状物一多	黄褐色	良	赤彩 カマド内出土

標本 番号	器 種	法 量	遺存状態	威・整形 手法	リナコ 組成	胎 土	色 調	焼成	備 考
30				胴部外面へラ削り後、ナ デ 胴部内面へラ削り 裾部内外へココナデ					
31	甕 (土師器)	17.2 25.1 8.0	1/3	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へ横へラナデ 胴部外面へラ削り風のヘ ラナデ		中粒砂一多	暗黄褐色	甘	
32	甕 (土師器)	— <9.5> 6.8	胴部下半 のみ	粘土結つみ上げ 胴部内面へラナデ 胴部外面へラ削り後、ナ デ		中粒砂一多	茶褐色(内 面暗茶 褐色)	やや甘	
33	甕 (土師器)	(21.6) <40.5> 7.5		粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へラ削り後、ナ デ 胴部外面へラ削り		粗粒砂一多	明褐色(下 半外面 暗褐色)	良好	覆土上層出土
34	甕 (土師器)	21.6 33.4 8.0	胴部1/8 を欠く	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へラナデ後、ナ デ 胴部外面へナデ 胴部下半へ底部へナデ状、 不整へラ 磨キ		雲母、石英、中 粒砂一多	黒褐色(外 面1/10 暗褐色)	甘	床面出土
35	甕 (土師器)	22.0 34.2 9.0 胴部大径 29.5	口縁部 1/4を欠 く	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へラナデ 胴部外面へ底部へラ削り 後、へラ磨キ		長石、石英、雲 母粒一多	茶褐色	良	カマド内出土
36	甕 (土師器)	(30.3) 30.1 9.0 胴部大径 32.1	口縁部 5/6を欠 く	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へラナデ 胴部外面へラ削り後、ヘ ラナデ 底部へラ削り後、ナデ		中粒砂一多	黄褐色	やや甘	胴部内外に広い 範囲でスス付着 床面出土
37	甕 (土師器)	20.1 ~18.4 <20.0>	胴部下半 1/2を欠 く	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部内面へラ削り 胴部上位へ下半へラ削り 後、ナデ 胴部外面へラナデ 胴部外面へラ削り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂一多	暗黄褐色 (外面半 分黒褐色)	良	床面出土
38	壺 (土師器)	16.7 <12.1>	胴上半 1/6	粘土結つみ上げ 口唇部へ胴部内面へココナ デ 胴部内面へナデ 口縁部へ胴部外面へラ磨 キ		中粒砂一多	黒褐色	甘	床面出土
39	甕 (土師器)	20.0 12.7 5.5	完形	粘土結つみ上げ 口縁部内外へ横へラナデ 胴部内面へナデ 胴部外面へナデ 底部へ焼成前穿孔でへラ削 り		中粒砂一多	暗茶褐色	やや甘	床面出土
40	甕 (土師器)	25.8 28.2 8.2	完形	粘土結つみ上げ 口縁部内外へココナデ 胴部上位内面へラナデ 胴部内面へラ磨キ		中粒砂一多	黄褐色	良	床面出土



第84图 002住居跡

検出 番号	部 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
40				内面下端へラナテ 胴部外面へラナテ後、へ ラナテ 胴部下半へラナテ 胴部下端へラナテ 端部へ地成前穿孔でへラナ テ					

#### 002住居跡 D4-84・85・94・95・96

グリッドにまたがって位置する。

プラン・規模 ほぼ正方形を呈し、東西6.7m、南北6.2mを測る。主軸方向N-28°-W

所見 001住居跡の約20m南側で検出されたもので、住居中央部に1.5m四方の擾乱部が認められたが、この擾乱も床面までは至っていなかった。現存壁高は20~30cmで、斜めに立ち上がる。周溝はカマド部と、それに対面する南壁側中央部を除いて廻り、幅20cm、深さ5~10cmを測る。柱穴は、P1(径75cm、深さ55cmの不整楕円形)、P2(径45~70cm、深さ45cmの楕円形)、P3(径50cm、深さ31cmの円形)、P4(径65cm、深さ50~60cmの楕円形)、P5(径65cm、深さ50cmの円形)、P6(径50~60cm、深さ40~45cmのほぼ円形)の六本柱となっている。

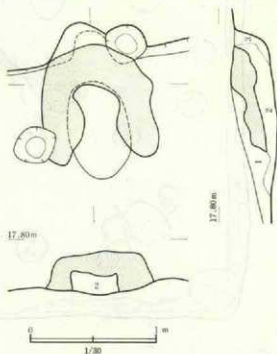
北東と南西の各壁隅部には平面形態ほぼ円形、深さ40~60cmのピットがあるが、底面は平坦にならず、貯蔵穴と判断するには難しいかもしれない。

カマドは北壁中央に構築され、掘方は壁の外方へ30cm程でU字状になっている。袖部の幅は90cm、煙道部は65°の傾斜で立ちあがる。カマドの土層は、1層が住居跡の覆土となる暗褐色土層、2層は天井部の崩壊土である灰色砂層、3層は煙道部への流入土と考えられる暗褐色土層である。

遺物の出土量は少ないが、大半は覆土中・下層から検出している。1の環はカマド袖部周辺で出土したものである。裏には、やや長胴を呈するもの(2)と、球胴のもの(3)、その中間タイプでやや大形のもの(4)がある。また瓶(5)の胴部には当該地域の裏の胴部に、当該地域で普遍的に用いられる手法の細い寛磨きが施されている。

表14 002住居跡出土遺物一覧

検出 番号	部 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
-1	埴 (土師器)	(13.0) 4.2	1/3	粘土紐つみ上げ 口縁部内外へココナテ		粗砂砂-多	暗茶褐色	やや甘	



第85図 002住居跡カマド

種別 番号	部 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	コアロ 組成	胎 土	色 調	焼成	備 考
				体部内面一短文風へう磨き 体部外面へう削り後、ナ デ					
2	襖 (土師器)	(20.4) 27.8 7.7	1/5を欠 く	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一 胴部内面へうナデ 胴部外面へう削り後ナ デ		中漚一多	赤褐色	良好	
3	襖 (土師器)	26.0 (28.6) — 最大径 28.3	2/3	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一ヨコナ デ 胴部内面へうナデ 胴部外面へう削り後、ナ デ後、一部欠く へう磨き		粗粒砂、長石、 石英一多	暗褐色	やや甘	
4	襖 (土師器)	22.6 30.4 8.4 胴径大径 27.4	口縁部 1/6胴部 1/10	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一胴部一ヨコナ デ 胴部内面へうナデ 胴部上位内外一ナ デ 胴部外面へう磨き		粗粒砂、長石、 石英一多	黄褐色	良好	黒斑有り
5	瓶 (土師器)	29.7 28.6 11.7	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一ヨコナ デ 胴部上位内外一ナ デ 胴部内面一横へう磨き 胴部外面一ナデ後、縦方向 のへう磨き 胴部下端へう削り後、横 方向のへう磨き		粗粒砂、長石、 石英一多	黄褐色	堅緻	

003住居跡 C 5-88・89・98・99グリッドに位置する。

プラン・規模 一辺5.9mの正方形。主軸方向 N-16°-W

所見 調査区内の最西端で検出した遺構である。カマド部を除いて、全体に遺存状態は良好で、現存壁高は60-78cmを測る。周溝は幅20cm、深さ7cmで、カマド部を除いて全周する。柱穴はいずれも小さく、径30cm前後である。深さはP 1 (70cm)、P 2 (40cm)、P 3 (35cm)、P 4 (32cm)、P 5 (38cm)、P 6 (30cm)である。なおP 1・2・5・6をもって四本柱とし、カマドに對面するP 3・4は入口部に対応するものと考えられる。

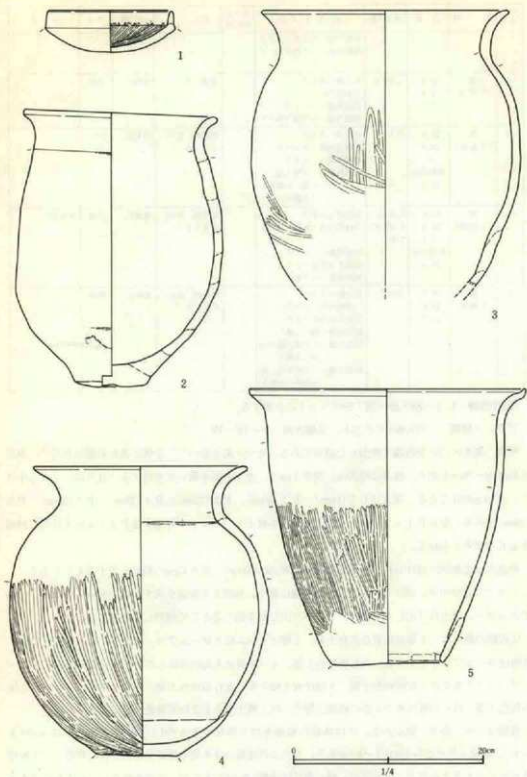
貯蔵穴は北東隅に設けられ、平面形態は長方形(50×70cm)、深さ43cmの箱形を呈するものである。

カマドは北壁中央に設けられるが、遺存状態は悪く、袖部と火床面を残すのみである。袖部は、地山であるローム層を作り出したもので、この作り出し部を袖の芯として利用している。

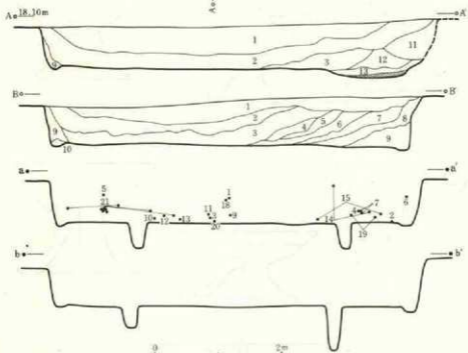
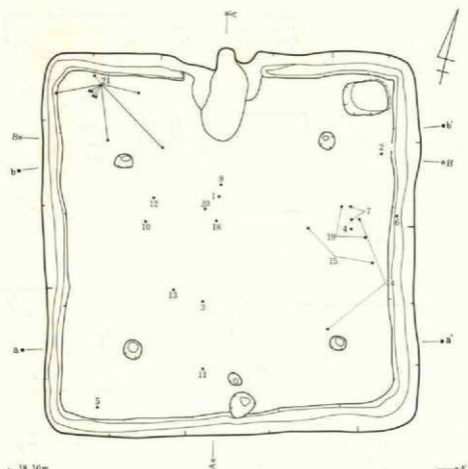
住居跡の覆土は、1層が軟質な黒色土層、2層はローム粒とロームブロックを多く含む暗褐色土層、3層はロームブロックを多量に含む暗褐色土層、4～8層は人為的埋戻しの可能性の強いもので、ロームブロックを多く含んだ暗褐色土層、9層は焼土粒を多く含む暗褐色土層、10層はロームブロック主体の褐色土層、11～13層はカマド部の崩壊土層で、灰と焼土を多く含む灰褐色土層である。

遺物は、坏、高坏、甕がある。坏は体部に稜線を持ち外反するもの(1・2)と、直立するもの(3～6)、稜線を持たないもの(7・8)がある。なお3の底部には多数の榫痕が認められ、砥石として転用されたものと考えられる。復元実測し得た高坏は10個(9-18)あるが、坏部を遺存しているものはすべて体部に稜線を持ち、口縁は大きく外反するものである。また脚部も比較的短く、大きく裾広がりになるものである。

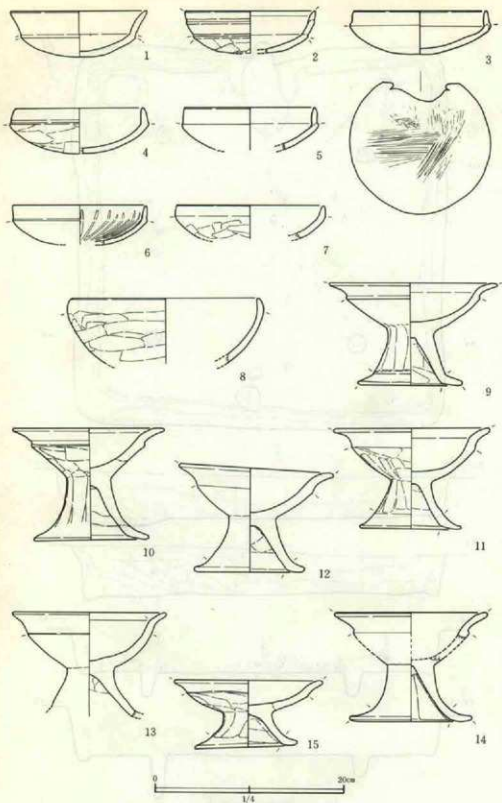




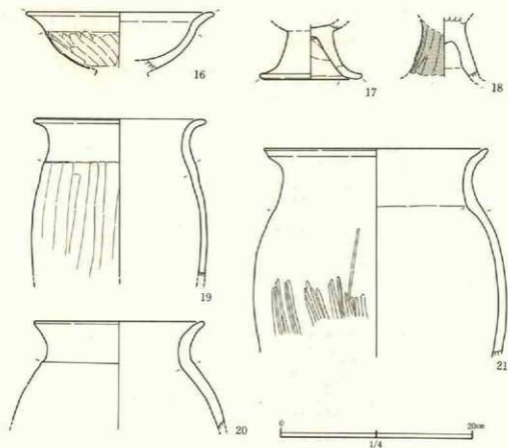
第86图 002住居跡出土遺物



第87图 003住居跡



第88圖 003住居跡出土遺物(1)



第89図 003住居跡出土遺物(2)

表15 003住居跡出土遺物一覽

神区 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	コノロ 陶質向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯 (土師器)	14.4 4.7	口縁部一 部欠損	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一帯へラ磨キ 底面内面一帯へラ磨キ 底面外面へラ削り後、へ ラ磨キ		細粒砂一多	淡黄褐色	良好	
2	杯 (土師器)	(13.8) < 4.4 >	1/3	粘土紐つみ上げ 口縁部内面一帯部へラ磨 キ 口縁部外面一帯部コナテ 底面内面へラ削り		中粒砂一多	暗茶褐色	良好	
3	杯 (土師器)	13.9 4.5	1/8を欠 (	粘土紐つみ上げ 口縁部内外ヨコナテ 底面内面一帯部コナテ 底面外面へラ削り後へラ 磨キ		細粒砂一多	暗茶褐色 (口縁部 黒褐色)	良好	
4	杯 (土師器)	(13.4) < 4.7 >	1/2	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一帯部コナテ 底面内面一帯部コナテ 底面外面へラ削り後、軽 いへラ磨キ		中粒砂一多	淡黄褐色 内面赤褐 色	良好	黒斑有り
5	杯 (土師器)	(13.8) < 4.4 >	1/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一帯部コナテ 底面内面一帯部コナテ		細粒砂一少	茶褐色	良	

神田 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	コテコ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
				底部外面へハケ削り後、ナ デ					
6	环 (土師器)	(14.0) < 4.05>	1/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内面一底部一ヨコナ デ後、放射状 暗文 口縁部外面一ヨコナデ 底部外面へハケ磨キ		粗粒砂一多	暗茶褐色	堅緻	
7	环 (土師器)	(15.6) < 3.4 >	体部上半 1/4	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一ヨコナデ 底部内面一ヨコナデ 底部外面へハケ削り後、ハ ケ磨キ		粗粒砂一やや多	暗茶褐色	堅緻	
8	鉢 (土師器)	(19.7) ( 6.8 ) —	体部2/5	粘土紐つみ上り 口縁部内外一体部内面一ヨ コナデ 体部外面へハケ削り		中粒砂一多	赤褐色	良好	
9	高 环 (土師器)	17.6 10.6 10.9	定形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一ヨコナデ後ハ ケ磨キ 环部内面へハケ削り後、ハ ケ磨キ 环部外面一脚部へハケ削り 後、ナデ 脚部内面へハケ削り 裾部外面へハケ磨キ 裾部内面一ナデ		粗粒砂一多	环部赤褐 色 脚部黒褐 色	良好	
10	高 环 (土師器)	15.8 11.6 12.1	裾部1/3 欠損	粘土紐つみ上げ 口縁部内面一底部へハケ磨 キ 口縁部外面一ヨコナデ 口縁下部一棒状工具で凹線 を加える 环部外面へハケ削り 脚部内外へハケ削り 裾部内外一ヨコナデ		粗粒砂一多	赤褐色	良好	
11	高 环 (土師器)	16.5 10.6 (10.6)	裾部2/3 欠損	粘土紐つみ上げ 口縁部一环部内面へハケ磨 キ 口縁部外面一ヨコナデ 环部外面一脚部へハケ削り 脚部内面へハケ削り 裾部内外一ヨコナデ		粗粒砂一多	(环部)赤 褐色(脚 部)暗褐 色	堅緻	
12	高 环 (土師器)	16.3 11.2 11.6	定形	粘土紐つみ上げ 口縁部一环部内面へハケ磨 キ 口縁部外面一ヨコナデ 环部外面一脚部へハケ削り 後、ナデ 脚部内面へハケ削り 裾部内外一ヨコナデ		粗粒砂一多	赤褐色(环及脚 内面)一 黒褐色	堅緻	
13	高 环 (土師器)	16.2 11.0 —	裾部欠損	粘土紐つみ上げ 口縁部内外一ヨコナデ 环部内面一ナデ 环部外面一脚部へハケ削り 後、ナデ 脚部内面へハケ削り		粗粒砂一多	赤褐色	良好	
14	高 环 (土師器)	(16.0) (11.4) (12.8)	口縁部 1/8脚部 4/5	粘土紐つみ上げ 口縁部一环部内面へハケ磨 キ 口縁部外面一ヨコナデ		中粒砂一多	暗赤褐色	甘	

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ 図取	胎 土	色 調	焼成	備 考
14				環部→脚部外面→ヘラ削り 後、ヘラ磨キ 脚部内面→ヘラ削り 環部外面→ヨコナデ後、ヘ ラ磨キ 環部内面→ヘラナデ					
15	高 環 (土師器)	15.6 7.6 10.8	環部1/4 欠損	粘土結つみ上げ 口縁部→環部内面→ヘラ磨 キ 口縁部外面→ヨコナデ 環部外面→ヘラ削り 脚部内面上部→ナデ 脚部内面下半→ヘラ削り 脚部外面→ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ 環部内外→ヘラナデ		粗粒砂一多	茶褐色	甘	
16	高 環 (土師器)	19.7 (5.8) —	脚部欠損	粘土結つみ上げ 口縁部→環部内面→ヘラ磨 キ 口縁部外面→ヨコナデ 環部外面→ヘラナデ		粗粒砂一多	暗褐色	良好	
17	高 環 脚部 (土師器)	— (5.6) (10.7)	2/3	粘土結つみ上げ 環部内面→ヘラ磨キ 脚部内面→ヘラ削り 脚部→環部外面→ヘラ削り 後、ヘラ磨キ 環部内面→ヨコナデ		中粒砂一多	暗褐色	良好	
18	高 環 (土師器)	— (5.1)	脚部部の み	粘土結つみ上げ		中粒砂一多	茶褐色	良好	脚部外面に赤彩
19	甗 (土師器)	(17.9) (16.6) — 胴径大径 (18.2)	体部上半 1/3	粘土結つみ上げ 口縁部内外→ヨコナデ 胴部外面→ヘラ削り		粗粒砂一多	茶褐色	彫織	黒斑有り
20	甗 (土師器)	17.7 (6.4) —	胴部上半 のみ	粘土結つみ上げ 口縁部内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→ヘラ削り		中粒砂一多	暗赤褐色	甘	
21	甗 (土師器)	23.4 (21.6) — 胴径大径 26.4	胴部上半 のみ	粘土結つみ上げ 口縁部内外→ヨコナデ 胴部内面→ナデ 胴部外面上半→ナデ 胴部外面下半→ナデ後、黄 いヘラ磨キ		長石、石英、粗 粒砂一多	赤褐色	良好	

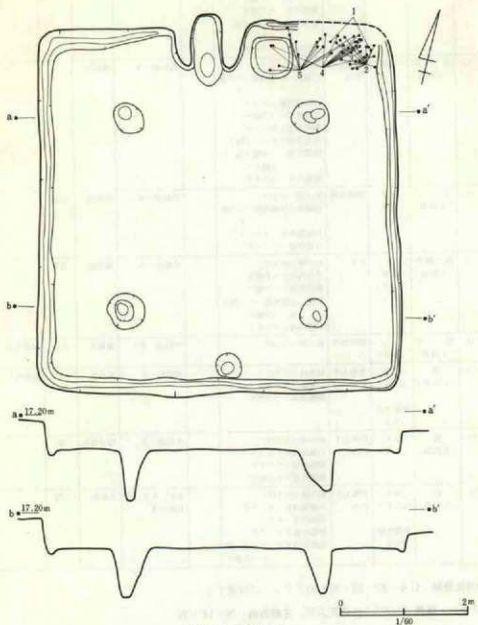
008住居跡 G 6-82・83・92・93グリットに位置する。

プラン・規模 一辺5.7mの正方形。主軸方向 N-14°-W

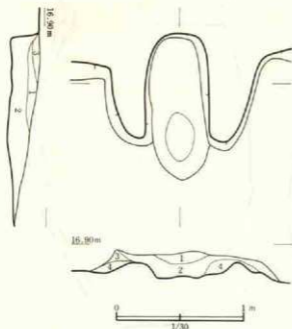
所見 西から東へ下がる緩やかな斜面に構築された住居跡で、北壁の東側部分は攪乱を受ける。壁高は西側の遺存の良いところで48cm、東側で25cmを測る。周溝はカマド部を除いて幅15cm、深さ6~10cmで全周する。柱穴はいずれも径40~60cmの円形を呈し、深さ60~70cmを測り、四本柱となる。カマドに対面する柱穴は深さ約20cmでやや浅いものである。

貯蔵穴はカマド袖のすぐ東側に設けられ、一辺70cmの正方形を呈し、深さは40cmとなる。

カマドは北壁中央にあり、袖部は地山のローム層を作り出して、芯としたものである。袖部の幅は1.1mを測る。カマドの土層は、山砂と焼土を含んだ天井部の崩壊土を1層とし、2層は焼土を多く含んだ



第90圖 008住居跡



第91図 008住居跡カマド

暗褐色土、3層は山砂と焼土を含む黒褐色土層、4層は袖部でロームで作り出した芯を被う構築材の山砂層と考えられる。

遺物は貯蔵穴の東側で、床面に密着して、押しつぶされたような状態で出土している。坏と甕からなり、甕は胴部に巾広い荒削りを施すもの(2~4)と細い荒削りを施すもの(5)とがある。

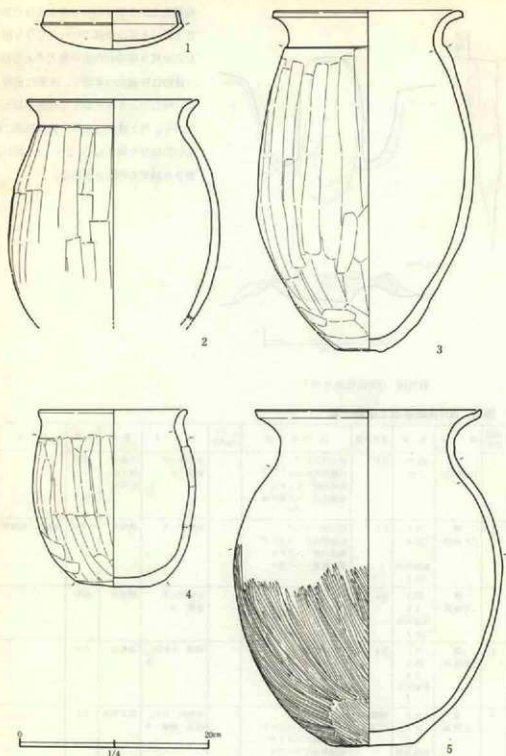
表16 008住居跡出土遺物一覧

種別番号	器種	法量	遺存状態	成・型形手法	製作方向	粘土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	14.0 3.95	完形	粘土つま上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ヨコナデ 底部外面-ヘラ削り後 ナデ		中粒砂-多 繊維-少	黒褐色(体外面-暗褐色)	良好	
2	甕 (土師器)	18.1 (23.1) - 胴径大径 (20.1)	3/4	粘土つま上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り		粗粒砂-多	黄褐色	やや甘	広範囲の黒染有り
3	甕 (土師器)	35.3 5.0 胴径大径 22.7	3/4	粘土つま上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り		中粒砂-多 繊維-少	暗褐色	良好	
4	甕 (土師器)	15.7 18.4 9.4 胴径大径 17.1	3/4	粘土つま上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面-ヘラ削り		繊維、中粒砂 -多	茶褐色	良好	
5	甕 (土師器)	24.0 34.9 8.5 胴径大径 (28.4)	胴部1/2 欠損	粘土つま上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ヘラナデ 胴部外面上-ナデ 胴部下-底面-ナデ後、 ヘラ削り		中粒砂、長石、 石英、繊維-多	暗黄褐色	良好	

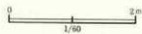
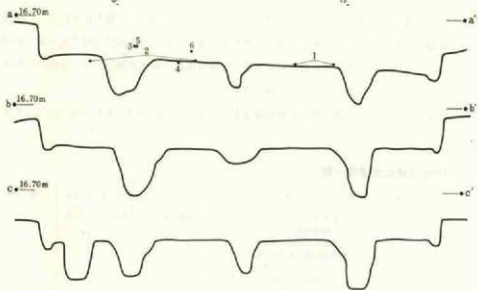
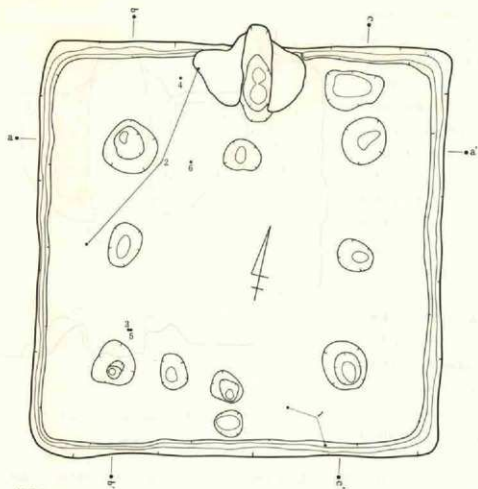
009住居跡 G 6-32・33・42・43グリッドに位置する。

プラン・規模 一辺6.4mの正方形。主軸方向 N-10°-W





第92図 008住居跡出土遺物

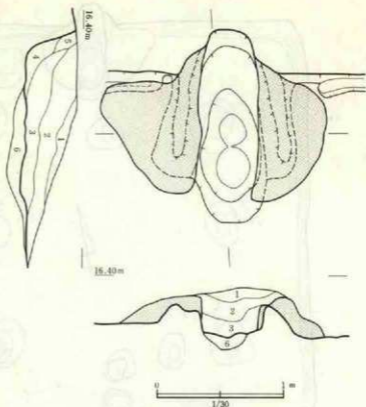


第93图 009住居跡

所見 008住居跡と同様に、西から東へ下がる緩やかな斜面に構築された住居跡である。遺在状態は良好で、西側の現存壁高は50cm、東側で30cmである。周溝はカマド部を除いて全周し、幅20cm、深さ10~15cmほど掘り込んでいる。柱穴は八本柱(P 1~4、P 6~9)とカマドに対面する柱穴(P 5)からなり、いずれも掘方は50~70cmと大きく、深さも40~80cmある。

貯蔵穴はカマドの東側約1.5mのところに構築され、平面形は90×60cmの不整長方形、深さ約60cmである。

カマドは北壁中央にあり、掘方は壁の外方に35cm程、U字状に張り出している。この



第94図 009住居跡カマド

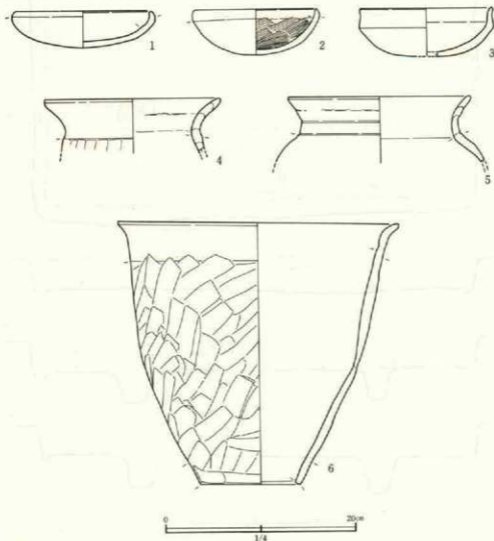
カマドも003・008住居跡と同様に、袖部の芯を地山のロームで作り出し、その周囲を粘土と山砂で被い袖部としている。煙道部は約70°で立ち上がっている。カマド内の土層は、1層が粘土粒混りの灰褐色土層、2層は崩壊した天井部にあたる焼土混りの灰褐色粘土層、3層は焼土混りの暗褐色土層、4・5層は煙道部にあたり、4層は粘土を少量含む灰褐色土層、5層は褐色土層、6層はカマド使用時における被熱層で、ポロポロとなったロームブロックの層である。

遺物の出土量は少なく、環、甕、瓶が実測可能なものであった。1・2・4は床面からの出土であり、他は覆土中層から出土したものである。

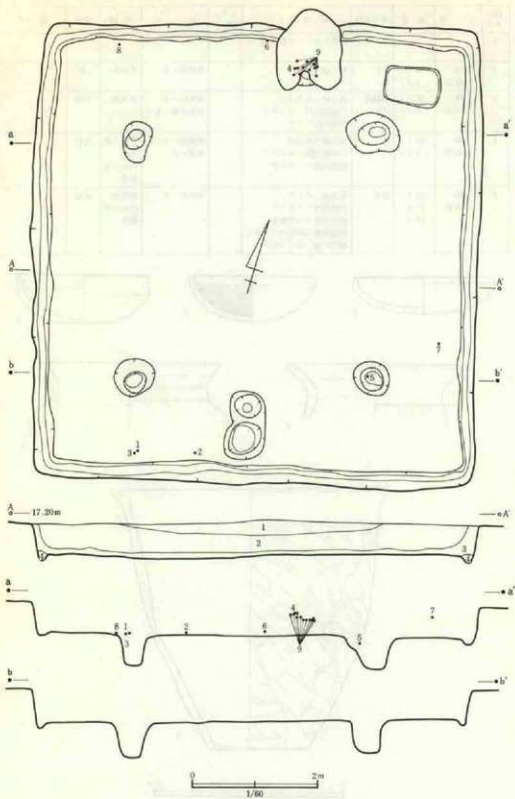
表17 009住居跡出土遺物一覧

検出番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	コアラ 製法	胎土	色調	焼成	備考
1	環 (土師器)	(14.2) 3.8	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部上位内面-ヨコナデ 底部内面-ナデ後、縦方向 のヘラ磨キ 底部外面-ヘラ磨キ後、ヘ ラ磨キ		細礫一や今多	茶褐色	良好	
2	環 (土師器)	13.0 4.6	3/4	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部内面-木口によるヘラ ナデ		細粒砂一多	暗黄褐色	良好	広範囲の黒斑有り

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整 形 手 法	ロツロ 編織回	胎 土	色 調	焼 成	備 考
2				底部外面へラ削り後、ナ デ					
3	杯 (土師器)	13.9 (4.9)	2/5	粘土紐つみ上げ		中粒砂一多	黒褐色	良	
4	甕 (土師器)	(18.5) < 5.7 >	口縁部 1/4	粘土紐つみ上げ 口縁部内外へヨコナデ 胴部内面へナデ		中粒砂一多 赤色中硬一若干	茶褐色	堅緻	
5	甕 (土師器)	(19.1) < 5.9 >		粘土紐つみ上げ 口縁部内外へヨコナデ 胴部内面へラナデ		粗粒砂一多 細礫一少	外面一黄 褐色 内面一赤 褐色	良好	
6	甕 (土師器)	29.2 22.4 10.4	定形	粘土紐つみ上げ 口縁内外へヨコナデ 胴部内面へラ磨キ 胴部外面へ斜位にへラ削り 胴部下端へ横へラ削り		中粒砂一多	黄褐色、 内面一赤 褐色	良好	



第95図 009住居跡出土遺物



第96图 010住居跡

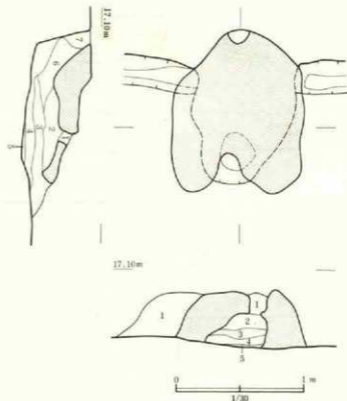
010住居跡 F 6-04・05・

14・15グリッドに位置する。

プラン・規模 一辺7.0mの正方形を呈する。

主軸方向 N-18°-W

所見 大形の住居跡であり、遺存状態も良好である。現存壁高は50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅20cm、深さ6~10cmでカマド部を除いて全周する。主柱穴は四本柱となり、P 1 (径65~85cm、深さ48cmの楕円形)、P 2 (径50~58cm、深さ52cmのほぼ円形)、P 5 (径58~65cm、深さ50cmのほぼ円形)、P 6 (径45~65cm、深さ46cmの楕円形)を測る。またカマドに対面する柱穴、P 3・4は連続しており、長軸1.05m、P 3の径55cm、P 4



第97図 010住居跡カマド

の径65cmとなる。深さはともに23cmで、主柱穴に比して、かなり浅いものである。

貯蔵穴はカマドの東側に設けられ、60×90cmの長方形を呈し、深さ58cmの箱形を呈している。

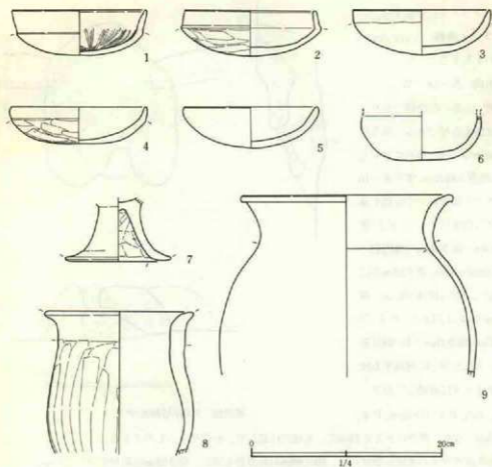
カマドは北壁の中央からやや東に寄って構築され、壁から外方に25cmほどU字状に掘り込んでいる。煙道の傾斜は約68°である。カマドの層序は、1層が崩壊し、流れ出した構築材、2層は山砂と焼土を含む褐色土、3層は焼土を多く含む褐色土、4層は灰、焼土とからなる層、5層は灰層、6層は山砂を少量含む褐色土、7層は流入土と考えられる褐色土である。

また住居跡の覆土は1層がローム粒を少量含む軟質な黒色土層、2層がローム粒、焼土粒を含む軟質な暗褐色土層、3層はローム粒を多量に含む黄褐色土層、4層はロームブロックとローム粒を多量に含む黄褐色土層である。

遺物の出土量は少ないが、その多くは、カマド内と床面から出土している。環の1と3は倒立して重なった状態で検出した。壁には長胴を呈するもの(8)と大型となるもの(9)の二種がある。

表18 010住居跡出土遺物一覧

検出番号	部 種	法 量	遺存状態	成・造形手法	ローム土の埋め方	動 土	色 調	焼成	備 考
1	環 (土師器)	14.0 4.6	完形	粘土練り上げ 口縁部内外-ヨコナア 底部内面-放射状刻文 底部外面-ヘラ削り後、ヘラ磨キ		中粒砂-少	赤褐色	堅緻	
2	環 (土師器)	13.8 4.8	完形	粘土練り上げ 口縁部内外-横ヘラ磨キ		中粒砂、赤色粒子-やや多	黄褐色	堅緻	



第98図 010住居跡出土遺物

神田 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロフロ 目録注	胎 土	色 調	焼成	備 考
2				底部内面一廻へラ磨キ 底部外面へラ磨リ後、ナ デ?					
3	环 (土器器)	14.2 4.6	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内面へラナデ 口縁部外面へラナデ後、へ ラ磨キ 底部上半内面へラナデ 底部下半へラナデ 底部外面へラ磨リ後、へ ラ磨キ		細砂粒	赤褐色	堅緻	
4	环 (土器器)	14.0 3.8	1/3	粘土紐つみ上げ 口縁部内面へラナデ 口縁部外面へラナデ 底部内面へラナデ 底部外面へラ磨リ		細砂一多	暗黄褐色	堅緻	
5	环 (土器器)	(14.0) 4.2	1/2	粘土紐つみ上げ 内外へラナデ		中粘砂一多	赤褐色	やや甘	
6	环 (土器器)	— < 4.1 >	口縁部欠 損	粘土紐つみ上げ 底部内面へラ磨キ 底部外面へラ磨リ		粗粘砂一多 中砂一少	黒褐色	甘	

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロフト 傾斜角	胎 土	色 調	焼成	備 考
7	高 杯 (土師器)	— (6.5) 11.2	胴部2/3	粘土紐つみ上げ 杯部内面へラ磨キ 胴部外面へラ磨キ 胴部内面へラナデ 杯部外面へラ磨キ 杯部内面へラコナデ		粗粒砂一やや多	茶褐色	堅緻	
8	甕 (土師器)	15.7 (14.7) 胴径大径 15.4	底部欠損	粘土紐つみ上げ 口縁-胴部内面-ナデ 口縁部外面-横ナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面へラ磨り		中粒砂一多	黄褐色	堅緻	黒染有り
9	甕 (土師器)	22.1 (18.9) — 胴径大径 (27.9)	胴上半 1/2弱	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内外へラナデ		長石、石英粒、 粗粒砂一多	内面-暗 褐色		

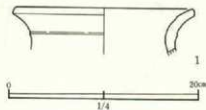
011住居跡 D 5-35・36・45・46グリッドに位置する。

プラン・規模 一部未調査であるが、一辺5.0mの正方形を呈すると考えられる。主軸方向 N-29°-W  
所見 住居跡南西端は、遺跡内を通る道路下にあり、工事工程と調査工程の絡みから、やむなく未調査となってしまった。

現在壁高は50cm、周溝は幅18cm、深さ10cmで、カマド部を除いて全周するものと考えられる。主柱穴は四本柱となり、各柱穴はP 1 (径45-50cm、深さ35cmの楕円形)、P 2 下径45×50cm、深さ53cmの楕円形)、P 4 (径35-45cm、深さ42cmの楕円形)、P 5 (径30-50cm、深さ40cmの楕円形)を測る。カマドに對面する柱穴P 4は径70cmの円形を呈し、他の柱穴よりも規模は大きく、深さは40cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、壁から外方に40cm程、U字状に掘り込んでいる。煙道部は約65°の傾斜で立ち上がる。カマドの層序は1層が山砂を多量に含んだ暗褐色土、2層は焼土と灰からなる層、3層も焼土と灰からなるが灰を多量に含む層、4層は山砂と焼土からなる灰褐色土層である。

遺物は極めて少なく、実測し得たものは甕の口縁部1点だけである。

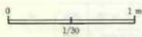
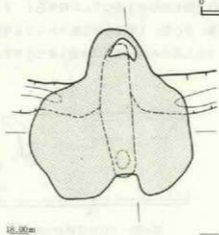
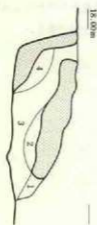
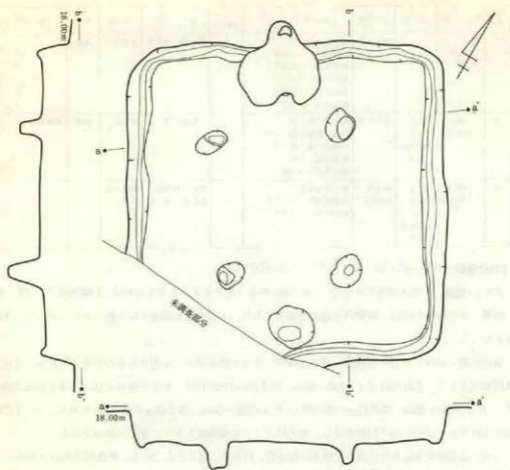


第99図 011住居跡出土遺物

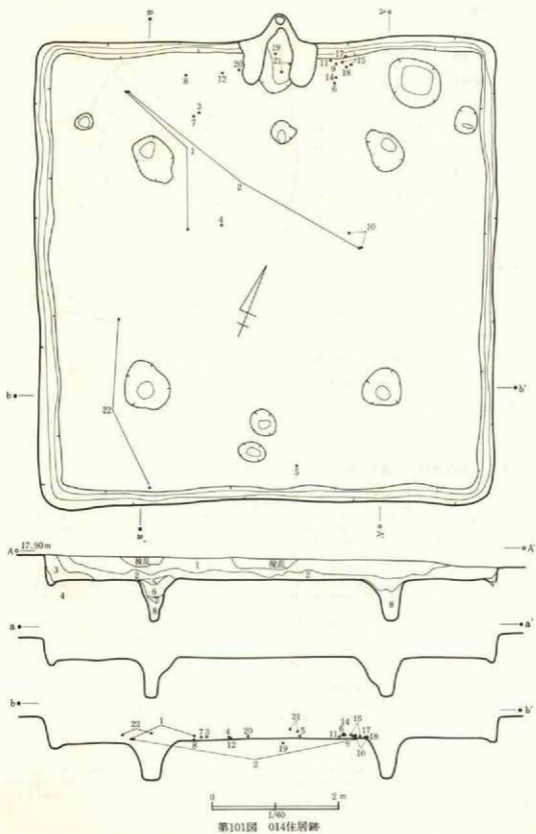
表19 011住居跡出土遺物一覧

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロフト 傾斜角	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	甕 (土師器)	(19.2) (4.7) —	口縁部 1/8	口縁部内外-横へラナデ		中粒砂一やや多	黄褐色	堅緻	





第100图 011住居跡



第101图 014住居跡

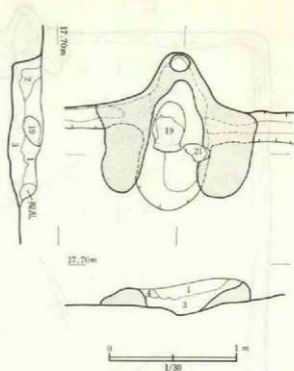
014住居跡 E4-00・01・10・11グリッ  
Pに位置する。

プラン・規模 一辺7.15mの正方形を呈  
する。主軸方向 N-23'-W

所見 015住居跡に次ぐ、大形の住居跡で  
ある。現存壁高は約40cm、周溝は幅15~20  
cmでカマド部を除いて全周する。P1~P  
4をもって支柱穴と考えたい。またP5  
~P7は一列に直線的に並び、P8・9も  
カマドに対面する位置からはやはずれるが、  
すべてこの住居に伴うものと考えられる。

貯蔵穴は北壁の東側に、径75cmの不整形  
形を呈し、深さ55cmのものがある。

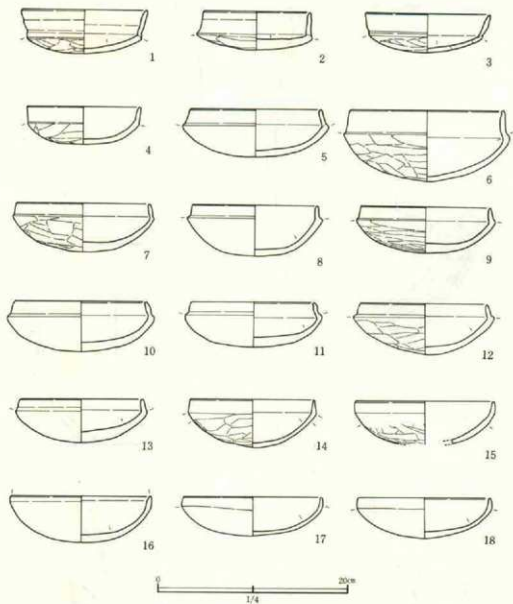
カマドは北壁中央にあり、壁から外方に  
45cm程V字状に掘り込まれている。土層断  
面は1・2層が崩壊した構築材、3層が焼  
土と炭を含む暗褐色土、4層が山砂と焼土  
を含む褐色土である。



第102図 014住居跡カマド

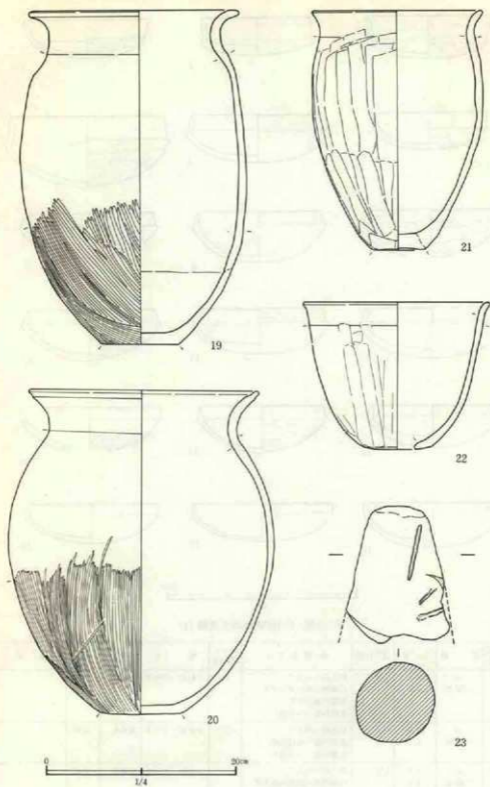
表20 014住居跡出土遺物一覧

埋蔵 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロチロ 跡の方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯 (土師器)	13.3	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部上半内面-ヨコナデ 底部下半内面-ナデ 底部外面-ヘラ削り		細礫-少	茶褐色	堅緻	外面に広範囲の 黒灰有り
		4.65							
		12.2							
2	杯 (土師器)	11.4	4/5	粘土板上に粘土紐つみ上げ 口縁外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-ヘラ削り		粘粒砂-多 細礫-少	明茶褐色	堅緻	口縁部は焼きひ ずみが著しい
		-11.7							
		4.0							
		12.2							
3	杯 (土師器)	13.0	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部上位外面-ナデ 底部外面-ヘラ削り		中粒砂-多	黒褐色	良好	
		4.1							
4	杯 (土師器)	11.9	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ後、 寛いヘラ磨キ 底部外面-ヘラ削り		粗粒砂-多	暗褐色	良好	
		3.8							
5	杯 (土師器)	13.8	1/3	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		細粒砂-多	黒褐色	堅緻	内外とも厚く炭 灰物の付着して いた痕跡が有る
		5.0							



第103図 014住居跡出土遺物 (1)

神区 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・変形手法	コナロ 傾斜方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
6	环 (土師器)	18.2 7.5	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外—ヨコナデ 底部内面—ナデ 底部外面—ヘラ削り		中粒砂—やや多	黒褐色	堅緻	
7	环 (土師器)	14.0 5.1	完形	粘土紐つみ上げ 底部内面—布目圧痕 底部外面—ヘラ削り		中粒砂—やや多	黒褐色	良好	
8	环 (土師器)	(13.2) 5.2	1/2	粘土紐つみ上げ 口縁内外—底部内面上半 —ヨコナデ 底部内面下半—ナデ 底部外面—ヘラ削り後、ヘ ラ磨き		中粒砂—やや多	暗褐色	堅緻	



第104图 014住居跡出土遺物(2)

神区 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	リゾソ 陶土質	胎 土	色 調	地 皮	備 考
9	坏 (土師器)	13.5 4.7	4/5	粘土紐つみ上げ 口縁外面～底部内面上半 -ヨコナテ 底部内面下半-ナテ 底部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		中粒砂-多	黒褐色	良好	
10	坏 (土師器)	13.7 5.2	口縁部 1/4欠損	粘土紐つみ上げ		中粒砂-やや多	明茶褐色	堅緻	
11	坏 (土師器)	13.0 4.6	完形	粘土紐つみ上げ 口縁内外-ヨコナテ 底部内面-ナテ 底部外面-ヘラ削り後、ナ テ		中粒砂-多	明茶褐色	堅緻	黒斑有り
12	坏 (土師器)	13.2 5.3	完形	粘土紐つみ上げ 底部内面-ヘラナテ後、ナ テ 底部外面-ヘラ削り後、ナ テ		中粒砂-少	黄褐色	堅緻	黒斑有り
13	坏 (土師器)	(12.8) 4.6	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁内外～底部内面上半 -ヨコナテ 底部内面下半-ナテ 底部外面-ヘラ削り後、ナ テ		中粒砂-少	黒褐色	良好	
14	坏 (土師器)	13.1 5.0	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナテ 底部内面-ナテ 底部上位外面-ナテ 底部外面-ヘラ削り		粗粒砂-少	暗黄褐色	やや甘	
15	坏 (土師器)	(14.4) (4.4)	1/2	粘土紐つみ上げ 底部外面上位-底部内面 -ヘラ磨キ 底部外面-ヘラナテ		粗粒砂-少	黒褐色	良好	
16	坏 (土師器)	14.6 4.8	3/4	粘土紐つみ上げ 口縁内面～底部内面上半 -ヨコナテ 底部内面下半-ナテ 口縁外面～底部外面 -ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		細粒砂-濃	黒褐色	良好	
17	坏 (土師器)	14.5 4.1	1/2	粘土紐つみ上げ 口縁外面～底部内面上半 -ヨコナテ 底部内面-ナテ 底部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		細粒砂-多	黒褐色	良好	
18	坏 (土師器)	(13.9) 4.1	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁外面～底部内面上半 -ヨコナテ 底部内面-ナテ 底部外面-ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ		細粒砂-少	黒褐色	良好	
19	甗 (土師器)	(22.0) 34.4 8.1	4/5	口縁内外-ヨコナテ 胴部内面-ナテ 胴部外面上半-ナテ 胴部外面下半-ヘラ磨キ 底部-木葉痕		長石、石英、磁 礫-多	暗褐色	良好	
20	甗 (土師器)	24.3 33.7 8.5	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナテ 胴部内面-ヘラナテ		細い長石、石英、 磁礫-多	口縁部- 黄褐色 胴部-明	良好	

神田 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロフロ 編成	粘 土	色 調	焼成	備 考
		胴最大径 28.0		胴部外面上半→ナデ 胴部外面下半→ヘラ磨キ			褐色		
21	甕 (土師器)	(18.0) 24.7 5.5 胴最大径 17.9	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→ヘラ磨り		粗粒砂一多	黄褐色	堅焼	黒斑有り
22	甕 (土師器)	(19.5) 15.2 (7.0)	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外→ヨコナデ 胴部内面→ヘラナデ 胴部外面→ヘラ磨り		中粒砂一多	淡黄褐色	堅焼	黒斑有り
23	土製支脚	現存長 14.2	下半部欠 損			粗粒砂一多	黄褐色		

また住居の覆土は、多量のローム粒を含んだ黒色土を1層とし、2・3層がローム粒、ロームブロックを多量に含む暗褐色土、4層はロームからなる褐色土、5層がローム粒を若干含む黒褐色土、6層はローム粒を多く含む暗褐色土、7層がロームブロック主体の褐色土、8層がローム粒を多量に含む褐色土である。

遺物はカマド内とその周辺から大半が出土しており、坏、甕、甒、支脚からなる。甕には胴部外面に細い荒磨きを施すもの(19・20)と中広の篋削りを施すもの(21)の二者がある。

015住居跡 D5-67・68・77・78グリッドを中心とした位置にある。

プラン・規模 7.3×7.6mのほぼ正方形を呈し、南側に一辺2m程の正方形の張り出し部をもつ。主軸方向 N-21'-W

所見 今回検出した住居跡の中で最大規模となる住居跡で、南側に張り出し部を持つ、特異な形態を示す。西壁は後世の溝(103溝)に切られているが、平均して現存壁高50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅20cm深さ8-10cmで、張り出し部も含めて全周する。柱穴はP1-P7をもって主柱穴とし、これにカマドに対面するP8が付随する。またP9-P11は張り出し部に伴う柱穴と考えたい。

またP11-P15は貯蔵穴と考えられ、P13は、P12を切って構築されている。

カマドは北壁に据方のみを残すものと、東壁中央に構築された、2基を検出した。また、この2基のカマドについては、P12(貯蔵穴)と北カマドがセットをなし、P13、またはP14、もしくは、この双方の貯蔵穴が東カマドとセットをなすものと考えられる。従って、貯蔵穴P12とP13の切り合いから、カマドは、北カマドから東カマドの順で構築されたものと考えられる。

床面については、全体に固く踏みしめられており、張り出し部についても同様である。また、この張り出し部の床面は、住居跡の床面よりも、平均して3-5cm程高くなっている。

遺物は、ほとんどが覆土下層から床面にかけて出土したものであり、須恵器蓋、土師器坏、甕、甒からなる。1の蓋は7世紀前半代の所産かと考えられる。また土師器の坏は、口縁部が内傾して立ち上がるも(2-7)と直立するもの(8)、体部に段をなさないもの(9・10)の形態がある。

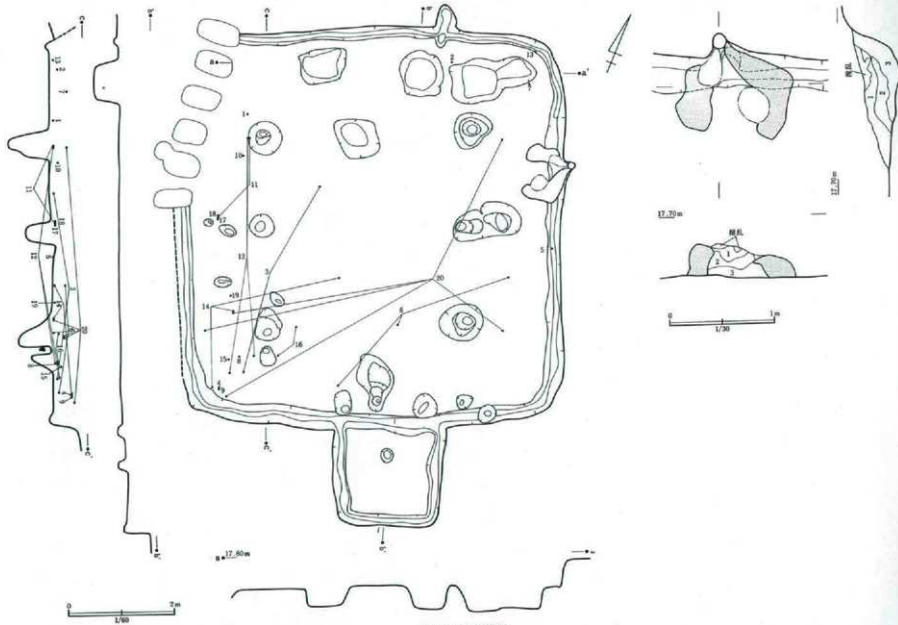
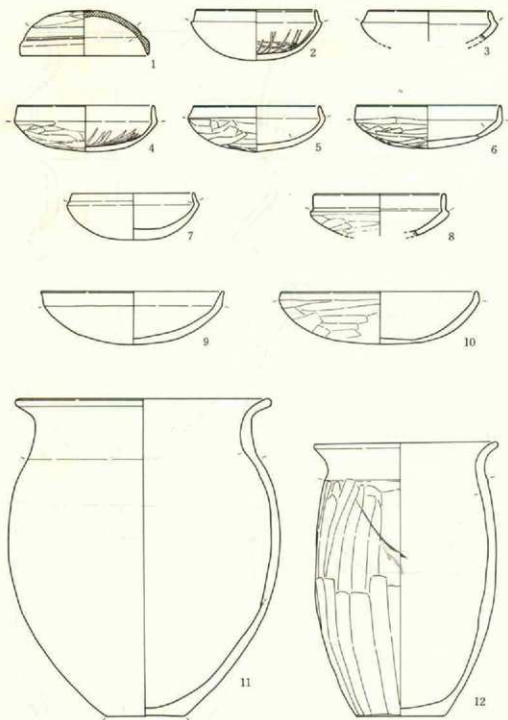
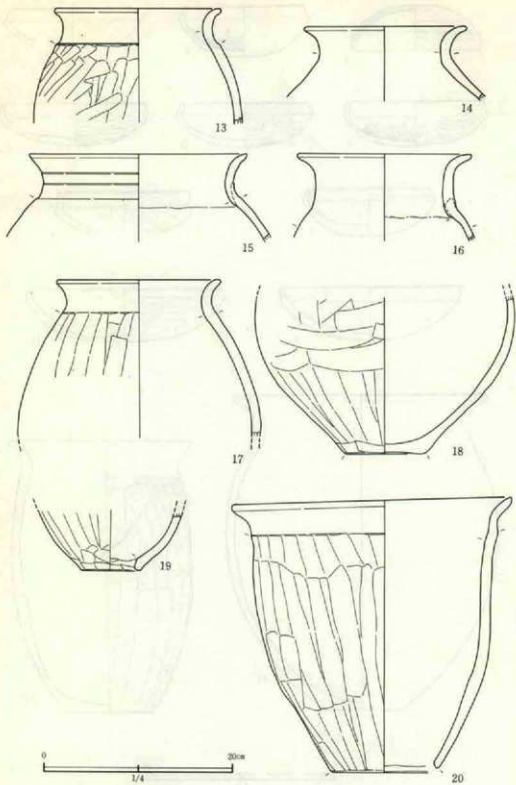


圖105 015住居跡





第106図 015住居跡出土遺物(1)



第107图 015住居跡出土遺物(2)

表21 015住居跡出土遺物一覧

検出 番号	器 種	法 量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ 回転方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	甕 (須恵器)	13.4 4.7	完形	巻き上げロクロ 口縁部内外-ヨコナデ 内面-不整ナデ 天井部外面-手へら削り	左	中粒砂-多 細礫-微	灰色	堅緻	内面が4/5周す る
2	坏 (土師器)	(12.8) 5.3	1/2割	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-へら削り後、へ ら磨き		中粒砂-少	黒色	堅緻	
3	坏 (土師器)	12.7 3.2	底部欠損	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-へら削り後、 へら磨き		中粒砂-少	黒褐色	やや甘	
4	坏 (土師器)	14.2 4.8	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-へら削り		粗粒砂-やや多	黄褐色		底部内面に暗文 風のへら磨き 黒疵有り
5	坏 (土師器)	(13.4) 4.7	1/2	粘土紐つみ上げ 口縁外面-底部内面上半 -ヨコナデ 底部内面下半-ナデ 底部外面-へら削り		中粒砂-多	暗褐色	良好	
6	坏 (土師器)	14.9 4.5	完形	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部内面-ナデ 底部外面-不整方向のへら ナデ		粗粒砂-やや多	口縁-内 面-黒色 底部外面 -黄白色	堅緻	
7	坏 (土師器)	(12.8) 4.9	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部内面-へら磨き 底部外面-へら削り後、へ ら磨き		粗粒砂-少	暗茶褐色 体上半- 暗褐色	良好	
8	坏 (土師器)	(13.8) <4.3)	1/5	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-底部内面 -ヨコナデ 底部外面-へら削り後、ナ デ		中粒砂-多	暗黄褐色	堅緻	
9	坏 (土師器)	19.1 5.6	3/4	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 底部内面-へら磨き 底部外面-へら削り後、へ ら磨き		細礫、粗粒砂 -多	暗茶褐色	堅緻	
10	坏 (土師器)	(20.5) 5.7	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部外面-ヨコナデ 口縁部内面-底部内面 -へら磨き 底部外面-へら削り		中粒砂-多 細礫-少	暗黄褐色 内面-明 茶褐色	堅緻	
11	甕 (土師器)	(26.9) 32.7 8.4 胴径大径 28.6	2/5	粘土紐つみ上げ 口縁部内外-ヨコナデ 胴部内面-ナデ 胴部外面-へら削り後、ナ デ 胴部下半-へら磨き		長石、石英、面 礫、粒粒砂-多	暗黄褐色 内面-暗 赤褐色	甘	
12	甕 (土師器)	19.5 28.3 9.2 胴径大径		口縁部内外-横へらナデ 胴部内面-へらナデ 胴部外面-へら削り		中粒砂-多	暗黄褐色 -黒褐色 (とくに 上半)	やや良	外面にスス付着 痕跡有り

神田 番号	部 種	法 量	遺存状態	成・形 手法	ロフコ 追加	土 質	色 調	境 成	備 考
13	壁 (土師器)	(17.6) <11.8> —	上半1/4	粘土繕つみ上げ 口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—斜位の方向にヘ ラ削り後、ナデ 胴部外面—ヘラ削り		粗粒砂—多 細礫—少	暗褐色 内面—黒 色	やや甘	
14	壁 (土師器)	(18.6) <7.6> —	口縁部 1/4	粘土繕つみ上げ 口縁部内外—ヨコナデ 胴部内外—ナデ		長石、石英、細 礫—多	暗赤褐色	甘	
15	壁 (土師器)	(22.8) <8.9> —		粘土繕つみ上げ 口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り後、ヘ ラ磨キ				甘	
16	壁 (土師器)	(18.4) <16.3>	上半1/3	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り後、ナ デ		長石、石英、細 礫、雲母—多	暗茶褐色	良	
17	壁 (土師器)	(17.1) <6.3> — 胴最大径 25.4	上半1/5	粘土繕つみ上げ 口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ナデ 胴部外面—ヘラ削り		粗粒砂—多	淡黄白色 胴外面半 分—黒褐 色	甘	
18	壁 (土師器)	— <16.3> 8.0 胴最大径	1/2	粘土繕つみ上げ 胴部内面—ナデ 胴部外面—底面—ヘラ削り		中粒砂—多	暗褐色 内面—黒 色	甘	胴部内面スス付 着外面に黒斑有 り
19	壁 (土師器)	— <8.1> 孔径 4.9	底部のみ	粘土繕つみ上げ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り		中粒砂—多	暗黄褐色	やや甘	
20	瓶 (土師器)	29.4 28.1 11.5 胴最大径	4/5	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラ磨キ 胴部外面—ヘラ削り 全体に雑な作り、口縁部は 楕円形(29.4×26.0)		粗粒砂—多	黄褐色	やや甘	外面に黒斑有り

014壁穴状遺構 E5-84・85グリッドに位置する。

プラン・規模 一辺4.5mの方形を呈すると考えられる。

所見 北側を近年の掘削坑によって切られるため全体の形状を知ることができない。また、覆土も大半が攪乱層となっており、遺存状態は極めて悪いものである。

現存する部分の床面は平坦になっており、固く踏みしめられた状態となっていた。また、現在壁高は約25cmである。

遺存する部分には、柱穴やカマドなどの痕跡は認められず、この遺構に確実に伴う遺物はないため、時期、性格ともに不明であるが、本遺構の位置や、壁の方向について、他の当該期の遺構との関連性が強く認められるので、一応この項において報告する。

101溝 調査区の西側で検出したものでD4-73地点から北上し、D4-14地点でやや張り出す。さらに溝は北に延びD5-83地点で屈曲して西へ走り、D5-71地点まで続く。またD4-14地点からもう一条の溝が西へ延びC4-07地点まで続く。

この溝内の左右の立ち上がる壁面には深さ40~90cmのピットが数多く検出された。また東西に延びる溝と南北に走る溝との合流点(D4-24地点)ではこのピット群が比較的密になっている。溝の幅は平均

2 m、深さ90cm程で、断面形態は、ゆるやかな傾斜を示す「U」字状となっている。

この溝の年代決定を下す資料には乏しいが、D5-83地点で近世の土埴204(この土埴も近年まで使用されていた井戸に切られるため、実測等はできなかった。)に切られており、また、溝内覆土から鬼高期の土師器の細片が出土していることから、古墳時代後期から、それ以降の時代に属するものと考えられる。

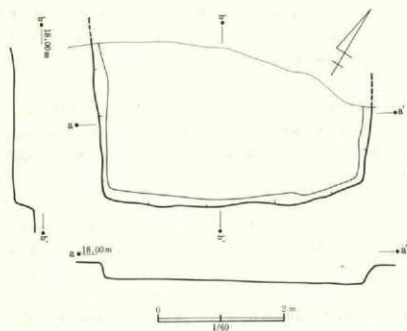
### C. 小 結

今回検出した古墳時代の遺構は、いずれも古墳時代後期の鬼高期の所産である。これらの実年代を考える上で、001・015住居跡出土の須恵器があり、6世紀前半代と7世紀前半頃の年代を与え得るであろう。

流山市域では、当該期の遺跡調査例は少なく、本遺跡の南約1kmの地点の下花輪第II遺跡、同じく南約2kmの地点にある町知遺跡等がある程度で、今回の出土資料は当該期の様相を知る上で貴重な資料となるであろう。

(郷堀)

(註1) 流山市教育委員会 川根正教氏の御教示による。



第108図 004竪穴状遺構

## 第4章 中・近世以降

### A. 概要

この時代に属する遺構の大半は調査区の西側で検出したもので、泉道松戸・野田線の直下とその西側で多数検出された。

遺構は土壇14基(その内11基は天井部を欠失した地下式壇と考えられる)、井戸状遺構6基、焼土遺構1基、溝状遺構1条である。

なお、上貝塚遺跡は昭和55・56年度の二次にわたって調査されたため、一部遺構番号の重複があるので以下調査年次ごとに記述する。

### B. 遺構各説

#### 昭和55年度調査区

この調査区は、現在の泉道松戸・野田線の西側の範囲であり、土壇4基、井戸状遺構4基、焼土遺構1基を検出した。なお、この地区は近世以降に立川ローム層Ⅶ層あたりまで削平し地山整形を施していたと考えられる。

#### 001土壇

長軸1.65m、短軸0.7~1.25mを測る不整形の焼土遺構である。火床は2ヶ所あり、被熱部分は深さ15~25cmまで達している。

この周辺ではいくつかのビット群を検出しており建物に関連した柱穴群を想定したが、配列に規則性が認められず、時期等も不明であるため、この001遺構との関連についても推定できなかった。しかしながら、へっつい等のような遺構が存在していたのではないだろうか。

#### 002土壇

1辺2.15mを測る隅丸方形の土壇である。深さ1.2mを測り、床面は平坦な四角形を呈している。方形を呈した土壇は昭和55・56年度の調査したものの中で、唯一のものであるが、この土壇も他の長方形を呈する土壇群と同様に天井部を削平された地下式壇の可能性もある。なお、覆土中から常滑の甕の口縁部2片(第 図5・6)が出土している。

#### 003土壇

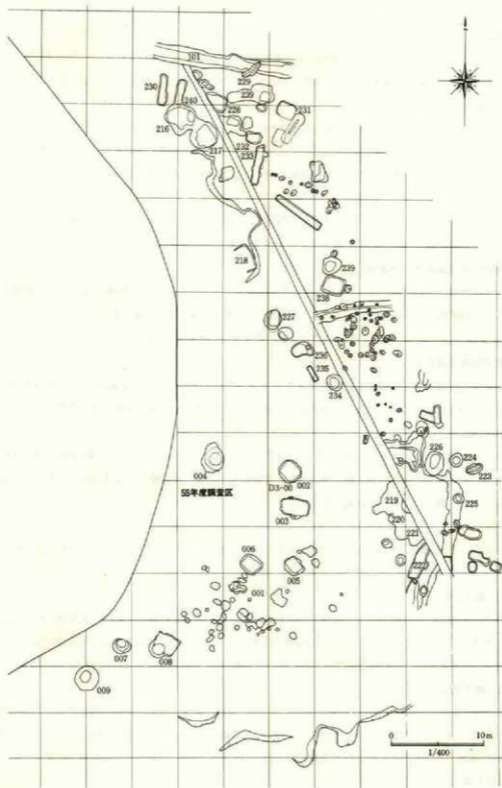
長辺3.0m、短辺1.7mの長方形を呈する土壇で、南壁中央部にやや張り出した部分があり、そこに小さな掘り込みが認められた。床面も平坦な長方形を呈している。天井部を削平された地下式壇の可能性もある。

#### 004土壇

径2.7mを推定する不整形の遺構である。深さは2.2mを測り、青灰色粘土層まで掘り込まれている。大形の井戸状遺構かとも考えられる。

#### 005土壇

長辺1.9m、短辺1.7mを測る長方形の土壇で、深さ1.15mとなる。床面は平坦な長方形を呈してい



第109図 土埧群全体図

る。これも天井部を削平された地下式塚となるかもしれない。

#### 007土塚

遺構確認面での径1.7mを測る。平面円形の遺構で、深さ60cmのところから径80cmの円筒状となる。この遺構は2m以上掘り込まれるため、全掘し得なかったが、井戸として機能したものと考えられる。

#### 008土塚

2遺構が重複するもので、長辺2.3m、短辺2.0m、深さ0.9mを測る長方形の土塚を切って、上端部の径2.1m、深さ70cmの部分から、径1m程の円筒状を呈する喇叭状遺構が構築されている。長方形の土塚は地下式塚の可能性がある。また井戸状遺構は深さは2mを超え全掘しはし得なかった。

#### 009土塚

上端部径2.5mの円形を呈し、深さ1.2mの部位から、径1.3mの円筒状となる井戸状遺構で、深さは3mを超えるが全掘し得なかった。覆土中から土師質の鍋の破片1点(第121図4)が出土している。

#### 昭和55年度調査区出土遺物

出土遺物量はさほど多くなく、園化し得たものは幕末～明治にかけての磁器碗(第121図1)、鉄軸を施した天目茶碗、丸茶碗(第121図2・3)と遺構出土の鍋、常滑の甕の口縁がある。

この他に古銭があり、その内訳は古寛永6枚、新寛永2枚がある。(第122・123図)

#### 昭和56年度調査区

昭和55年度調査区と連続する、県道松戸・野田線直下を中心として、土塚3基(その内1基は天井部を欠失した地下式塚と考えられる。)、地下式塚6基、井戸状遺構2基、溝状遺構1条を検出した。

#### 201土塚

中近世遺構の中で最も東に位置し、E5-94グリッドで検出したものである。長軸4.0m、短軸2.8mの不整形円形の土塚である。南と西の壁は緩やかな傾斜をもつが、他の壁面はほぼ垂直に立ち上がり深さ75cmを測る。覆土中から不明鉄銭1枚が出土している。

#### 204土塚

101溝を切って構築されるが、この204土塚も近年まで使用された丸井土に切られるため、実測はし得なかった。しかしながら、形態的には201土塚に酷似したものである。

#### 216地下式塚

天井部の崩壊した地下式塚で、南側に竪坑が設けられたものと思われる。坑内の床面は2.8×1.5mの長方形を呈し、北東部に一辺1m深さ18cm程の不整形をした浅い掘り込みがある。遺構確認面からの深さは2.2mを測るが、天井部が崩壊しているため、実際の土塚内の高さは、もっと低くなるであろう。

#### 217地下式塚

216地下式塚の東壁と接するように設けられている。216と同様に南側に竪坑が構築される。坑内の床面は2.0m×1.25mで216土塚よりやや小形となる。遺構確認面からの深さは約2.1mであるが、これも天井部が崩壊しているため、土塚内の実際の高さは、さらに低いものであろう。

#### 218土塚

床面の規模は2.65m×1.5mで、長方形を呈する土塚である。西側は大きく削平されるため推定するしかないが、地下式塚となっていたものと考えられる。現存する壁面の高さは1.1mを測る。



### 219地下式埴

西側に1.3m×1.9mの長方形を呈し、深さ0.9mの竪坑から地下式の埴内に至る。埴内の床面は2.1m×1.7mの長方形を呈している。坑部から埴内の床面までは90cm前後を測る。

### 220地下式埴

219地下式埴と接し、221地下式埴を切って構築される。西側に0.8m×0.7m、深さ0.85mの竪坑から地下式の埴内に至る。埴内床面は1.9m×1.8mの長方形を呈している。天井部は崩壊しているため埴内の高さは不明であるが、竪坑部から埴内の床面までは、1.1~1.2mを測る。

### 221地下式埴

竪坑は南に設けられ、深さ0.8mを測る。埴内の床面は1.9m×1.4mの長方形を呈するが、219・220地下式埴に比して、やや小形であり、また掘り込みも浅い。竪坑部から埴内床面までの深さは0.6mである。

### 224井戸状遺構

径1.3mの円形を呈する井戸状遺構である。深さ80cmの部位からは径0.9mとなり、円筒状で下に続く。深さ約2mの地点までは確認したが、完掘していない。

### 225井戸状遺構

1.1m×0.85mの平面楕円形を呈し、わずかに径をせばめながら円筒状となる遺構である。深さ1.8mの地点までは確認したが完掘はしていない。

### 226土埴

平面は不整形円形を呈し、長軸2.4m、短軸1.7mを測る。床面は皿状となり、最深部で50cm程度の性格不明土埴である。

### 227地下式埴

今回の調査で、唯一天井部の遺存していた地下式埴であるが、調査中に崩落したものである。他の地下式埴とやや形態が異なり、竪坑部は張り出さず、直線的に横穴部に至るもので、埴内は、2.1m×1.3mの楕円形を呈している。天井部までの高さは1.1m、竪坑上面から、埴内床面までは1.5mとなる。

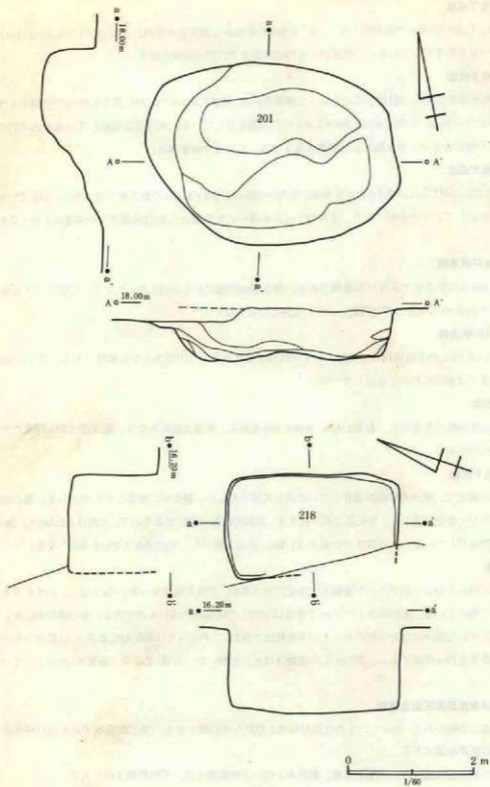
### 103溝

D4-98からD5-37グリッドを結んで南北に延びるが、主軸方向はN-6'-Wとなり、わずかでであるが西に掘れている。溝の幅は4~5mで深さは平均して60cm程の浅いものである。また溝の中心からやや東にずれた部分には舟底形のピットが多数検出された。このピットは幅0.4m、長さ2m前後のものが多く深さも10cm程度である。溝内からの遺物はほとんど無いが、古銭(北宋銭・新寛永)が出土している。

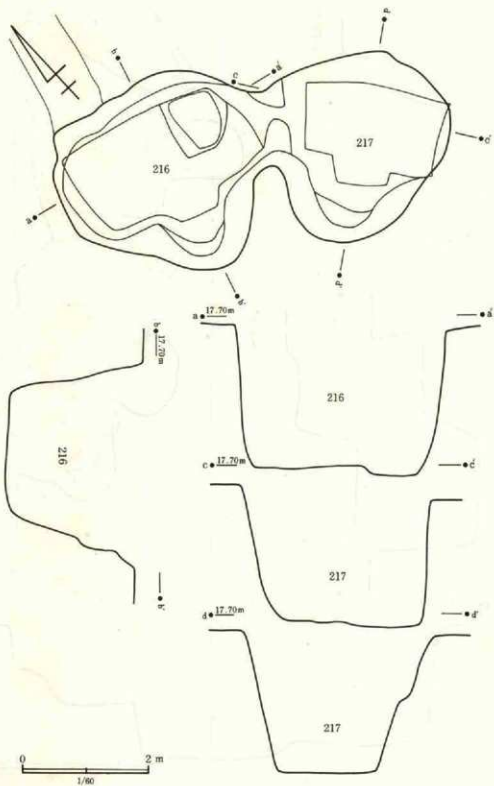
### 昭和56年度調査区出土遺物

陶磁器と古銭がある。図示したものは染付磁器と型打ちの白磁である。(第120図)いずれも江戸時代末期の伊万里系磁器である。

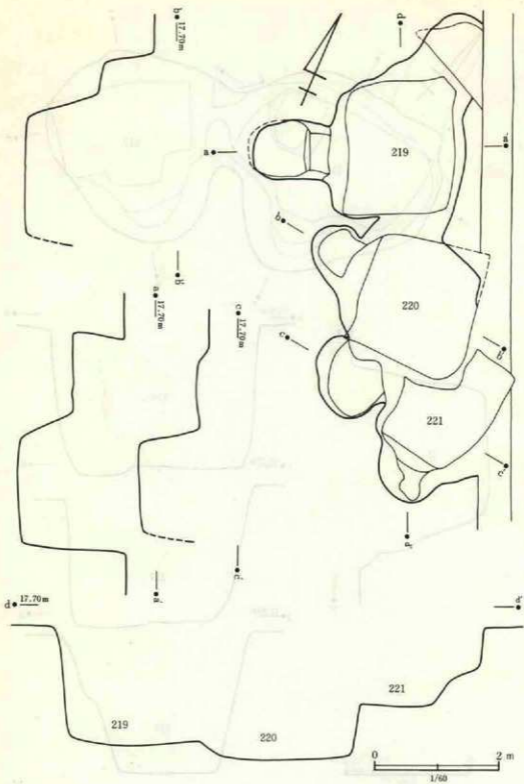
また古銭は渡来銭3枚、古寛永2枚、新寛永7枚、不明銅銭5枚、不明鉄銭3枚である。



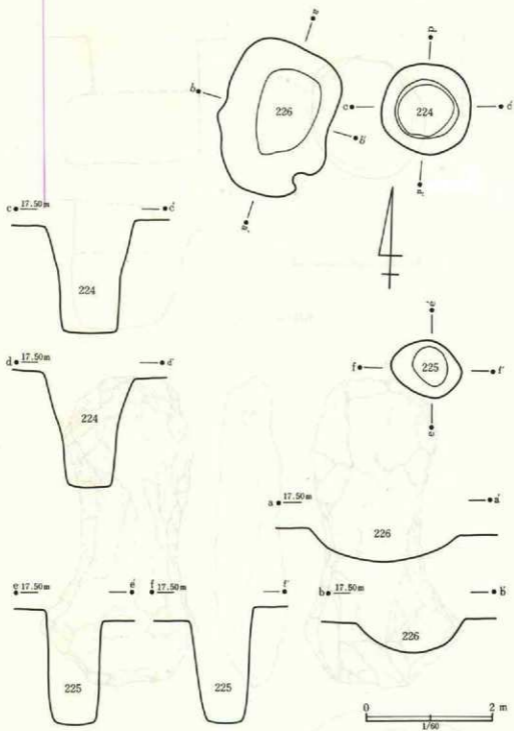
第110圖 201・218土城



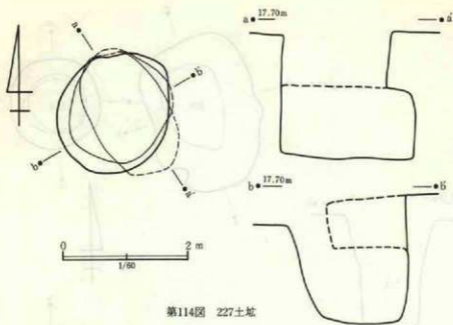
第111圖 216・217土壇



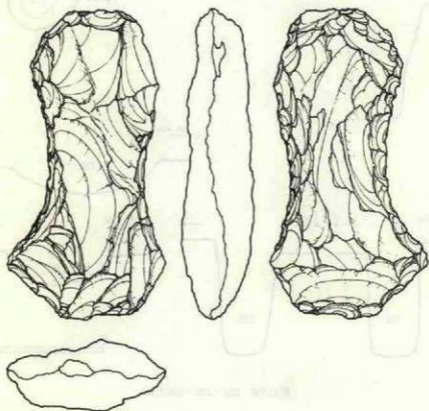
第112圖 219・220・221土壇



第113图 224·225·226土坑



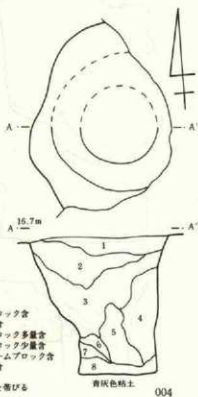
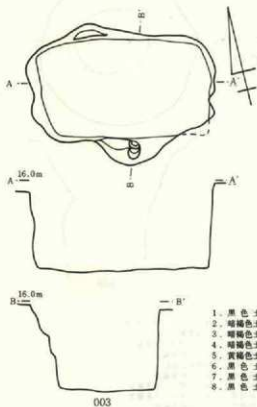
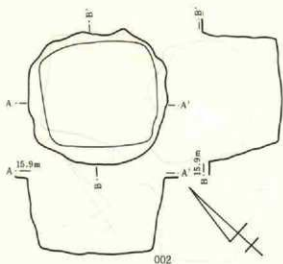
第114图 227土坑



第115图 201土坑出土石器

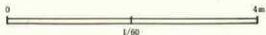


1. 黒褐色土：焼土・ローム粒含
2. 黒色土：焼土・山砂含
3. 赤褐色土：白味をおびた焼土
4. 灰白色土：焼土・山砂含
5. 黄白色土：山砂まじり粘土
6. 暗褐色土：凝結したローム

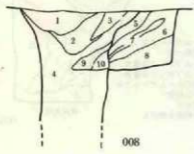
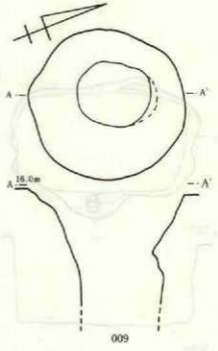
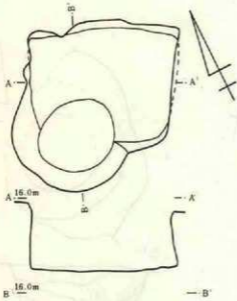
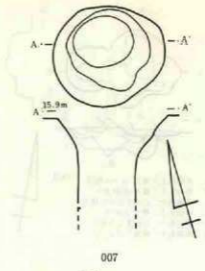
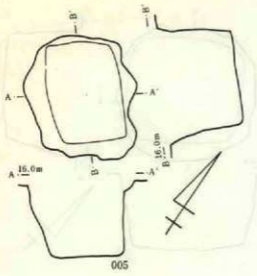


1. 黒色土：ロームブロック含
2. 暗褐色土：白色粘土含
3. 暗褐色土：ロームブロック多量含
4. 暗褐色土：ロームブロック少量含
5. 黄褐色土：大型のロームブロック含
6. 黒色土：ローム粒含
7. 黒色土：均質な土
8. 黒色土：やや粘性を帯びる

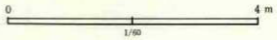
青灰色粘土



第116図 55年度調査区001～004遺構平・断面図

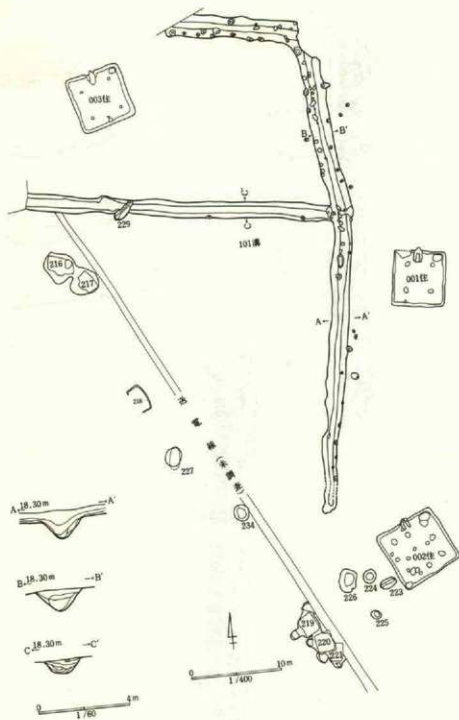


- 1. 黒褐色土：ロームブロック含
- 2. 暗褐色土：ロームブロック・山砂含
- 3. 灰白色土：山砂多量含
- 4. 暗褐色土：ロームブロック多量含
- 5. 黒褐色土：ローム粒多量含
- 6. 黒色土：粘性ある細粒土
- 7. 黄褐色土：ローム粒多量含
- 8. 黒色土：ロームブロック多量含
- 9. 暗褐色土：ロームブロック多量含
- 10. 暗褐色土：ローム粒多量含

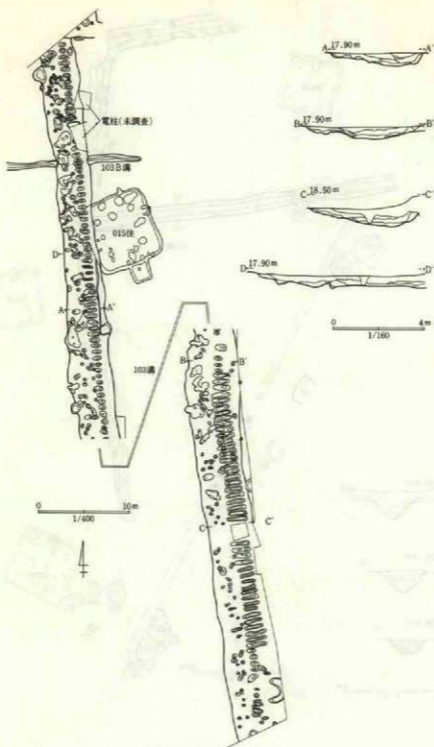


第117図 55年度調査区005・007～009遺構平・断面図

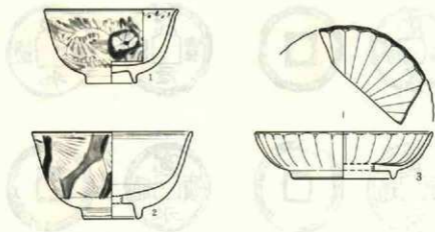




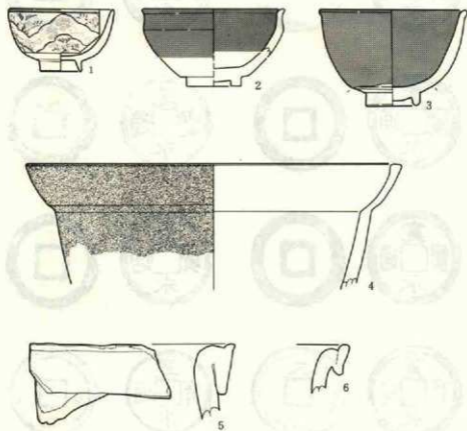
第118図 101溝平・断面図



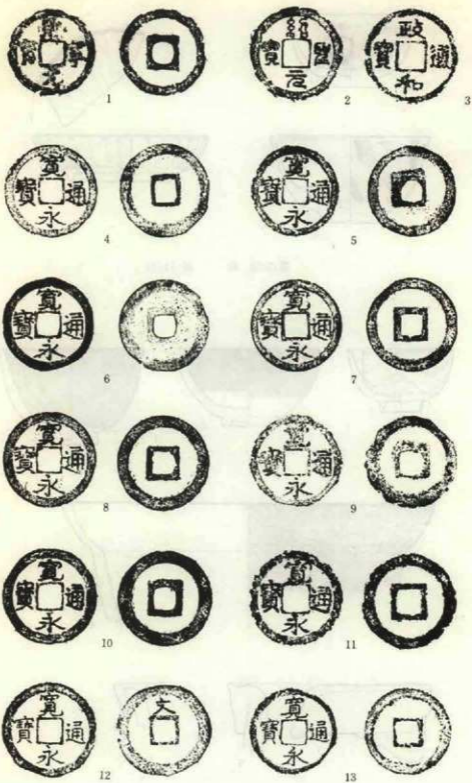
第119圖 103溝平・断面圖



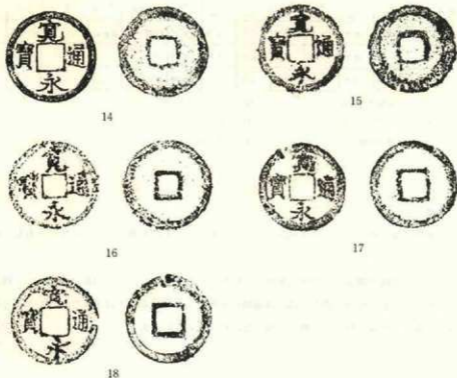
第120图 磁 器 (1/3)



第121图 55年度调查区出土陶磁器 (1/3)



第122圖 上貝塚遺跡出土古錢 (1) (1/1)



第123圖 上貝塚遺跡出土古錢(2) (1/1)

表 22 錢貨計測值表

番号	錢貨名	OD (mm)	1 D (mm)	OG (mm)	H (mm)	T (mm)	t (mm)	W (g)	出土地点	備 考	%	%
1	開寧元寶	22.90	19.00	7.25	5.20	1.14	0.73	2.05	103溝			
2	政和通寶	26.50	21.00	8.00	5.50	2.24	1.69	5.30	表塚			
3	紹聖元寶	24.50	19.90	7.50	5.41							表塚
4	永戶錢-正足寬	24.60	20.00	7.90	5.50	1.20	0.68	3.29	C-7	S 55年度調査区 古寛永	3.51	1.25
5	鎌古銭- 藤字銀細通	23.60	19.50	7.00	5.50	1.30	0.88	3.20	E-6	S 55年度調査区 古寛永	3.37	1.21
6	常谷銭-正足宝	24.20	19.80	7.00	5.50	1.01	0.68	2.65	D6-91	古寛永	3.46	1.22
7	常谷銭-正足宝	24.20	20.00	7.50	5.50	1.34	0.69	3.50	C-7	S 55年度調査区 古寛永	3.23	1.21
8	常谷銭-正足宝	24.80	19.80	7.20	5.50	1.15	0.50	3.00	C-7	S 55年度調査区 古寛永	3.44	1.25
9	常谷銭-正足宝内 減寛	24.35	20.00	7.35	5.50	1.10	0.75	2.35	C-7	S 55年度調査区 古寛永	2.35	1.22
10	鎌仁寺銭- 小字公寛	25.00	20.00	7.20	5.80	1.33	0.65	3.75	F7-95	新寛永	3.47	1.25
11	鎌仁寺銭- 大字新寛	25.00	20.00	7.70	6.20	1.54	1.05	3.20	G6-32	新寛永	3.25	1.25
12	大佛銭-慶文	25.20	20.50	7.20	5.70	1.22	0.54	2.80	D-7	S 55年度調査区 新寛永	3.50	1.23
13	光文龜戸銭-小字	23.20	19.80	7.00	6.70	0.94	0.44	1.70	F7-49	新寛永	3.31	1.17
14	光文龜戸銭	24.00	20.00	7.50	6.40	1.11	0.70	2.75	F7-95	新寛永	3.20	1.20
15	光文秋田銭-数字	23.10	19.10	7.20	6.00	1.09	0.69	1.95	D-7	S 55年度調査区 新寛永	3.21	1.21

番号	調査名	OD (mm)	ID (mm)	OG (mm)	IG (mm)	T (mm)	t (mm)	W (mm)	出土地点	備考	%	%
16	明和四年銭	23.70	20.00	6.60	5.30	1.81	1.38	3.45	103溝	新寛永	3.59	1.19
17	寛永通宝(不明)	23.20	18.80	7.10	6.00	1.07	0.83	2.20	F5-24			
18	寛永通宝(不明)	23.00	18.80	7.90	6.90	1.23	0.81	2.30	表塚			

※ OD = 外縁外径平均値

ID = 外縁内径平均値

OG = 内郭外長平均値

IG = 内郭内長平均値

T = 外縁厚平均値

t = 文字面厚平均値

### C. 小 結

検出した遺構は地下式壇もしくは土壇がほとんどであり、いずれも墓壇としての性格を有していたものではないかと考えられる。

また、これらの遺構が調査区の西側に集中して検出されたことから、この地点が墓域として機能していたものと考えられる。今回の調査では、各遺構の実年代を推定することはできなかったが、今後、周辺地域の古文書等の文献史料と共に検討を加えなければならないであろう。(郷城)

第3篇 若葉台遺跡

# 第1章 先土器時代

## A. 概 要

若葉台遺跡から検出された先土器時代のブロック（石器の地点分布）は7箇所ある。ブロックの分布状況を見ると、J列からN列の10～13区に点在する状況を示している。この分布状況は、縄文時代の住居跡の分布状況と近似しており、調査区域の中央部に、南東方向に開口していたと推定される谷頭部を取り巻くかのようなかたちをしている。残念なことに、この谷は、若葉台団地の造成時に、遺跡の一部と共に破壊、埋立てられ、現状からその規模を窺うことはできなくなってしまった。

遺跡の基本土層は、第125図に示した柱状図に見られるとおりであって、既に述べた上貝塚遺跡における所見と一致している。

Ⅲ層 ソフトローム層

Ⅳ層 ハードローム層最上部

Ⅴ層 第1黒色帯

Ⅵ層 始良 Tn 火山灰を含む明黄褐色硬質ローム層

Ⅶ層 第2黒色帯 スコリア質暗褐色ロームで、通常3枚に細分されるが、本遺跡では1枚とした。

Ⅷ層 立川ローム層最下層であり、2層に分けられるのが普通であるが、本遺跡では1層にまとめた。遺物の産出層準は、Ⅳ層からⅧ層に及ぶが、Ⅳ・Ⅴ層を中心とするブロックが多い。この傾向は上貝塚遺跡でも同様であるばかりか、下総台地全体を通じて似たような状況を示しており、下総Ⅱb期の遺跡の分布密度が、前後に比べて高くなるという南関東における一般的動向を良く反映している。

## B. ブロックとその遺物

**第1ブロック** K10-25ポイントの北東に位置する。径約2.5mの範囲から46点の遺物が得られた。産出層準はⅢ層からⅤ層上部に及ぶが、Ⅳ層の下部に最も集中している。

資料総数は46点と記録されているが、このうち7点の所在が判明せず、39点について検討する。資料の内訳は次のようになっている。

母岩No.1-1（黒曜石）

ナイフ形石器 1 剥片 2 削片 31

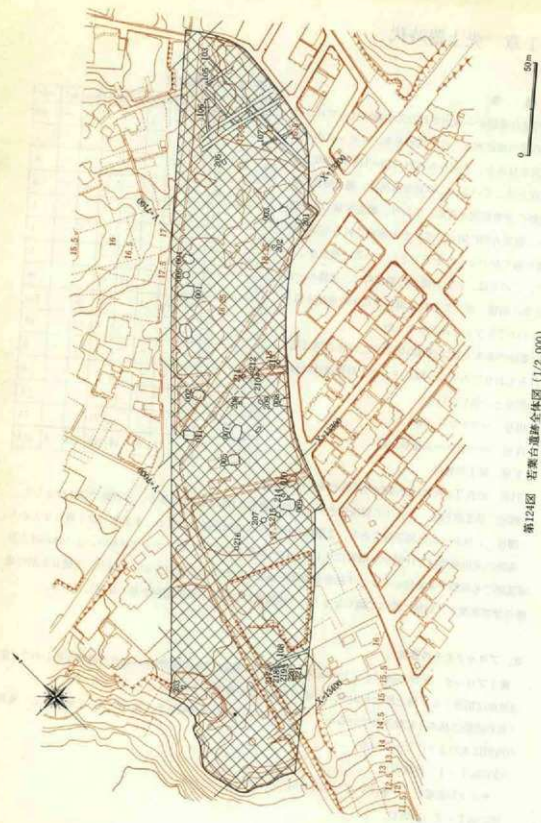
母岩No.1-2（玄武岩）

ナイフ形石器 1

表 23 石器集計表

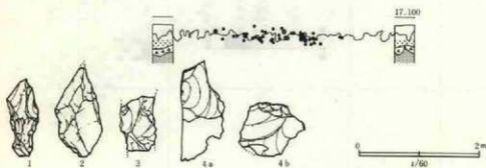
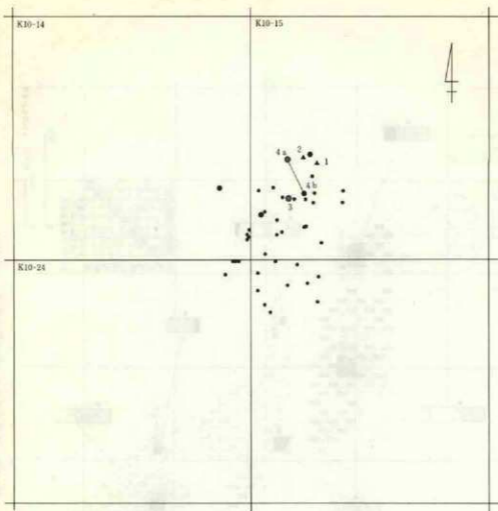
分類	No1	No2	No3	No4	No5	No6	No7	小計
ナイフ形石器	2	-	5	-	9	14	-	30
尖頭器	-	-	-	-	1	-	-	1
角錐状器	-	-	-	-	-	-	-	0
石錘	-	-	-	-	-	-	-	0
削器	-	-	2	-	5	-	-	7
彫器	-	-	-	-	-	1	-	1
楔形石器	-	-	-	-	-	-	-	0
剥片	4	-	14	18	14	7	2	59
削片	38	11	33	-	23	26	-	131
石核	2	-	2	-	4	2	-	10
石斧	-	-	-	-	-	-	-	0
礫器	-	-	-	-	-	-	-	0
敲き石	-	-	1	-	-	-	-	1
礫	-	-	-	-	73	-	-	73
小計	46	11	57	18	129	50	2	313



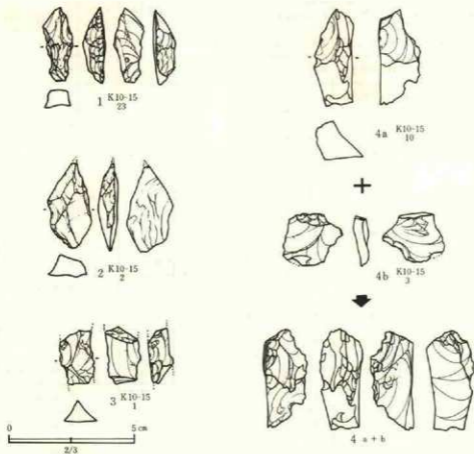


第124圖 若葉台道站全体圖 (1/2,000)





第126図 第1ブロック遺物出土状況



第127図 第1ブロック石器

母岩No 1-3 (頁岩)

石核 1 剥片 1 削片 1

このように、黒曜石に偏った母岩分布が見られ、黒曜石を用いた石器製作と、頁岩による若干の剥片剥離を背景として成立したブロックと考えられる。

主要な石器を第127図に掲げた。1はナイフ形石器。素材の打面側を基部において、一見縦長剥片素材を思わせるが、素材の変形度が大きく、本来の形態は分らない。ブランティングは両側縁にあり、基部は未加工である。短かい刃部と平坦な基部から切出型に近い印象を受ける。黒曜石製で、本ブロック内で製作されたにちがいない。2はやはりナイフ形石器。横に長い素材を用い、対辺にブランティングを加える変形を呈する。安山岩あるいは玄武岩製。3は石核としたが、ナイフ形石器、あるいは角錐状石器の破片の可能性もある。

剥片と石核の接合例を4に示した。厚味のある頁岩の剥片を用い、腹面から1枚の剥片が落とされている。作出された剥片は小型であり、実用向きとも思われぬ点があり、あるいは何か石器を目的とした剥離であるのかもしれない。

表 24 第 1 ブロック 石器属性表

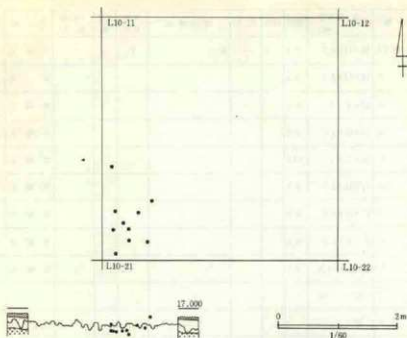
No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No.	打面	背面構成	本端 形状	使用 痕	折れ 部位	石 材	母岩No.
1	K10-14	1 削 片	17×23×4.6	1.3		1-0	L-1→H-2	F	-		黒曜石	1-1
2		2 削 片	11×8×1.2	0.1							黒曜石	1-1
3		3 削 片	15×9×5.8	0.3							黒曜石	1-1
4		4 削 片	5×4×0.6	<0.1							黒曜石	1-1
5		5 削 片	14×6×3.3	0.2							黒曜石	1-1
6		6 削 片	10×8×1.7	0.1							黒曜石	1-1
7	K10-15	1 石 板	14×22×9.6	0.2							黒曜石	1-1
8		2 ナイフ形石器	34×18×8.2	4.4	-2	-	L-2→R-2	-	-		玄武岩	1-2
9		3 削 片	24×20×4.6	0.2	-4b	1-0	H-5	H	-		頁 岩	1-3
10		4 削 片	9×6×2.4	0.2							黒曜石	1-1
11		5 削 片	16×18×4.1	0.8		1-0	R-1→H-5	H			頁 岩	1-3
12		6 削 片	11×3×0.7	<0.1							黒曜石	1-1
13		6 削 片	10×9×1.5	0.1							黒曜石	1-1
14		7 削 片	19×12×2.4	0.3							黒曜石	1-1
15		8 削 片	10×11×4.4	0.4							黒曜石	1-1
16		9 削 片	9×7×1.7	0.1							黒曜石	1-1
17		10 石 板	17×37×15.8	7.8	-4a						頁 岩	1-3
18		11 削 片	19×14×3.8	0.7							黒曜石	1-1
19		12 削 片	12×7×2.2	0.1							黒曜石	1-1
20		13 削 片	7×12×1.9	0.1							黒曜石	1-1
21		14 削 片	17×16×2.2	0.4							黒曜石	1-1
22		15 削 片	12×2×1.7	0.1							黒曜石	1-1
23		16 削 片	8×13×2	0.2							黒曜石	1-1
24		17 削 片	10×7×2.2	0.1							黒曜石	1-1
25		18 削 片	21×15×5.6	1.3		1-0	2-1→V R-1	O		v-M	黒曜石	1-1
26		19 削 片	8×10×2.1	0.2							黒曜石	1-1
27		20 削 片	10×8×2.3	0.1							黒曜石	1-1
28		21 削 片	12×8×2.9	0.2							黒曜石	1-1
29		22 削 片	5×4×0.3	<0.1							黒曜石	1-1

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	D%	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
30	23	ナイフ形石器	29×12×8.5	2.4	-1	-	B-1	F	-		黒曜石	1-1
31	24	削片	18×12×2.7	0.4							頁 岩	1-3
32	25	削片	12×8×4	0.2							黒曜石	1-1
33	K10-24 1	削片	10×10×3.2	0.3							黒曜石	1-1
34	2	削片	5×7×1	<0.1							黒曜石	1-1
35	2	削片	11×11×2.5	0.1							黒曜石	1-1
36	3	削片	12×12×2.6	0.3							黒曜石	1-1
37	K10-25 1	削片	9×5×1.7	0.2							黒曜石	1-1
38	2	削片	9×5.8×1.3	0.1							黒曜石	1-1
39	3	削片	紛 失									
40	4	削片	紛 失									
41	5	削片	紛 失									
42	6	削片	紛 失									
43	7	削片	5×6.7×1.1	<0.1							黒曜石	1-1
44	8	削片	紛 失									
45	9	削片	紛 失									
46	10	削片	紛 失									

第2ブロック 第1ブロックの東方約14m、L10-11区に位置する。産出層準は第1ブロックと同一であり、IV層下部と推定される。資料総数11点で、玄武岩の削片が1点ある他は、全て同一母岩の黒曜石削片によって占められている。第1ブロックとの関連が問題となるが、母岩対比による判定は難しい。ブロックの基本的性格は、石器製作に関係することが予測され、第1ブロックと近いものと言えるだろう。

表 25 第2ブロック 石器属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	D%	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	L10-00 3	削片	15×8×4.3	0.5							玄 武 岩	2-1
2	L10-11 2	削片	16×10×2.2	0.3							黒曜石	2-2
3	3	削片	21×13×3.2	0.6							黒曜石	2-2
4	4	削片	12×12×5.5	0.5							黒曜石	2-2
5	5	削片	5×7×1	<0.1							黒曜石	2-2
6	6	削片	12×12×3.9	0.5							黒曜石	2-2



第128図 第2ブロック遺物出土状況

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	本端 形状	使用 数	折れ面 部位	石 材	母岩No
7	7	削片	9×5×3	0.1							黒曜石	2-2
8	8	削片	17×14×4	1.1							黒曜石	2-2
9	9	削片	22×9×9.7	1.0							黒曜石	2-2
10	10	削片	9×8×1	0.1							黒曜石	2-2
11	11	削片	8×7×1.9	0.1							黒曜石	2-2

第3ブロック L12-71・72・81・82の4グリッドにまたがって検出された。ブロックは4.5m×2.9mの規模を有するが、ブロックから2.6m離れて敲き石が単独で出土している。遺物産出層準はIV層下部からV層にかけてと見られるが、一応V<sub>1</sub>としておく。第1ブロック、第2ブロックより若干だが下層に位置しよう。

石器総数は57点で、本遺跡としては多い部類に入る。組成は表24に示したとおりだが、5(6)点のナイフ形石器を含む。母岩毎に再整理しておく。

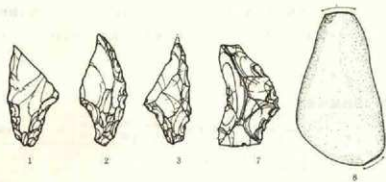
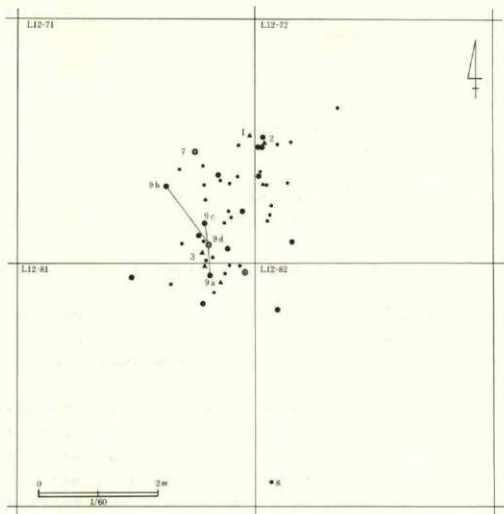
母岩Na3-1(頁岩) ナイフ形石器 1

母岩Na3-2(頁岩) ナイフ形石器 2 削器 2 剥片 5 削片 6 石核 1

母岩Na3-3(頁岩) 削片 1

母岩Na3-4(頁岩) ナイフ形石器 1 剥片 8 削片 19 石核 1

母岩Na3-5(玉髓) 削片 3



第129図 第3ブロック遺物出土状況



- 母岩No 3-6 (頁岩) 剥片 1  
 母岩No 3-7 (頁岩) ナイフ形石器 1  
 母岩No 3-8 (頁岩) 削片 1  
 母岩No 3-9 (頁岩) 削片 1  
 母岩No 3-10 (石英斑岩) 敲き石 1

以上の母岩の内容から、母岩の用いられ方に2つの類型が設定される。

第1類 石核・剥片・削片・製品の全てをもつもので、母岩No 3-2と同3-4がこれに相当する。ブロック内の一連の工作過程を示す。

第2類 これには2種があるが、剥片剥離から製品加工に至る過程の一部分しかないものである。

第1種 微量の剥片や削片からなるもので、母岩No 3-3、3-5、3-6、3-8、3-9が該当している。

第2種 別地点での第1類過程の結果が搬入されたもので、母岩No 3-1、3-4、3-7、3-10が該当する。

主要な石器を第130図に示した。1-3はナイフ形石器の完全なもの、4は破片で、製作途中で破損したものと見られる。5、6は判然としないが、やはりナイフ形石器の破片若しくは削器かもしれない。7は削器であるが、もともとは石核と考えられる。8は敲き石、9に接合資料を示した。石核に剥片2点と削器1点が接合する。

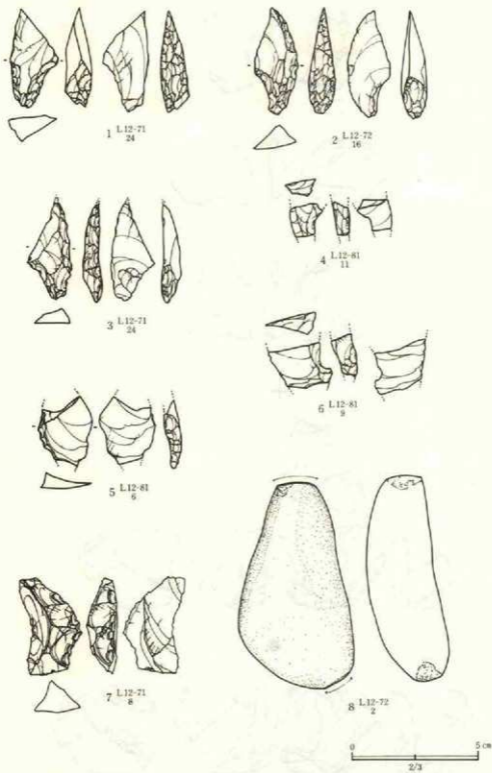
ナイフ形石器のうち、形の完全なものを見ると、1・2が横長剥片を、3がおそらく短形の縦長とも、横長ともつかない剥片を素材に選んでいるが、その形態は3例共にたいへん良く似ている。プランティンクは2個縁に加えられているが、基部バルブ側に内彎する、そして対応する縁辺は外彎する形状を有し、*Pointe à cran* に近い形態を示している。神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡の層位的出土例を見ると、この形態のナイフ形石器は、第VIII、第IX文化層などB<sub>2</sub>L中部に認められる(柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 昭和58年)。

石核は、剥片腹面を打面とし、剥片長軸に沿うて横長剥片を作成するもの(7)と、打面と作業面を90°を一単位として入れかえるもの(8)の両者がある。後者から得られる剥片は、ややすぼまりの矩形を呈するものが一般的である。母岩類型第1類の存在から、後者の剥片剥離過程は、ナイフ形石器の内在的契機とも理解し得るものである。

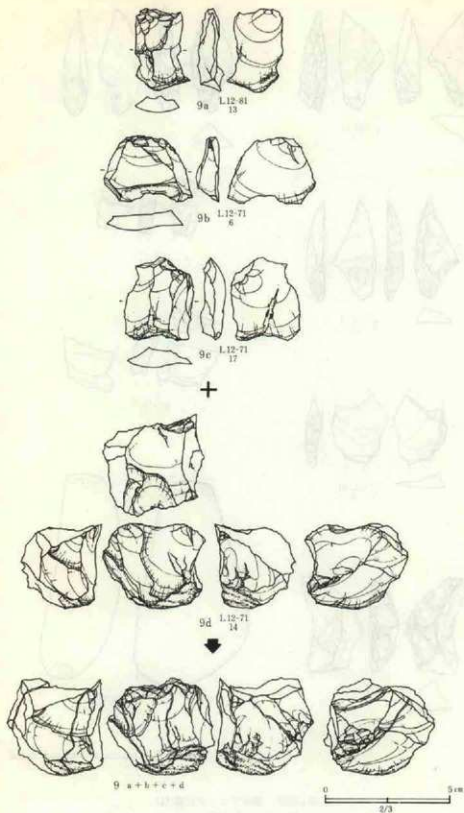
(注) 脱稿後、使用された石材について再検討する機会を得た。その結果上で頁岩としたものが、実は細粒凝灰岩であることが判明したので訂正しておきたい。なお、本石材は東丹沢に多産し、相模野台地との密接な関連性が推測されよう。

表 26 第3ブロック 石器属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	200No	打面	背面構成	本端 形状	使用 痕	剥片面 部位	石 材	母岩No
1	L12-71 2	ナイフ形石器	4×29×9.6	5.6	-1	-	H-1	-	-		頁 岩	3-1
2		削 片	9×13×2.6	0.3							頁 岩	3-2



第130図 第3ブロック石器(1)

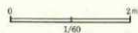
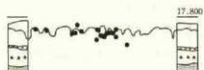
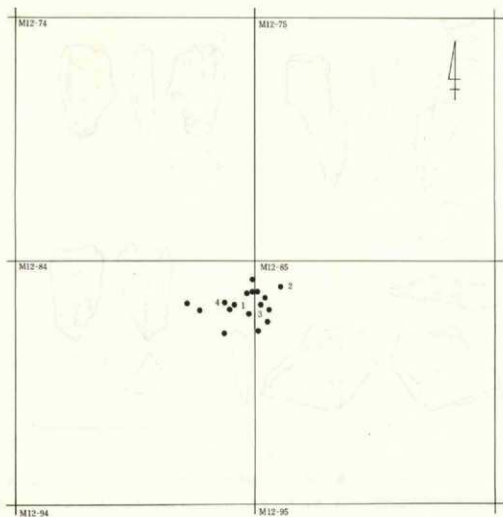


第131図 第3ブロック石器 (2)

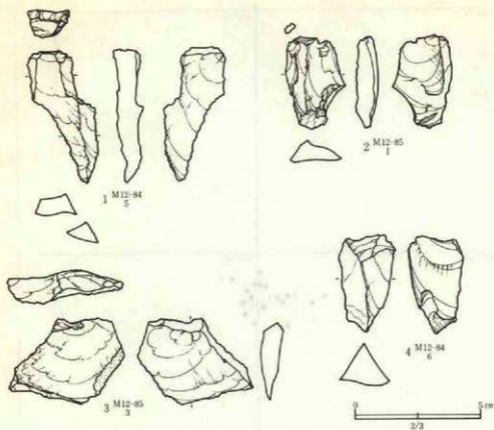
No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(D)	図No	打面	背面構成	末端 彫刻	使用 数	折込面 部位	石 材	母岩No
3	4	削片	6×14×3.9	1.2							頁 岩	3-3
4	5	削片	17×23×1	1.0		1-0	R-1→L-1→ H-1	H	-		頁 岩	3-4
5	6	削器	31×32×6.9	7.6	-9b	1-0	V <sup>a</sup> -2→H-5→ B-1	-	+		頁 岩	3-2
6	7	削片	23×17×4	1.6		1-0	C→H-3→R-1	H	-		頁 岩	3-4
7	8	石 核	29×24×12.7	7.5	-7						頁 岩	3-4
8	9	削片	11.5×5×3.7	0.3							頁 岩	3-4
9	10	削片	23×28×6.7	3.9							玉 髓	3-5
10	11	削片	22×13×5	1.0							頁 岩	3-4
11	12	削片	23×33×7	4.9							頁 岩	3-4
12	12	削片	8×11×1.6	0.1							頁 岩	3-4
13	13	削片	11×13×3.8	0.7							頁 岩	3-2
14	14	石 核	36×44×30	43.5	-9d						頁 岩	3-2
15	15	削片	5×14×12.5	5.7		1-0	B-4→H-3	F			頁 岩	3-6
16	16	削片	12×14×2	0.4							頁 岩	3-2
17	17	削片	33×27×8	7.7	-9c	1-0	C→R-2→H-3	O			頁 岩	3-2
18	18	削片	38×29×1.8	6.5		2-1	C→B-1→H-1	F			頁 岩	3-2
19	19	削片	15×18×7.3	1.9							玉 髓	3-5
20	20	削片	9×8×3	0.2							玉 髓	3-5
21	21	削片	8×5×1.6	<0.1							頁 岩	3-4
22	22	削片	11×19×6.6	0.9							玉 髓	3-5
23	23	削片	4×7×1	<0.1							頁 岩	3-4
24	24	打石核	38×17×7.2	3.2	-3		H-2				頁 岩	3-7
25	25	削片	13×12×2.2	0.3							頁 岩	3-8
26	26	削片	8×12×3	0.3							頁 岩	3-4
27	27	削片	7×12×1.4	0.1							頁 岩	3-4
28	L12-72	2削片	11×28×4.8	0.6							頁 岩	3-4
29	3	削片	17×12×3.3	0.7							頁 岩	3-4
30	4	削片	14×9×2.4	0.3							頁 岩	3-4
31	5	削片	11×18×2.3	0.3							頁 岩	3-4

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	DNNo.	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No.	
32	6	削片	12×7×2.3	0.2							頁岩	3-4	
33	6	削片	5×7×1	<0.1							頁岩	3-9	
34	7	削片	25×30×7.5	2.5		1-0	H-1+L-1→ R-1→H-1	H	-		頁岩	3-4	
35	8	削片	7×11×2	0.2							頁岩	3-7	
36	9	削片	16×15×6.3	0.9							頁岩	3-4	
37	10	削片	17×13×3.2	0.8		1-0	H-2	F	-		頁岩	3-4	
38	11	削片	20×26×5.2	1.4		1-0	L-1+R-1→ H-3	F	-		頁岩	3-4	
39	13	削片	9×8×1.2	0.1							頁岩	3-4	
40	14	削片	23×24×6.3	2.7		1-0	L-1→H-2	F	-		頁岩	3-4	
41	15	削片	27×24×2.7	0.5		1-0	H-2	H	-		頁岩	3-4	
42	16	ナイフ形石器	41×17×11	4.9	-2	-	H-1	-	-		頁岩	3-4	
43	17	削片	7×5×2	0.1							頁岩	3-4	
44	18	削片	13×7×2.3	0.2							頁岩	3-4	
45	L12-81	3	削片	34×14×13.5	2.1		-	L-1→R-5	-	-	t-H	頁岩	3-4
46	4	削片	9×6×7	<0.1		1-0	R-4+L-2+ H-4	O	-		頁岩	3-2	
47	5	削片	26×23×6	2.7							頁岩	3-2	
48	6	削片	8×18×3.7	0.6	-5	-	H-1	F	+	t-H+ t-B	頁岩	3-2	
49	7	削片	5×6×0.8	<0.1							頁岩	3-2	
50	8	削片	20×26×7.7	2.4							頁岩	3-2	
51	9	ナイフ形石器	7×5×1.2	1	-6	-	H-1	-	-	t-H+ t-B	頁岩	3-2	
52	10	削片	13×12×5.4	0.9							頁岩	3-2	
53	11	ナイフ形石器	11×8×1.7	2	-4	-	H-2	-	-	t-H+ t-B	頁岩	3-2	
54	12	削片	11×0.9×0.3	0.3							頁岩	3-4	
55	13	削片	31×20×7	4.9	-9a						頁岩	3-2	
56	L12-82	2	ハンマー	80×46×27.6	138.8	-8					石英英岩	3-10	
57	3	削片	14×14×3.6	0.6		-	H-2+不明-1	F	+	t-B	頁岩	3-2	

第4ブロック M12-84・85グリッドに位置している。1.61m×0.87mという狭い範囲から18点の資料が得られている。産出層単は、近接する土層断面図に遺物を投影して決定したいのだが、断面図に見えるV層が多少薄すぎるような気がする。何らかの、土壌生成過程における要因によるのかもかもしれないが、本区のV層は発達が悪い。一応、IV層からの出土ということにしておきたい。



第132図 第4ブロック遺物出土状況



第133図 第4ブロック石器

さて、本ブロックの構成母岩を調べてみると、母岩No 4-2（玄武岩）が15点を占め、その他には、母岩No 4-1（細粒砂岩）、同 4-3（玄武岩）がそれぞれ2点、1点見られるのみで、ほとんど単一母岩と言っても良い程である。また、資料の全てが剥片であることも大きな特徴であり、母岩No 4-2の剥片剥離がブロック成立の要因であることは見やすい。

第133図に剥片の一部を示した。全体に形の不ぞろいなものが多く、良好な剥片は石核と共に他所へ搬出されたのだから、そのようなものが打ち捨てられているのは道理に叶ったことなのだろう。剥片3を観察すると、打面及び側面に2枚、剥離方向を異にする剥離面が切り合っている。このことから、この母岩によって作出された石核の状況は、第3ブロックの9に示したような、打面と作業面との90°を1単位とする入れかえを特徴とするものであったにちがいない。

（注）細粒砂岩は砂質の頁岩とした方が良くかもしれない。

表 27 第4ブロック 石器属性表

No	産物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	DSNo	打面	背面構成	末端 形状	使用 数	剥れ面 部位	石 材	母岩No
1	M12-84 1	剥 片	21×32×10	6.0		1-0	不明	F	-	v-M	細粒砂岩	4-1
2	2	剥 片	21×26×4.6	2.8		C	H-4	O	+		玄武岩	4-2
3	3	剥 片	26×17×7	1.0		1-0	H-3	F	-		玄武岩	4-2

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(D)	容積	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
4	4	剥片	42×32×16	13.0		-	H-2	F	-	t-M	玄武岩	4-2
5	5	剥片	53×25×9.7	7.1	-1	7-4	H-4	F	-		玄武岩	4-2
6	6	剥片	25×27×4.4	2.1	-4	1-0	不明-1→ B-2→R-2	F	-		玄武岩	4-2
7	7	剥片	21×30×5.2	1.9		P	不明-1→H-1	F	-		玄武岩	4-2
8	8	剥片	22×20×13	5.0		1-0	R-3→H-1	O	-		玄武岩	4-2
9	9	剥片	17×20×4.3	1.3		1-0	不明-1→ L-1→H-2	F	-		玄武岩	4-2
10	10	剥片	29×46×9.5	10.6		1-0	C→H-1	O	-		玄武岩	4-2
11	M12-85 1	剥片	33×28×5	4.7		1-0	C→L-1→ H-1→R-1	F	-		玄武岩	4-2
12	2	剥片	31×28×5.2	4.4		P	C→H-1	F	-		玄武岩	4-2
13	3	剥片	36×47×9.5	14.5	-3	2-0	C→H-1	F	-		玄武岩	4-2
14	4	剥片	43×22×11	9.7		P	R-1	-	-	t-M	玄武岩	4-2
15	5	剥片	13×20×5.4	1.8		1-0	H-2	R	-		玄武岩	4-2
16	7	剥片	49×18×8.8	5.6		1-0	H-1	O	-		玄武岩	4-2
17	8	剥片	15×14×3.4	6.0		1-0	不明	F	-		細粒砂岩	4-1
18	M12-86 1	剥片	35×22×7	5.7	-2	1-0	R-2→L-1	F	-		玄武岩	4-3

第5ブロック N13-91区を中心に、N13-90、N12-01区にまたがり129点の遺物が検出された。これは、本遺跡のブロックとしては最大の規模を有し、出土遺物にも見るべきものが多い。ブロックは、N13-91区に集中するが、N12-01区にも礫片を中心とする散漫な集中が認められたが、両者間には接合関係があり、同一時期あるいは、近接時期に形成されたことは明らかである。N13-91区の集中範囲は3.13m×2.26m、N12-01区のそれは3.20m×2.58mとなっている。一方、遺物の垂直分布状況は、III層からVI層に及んでいるが、本ブロック周辺はローム層の層厚が薄く、本来の埴輪層準の決定には不安が残る。一応IV層下部、あるいはV層上部としておきたい。根拠に乏しいが、第1ブロックよりは深く、第3ブロックよりは浅くなるのではない。

出土資料の内訳を見ると、総数129点のうち73点(57%)を礫が占め、礫群としての性格が濃い。礫を除いた石器類の組成は、ナイフ形石器9点、尖頭器(樺石器)1点、削器5点と充実した組成を示し、他に石核5点、剥片14点、削片23点が含まれている。これらを母岩毎に整理してみる。

#### 黒曜石(8個体)

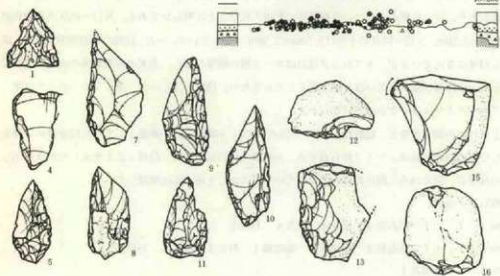
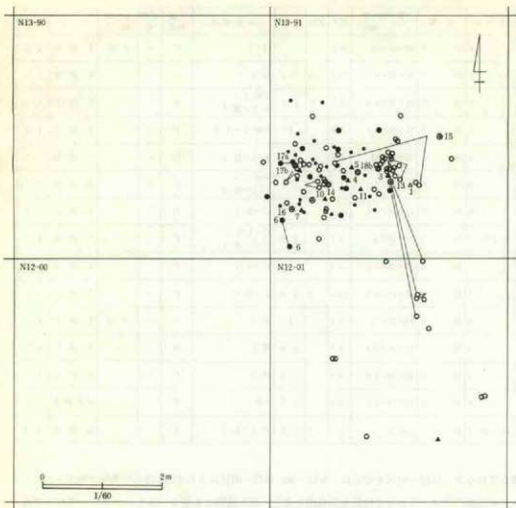
No.5-3 ナイフ形石器2 剥片4 削片6 石核1

No.5-7 ナイフ形石器2 端削器1 端削器1 剥片4 削片5 石核2

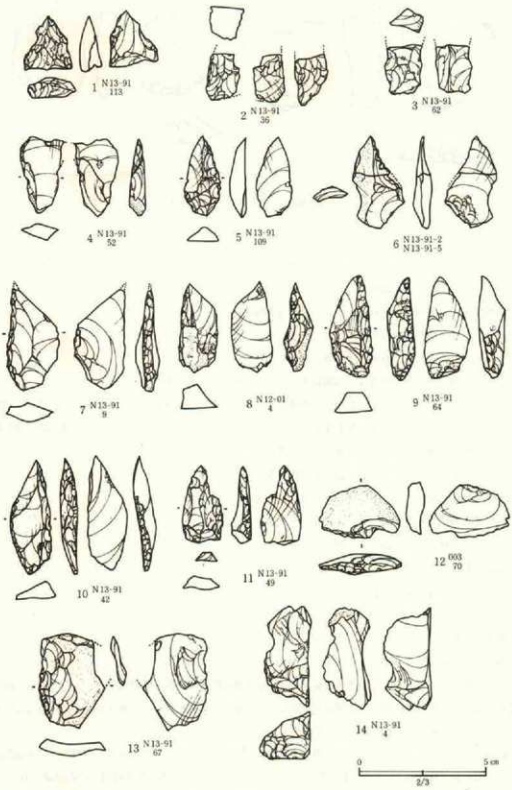
No.5-8 端削器1

No.5-9 ナイフ形石器1 石核1

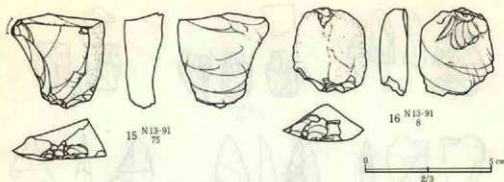




第134図 第5ブロック遺物出土状況



第135図 第5ブロック石器(1)



第136図 第5ブロック石器(2)

Na 5-15 削片 3

Na 5-16 ナイフ形石器 1 剥片 1 削片 3

Na 5-17 剥片 1 削片 1

Na 5-31 尖頭器(楯石器) 1 玄武岩(2個体)

Na 5-20 剥片 3 削片 1

Na 5-28 剥片 1 頁岩(1個体)

Na 5-14 ナイフ形石器 3 削削器 1 剥片 1 削片 1 石核 1

一般的な傾向として、石核を含む母岩の器種組成が多彩であり、黒曜石の2個体(Na 5-9、Na 5-31)のように剥片を含まず、製品を保有する場合もあるが、石核-剥片-製品という3位1体の例が著しい。

次に、礫種の礫種を見ると、9種20母岩が識別される。すなわち、

流紋岩6個体(Na 5-6、5-13、5-19、5-21、5-23、5-27)

砂岩4個体(Na 5-5、5-12、5-24、5-26)

安山岩3個体(Na 5-1、5-4、5-10)

ヒン岩2個体(Na 5-25、5-29)

流紋岩質凝灰岩1個体(Na 5-2)

石英斑岩1個体(Na 5-11)

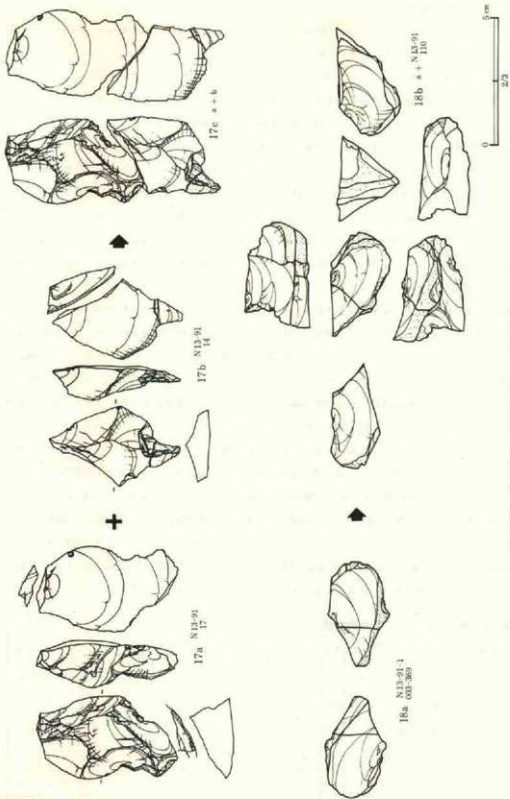
チャート1個体(Na 5-18)

粗面岩1個体(Na 5-22)

凝灰岩1個体(Na 5-30)

という構成を示している。この礫種の組合せは、北総地域IV属の礫種の礫組成を良く示している。礫の遺存状況、礫表の特徴に関しては詳細を割愛したが、全般に破砕の進行した礫片が多く、熱熱に起因する赤化、黒斑の認められるものが大半を占めている。

石器のうち、2次加工の明らかなのを、第135-137図に示した。1は尖頭器(楯石器)の先端部破片。黒曜石製(母岩Na 5-31)。2、3はナイフ形石器の破片だが、共に製作段階での破損品であろう。2が頁岩5-14、3が黒曜石5-7で、共に3位1体型の母岩であることは、ブロック内での石器製作工程の存在を暗示している。6は刃こぼれのある剥片(黒曜石5-7)。4、5、7-11はいずれもナイ



第137図 第5ブロッツク石器(3)——検査資料

フ形石器で、全形を窺知し得るものである。帰属母岩は、4=黒曜石5-3、5=黒曜石5-9、7=頁岩5-14、8=黒曜石5-3、9=黒曜石5-7、10=頁岩5-14、11=黒曜石5-16となっている。

ナイフ形石器の分類。形状の判明する例について、分類をしておく。

第1類 縦長剥片の両側縁にブランディングの認められるもので、左右の両側縁が平行になるもの(5、9、10)。5は腹面と背面との交差する角度が小さく、左右の側面からの剥離が背面中央で交わるなど、1と近以の2次加工が認められる。9は素材に対する変形度が大きく、打面を残置している。10は背縁の併走する整った素材の存在を予測させ、基部側にも未加工の縁辺が保存されている。

第2類 横に長い剥片の側縁にブランディングの認められるもの(7、11)。7は打面を残すと共に、基部に未加工の縁辺が保存されている。11は基部が欠損し、打面部を除去する加工がある。

第3類 剥片の側縁にブランディングが認められるが、刃部の水平となるもの(4)。

削器には、側削器(13=黒曜石5-7)、端削器(14=黒曜石5-8、15=頁岩5-14、16=黒曜石5-8)がある。12は本ブロックに接する003住居跡覆土内からの採集であるが、黒曜石5-7が素材と見られるから、側削器に含められよう。

最後に、第5ブロックの編年的位置に就き、簡単に触れておきたい。ナイフ形石器の形状を手がかりに、その類例を求めると、おそらく、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡第VII文化層を近似例として挙げ得るであろう。このことは、先に、第3ブロックが、同遺跡の第VIII、第IX文化層と対比し得ることを指摘したが、若葉台遺跡において確認された、第3ブロックと第5ブロックとの微妙なレヴェル差とも合致している。さらに、埼玉県嵐山遺跡(石器研究会編 昭和57年)には、本遺跡第1類が含まれ、柏ヶ谷長ヲサ遺跡と対比することから、国府型ナイフ形石器の細分をも示唆することになろう。

もうひとつ気になるのは、第1類のなかに、石刃の斜め整形かと思われるナイフ形石器006が含まれることである。この資料に関しては、埼玉県市場坂遺跡(滝沢 昭和39年)との関連性が問題である。市場坂は「石刃製ナイフ形石器の定型化と、横打剥片製石器の共存」(佐藤 昭和44、53年)によって特徴づけられるのだが、その後、「埼玉県市場坂遺跡の石器群は、相模野第三期と同第四期の石器群が混在している」(矢島・鈴木 昭和51年)と指摘を受け、この2分案が一般化している(寛井 昭和54年、栗島 昭和58年)。しかし、僅少とは言え、市場坂と同等の組成を示す一括遺物の存在は、出土状況に立脚せず、形式的に組成の整合性のみを強調する、矢島らの立場を危うくするものである。

表 28 第5ブロック 石器属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	DN%	打面	背面構成	未造 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	N12-01	2	礫	10×13×6.2	1.5						安山岩	不明
2		2	礫	46×39×25	42.5						安山岩	5-1
3		3	礫	44×31×20.5	16.2						流紋岩質 凝灰岩	5-2
4		4	ナイフ形石器	35×15×11	4.2	-8	-	C→L-1	F	-	黒曜石	5-3
5		5	礫	15×13×8	1.3						安山岩	5-4
6		5	礫	40×30×22.4	22.8						安山岩	5-4

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	団No	打痕	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
7	6	礫	36×20×14.6	11.9							砂 岩	5-5
8	7	礫	37×38×17	14.3							砂 岩	5-5
9	8	礫	34×25×14.6	17.2							砂 岩	5-5
10	10	礫	31×30×20.4	18.5							砂 岩	5-5
11	12	礫	35×17×10	4.2							流 紋 岩	5-6
12	12	礫	69×42×38.8	91.6							流 紋 岩	5-6
13	13	礫	31×23×9.2	11.2							砂 岩	5-5
14	14	礫	16×15×10	2.5							安 山 岩	5-4
15	N13-90 3	剥 片	25×16×10.4	2.7		2-0	Ve-1→H-2+C	H	-		黒 曜 石	5-7
16	N13-91 1	剥 片	31×31×14.3	13.6		1-1	C→H-2	F	-		黒 曜 石	5-7
17	1	剥 片	24×27×6.8	4.1		C	B-1	O			黒 曜 石	5-7
18	1	石 核	24×19×18	9.7							黒 曜 石	5-3
19	2	剥 片	21×17×2.7	1.1	-6	-	C→L-1	F	+	t-M	黒 曜 石	5-7
20	2	削 片	14×23×5.3	1.5							黒 曜 石	5-7
21	3	端 削 器	34.8×28×12.1	11.2	-16	1-0	C		+		黒 曜 石	5-8
22	4	石 核	40×22×14.4	9.6	-14						黒 曜 石	5-9
23	5	剥 片	23×20×6.3	2.4	-6	1-0	C→L-2	-	-	t-M	黒 曜 石	5-7
24	6	礫	26×11×7.6	2.6							安 山 岩	5-10
25	7	礫	49×41×26.9	58.2							石 英 斑 岩	5-11
26	9	礫	67×54×30.5	97.3							安 山 岩	5-4
27	10	削 片	10×20×4	0.6							黒 曜 石	5-7
28	11	削 片	7×12×3.8	0.1							黒 曜 石	5-7
29	12	礫	43×25×9.3	18.4							砂 岩	5-12
30	13	礫	27×17×10	4.2							流 紋 岩	5-13
31	14	剥 片	57×24×7.2	9.2	-15	-	H-1→B-1→ H-1	O	-	t-M	頁 岩	5-14
32	15	礫	14×12×7.5	1.3							流 紋 岩	5-13
33	16	削 片	8×5×1.5	0.1							黒 曜 石	5-15
34	17	石 核	57×30×17.4	2.5	-15a						頁 岩	5-14
35	18	礫	37×40×31.4	5.3							安 山 岩	5-4

№	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面標式	未施 形状	使用 痕	折れ部 部位	石 材	母岩No
36	19	ナイフ形石器	39.5×21×9	5.8	-7	3-1	H-3	F	-		頁 岩	5-14
37	20	鏃	48×37×12	13.6							流紋岩	5-13
38	21	鏃	33×20×5.1	3.8							砂 岩	5-12
39	22	削 片	11×16×3	0.4							黒曜石	5-7
40	23	削 片	12×15×26	0.4							黒曜石	5-16
41	24	削 片	14×8×4.2	0.3		-	H-1→V a-1	F		t-B	頁 岩	5-14
42	25	鏃	45×44×28	56.6							流紋岩	5-13
43	25	鏃	36×24×14	11.8							安山岩	5-4
44	26	鏃	20×14×9.8	2.7							砂 岩	5-12
45	27	削 片	21×22×12.2	3.6							黒曜石	5-16
46	28	削 片	7×8×1.5	0.1							黒曜石	5-17
47	29	鏃	29×24×17.1	13.5							チャート	5-18
48	30	削 片	16×9×3.9	0.3							黒曜石	5-15
49	31	削 片	19×17×7.7	1.8		-	C→L-2	-	-	t-H→ t-B	黒曜石	5-3
50	32	鏃	35×32×19	16.1							流紋岩	5-19
51	33	削 片	23×14×5.3	1.1		1-6	H-3	F	-		玄武岩	5-20
52	34	鏃	23×20×10.9	4.3							石英斑岩	5-11
53	35	鏃	76×60×33	121.8							流紋岩	5-16
54	37	削 片	8×12×14	0.1							黒曜石	5-3
55	38	削 片	20×16×4.2	0.6							黒曜石	5-3
56	39	削 片	16×10×4.7	0.4							黒曜石	5-3
57	40	鏃	16×13×7.8	1.5							流紋岩	不明
58	41	鏃	17×16×11.7	218							流紋岩	5-19
59	42	ナイフ形石器	45×15×6.7	2.2	-10	-	H-3	F	-		頁 岩	5-14
60	43	鏃	58×43×35	96.0							流紋岩	5-21
61	44	鏃	49×37×15.1	75.3							流紋岩	5-21
62	45	鏃	50×35×20.3								流紋岩	5-21
63	46	削 片	8×10×1.3	<0.1							黒曜石	5-7
64	46	鏃	18×16×2.5	7.0							流紋岩	5-21

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ戻 部位	石 材	母岩No
65	47	剥片	17×37×8	3.9		1-0	C→H-1	O	-		黒曜石	5-3
66	49	ナイフ形石器	31×16.4×8.7	2.7	-11	-	R-2→H-1	F	-		黒曜石	5-16
67	50	礫	40×23×20.3	15.9							粗面岩	5-22
68	51	剥片	15×14×4.7	1.3		2-0	C→R-5→H-1	F	+		黒曜石	5-3
69	52	ナイフ形石器	30×17×6.1	2.4	-4	1-0	H-1	F	-		黒曜石	5-3
70	53	剥片	40×30×12.9	14.8		1-0	C→H-2	O	-		玄武岩	5-20
71	54	削片	17×12×2.8	0.5							玄武岩	5-20
72	56	削片	11×16×2.3	0.3							黒曜石	5-16
73	57	礫	55×50×29.8	94.6							流紋岩	5-23
74	58	剥片	25×29×8.4	4.7		3-0	L-1→H-1	H	-		黒曜石	5-16
75	59	礫	71×42×32.8	100.3							砂岩	5-24
76	60	礫	34×29×8.6	6.8							砂岩	5-12
77	60	礫	54×42×48	67.5							砂岩	5-12
78	61	礫	82×53×31	152.1							トシ岩	5-25
79	62	石 槌	20×14×9.5	1.5							黒曜石	5-7
80	63	礫	44×40×19.2	39.7							砂岩	5-26
81	64	ナイフ形石器	40×17×9.2	5.1	-9	1-0	H-4	F	+		黒曜石	5-7
82	65	礫	37×35×28	4.1							砂岩	5-26
83	67	削片	37×26×7.2	6.5	-13	-	C	-	-		黒曜石	5-7
84	68	剥片	32×18×6.4	3.5		P	不明	F	-		玄武岩	5-20
85	69	礫	31×33×34.1	51.6							石英斑岩	5-11
86	70	礫	82×51×49.6	210.0							流紋岩	5-27
87	72	礫	13×7×4.4	0.3							流紋岩	5-21
88	74	削片	8×13×5.4	3.0							黒曜石	5-3
89	75	削片	50×33×22.5	49.8	-15	-	C→L-3	F	-	t-M	頁 岩	5-14
90	77	礫	10×11×23	2.0							黒曜石	5-17
91	78	礫	15×13×11.5	3.3							石英斑岩	5-11
92	79	礫	79×59×27.4	130.0							流紋岩	5-19
93	80	礫	49×27×22.3	30.4							砂岩	5-28



No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(kg)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
94	81	礎	41×37×13.8	18.3							流紋岩	不明
95	82	礎	42×28×25.7	25.2							石英斑岩	5-11
96	83	削片	26×32×9.7	9.3		1-0	不明	H	-		玄武岩	5-28
97	84	削片	10×10×3.6	2.0							黒曜石	5-3
98	85	削片	6×6×1.9	<0.1							頁岩	5-14
99	86	削片	12×16×4.6	0.5							黒曜石	5-3
100	87	削片	5×7×7	<0.1							黒曜石	5-7
101	88	削片	30×13×3.8	1.5		1-0	C→R-1→ B-1→H-1	F	-		黒曜石	5-3
102	89	削片	5×9×0.7	<0.1							黒曜石	5-7
103	90	礎	16×17×4.3	1.1							流紋岩	5-21
104	91	削片	8×10×2	0.1							黒曜石	5-15
105	93	礎	47×45×28.4	54.9							流紋岩	5-21
106	94	礎	16×18×8.3	5.0							ヒン岩	5-29
107	95	礎	32×25×19.2	17.4							ヒン岩	5-29
108	97	礎	57×35×18.6	35.1							ヒン岩	5-25
109	98	礎	32×19×20	11.1							流紋岩	5-6
110	99	礎	33×24×19.5	17.9							石英斑岩	5-11
111	100	礎	28×24×12.8	12.4							ヒン岩	5-29
112	101	礎	51×37×25.3	45.6							流紋岩	5-19
113	102	礎	40×38×34.4	50.2							石英斑岩	5-11
114	103	礎	37×23×6.8	5.4							凝灰岩	5-30
115	103	礎	64×60×29.7	153.4							凝灰岩	5-30
116	104	礎	59×36×13	25.2							ヒン岩	5-25
117	105	削片	13×19×3.1	0.6							黒曜石	5-3
118	106	礎	29×25×16.7	8.3							砂岩	不明
119	108	礎	20×22×6.6	1.4							砂岩	5-12
120	109	ナイフ形石器	31×14×6.4	2.1	-5	-	C→H-1	F	-		黒曜石	5-9
121	110	石 槌	24×37×17.7	10.1							黒曜石	5-7
122	111	礎	11×13×6.3	1.9							石英斑岩	5-11

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(D)	図No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
IV	112	鏃	17×26×15.5	14.7							砂 岩	5-26
IV	113	尖頭部礫石器	19×22×8	2.6	-1	—	不明	—	—	1-M	黒 曜 石	5-31
IV	114	鏃	31×25×17.8	1.8							流 紋 岩	5-19
IV	115	鏃	37×39×29.3	26.6							石 英 斑 岩	5-11
IV	116	鏃	14×21×29.3	4.4							流 紋 岩	5-21
IV	117	鏃	14×6×4	2.0							流 紋 岩	5-21

第6ブロック L12-09・19、M12-00・10区から検出された。ブロック全体の広がりは5.78m×3.49mに及んでいるが、細かく見ると、L12-09区に1.80m×1.58mの範囲で遺物の密集する部分があり、その部分の南側M12-10ポイント周辺の、散漫な分布域と区分される。前者を6 a、後者を6 bとしよう。両者は母岩を共有し、かつ産出層も同等とみなされるから、同時期に形成されたと考えてさしつかえない。垂直的な遺物分布は、III層最下部からVI層に及んでいるが、IV層上部～V層下部に集中し、AT降下直後の所産と認められる。従って、

第6ブロック：AT降下直後

↓

第3ブロック：V層

↓

第5ブロック：IV下層

という層位的な知見が得られ、各ブロックに含まれるナイフ形石器の変遷を跡づけることが可能である。

遺物の総数は50点であるが、14点のナイフ形石器が含まれている。他には、折断面から割打を加えた彫器と見られるもの(第139図17)、使用痕ある剥片(同図16)がある程度であり、残りのほとんどが微細な削片により占められている。削片は所謂ブランディングチップと見られるが、特に6 aブロックに集中し、逆に、6 bブロックはナイフ形石器が主体となっているから、6 a、6 b間には場としての機能差があったものと推定される。この場合、M12-10ポイント周辺の、3.71m×2.13mの範囲が居住区であり、6 aブロックは居住区に北接した屋外工房址と判定されよう。

次に、この屋外工房での石器工作の実体を復元するために、石器組成と母岩組成とを検討してみたい。結果は以下のとおりである。

黒曜石(4個体)

Na 6-1 ナイフ形石器 8 彫器 1 剥片 4 削片 26 石核 1

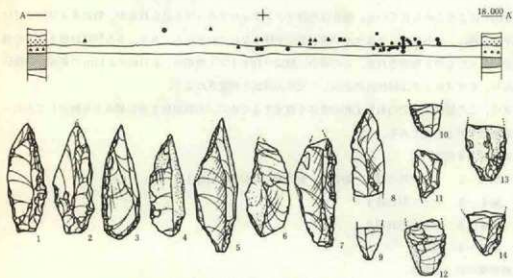
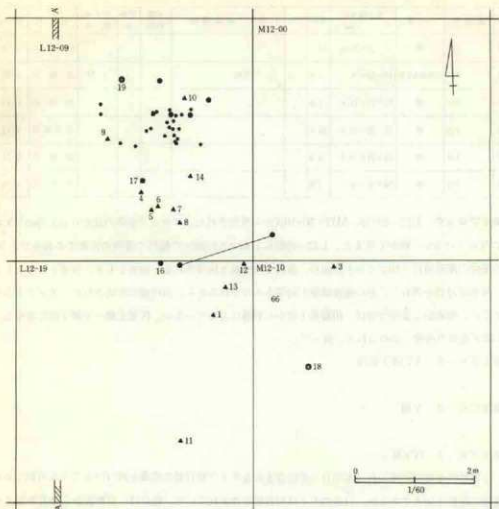
Na 6-2 ナイフ形石器 4

Na 6-3 ナイフ形石器 2

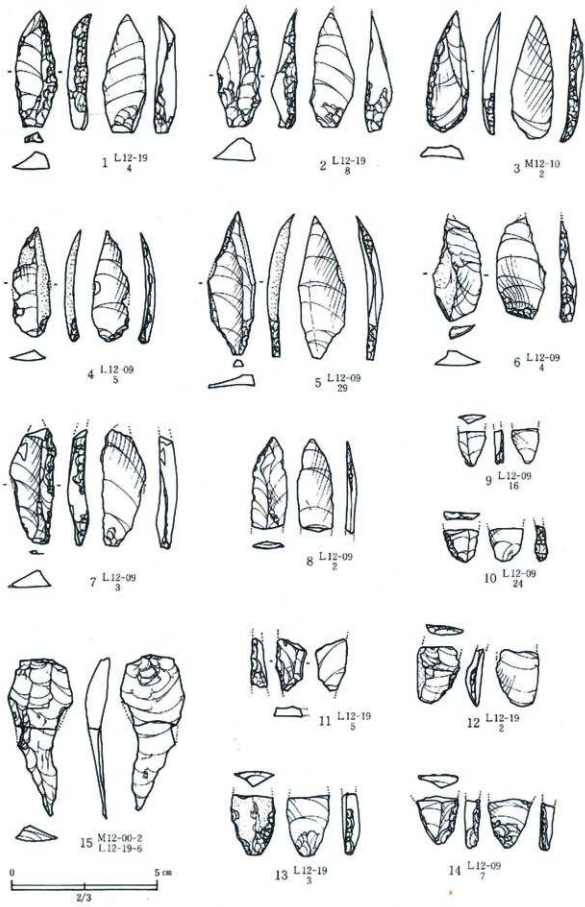
Na 6-4 剥片 2

細粒凝灰岩(1個体)

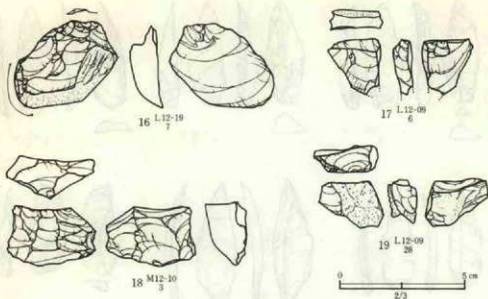
Na 6-5 石核 1



第138図 第6ブロック遺物出土状況



第139図 第6ブロック石器 (1)



第140図 第6ブロック石器(2)

すなわち、工房では黒曜石6-1単独母岩によるナイフ形石器の製作が実施されていたに違いない。しかし、本母岩には剥片が少なく、石核としたものも、破砕片であり、ブロック内での剥片の組織的生産過程を実証できない。むしろ、別地点での剥片剥離による石刃の搬入を想定した方が良好だろう。その他の母岩に帰属する資料も別地点での製作に関するものであることは明らかであろう。

各母岩毎に主要石器を観察しよう(第138図、第139図)。

母岩No 6-1 この母岩によるナイフ形石器は3、5、6、8-12の8点である。形態の判明する資料から分類すると、

第1類 2側縁加工の石刃ナイフ(3)

第2類 1側縁加工の石刃ナイフ(6、7)

第3類 基部加工の石刃ナイフ(5)

とそう3者の別が設けられる。腹面剥離は第2類の一例に看取される(6)、16、17、19の3例は本母岩に属するが、標表を留め、石核調整段階の剥片が素材なのであろう。

母岩No 6-2 ナイフ形石器4点から構成されている。4、7、13、14がこれに該当しているが、4、13は第3類、7は第2類に帰属する。13の背面は表現方法がまずく、原標面であるかの如くだが、背縁右側の面は、主要剥離面とは逆方向からの剥離によるものである。

母岩No 6-3 1、2が本母岩の全てである。共に打面を残し、両側縁に加工のある第1類に属する。

母岩No 6-4 剥片2点から構成されているが、両者は接合し、完形の石刃になった08。先に、〈素材としての石刃〉が移動することを考えたが、これもナイフ形石器の素材であるのかもしれない。

母岩No 6-5 石核1点のみであり08、黒曜石以外の唯一の石器。石核としては最終局面の資料であり、これからだけでは本質的な理解は困難である。下端に細かい刃こぼれが認められる。

第6ブロックの石器群に関しては、その基盤とも言える剥片剥離過程の内容に不明な部分が多いが、

そこに含まれるナイフ形石器の様相から、八千代市権現後遺跡Ⅲ期（橋本 昭和59年）と比較される。この系統に関しては、必ずしも明らかとは言えないが、Ⅶ層上部の石刃石器群との関連が論議されよう。本段階の石刃作出技法は、基本的に砂川型刃器技法であると理解しているが（織笠 昭和53年）、八千代市北海道遺跡Ⅰ期類型Ⅰa（橋本 昭和60年）との系統的関連性を指摘することは困難であろう。一方、この段階には別種の剥片生産体系を基盤とするナイフ形石器文化が知られている（鈴木 昭和55年）ので、両者の位置づけに苦慮する。

鈴木次郎は、寺尾遺跡第Ⅵ文化層と、鈴木遺跡Ⅵ層、打越遺跡JA地点Ⅶ層との顕著な差異に就いて触れ、「このような違いは、単なる遺跡単位の差なのか、あるいは、相模野台地と武蔵野台地の地域性としてとらえるものなのか問題となろう」（鈴木 昭和55年273頁）と、結論を留保している。その後、東京都葛留多遺跡Ⅶ層から、寺尾遺跡第Ⅵ文化層との密接な関連性をうかがわせる資料が検出され（高杉 昭和57年）、ようやくⅦ層段階における異系統並存の可能性が示唆されるに至った。国府型近似の横打剥片製ナイフ形石器を含む東京都西之台遺跡B地点Ⅶ層（小田編 昭和55年）の位置付けなど、この段階には種々の未解決の問題が残されている。

ところで、若葉台遺跡第6ブロック以後、第3ブロック以前の様相はどうであったか。この問題に答え得る層位的出土例はほとんど知られていない。相模野ではB<sub>2</sub>L下底がこの段階に相当するが、地蔵坂遺跡（相模考古学研究会編 昭和49年）、柏ヶ谷長ヲサ遺跡（堤 昭和59年）等の断片的資料からでは何とも言えない。この問題に関しては橋本が木苜峠遺跡について「これ（木苜峠Ⅳ<sub>2</sub>期のブロックを指す一筆者注）より上位から出土した木苜峠Ⅵ期（第23、24ユニット）はⅢ2期の一部（第22ユニット）に武蔵野台地Ⅳ層下部に相当する石器群を保有することからⅤ層段階に対比される」（傍点筆者）という指摘を行っている（橋本 昭和59年 147頁）。文意不明の作文であり、さらに、橋本が木苜峠遺跡の報告書をろくに読んでいないことは、一読して明らかなのだが、その事には触れないでおく。要するに、木苜峠Ⅳ<sub>1</sub>期が、相模野のB<sub>2</sub>L下底と並行するか否かが問題とされている。

ここで、鈴木道之助が木苜峠Ⅳ<sub>1</sub>期をⅣ<sub>2</sub>期に後在させた根拠は、両期のブロックが検出されたA地点とH地点とに層位的な差が認められなかったために、「ナイフ形石器の小形化、刃器状剥片の衰退、また、石質等」（鈴木 昭和50年 120頁）の総合的判断によるものであった。この見解は、当時の編年の研究の水準を踏まえたものとして評価されるが、現在でも資料的蓄積はほとんど進展していない。

木苜峠A地点の基盤に、砂川型刃器技法が存在することは確実と見られ、これがたいがい若葉台遺跡第6ブロックと対比されることにも、また、異論はないであろう。ところが、H地点ではその種の石刃生産過程を欠いている。石核には、打面と作業面の入れ換えを示す例（報文3-31図6）と、両設打面をもつ角柱状の例（報文3-32図3）の両者があり、前者からは、やや幅のある矩形の剥片が、後者からは、ナイフ形石器素材でもある縦長の石刃様の剥片が獲得されたようである。これら両者の技術的特徴は、A地点のそれよりも、むしろ、寺尾の2つの類型に近い。更に、ナイフ形石器の形態的特徴も寺尾に近似するようである。木苜峠H地点と比較される資料は少ないが、下総では、習志野市藤崎塚込貝塚（大塚 昭和52年）、富里町獅子穴Ⅵ遺跡（田村 昭和59年）が挙げられよう。ただ、これら2遺跡に就いては、明確な産出層準の同定ができないので、結論は留保しておきたい。

このように、今のところ、若葉台遺跡第6ブロック以後の状況も不明なところが多く、容易に分りそ

表 29 第 6 ブロック 石器属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	L12-9	2 ナイフ形石器	32×12×2.5	1.0	-8	-	H-3	F	+	t-H	黒曜石	6-1
2		3 ナイフ形石器	40×20×5.2	3.0	-7	1-0	H-1→B-1→ H-2	F	-	t-B	黒曜石	6-2
3		4 ナイフ形石器	35×17×5	2.3	-6	-	C→B-2	F	-	t-B	黒曜石	6-1
4		5 ナイフ形石器	38×13×3.4	1.6	-4	-	C→H-1	F	-		黒曜石	6-2
5		6 類 形 器	22×21×7.6	3.2	-17	C	H-1→L-1→ R-1	-	-	t-B	黒曜石	6-1
6		7 ナイフ形石器	17×14×4.4	1.0	-14	-	H-2	-	-	t-H	黒曜石	6-2
7		8 削 片	17×18×4.4	0.6							黒曜石	6-1
8		9 削 片	8×6×1.4	0.1							黒曜石	6-1
9		9 削 片	15×8×2.4	0.5							黒曜石	6-1
10		10 削 片	11×9×1	0.1							黒曜石	6-1
11		11 削 片	15×10×2	0.2							黒曜石	6-1
12		12 削 片	10×6×1.3	0.1							黒曜石	6-1
13		13 削 片	16×8×4.4	0.5							黒曜石	6-1
14		14 削 片	11×17×1.8	0.3							黒曜石	6-1
15		15 削 片	14×9×2.4	0.2							黒曜石	6-1
16	16	ナイフ形石器	13×9×2.9	0.3	-9	-	H-2	-	-	t-H	黒曜石	6-1
17		17 削 片	21×13×5.5	1.0							黒曜石	6-1
18		18 削 片	21×11×3.8	0.4							黒曜石	6-1
19		19 削 片	10×10×1.3	0.1							黒曜石	6-1
20		19 削 片	13×13×3	0.3							黒曜石	6-1
21		19 削 片	12×13×5.8	0.5							黒曜石	6-1
22		20 削 片	10×12×2.5	0.2							黒曜石	6-1
23		21 削 片	7×13×2.9	0.2							黒曜石	6-1
24		22 削 片	11×14×2	0.2							黒曜石	6-1
25		23 削 片	20×9×2.7	0.3		1-0	H-2	F	-		黒曜石	6-1
26	24	ナイフ形石器	12×12×3.8	0.5	-10	-	H-2	-	-	t-H	黒曜石	6-1
27	25	削 片	24×8×4	0.5		1-0	H-1→L-8	-	-	t-B	黒曜石	6-1
28	26	削 片	15×5×1.4	0.1							黒曜石	6-1
29	27	削 片	18×13×3.3	0.6		3-1	C→B-1→H-2	H	-		黒曜石	6-1



No	遺物 No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(D)	図No	打面	背面構成	末端 形状	使用 数	背れ面 部位	石 材	母岩No
30	28	石 杖	27×17×9.4	3.0	-19						黒曜石	6-1
31	29	ナイフ形石器	29×15×4.8	3.0	-5	1-0	C→H-3	F	-		黒曜石	6-1
32	30	削 片	12×6×2.2	0.2							黒曜石	6-1
33	31	削 片	4×7×1.8	<0.1							黒曜石	6-1
34	32	削 片	12×8×1.4	0.1							黒曜石	6-1
35	33	削 片	7×3×1.3	<0.1							黒曜石	6-1
36	34	削 片	13×6×2.9	0.2							黒曜石	6-1
37	35	削 片	9×9×1.3	0.1							黒曜石	6-1
38	36	削 片	10×6×1.6	0.1							黒曜石	6-1
39	37	削 片	14×14×3.8	0.4							黒曜石	6-1
40	38	削 片	20×9×5.2	0.4	-		C→H-1→L-5	F	-	t-H	黒曜石	6-1
41	L12-19	2 ナイフ形石器	20×15×5	1.3	-12	-	C→H-1→(H-3)	F	-	t-B	黒曜石	6-1
42	3	ナイフ形石器	22×14×6.6	1.8	-13	1-0	C→B-1 (実測図区)	-	-	t-M	黒曜石	6-2
43	4	ナイフ形石器	40×14×7.2	3.4	-1	1-1	L-1→H-3	F	-		黒曜石	6-3
44	5	ナイフ形石器	17×11×3.4	0.8	-11	-	H-3	-	-	t-M	黒曜石	6-1
45	6	削 片	55×21×6.9	4.5	-15	-	H-3	F	-	t-M	黒曜石	6-4
46	7	削 片	45×30×11.3	11.5	-16	P	H-4	F	+		黒曜石	6-1
47	8	ナイフ形石器	40×16×9	4.0	-2	1-0	H-3	F	-		黒曜石	6-3
48	M12-00	2 削 片	30×23×6.8	3.2		4-0	H-4	-	-	t-M	黒曜石	6-4
49	M12-19	2 ナイフ形石器	42×15×4.9	3.0	-3	-	H-3	-	-		黒曜石	6-1
50	3	石 杖	35×24×15	11.3	-18						凝結凝灰岩	6-5

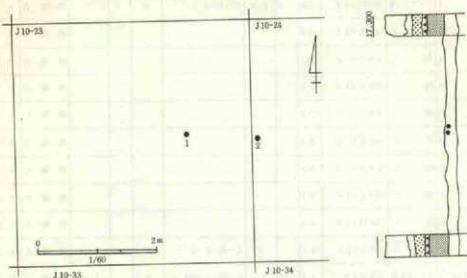
うもない。仮に、木崎峠J地点が、橋本の言うとおりのA地点よりも新しいとしても、両地点間に明確な系統的脈絡が指摘されるであろうか。両者は本来別箇の系統に属するものではあるまいか。既に、VII層段階に認められた異種石器文化の本質的理解なくして、若葉台遺跡第6ブロックの理解は困難であることを再度確認したい。VI層段階の石器文化に関しては、汎日本的な視座からの資料的集積が必要であり、諸系統に内在する変遷の機制を見きわめてゆかねばならない。

第7ブロック J10-23区に1点、J10-24区に1点、合計2点の石器が、約1.2mの間隔をもって検出された。産出層準はVII層上部であり、若葉台遺跡最古のブロックである。第142図に実測図を示したが、両例共に石刃である。1は頁岩製で、末端に細かい剝離痕があり、ナイフ形石器の先端部であるかもしれない。2は安山岩（あるいは頁岩か）の整った石刃で、平坦打面を有し、頭部調整が著しい。



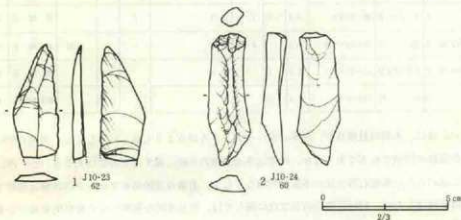
ブロック外の石器 縄文時代の遺物に混じって、相当量の先土器時代の石器が採集された。第143、144両図に、これらのうちから若干のものを選択して示した。簡単に解説を加える。

1～7にナイフ形石器を集めた。1の種属は不明だが、2、3はAT降下直後のナイフ形石器であろう



第141図 第7ブロック遺物出土状況

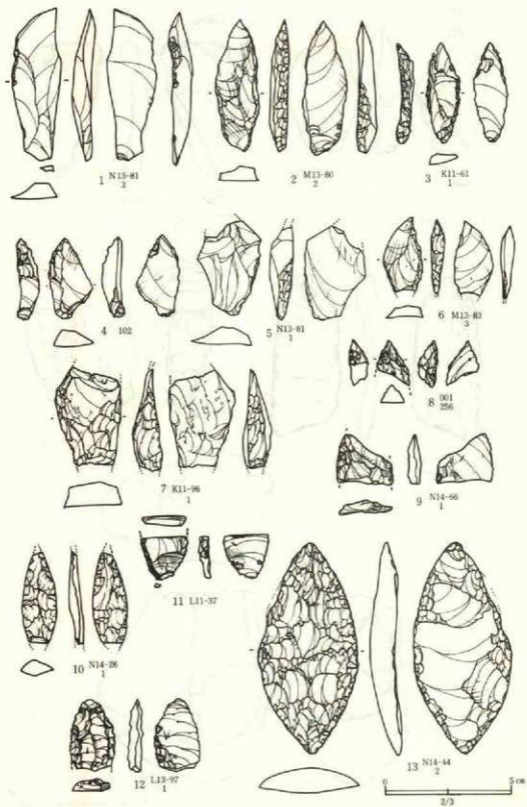
う。特に、2は母岩No.6-1(黒曜石)を素材にしているから、本来は第6ブロック、若しくは、第6ブロックと同時存在した別ブロックに含まれていたと考えられる。3は頁岩製であるが、形態からやはりAT前後の時期に比定したい。8は尖頭器様石器尖端部で黒曜石製。9、10、12、13などは尖頭器である。11はナイフ形石器かもしれない。9、12が古く、10、13が新しい。14は石錐、15、16は刃こぼれ



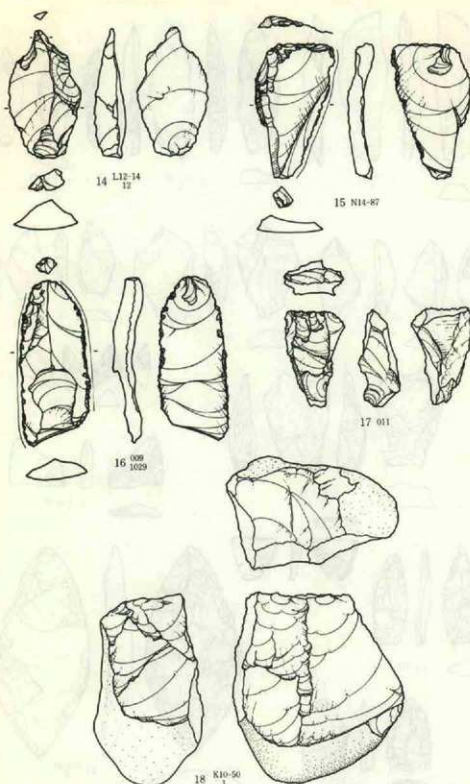
第142図 第7ブロック石器

表30 第7ブロック 石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重量	団No	打面	背面構成	先端 形状	使用 痕	折れ面 部位	石 材	母岩No
1	J10-23 62	制 片	44.7×18.2×4.1	3.9		-	H-3	F	+	t-H	頁 岩	7-1
2	J10-24 60	制 片	61.4×16.9×9.9	6.1		1-0	H-3	F	-		安 山 岩	7-2



第143図 ブロック外表面採集の石器 (1)



第144図 ブロック外・表面採集の石器(2)

のある剥片、17、18は石核である。

### C. 小 結

若葉台遺跡からは合計すると7箇所のブロックが検出された。ブロックは相互に関係するものは無く、1ブロックで1ユニットを構成するものばかりで、上貝塚遺跡でのブロックのあり方と近似している。各ブロックの産出層準は、大別して4枚に分けられ、

IV<sub>下</sub>層 第1ブロック、第2ブロック、第4ブロック、第5ブロック

V層 第3ブロック

VI<sub>上</sub>層 第6ブロック

VII<sub>上</sub>層 第7ブロック

となり、IV・V層に帰属するブロックが著しい。

ブロックの産出層準を前提とした、各ブロックの編年の位置に就いては、既に前項にてその概要を述べたが、第6、第3、第5ブロックの石器群からは重要な知見が得られた。第1ブロックは、近隣の遺跡の出土状況から、おそらく、第5ブロックに後続する石器群と考えられるので、V層の前後で、大よそ4枚に亘る文化層の重複を指摘しうることになる。この段階の層位的出土例としては、神奈川県柏ヶ谷ヲサ遺跡（柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 昭和36年）の連続性が最も良好であるが、若葉台遺跡における検出状況は、これを追認するものと評価され、下総II b期の初源期を暗示している。

ブロックの構造に関しては、横のつながりをもたない単独に存在するものばかりであり、上貝塚例と比較されることを指摘したが、第5ブロックや第6ブロックでは、石器総数に比して多量のナイフ形石器を保有し、必ずしも、上貝塚遺跡と軌を一にしている訳ではない。今後は、母岩構成と石器組成のあり方から、諸類型の抽象と、その動態モデルの設定、検証が不可避の課題として浮上してくると思われる。

(田村)

## 第2章 縄文時代

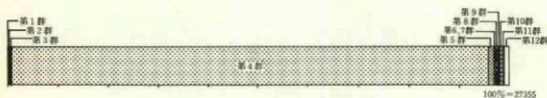
### A. 遺構・遺物の概要

若葉台遺跡からは、縄文時代前期前半に属する竪穴住居跡10基・土坑3基、中期後半の竪穴住居跡1基、晩期前半の土坑1基及び構築時期不詳の土坑10基が検出された。台地上に比較的濃密な生活痕跡を残す、縄文時代前期集落跡の主要部分が調査されたものと思われる。遺跡の範囲は、今回の調査区外、北西側と南側に広がる可能性を持つが、調査区全体の遺物分布や、地形的な制約からみて、その面積はそれほど大きくない。集落遺跡の主要部分は、その過半を調査したものと見てよいであろう。

調査によって出土した資料は、整理作業の過程で、その全てについて時期別分類、総量把握に努めた結果、分類可能な27355点の土器片と、2317点の石器・礫を確認した。出土土器の95%は前期前半、黒浜期の資料である。その他、早期前半から晩期に至る各時期の資料が出土しているが、前期後半及び晩期の土器が目立つ他は、いずれも僅少である（第145図）。

報告は、上貝塚遺跡と同様、先に遺構及びその出土遺物を、調査時に付した遺構番号順に報告し、その後で遺構外出土の遺物を、時代順に古いものから呈示した。遺構の報告はその種類毎に行ったが、整理途上の分析で番号に欠番が生じている。

なお、黒浜式土器の時期・段階細分については、新井和之氏の5段階細分（新井 昭和57年）に準拠して記載を進めた。（原田）



第145図 若葉台遺跡出土縄文土器時期別数量比

## B. 竪穴住居跡とその出土遺物

### 001竪穴住居跡 (第149-151図=PL, 32・PL, 49)

遺構：台地中央、M12区南西部に位置し、住居跡の北西部1/5が攪乱を受けている。ほぼ整った長方形を呈す。長径850cm以上、短径595cm、長軸方向をN-47°-Wにとる。長辺に沿って深さ15cmの壁溝を有し、支柱穴は6本と推定される。床面の北西寄りに地床炉を設ける。

遺物：床面から若干浮いた状態で多くの遺物が出土したが、炉跡周辺には少なく、接合関係が明らかなものも僅少である。前期前半426点、同後半4点、中期後半1点、後期後半2点及び土製円板4点の、合計437点の土器片と、削器3点、楔形石器1点、石斧1点、剥片10点と礫27点が出土した。

図示した資料は、いずれも前期前半の土器である。1・2は口縁部に短い櫛歯状沈線文が施され、前者にはループ文を伴う単節縄文RLが菱形に施文され、後者には竹管内面施文の平行沈線文が器周する。文様モチーフを持つ土器は、他にタガ状の隆帯をめぐらす頸部破片4、竹管状工具による平行沈線文、連続爪形文を縄文地、あるいは無文地の上に施す3・5-7がある。

8-11は軸縄文、あるいは結節縄文を施すもので、9のように施文部の継ぎ目にミミズ腫れ状の微隆起を残すものを含む。また12-22は無節・単節縄文を全面に施すもの。うち12・13は結節縄文で、後者は横位方向に原体の上下を逆にして連続施文し、菱形文の効果を表出している。14は0段3条の単節縄文RLによる菱形施文。15-22は斜方向の縄文施文が行われたもので、うち18-20・22は無節縄文を施文している。23・24は土製円板。

口縁部に櫛歯状沈線文を施す土器や、ループ文の存在、さらに竹管内面施文の平行沈線文等の在り方から、当遺構出土の土器は、黒浜式土器古段階（新井分類第I段階）に主体を置くものと思われる。

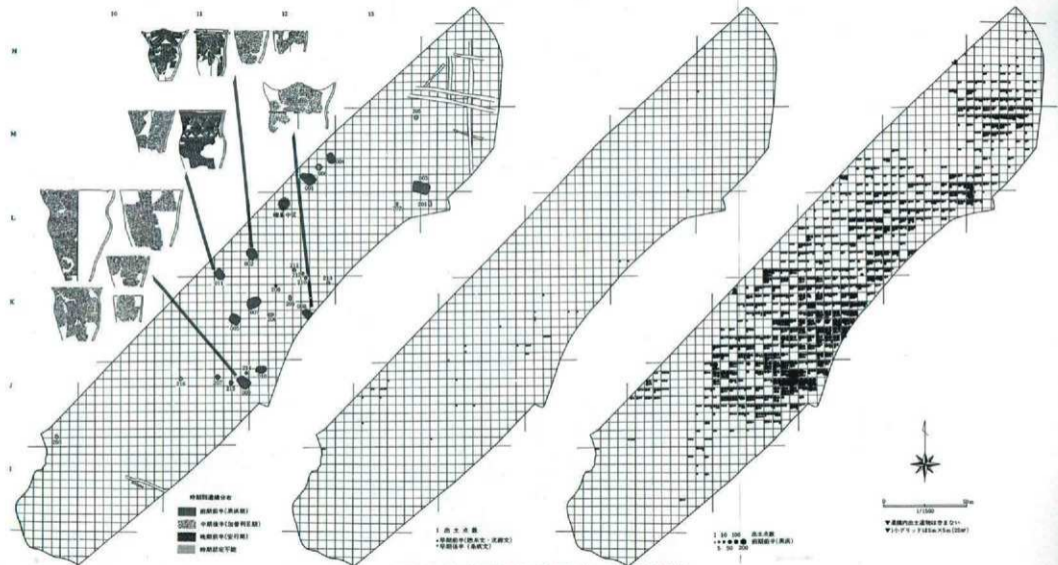
時期：出土土器の在り方から、前期前半、黒浜式古段階（新井分類第I段階）の住居跡である。

### 002竪穴住居跡 (第152-158図=PL, 32・PL, 41-42・PL, 50-51)

遺構：台地中央、L11・L12区の境界上に位置する。南側の一部を溝及び風倒木根で攪乱されているが、長径715cm、短径538cm、長軸方向N-34°-Wを示し、不整楕円形を呈す。中央部やや北西寄りに地床炉を設け、壁柱穴状のビット9本を巡らせる。

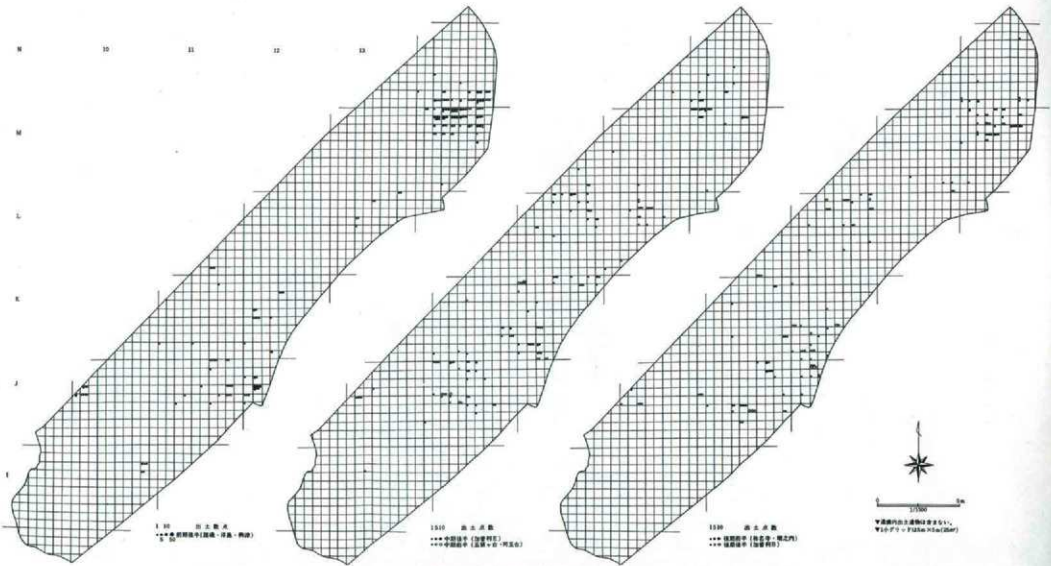
遺物：炉跡及びその周辺に遺物の集中が認められ、一部の土器は床面直上から出土した。接合関係を持つ個体も多い。前期前半480点の土器片と、土製円板1点、石鉄1点、円礫石製品1点、剥片2点及び礫3点が出土した。うち8点は略定形、及び器形の概要が分かる大型破片である。1は小型の4単位波状口縁の深鉢形土器で、地文に異条斜縄文が羽状施文され、口縁部に竹管状工具による連続爪形文のモチーフを持つ。2は波状口縁下にタガ状の鈎が巡る注口深鉢。4も口縁下に太い鈎がめぐる深鉢であり、いずれも黒浜式の古相を呈す。3は粗い縄文が施された土器で、器形から丸底を呈する可能性もある。5は細かな燃承文が全面を覆うもの、6は無節縄文。7・8は単節縄文が施された、いずれも大形深鉢である。

9-43は破片資料。乱雑な格子目状沈線文を施す9以外は、燃承文・縄文のみの土器である。10-12は細かな燃承文が横走するもの。12-14は2条一組の燃承文を付加した付加条縄文、15は不鮮明ながら異条斜縄文が施される。16-37は無節・単節縄文が施された破片で、16には頸部に巡る鈎が、18には口唇上面への縄文施文が特徴的である。縄文施文の継ぎ目部分に、ミミズ腫れ状の微隆起が残る土器18・



第140図 石巻台遺跡特殊層分布図(縄文時代)及グリッド別出土遺物分布図(1)

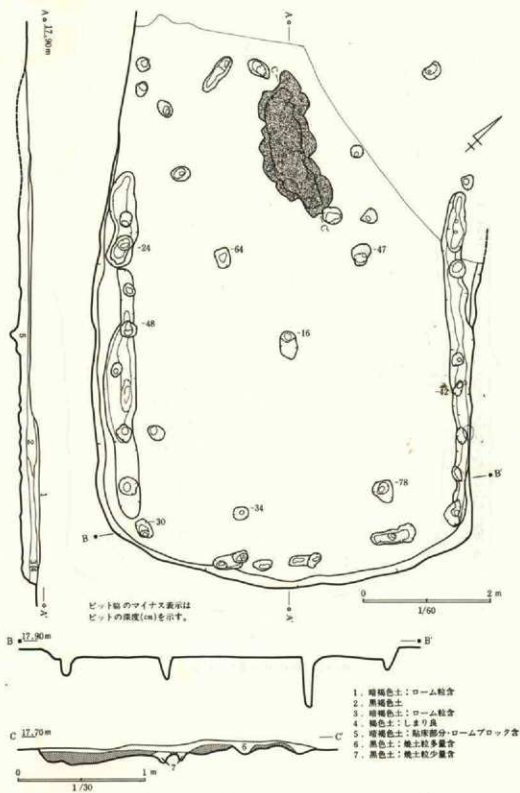




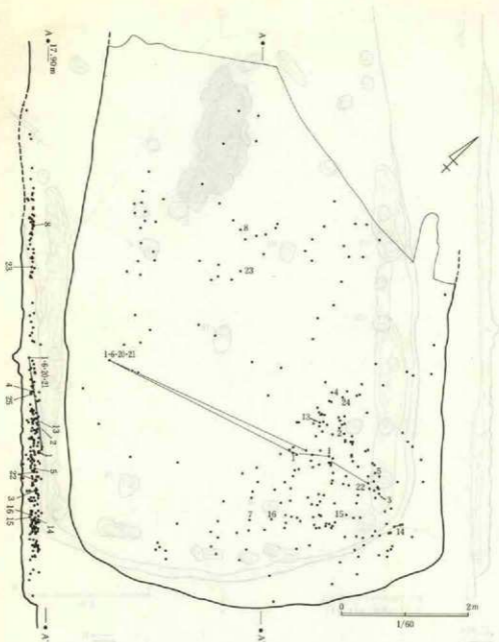
第147図 若狭白邊沖グリッド別出土遺物分布図 (2)



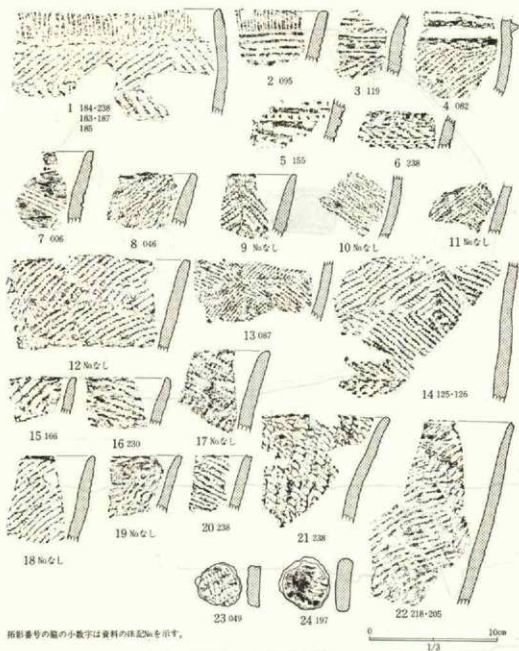




第149図 001住居跡 平・断面図



第150図 001住居跡遺物分布図

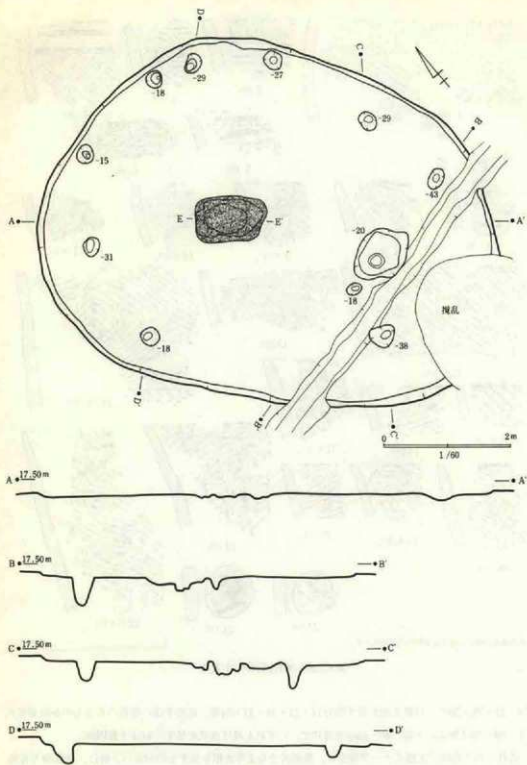


第151図 001住居跡出土遺物

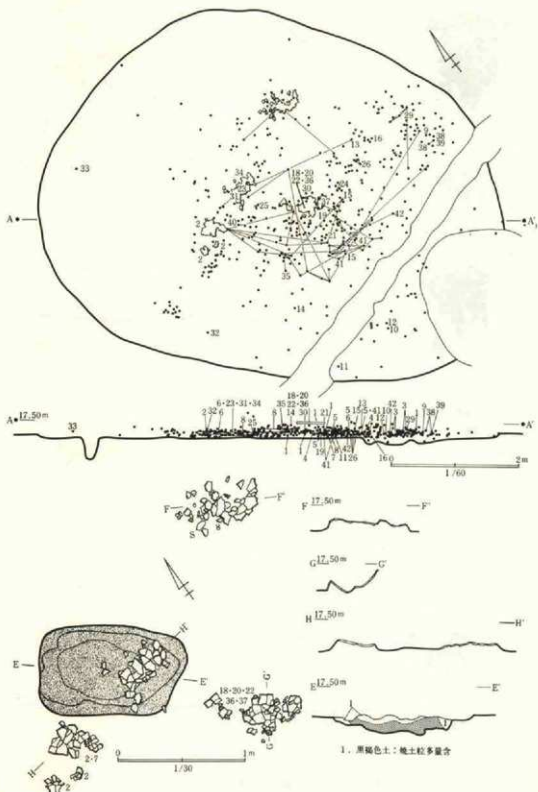
20・21・26・36や、口唇上面が若干凹む14・21・30・33・34等、成形手法に特色のあるものが散見される。38・39は無文の土器、40～43は底部片で、いずれも揚げ底状を呈す。44は土製円板。

これらの土器は、文様モチーフ等から、黒浜式でもより古相を呈すものが多い。特に、中部地方有尾式土器の菱形爪彩文の影響を受けた1、関山式土器の文様モチーフを引き継ぐ2・3等の在り方から、新井分類の第Ⅰ段階に属するものが主体を占めている。

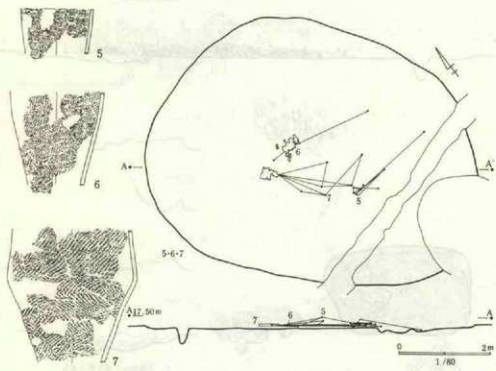
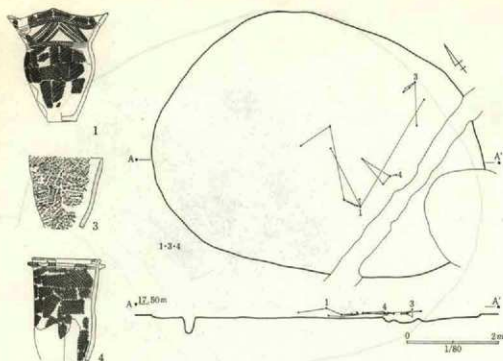
時期：出土土器の様相から、前期前半黒浜式古段階（新井分類第Ⅰ段階）の住居跡である。



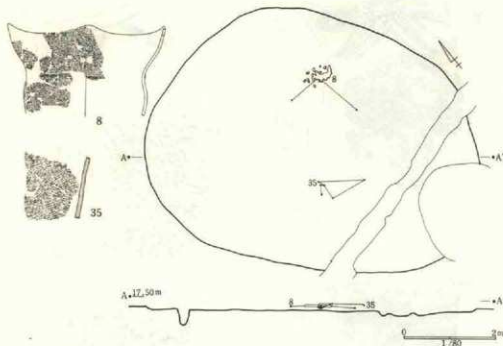
第152图 002住居跡 平・断面图



第153図 002住居跡遺物分布図及びびわ跡周辺遺物出土状態図



第154图 002住居跡出土土器個別接合図(1)



第155図 002住居跡出土土器個体別接合図(2)

003竪穴住居跡(第159~162図=PL. 33・PL. 52)

**遺構:** 台地北西部、M13・M14区境界上に位置する。西壁が攪乱を受けるが、推定長径987cm、短径600cm、長軸方向をN-73°-Wにとる整った長方形を呈す。西側に長楕円形の地床炉を設け、床面に土坑状掘り込みが3か所あるが、本来的に当住居に伴う施設かどうかは不明。四周に不規則な配置ながら壁柱穴を巡らし、東壁側のみに、壁から約80cmほど離れて、深さ20cmの溝が掘られている。

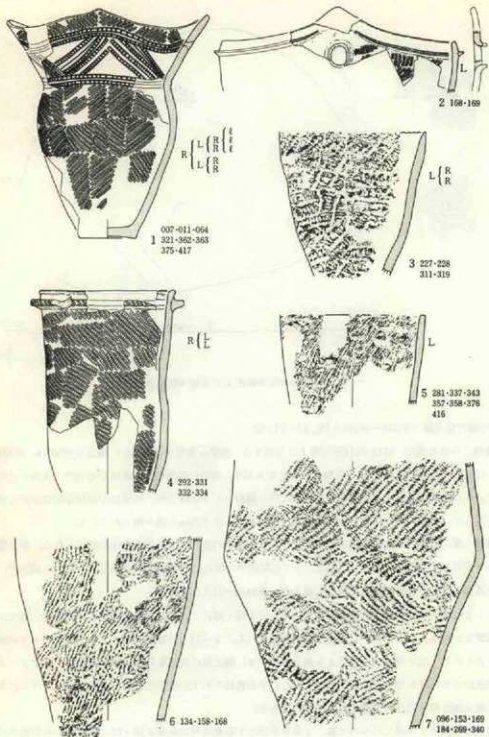
**遺物:** 覆土が薄く、従って出土遺物も少ない。住居跡の南西部に若干の集中が認められる。接合関係を持つ資料は少ない。出土した土器は、全て前期前半に限られ、合計393点である。いずれも破片で、全体の器形を窺える資料は無い。他に石鏃1点、硬18点が出土している。

1・2は内面施文の竹管文による菱形モチーフを描く破片で、口縁部には縦位の短沈線が、地文には単節縄文が施され、半月状の竹管刺突文が加飾される。3~14も竹管状工具による文様モチーフが表出されるもので、無文地に深い刺突文を加えた3・4、縄文地に沈線を引き、粗い刺突文を施す5~7、曲線状のモチーフを描く8の他、整然としたC字形連続爪形文が横位に重畳した9~14に分けられる。15は縄文地に格子目状の沈線文を施すものである。

16~37は摺糸文・縄文のみの土器。2条を単位とする摺糸付加条縄文16・21、摺糸文のみが施された17の他、付加条縄文による菱形モチーフを表出した24、結節のある無節縄文26、0段多条の無節縄文37等、バラエティーに富むが、施文原体の分析は未了である。

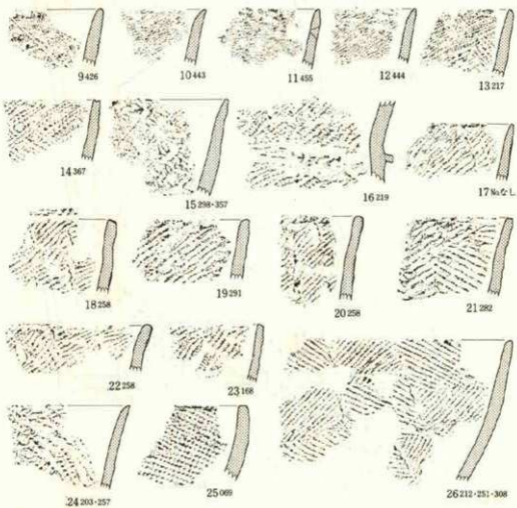
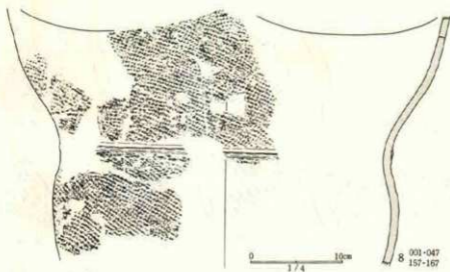
38は薄手の無文土器、39~41は底部破片で、41には4単位と思われる透かし孔がある。台付鉢の破片であろうか、薄手の作りである。42は無文の土製円板。



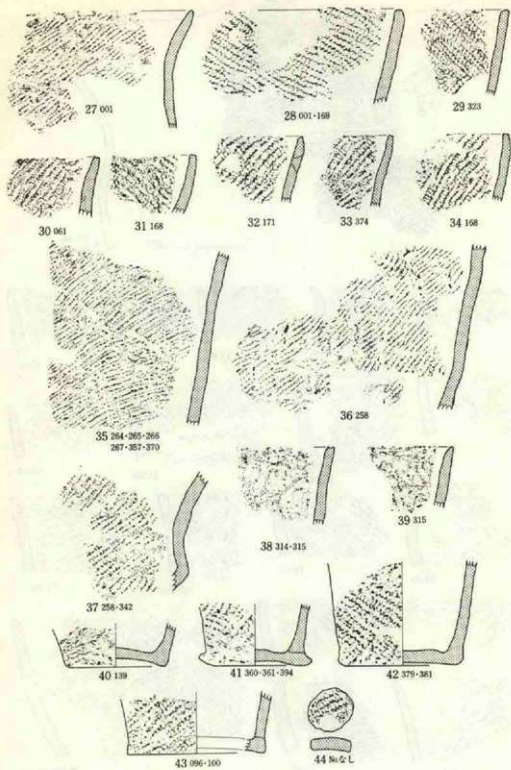


0 10cm  
1/4

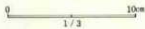
第156圖 002住居跡出土遺物(1)

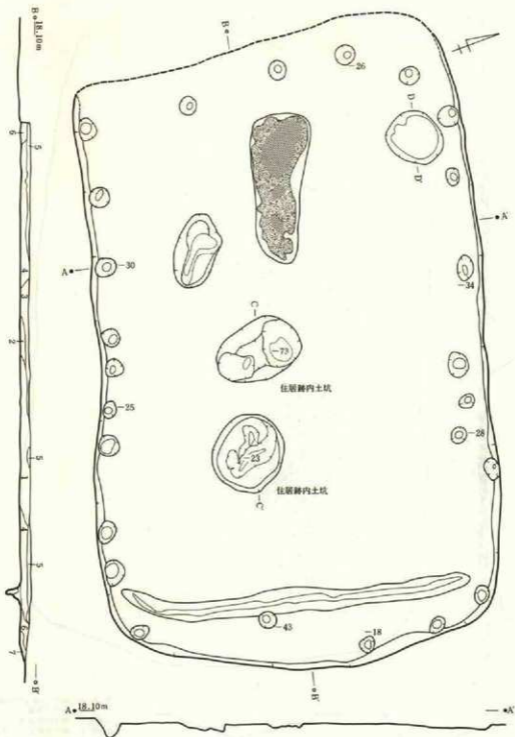


第157図 002住居跡出土遺物(2)



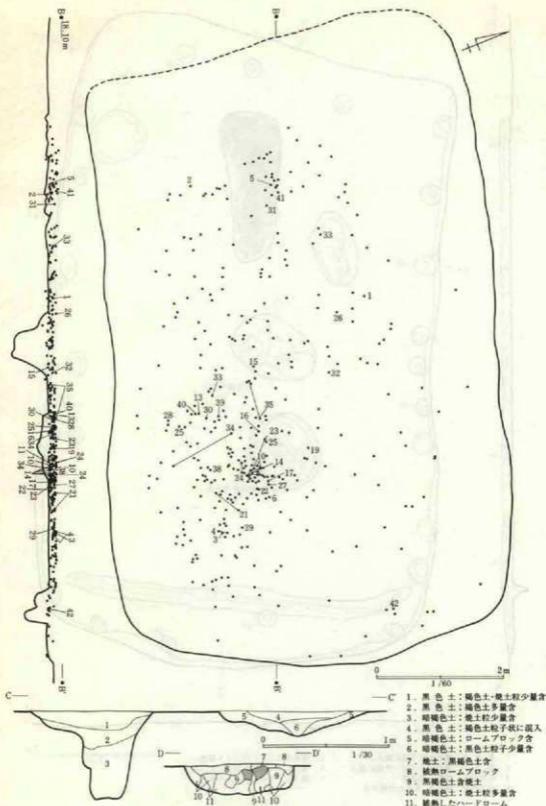
第158圖 002住居跡出土遺物(3)





- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. 黒色土：褐色土粒子状に混入    | 5. 増褐色土：4に比べより褐色  |
| 2. 黒色土：褐色土小ブロック状に混入 | 6. 褐色土：黒色土がまだらに混入 |
| 3. 増褐色土：褐色土粒子含      | 7. 褐色土：6に比べより褐色   |
| 4. 増褐色土：褐色土・黒色土の粒子含 |                   |

第159図 003住居跡 平・断面図

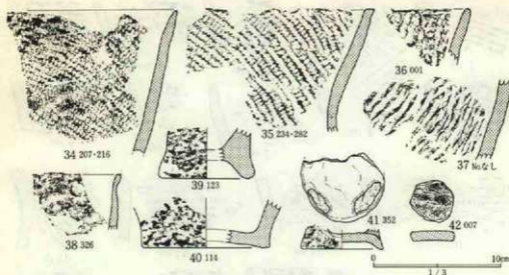


第160図 003住居跡遺物分布図及び住居跡内土坑断面図



0 10cm  
1/3

第161圖 003住居跡出土遺物(1)



第162図 003住居跡出土遺物(2)

以上の資料は、竹管内面施文の沈線や、横位に重畳する連続爪形文等、黒浜式土器の文様要素としては古手(新井分類第Ⅰ段階)に属するものと考えられる。

時期：遺構の形態及び出土遺物から、前期前半、黒浜式古段階の住居跡と判断される。

#### 004竪穴住居跡(第163・164図)

遺構：台地中央、M12区の西寄りに位置する。床面と地床炉及び壁柱穴が確認されたのみで、壁は検出できなかった。柱穴の配置から、N-20°-Wに長軸方向をとる、長方形の住居跡であった可能性が高い。

遺物：遺存していた覆土が薄く、量的に極めて少なく、接合関係を示す個体は見出せない。出土資料は、全て前期前半の土器片に限られ総数66点である。いずれも破片で、全形を窺える資料は無い。他に剥片2点及び礫7点が出土した。

1・2は縄文地文の上に、竹管状工具による平行沈線文を描くもの、6は口唇断面が尖頭状を呈し、外面に格子目状沈線文を施す。3～5・7・8は、付加糸縄文・単節縄文が施された、いずれも胴部片である。

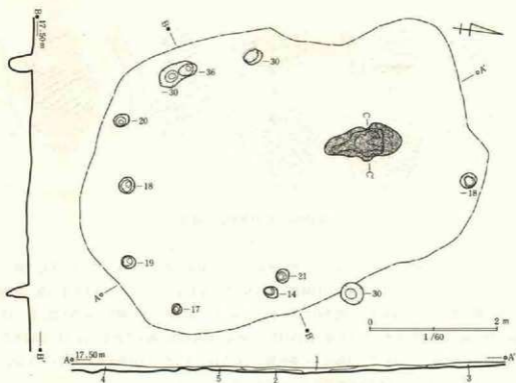
時期：出土土器の様相から、他の住居跡同様、前期前半黒浜式古段階の住居跡と考えられるが、細段階を明らかにする資料を欠く。

#### 005竪穴住居跡(第165～168図=PL.33・PL.53～54)

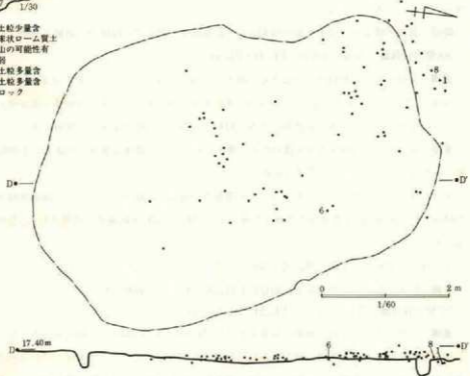
遺構：台地中央部、K11区に位置する。長径605cm、短径578cm、長軸方向をN-63°-Wにとり、隅丸方形を呈す。床面北西側に地床炉を設け、主柱穴6本及び壁柱穴18本が検出されたが、壁溝は無い。

遺物：地山面への掘り込みが浅く、かつ住居跡南西半分の覆土を、検出時にかなり削平してしまったため、遺物分布図上にドットの片寄りが生じてしまった。床面から若干浮いた位置から、多量の遺物が出土しているが、接合関係を示す個体は少ない。出土土器は、全て前期前半に限られ、総数430点。その内2点は、大略の器形を窺える大形破片である。他に楔形石器1点、円礫製品1点、剥片3点及び礫10点が出土した。



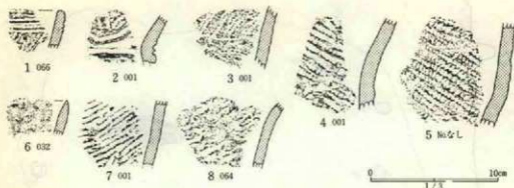


1. 黒褐色土：焼土粒少量含
2. 暗褐色土：貯庫状ローム質土
3. 暗褐色土：地山の可能性有
4. 暗褐色土：軟弱
5. 黒褐色土：焼土粒多量含
6. 黒色土：焼土粒多量含
7. 焼熱ロームブロック



第163図 004住居跡 平・断面図及び遺物分布図





第164図 004住居跡出土遺物

文様モチーフの判明するものは少なく、粗い連続爪形文で直線・曲線文を描く1~4、平行沈線によるX字状モチーフを持つ5、刺突文が口縁部に巡る6、細かなC字形爪形文が連続する7の他、単節縄文地に横位並列する竹管刺突文が施された8~10がある。11~30は摺糸文・縄文のみの土器、11~13・16~18・20は2条単位の摺糸付加条縄文、15・17は摺糸文が比較的密に施文される。19・21~30は単節・無節縄文の施された土器片で、乱雑ながら菱形施文される19・21・22、口唇部上面に刻目を加える23・24が含まれる。また31~34は土器底部片で、いずれも揚げ底状を呈している。

これらの資料は、文様モチーフを持つ断片資料から考えて、黒浜式古段階（新井分類第I段階）を主体とするものと考えられる。

**時期：**遺構の構造及び出土土器の様相から、前期前半、黒浜式古段階の住居跡と判断される。

**006竪穴住居跡**（第169・170図＝PL.34・PL.43）

**遺構：**台地中央部、M12区に位置する。地山への掘り込みが浅く、壁の東半分は検出できなかったが、径370cm程度の円形を呈するものと思われる。床面中央に胴下半を欠く大形の炉体土器が使われた埋燻炉を設け、壁際に8本及び床面北西側に2本の対柱穴を持つ。比較的小型の住居跡である。

**遺物：**確認面からの掘り込みが浅いため、覆土から出土した遺物は僅少。炉体土器1個体の他、前期前半の土器片6点が出土しただけである。

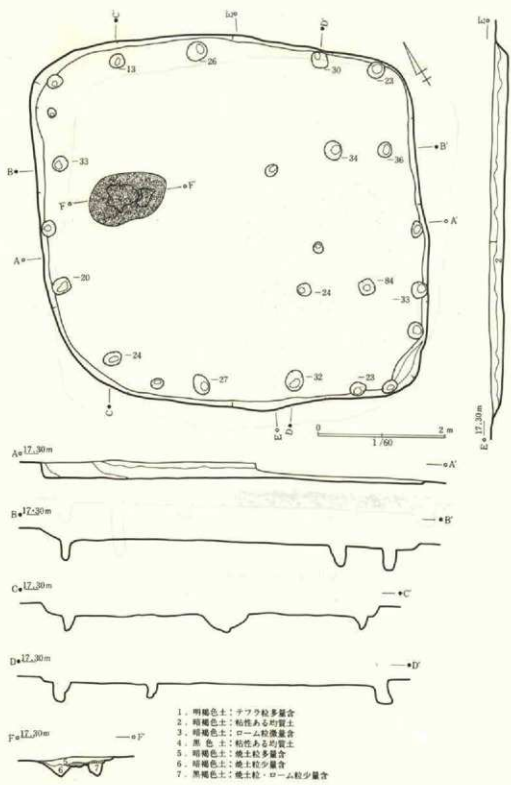
1は炉体土器で、胴下半を欠失する。太い隆線及び幅広い沈線文によって、口縁部文様帯（7単位）が構成され、胴部には2本単位の沈線文が垂下する。地文はRL単節縄文が充塞される。加曾利EⅡ式土器である。

2~5は前期前半の土器。黒浜式土器の小片で、いずれも流入したものであろう。

**時期：**炉体土器から、中期後半、加曾利EⅡ式期の住居跡と判断される。

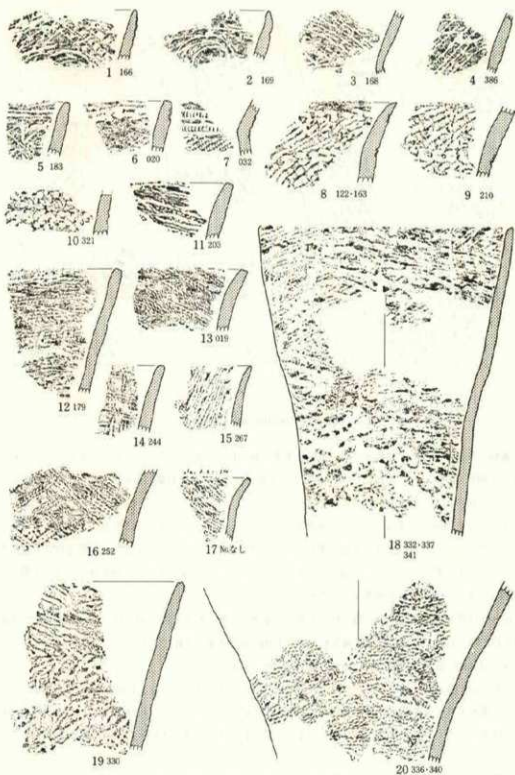
**007竪穴住居跡**（第171~173図＝PL.34・PL.54~55）

**遺構：**台地中央部、K12区東側に位置する。長径875cm、短径630cm、主軸方向をN-57°-Eにとり、不整楕円形を呈す。一部北側の壁が失われており、本来の形状をどの程度保っているかは、検討の余地がある。床面の北東側及び西側の2か所に地床炉を持ち、柱穴は不規則に検出された。本来的には2時期に亘る竪穴住居跡が重複しているのかも知れない。

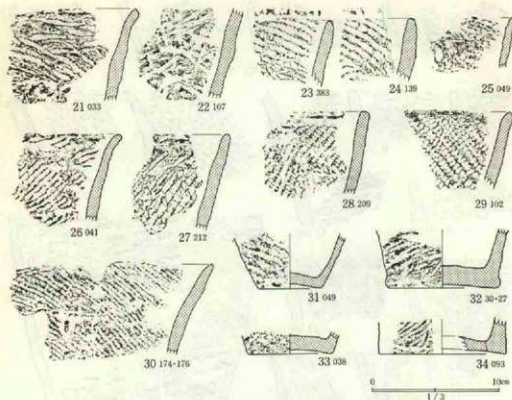


第165図 005住居跡 平・断面図





第167图 005住居跡出土遺物(1)



第168図 005住居跡出土遺物(2)

**遺物：**住居跡南西部に、散漫ながら遺物の集中が見られる。接合関係を示す資料は僅少。出土資料は全て前期前半に限られ、総計423点の土器片と、土製円板3点、及び石錐、石皿、剥片各1点、礫2点があるが、図示するに足るものは少ない。

1は竹管内面施文の沈線によって、直線的なモチーフを描くもの。2～5は竹管状工具による連続爪形文を描くもので、特に2は口縁部に菱形のモチーフを描き、また、5は2条単位の摺糸付加条縄文を併用する。6は格子目状沈線文が施されたもの。7・8は貝殻腹縁文及び貝殻背圧痕文を持つ土器、9は頭部の隆帯の上下に竹管刺突文が施される。

10～25は摺糸文・縄文のみが施された土器。2条単位の摺糸付加条縄文10～15、ループ文を含む羽状縄文16の他、17～25は単節縄文が施され、中でも20は0段多条のLRである。

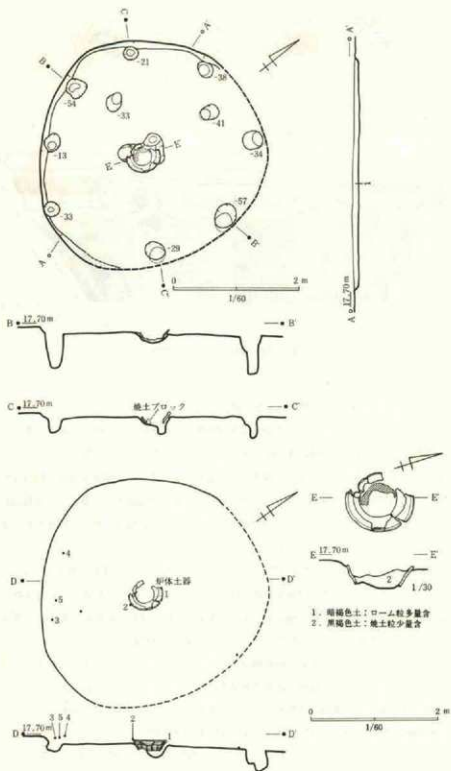
26～28は揚げ底状の底部破片。29～31は土製円板である。

これらの土器は、文様モチーフを持つ資料に乏しいが、1～4のような、竹管内面施文の沈線、2のような菱形モチーフを基調とした連続爪形文等、黒浜式土器の古い部分（新井分類第Ⅰ段階）に盛行する文様要素が多く含まれる。ただし、6のような格子目状沈線文は、大旨第Ⅱ段階以降に多用されるモチーフである。

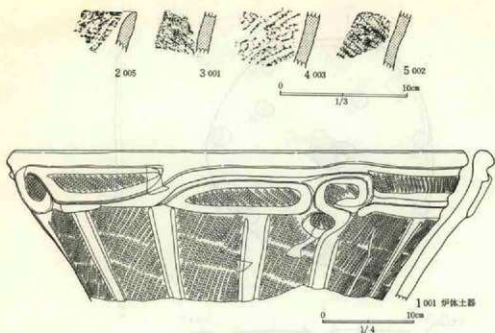
**時期：**出土土器の在り方から、前期前半、黒浜式古段階の住居跡と判断される。

**008竪穴住居跡**（第174・175図＝PL.35・PL.55～56）

**遺構：**台地中央部、K12区に位置する。南西側約1/5が調査区外に広がるため、全形を知り得ない。



第169図 006住居跡 平・断面図及び遺物分布図



第170図 006住居跡出土遺物

長径515cm以上、短径440cm以上、長軸方向をN-48°-Wにとり、長楕円形を呈するものと思われる。床面南西側に地床炉を設け、長辺2辺に深さ15cm程度の壁溝が検出された。主柱穴配置は不詳だが、4本の柱穴が不規則に存在する。北西隅に浅い掘り込みを有するが、その性格は不明。

遺物：地山への掘り込みが浅く、従って覆土からの遺物出土も乏しい。地床炉周辺に散漫ながら集中が認められる。接合関係を持つ個体は少ない。出土資料は、全て前期前半の土器片で、総数62点。うち1点は、器形復元が可能な大型破片であるが、他は小片が多い。石器類は石斧、石核各1点と礫4点が出土した。

1は4単位の波状口縁、頸部にタガ状隆帯を巡らす大形の深鉢で、全面にRLの具条縄文が施され、口唇部上面は平坦か、若干凹む。2は口縁波頂部の破片で、隆帯が縦に貼付される。3～8は燃糸文・縄文のみが施されたもの。無節縄文Lを施文する3、2条単位の燃糸文Lを付加した縄文4、具状斜縄文5の他は、単節縄文である。9は下端が外に張り出した、揚げ底状底部片。

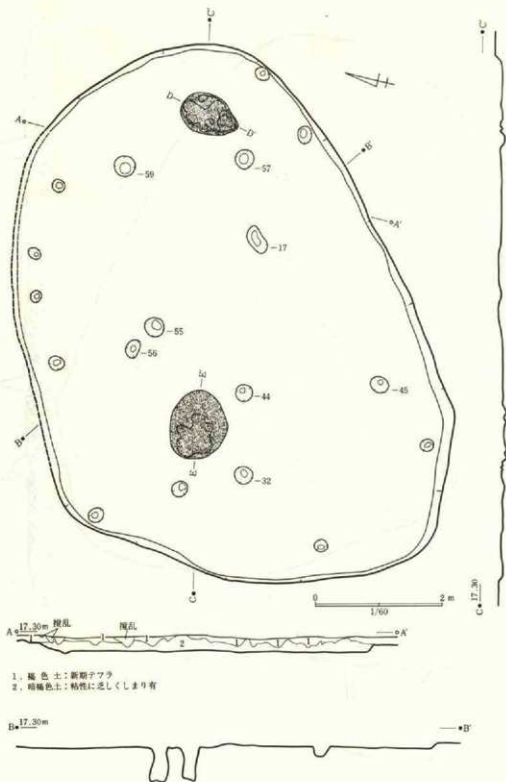
これらは、量的な乏しさから、明瞭な時期細分をできないが、口唇部上端が若干凹む1・5の存在等から考えて、黒浜式土器でも古い様相（新井分類第1段階）を示すものと思われる。

時期：遺構の構造及び出土遺物の様相から、前期前半黒浜式古段階の住居跡と判断される。

009竪穴住居跡（第176～187図＝PL. 35・PL. 43・48・PL. 56～60）

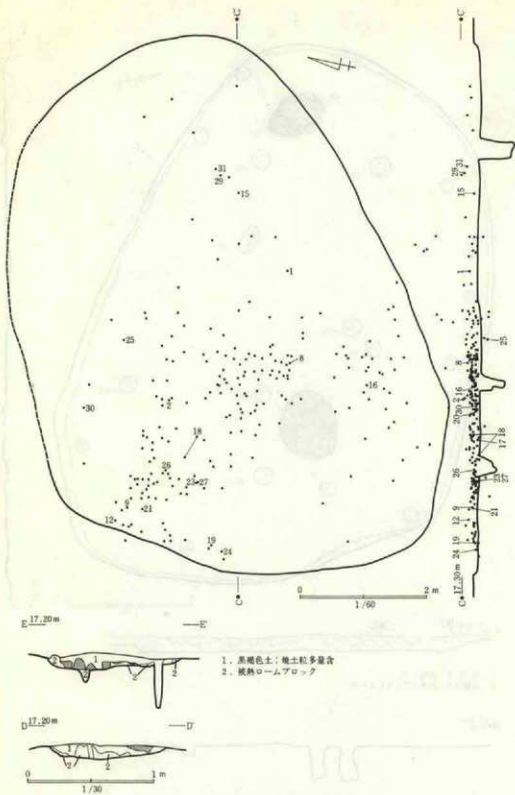
遺構：台地中央、J11区の東寄りに位置する。北及び南西部の壁が一部検出されていないが、長径800cm、短径615cm、長軸方向をN-50°-Wにとり、下辺が台形状に控る隅丸方形を呈す。床面の長軸線上に2か所の地床炉を設け、柱穴14本、壁柱穴11本が検出された。2回以上の建て替えが想定される。

遺物：住居跡の南西側を中心に、極めて多量の遺物及び7か所の貝ブロックが出土・検出された。遺

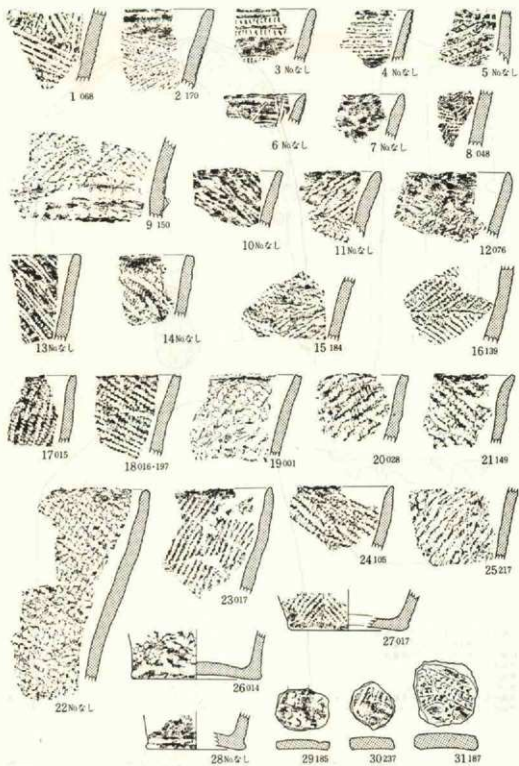


第171図 007住居跡 平・断面図

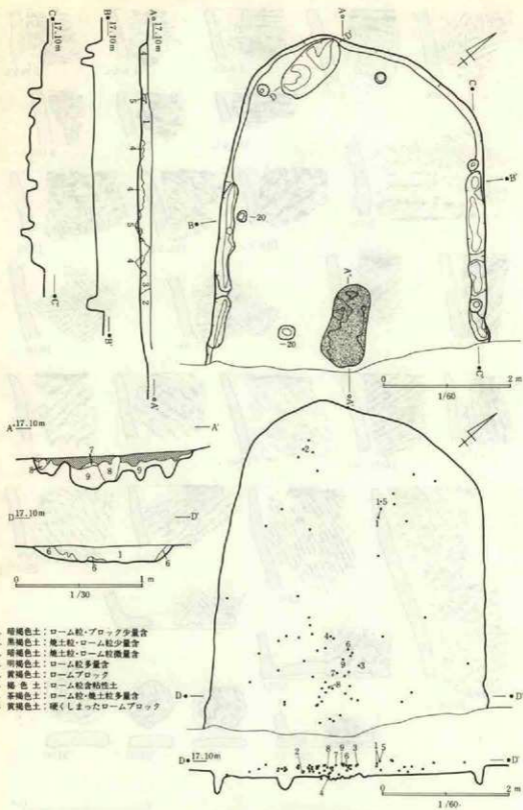




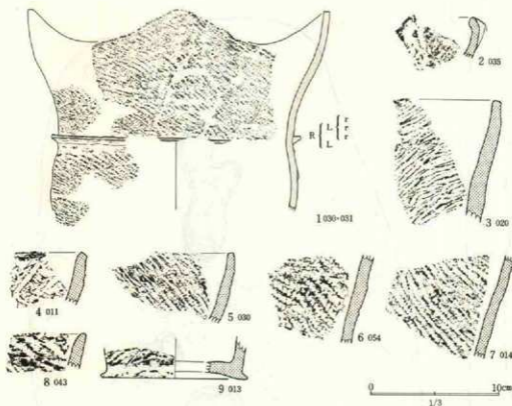
第172図 007住居跡・伊勢断面図及び遺物分布図



第173図 007住居跡出土遺物



第174図 008住居跡 平・断面図及び遺物分布図

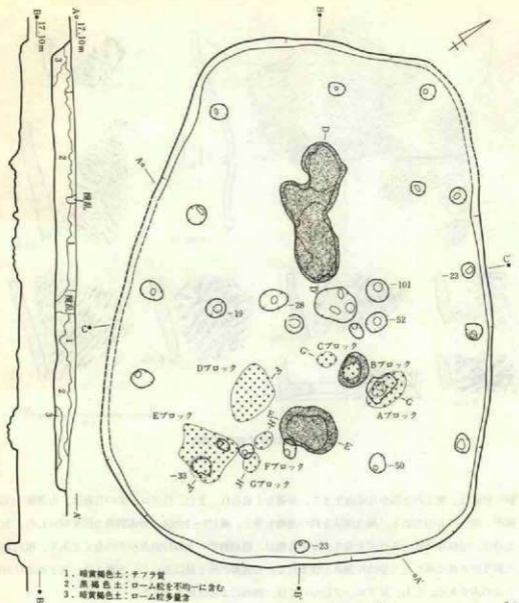


第175図 008住居跡出土遺物

物の分布は、覆土の上部から床面上まで、万遍なく見られ、また、貝ブロックの存在は、当遺跡の住居跡中、唯一のものである。接合関係を持つ遺物も多く、第178～180図に個別接合図を明示した。出土土器は、早期後半鶴ヶ島台式土器2点がある他は、前期前半の土器1751点その全てであり、復元完形土器及びそれに準じた大型破片28点が含まれる。石器類の出土量は乏しく、石鏝1点、玉1点及び剃片7点のみである。なお、貝ブロックについては、別稿による分析を行った。

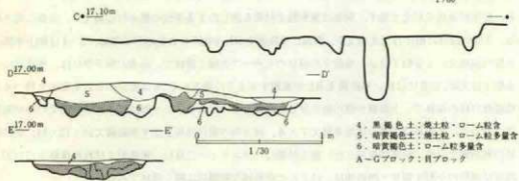
1は頸部がくびれ、胴部に最大径を持つ大形深鉢。頸部の区画線より上に、凹形入組文的なモチーフを、C字形連続爪形文で施す。胴部は菱形施文効果を出した2条単位の燃糸付加縄文が、全面に施される。2は口縁部に格子目状沈線文が、胴部に単節縄文 RL が施された朝顔形の深鉢。3・4は胴上半部に竹管内面施文による格子目状、横位平行線状のモチーフを描く深鉢で、前者の胴下半には、単沈線による格子目文が、後者には粗い単節縄文 RL が重複するように施される。6は縦位の貝殻条痕文を持つ4単位波状口縁の深鉢で、上面観が特異なものである。7～28は燃糸文及び縄文のみが施されたもので、2条単位の燃糸付加条縄文7・8、縦方向の羽状効果を出す単節縄文10・12・14、菱形羽状の無節縄文11等、原体は単純だが、施文効果はバラエティーに富む。頸部がくびれた深鉢7・11・21・22及び坩形の小形土器9・28の他は、ほとんどが単純な朝顔状に開く深鉢である。

29～91は破片資料。29・30は同一個体で、大波状口縁を持つ深鉢の一部で、竹管内面施文の平行沈線



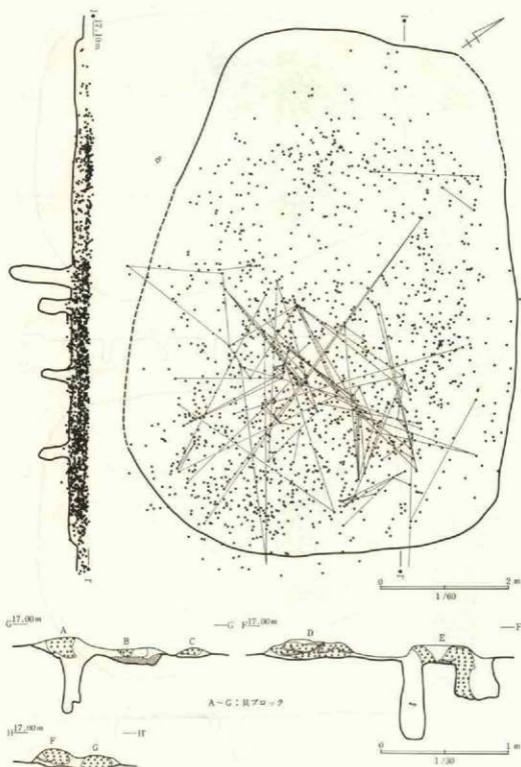
1. 暗黄褐色土：チフラ質
2. 黒褐色土：ローム粒を不均一に含む
3. 暗黄褐色土：ローム粒多量含

0 2 m  
1/60

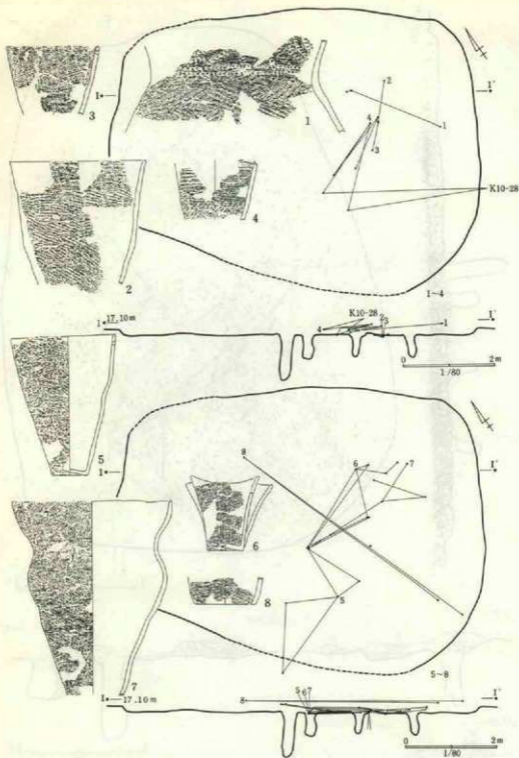


4. 黒褐色土：焼土粒・ローム粒含
  5. 暗黄褐色土：焼土粒・ローム粒多量含
  6. 暗黄褐色土：ローム粒多量含
- A-Gアロック：貝アロック

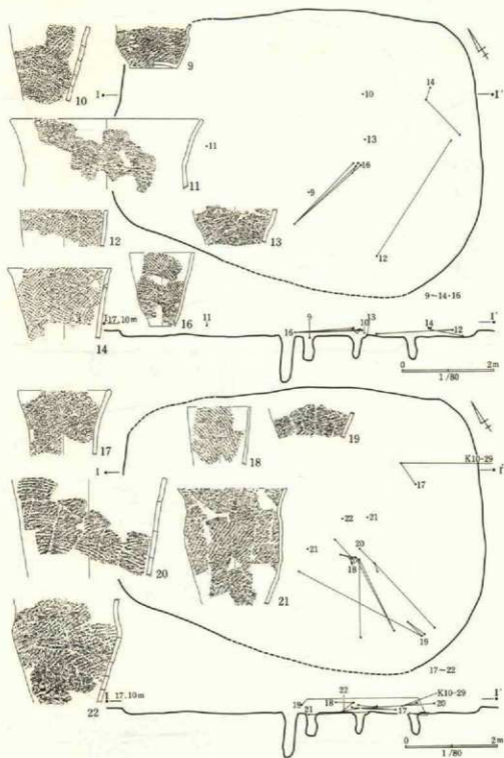
第176図 009住居跡 平・断面図



第177図 009住居跡遺物分布図及び貝ブロック断面図

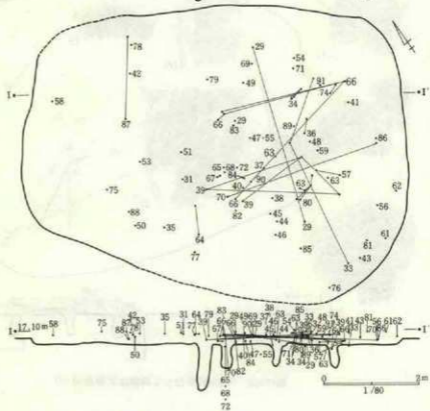
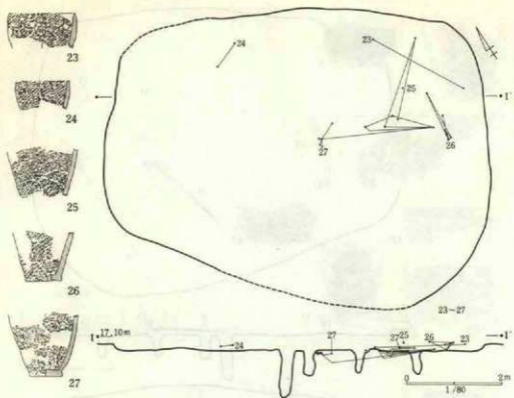


第178图 009住居跡出土土器個体別接合図(1)

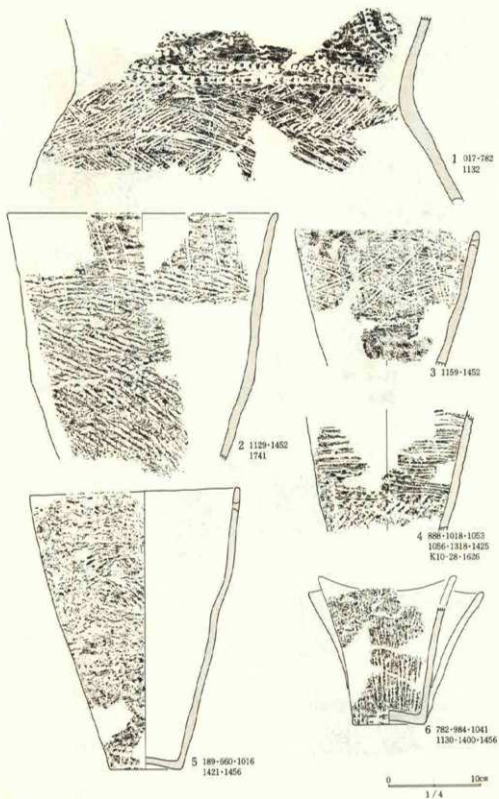


第179图 009住居跡出土土器個体別接合図(2)

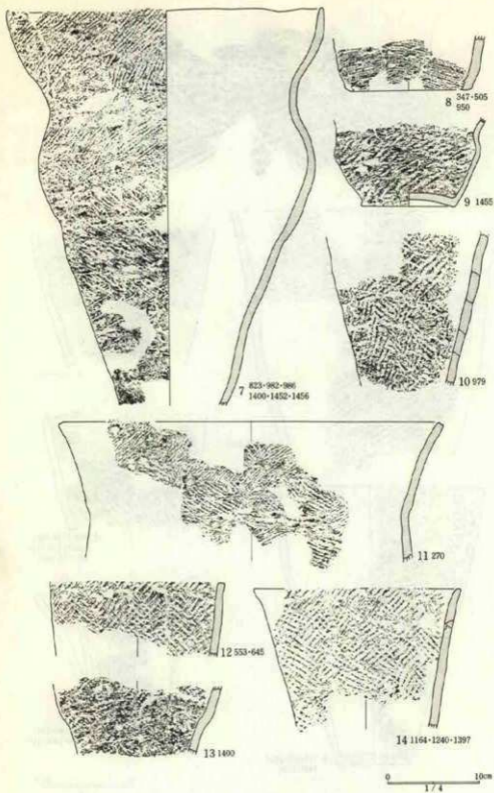




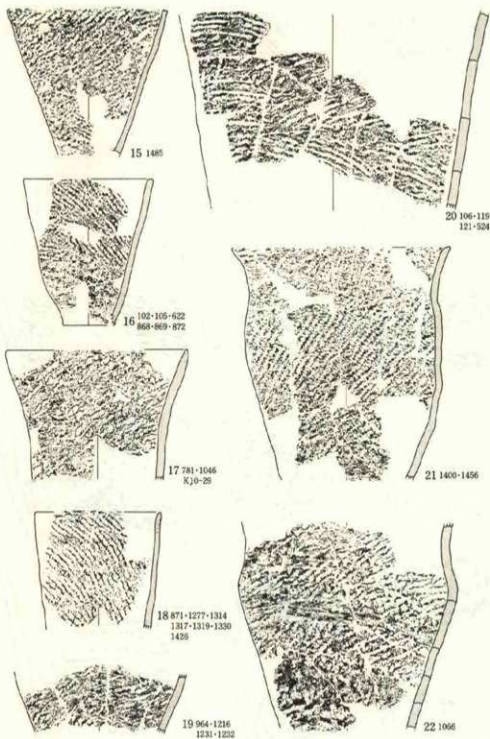
第180图 009住居跡出土土器個体別接合図(3)



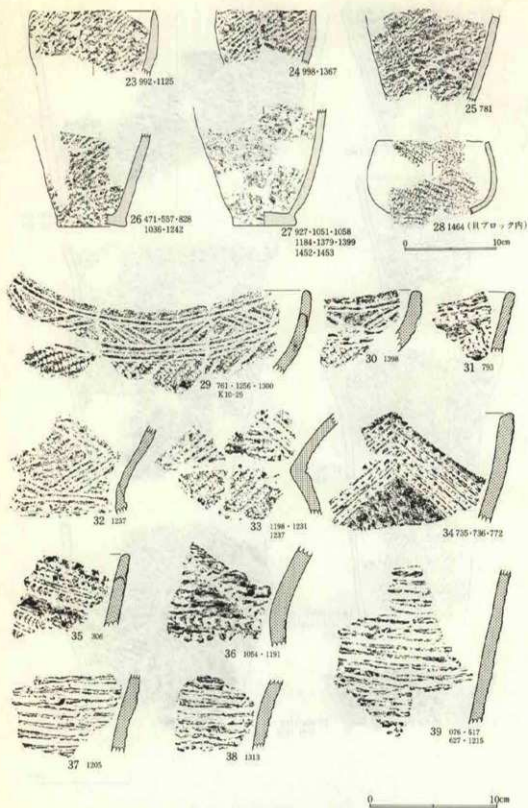
第181図 009住居跡出土遺物(1)



第182図 009住居跡出土遺物 (2)



第183圖 009住居跡出土遺物(3)

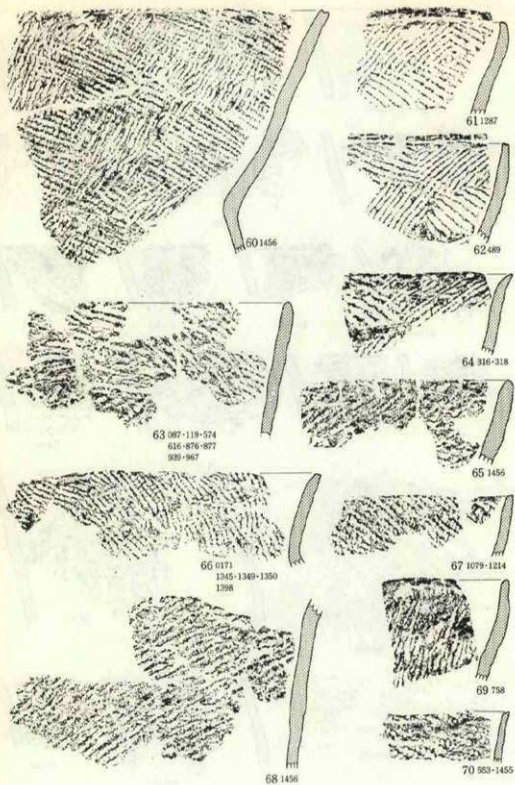


第184図 009住居跡出土遺物(4)

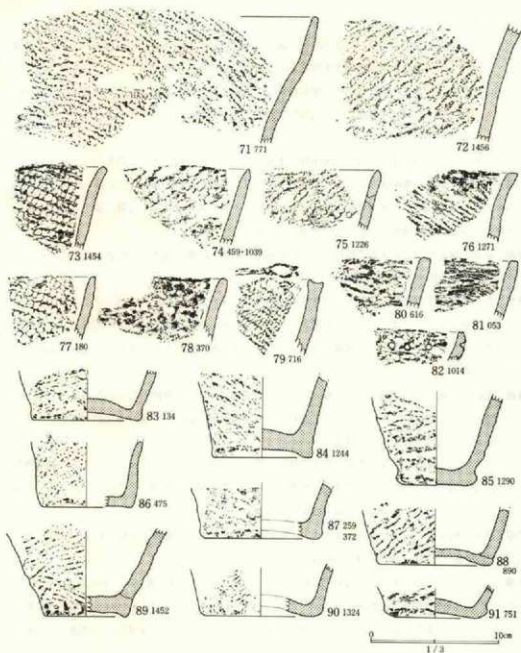


第185図 009住居跡出土遺物(5)





第186圖 009住居跡出土遺物(6)



第187図 009住居跡出土遺物(7)

文間を、連続山形文で充填し、地文には単節縄文LRが施される。32・33も竹管内面施文の沈線で、菱形モチーフを構成し、地文に単節縄文LRが施される。31・34～36は竹管状工具による連続爪形文が施されたもので、菱形のモチーフを基調とするものであろう。他に沈線文を多用する土器は、平行沈線文が重畳した37～39、格子目沈線文が施された40～42がある。

43～45は貝殻文が施された土器片で、条痕文のみの43と、貝殻背圧痕文の44・45に分けられるが、量的には多くない。

46～80は、燃糸文及び縄文のみが施された土器片。網目状燃糸文・縄文が用いられた付加条縄文46・



57、細い燃糸文が縦走する47、横走する48及び2単位・4単位の燃糸付加条縄文51・53と共に、ループ文が重畳する59等、変化が多い。55は大波状口縁を持つ深鉢で、無節縄文Lが変形効果を出して施される。72・74等、所謂固い繊維の縄文も散見されるが、56等原体の判別ができない個体も含まれる。

80・81は無文、或いは縄文施文後のナデ整形によって無文化された土器片。82は未貫通の円孔が口唇直下に巡るもの。また83-91は底部片で、底部外面の張り出しの有無等、バラエティーは多いが85を除き、いずれも揚げ底状を呈している。

以上の資料中には、29・30等、前代の関山Ⅱ式土器に、そのまま文様モチーフの系統を辿れるものや、中部地方有尾式土器の(衝刺状突起による)変形モチーフにつながる34・36、多段のループ文の存在59等、黒浜式でも古い様相を示す文様要素が多く含まれる。大旨、新井分類第Ⅰ段階に属する一括資料として理解できるが、縄文原体の分析が未了であることは惜しまれる。

時期：遺構の構造及び出土土器の様相から、前期前半黒浜式古段階に属する住居跡と判断される。

#### 010竪穴住居跡(第188・189図=PL, 36)

遺構：台地中央、J12区の北西寄りに位置する。西壁際に深さ25cmの円形土坑が重複するが、当住居跡に直接関係するものとは思えない。長径555cm、短径430cm、主軸方向をN-78°-Eにとり、不整形円形を呈す。床面中央やや西寄りに地床炉を設け、柱穴7本が検出されたが、本来的には6本柱穴の住居跡と思われる。

遺物：地山への掘り込みが浅いため、覆土からの出土遺物は少ない。炉跡周辺に若干の集中を見せるが接合関係を有する個体は皆無である。出土資料は全て前期前半に限られ、総数62点の土器片であるが、小片が多い。他に円礫製品1点及び礫2点がある。

竹管状工具による連続爪形文が重畳した1の他は、燃糸文・縄文のみの土器で、3・4には単節縄文LRが、2・5には2条単位の燃糸付加条縄文が施される。他の遺構出土資料から考えて、黒浜式でも古段階の資料と思われるが、詳細な段階細分に耐え得ない。

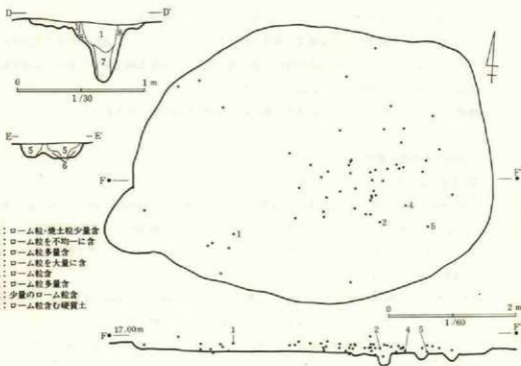
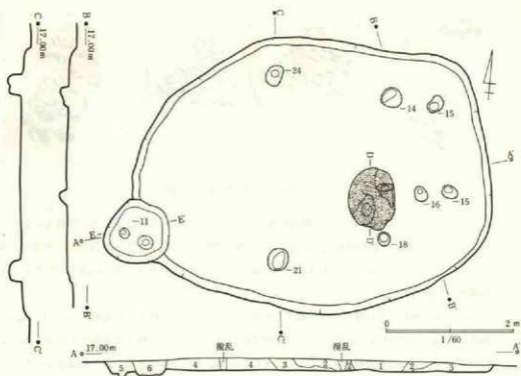
時期：遺構の構造及び出土土器の在り方から、前期前半黒浜式期の住居跡と判断される。

#### 011竪穴住居跡(第190-193図=PL, 36・PL, 61-62)

遺構：台地中央、L11・K11区の境界上に位置する。北西側1/5程度が攪乱のため破壊を受けるが、長径670cm以上、短径470cmの長楕円形を呈す。床面の北寄りに地床炉が設けられ、柱穴9本が不規則な配置で検出された。また床面中央部付近に、深さ43cmの円形土坑があるが、本来的に当遺構に伴うものかは判らない。

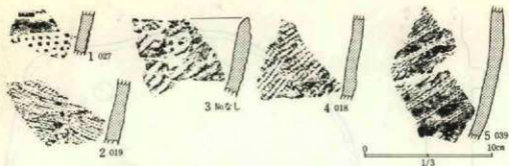
遺物：床面直上を含む、覆土の全体から、比較的濃密に遺物が出土した。接合関係を示す個体も若干認められる。遺構の遺存状態の割には多くの遺物がある。出土資料は全て前期前半に属し、総数640点の土器片と、土製円板1点がある。うち3点は、器形復元が可能なのである。また石器類の出土は少なく、剥片7点、石核1点及び礫8点のみである。

1は頸部がくびれ、胴部に最大径を持つ深鉢で、口縁部直下に竹管内面施文の沈線を3条、頸部に2条施し、その間を3条単位の竹管内面施文沈線で連続山形文状に充填する。頸部以下にも2条単位の竹管内面施文沈線が山形に施され、その交点に円形突起を加飾する。地文は複雑な異条縄文を、変形羽状に施している。



1. 黒色土：ローム粒・堆土較少量含
2. 黒色土：ローム粒を不均一に含
3. 褐色土：ローム粒多量含
4. 褐色土：ローム粒を大量に含
5. 暗褐色土：ローム粒含
6. 褐色土：ローム粒多量含
7. 黒色土：少量のローム粒含
8. 暗褐色土：ローム粒含む硬質土

第188図 010住居跡 平・断面図及び遺物分布図



第189図 010住居跡出土遺物

2・3は単純に口縁部が外反する朝顔形深鉢で、2にはLRの、3にはRLの単節縄文が全面に施される。4は1と同様、竹管内面施文の沈線と、単節縄文RLを持つもの、5・7は連続爪形文で、口縁部に菱形モチーフを描く土器、5・6は波状の口縁部片である。また9は、強く屈曲する隆帯より上部に、曲線波状の隆帯が乱雑に付されている。

10～25は、捻糸文及び縄文のみが施されたもので、2条単位の捻糸付加条縄文10～13、細かい無節の縄文14・15、口縁部下に3段のループ文が施された17の他は、いずれも単節縄文が施される。この中には21・22等、羽状効果を現出するものも含まれる。26は薄手の無文土器、27～32は底部片で、いずれも揚げ底状を呈する。33は土製円板である。

以上の資料は、文様モチーフを持つものが多くはないが、関山Ⅱ式土器の一部に文様モチーフが共通しながら、地文が組紐文から異条縄文に置換された1や、菱形モチーフを連続爪形文で表出する6・7、隆帯の貼付された9等に、黒浜式古段階の要素が強く窺える。複雑な縄文原体の多用も注意を惹く。新井分類第Ⅰ段階の一括資料として好適なものであろう。

時期：出土土器の様相から、前期前半、黒浜式古段階の住居跡と判断される。

### C. 土坑とその出土遺物

#### 201土坑（第194図）

遺構：003竪穴住居跡の南方、L14区に位置する。長径338cm、短径195cm、長軸方向N-13°-Wの長楕円形を呈す。北側が一段落ち込み、壁はなだらかに立ち上がる。構築時期・性格は不明。

遺物：（第198図=PL.63）図示した1点のみが出土した。前期前半、黒浜式土器の胴部片である。

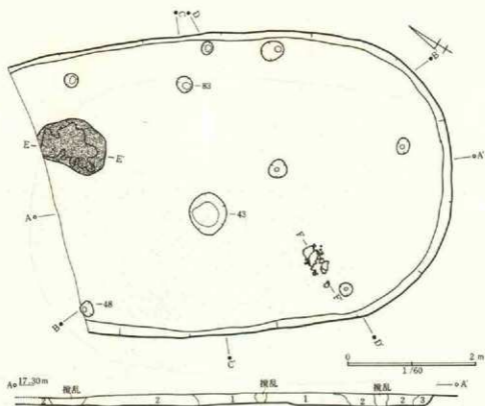
#### 202土坑（第194図=PL.37）

遺構：003竪穴住居跡の南西方、L13区に位置する。長径128cm、短径95cm、長軸方向をN-22°-Eにとり楕円形を呈す。壁の立ち上がりはなだらか。時期・性格は不明。

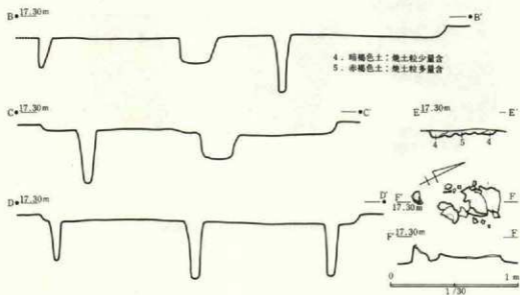
遺物：（第198図=PL.63）前期前半の土器5点が出土した。1は黒浜式土器の胴部片である。

#### 203土坑（第194図）

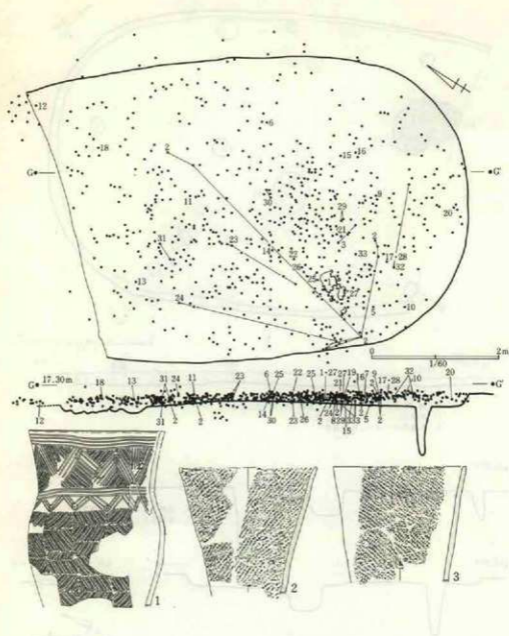
遺構：台地東端のJ10区、他の遺構とは離れて存在する。長径138cm、短径96cm、長軸方向をN-27°-Eにとり楕円形を呈す。底面の凹凸が激しく、壁の立ち上がりも不規則。出土遺物は無く、構築時期・性格とも不明である。



1. 褐色土：チアラ質土・ローム粒ブロック状に混入
2. 黒褐色土：ローム粒・焼土粒少量含
3. 暗褐色土：ローム粒多量含



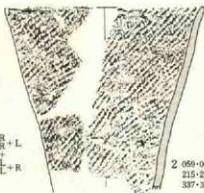
第190図 011住居跡 平・断面図及び遺物分布図



第191圖 O11住居跡遺物分布圖



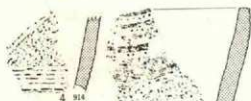
L (R+L)  
R (L+R)



2 050-060-064  
215-216-334  
337-383



3 057-469  
0 10cm



4 914



8 437



5 101



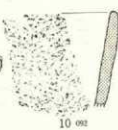
6 186



7 102



9 501



10 092



11 241



12 641



13 302



14 155



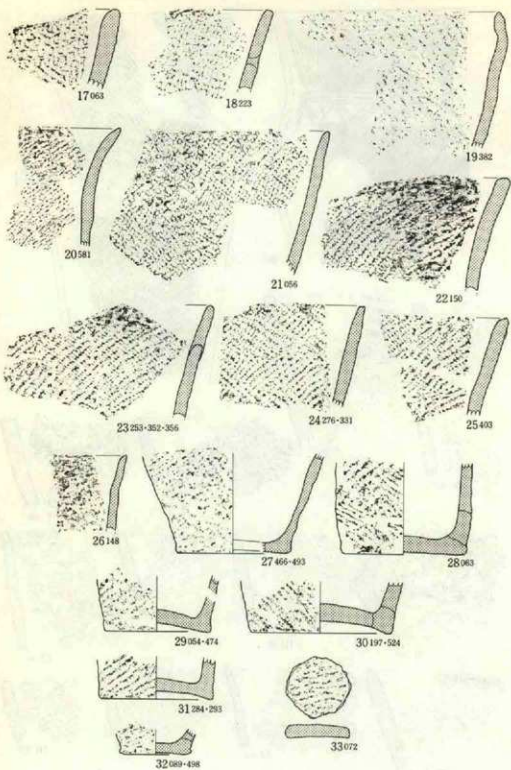
15 318



16 002

0 10cm  
1/3

第192図 011住居跡出土遺物 (1)



第193図 011住居跡出土遺物(2)





#### 205土坑 (第194図=PL, 37)

遺構：台地西端部、M13区に位置する。長径131cm、短径96cm、長軸方向をN-47°-Wにとり、不整形円形を呈す。底面が平坦で壁は垂直に立ち上がり、検出面からの深度78cmを測る。出土遺物は無く、明瞭な時期は不詳だが、形状からみて所謂陥穴状土坑である。

#### 206土坑 (第195図=PL, 38)

遺構：台地中央部、K12区に位置する。長径317cm、短径102cm、長軸方向をE-Wにとり、底面が長軸方向に張り出した長楕円形を呈す。壁は急峻に立ち上がり、検出面からの深度106cmを測る。出土遺物無く、時期は不明だが、所謂「Tビット」と呼ばれる陥穴状土坑である。

#### 207土坑 (第195図=PL, 38)

遺構：009竪穴住居跡の西方、J11区に位置する。長径180cm、短径131cm、長軸方向をN-25°-Wにとり、楕円形を呈す。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深度192cm、出土遺物から一応前期前半に属する可能性が高い。円形の所謂陥穴状土坑である。

遺物：(第198図=PL.63) 前期前半の土器7点が出土した。1はループ文を含む半節縄文LR、2は捻糸文Lの付加糸縄文、3は無文のいずれも黒浜式土器である。

#### 208土坑 (第196図=PL, 39)

遺構：007住居跡の北東方、K12区に位置し、径92cmの円形を呈す。覆土の下部に厚さ20cm程度の焼土層が検出された。出土遺物の在り方から、当遺跡で唯一、晩期前半に属する土坑と考えられる。

遺物：(第198図=PL.63) 前期前半の土器5点、晩期前半の土器7点が出土した。1～3は安行皿a式の深鉢形土器で、同一個体、4は同時期のものだが、別個体の胴部片である。他に礫1点が出土している。

#### 209土坑 (第196図)

遺構：008竪穴住居跡の北西、K12区に位置する。長径274cm、短径112cm、長軸方向をN-3°-Wにとり、底面が長軸方向に張り出した長楕円形を呈す。壁の立ち上がりは急角度で、検出面からの深度120cmを測る。出土遺物は無く、時期不詳だが、その形状から所謂「Tビット」と呼ばれる陥穴状土坑である。

#### 210土坑 (第196図=PL, 39)

遺構：008竪穴住居跡の北方、K12区に位置する。長径98cm、短径77cm、長軸方向をN-37°-Wにとり楕円形を呈す。底面が一段深く掘り込まれるが、壁はなだらかに立ち上がる。時期認定に足る出土遺物を欠き、またその性格も不明。

遺物：(第198図=PL.63) 前期前半の土器5点が出土した。1は黒浜式土器の胴部片である。

#### 211土坑 (第196図)

遺構：台地中央、L12区に位置し、径70cmの円形を呈す。検出面からの深度38cm、底面が平坦で壁は垂直に立ち上がる。出土土器から構築時期を断定することは難しい。

遺物：(第198図=PL.64) 前期前半の土器4点が出土した。1は黒浜式土器の胴部片である。

#### 212土坑 (第197図)

遺構：211土坑の北側に近接し、L12区に位置する。径70cmの円形を呈し、底面の凹凸は激しいが、壁の立ち上がりは比較的なだらかである。時期認定に足る遺物の出土は無く、その性格も不詳。



遺物：(第198図=PL.64) 図示した1点のみが出土した。前期前半、黒浜式土器の胴部片である。

#### 213土坑 (第197図)

遺構：210土坑の東側、K12区に位置する。長径92cm、短径74cm、長軸方向をN-19°-Wにとり楕円形を呈す。底面北寄りに一段深い掘り込みを有するが、壁の立ち上がりは概してなだらかである。構築時期を認定するに足る出土遺物は無く、性格も不明。

遺物：(198図=PL.64) 前期前半の土器2点が出土した。1は隆帯を持つ黒浜式土器胴部片である。

#### 214土坑 (第197図)

遺構：009・010両竪穴住居跡の間、J11区に位置する。長径170cm、短径153cm、長軸方向をN-6°-Eにとり不整楕円形を呈す。底面は僅かに凹凸を持つが平坦で、壁の立ち上がりも明瞭、検出面からの深度22cmを測る。出土遺物から、前期前半に属する土坑と判断されるが、その性格については詳らかでない。

遺物：(第198図=PL.64) 前期前半の土器53点が、底面から10cm以上浮いた状態で集中的に出土した。当遺跡の土坑中、最も出土土器が多い。1・5は胴部の大破片で、2条1単位の捻糸付加条縄文、2は3条1単位の捻糸付加条縄文、3・4は単節縄文RLが施された土器片である。いずれも黒浜式に属するが、段階細別に足る資料ではない。

#### 215土坑 (第197図=PL.40)

遺構：009竪穴住居跡の西側に近接し、J11区に位置する。長径223cm、短径189cm、長軸方向をN-89°-Wにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がり、検出面からの深度22cmを測る。出土遺物から考えて、前期前半期の土坑と判断される。

遺物：(第199図=PL.64) 遺物分布図を欠くが、前期前半の土器40点が覆土から集中的に出土した。1-4はいずれも黒浜式土器の胴部片である。他に石鏝1点、剥片1点及び礫1点が出土している。

#### 216土坑 (第197図=PL.40)

遺構：209土坑の西方、J11区に位置する。東壁の一部を欠くが、長径168cm、推定短径146cmの楕円形を呈し、底面は平坦で壁もなだらかに立ち上がる。出土遺物は無く、構築時期・性格については不明である。

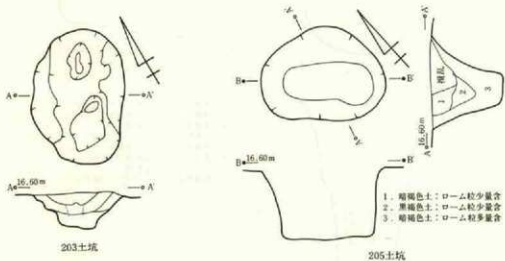
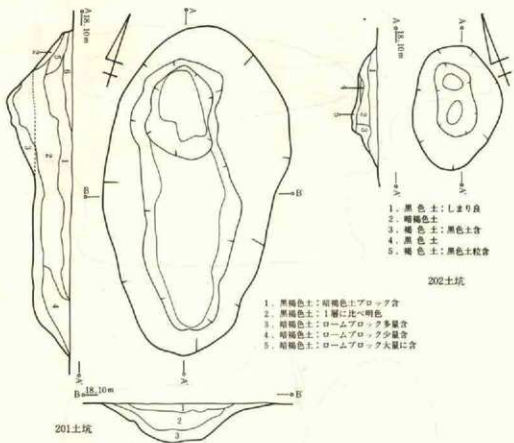
### D. 溝出土の土器 (第200図=PL.63)

近世の地割り区画線として掘られた溝の覆土中からも、各期の縄文土器が混在して出土した。本来的な出土位置を留めず、遺構外出土の遺物と一括して扱うべき資料であるが、整理作業上の便宜から一項を設け、報告する。

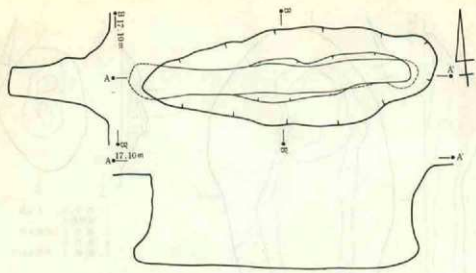
出土資料の内訳は、101溝：前期前半14点・同後半4点、102溝：前期前半18点・同後半4点・中期後半1点、108溝：前期前半58点の、いずれも土器片である。しかし多方の資料は小片であり、108溝出土土器の一部のみを図示した。

1・2は単節縄文RLの施された深鉢、3・4は貝殻背任痕文が乱雑に施された注口付深鉢、5は揚げ底状の底部片である。3・4は関山II式土器の系譜をひく器種であり注意を惹くが、大旨黒浜式土器古段階の資料である。

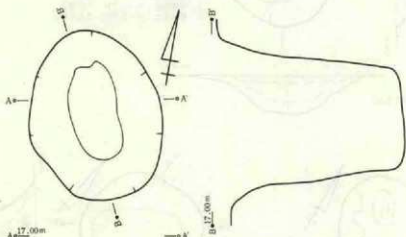
(原田)



第194図 201-203・205土坑 平・断面図

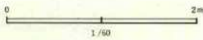


206土坑

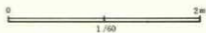
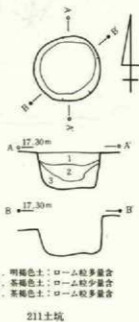
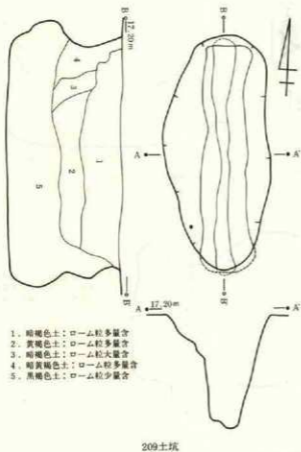
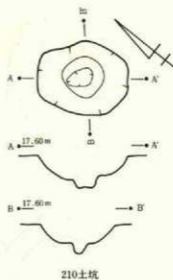
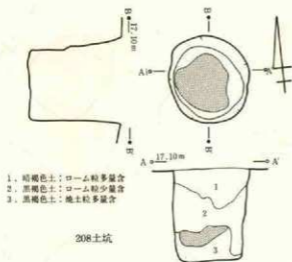


207土坑

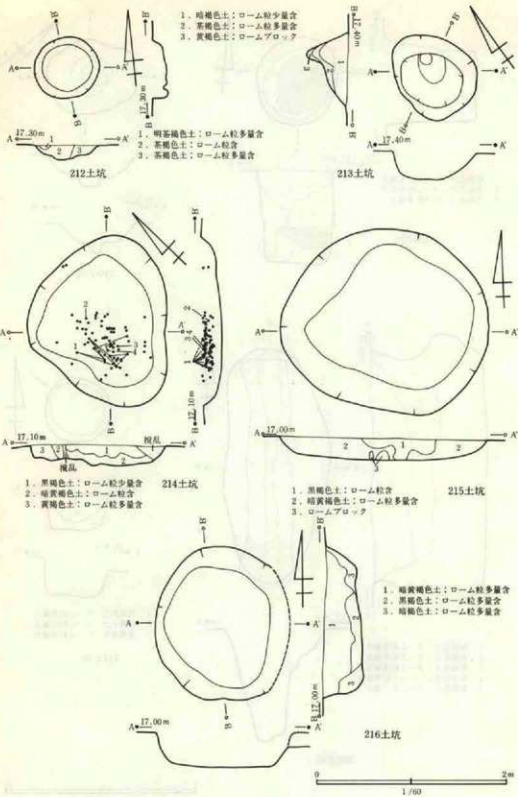
1. 黒褐色土：ローム粒・木炭粒少量含
2. 黄褐色土：ローム粒多量含
3. 黒褐色土：ローム粒含
4. 黄褐色土：ロームブロック多量含
5. 黒褐色土：ローム粒多量含
6. 黄色土：ローム粒含しまりなし
7. 黑色土：ローム粒含
8. 黄褐色土：ロームブロック含粘性土



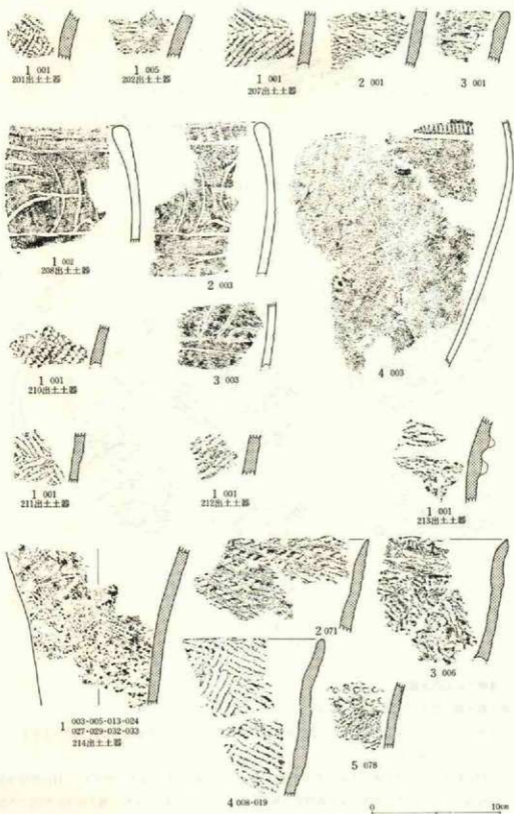
第195図 206・207土坑 平・断面図



第196图 208~211土坑 平·断面图

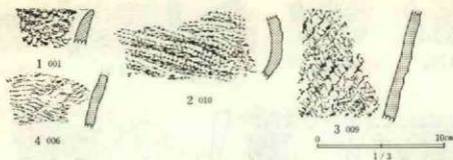


第197図 212~216土坑 平・断面図

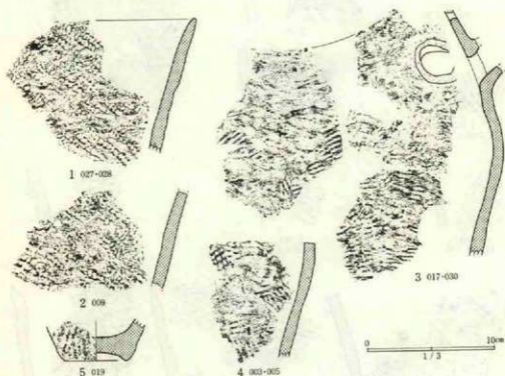


第198图 201・202・207・208・210-214土坑出土遺物

1/3



第199図 215土坑出土遺物



第200図 108溝出土遺物

#### E. 遺構外出土の土器

##### 第1群土器 (第201図: 1~20=PL. 83)

早期前半、燃糸文土器を本群とした。出土総数26点、遺跡内における平面分布は散漫で、まとまった廃棄ブロックは指摘できない。

1~10は断面円頭状の深鉢形土器片で、口縁部直下から単節縄文RLを全面に施すもの。11は肥厚外反する口縁部及び胴部に燃糸原体による条痕文が施されたもの、12~19はいずれも施文原体が判別できない小片、20は内外面ともミガキが丁寧に施された無文土器片である。

磨滅のため、文様の判別ができない資料が多いが、11・20を第4様式（稱荷台式）として認識すべきである他は、いずれも第3様式（夏島式）の範疇に含まれるものである。ただし全体的な様相は、先に報告した上貝塚遺跡第1群土器に比べて、ナデを主とした器面調整が顕著に行われ、文様施文も浅く、より後出的な感覚を受ける。

口縁部破片は図示した20点が全てで、文様組成比は、縄文施文型〈J型〉11点（RL10点、不明1点）、燕糸文施文型〈Y型〉皆無、無文型〈M型〉1点及び絡糸条文1点と、典型的なJ型施文優位の構成をとる。

#### 第2群土器（第201・202図：21～28＝PL.83）

早期前半、沈線文系土器を本群とした。出土総数9点2個体に留まる。28は口唇部内削ぎ、外面全体に太い凹線状沈線が斜走する深鉢で、素地土の練りが不完全のため、粘土粒子が不均一に混じり合う。三戸式土器に属するもので、相互に接合しないものも多いが、一括して1点と数えた。

21～27は比較的薄手で、焼成堅緻な同一個体の土器。口唇部には内外面双方から細かい刻目が施され、胴上半部に単沈線による入組文が、沈線間には横位・斜位の貝殻覆線文が充填される。地文に残る条痕文状の痕痕は、東北地方の物見台式土器に共通するもので、田戸上層式土器中段階の、東北地方貝殻沈線文系土器様式の影響を強く受けた資料である。なお、田戸下層式土器は1点も出土していない。

#### 第3群土器（第202図：29～32）

早期後半、条痕文系土器を本群とした。出土総数7点と僅少である。29が微隆起線文の上に竹管刺突文が加飾され、鶴ヶ島台式土器に比定される他は、いずれも型式同定に耐えない、条痕文のみの土器である。

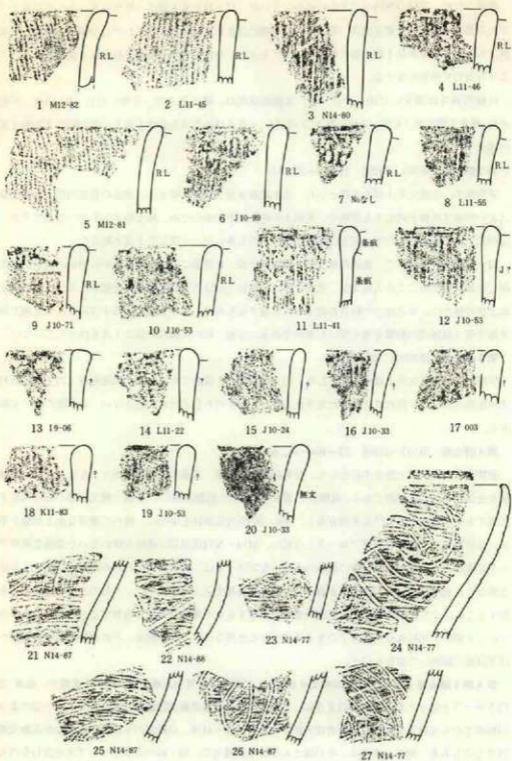
#### 第4群土器（第203～219図：33～464＝PL.65～81）

前期前半、黒浜式土器を本群とした。10軒の竪穴住居跡、3基の土坑の検出とともに、若葉台遺跡で最も主体を占める土器群である。遺構出土遺物を含め出土総数26152点、全出土縄文土器の95.6%が本群土器である。遺跡内における平面分布も、008・009竪穴住居跡を中心に、極めて濃密な出土状態を示すが、住居跡を伴う大きな廃棄ブロックとは別に、M14・N14区周辺に遺構を伴わない小規模な廃棄ブロックが確認された（第148図）。特に後者の小規模なブロックは、黒浜式土器のみが集中的に出土する前者と異なり、前期前半（第5群）の土器とその分布が重複する。両廃棄ブロック毎の土器組成の相違を検討することにより、黒浜期の土器組成の変遷を追求する上で重要な情報を内包するものと思われるが、ブロック間の土器組成分析は未了のまま報告せざるを得なかった。本群は、その文様要素が複雑なため、以下14類に細別して報告を行う。

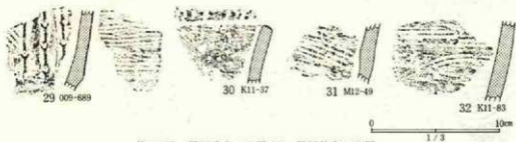
第4群1類土器（33～71）：単節縄文を地文として施し、竹管内面施文による平行沈線で、直線・曲線のモチーフを描く土器。33～35のように、口縁部に縦位の短沈線が加飾されるものと、42～52のように、口唇直下から沈線文が施される2者に大別されるが、36～41等、口縁部の下に僅かな幅ながら無文帯を残すものもある。地文の縄文は、そのほとんどが単節縄文で、35・44のようにループ文を含むものもあるが、組紐文は全く存在しない。器形が明らかな資料は無いが、34・38・43・44のような、波状口縁を呈する深鉢や、45・47～50等の若干口縁が内彎する平縁深鉢が存在する。

文様モチーフ及び竹管内面施文の手法は、前代の関山II式土器に通有な要素であるが、関山II式土器





第201図 早期前半の土器 (1)



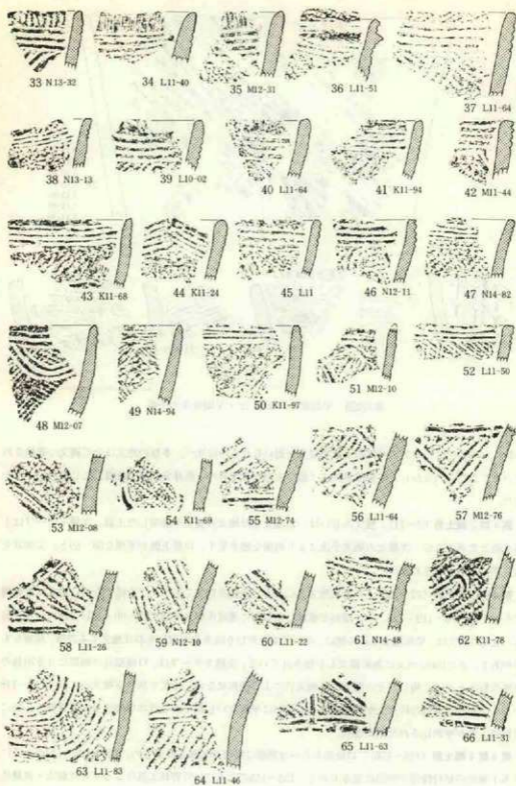
第202図 早期前半の土器 (2)・早期後半の土器

の新しい段階では、地文の90%以上に粗紐文が用いられるのに比べ、本類の地文は全て縄文に置換されている。これらの点から、本類は黒浜式土器の古相を示すもの（新井分類第1段階）として扱うこととした。

**第4群2類土器 (67~71)：**無文あるいは一旦施文した地文の縄文を磨消した土器。文様モチーフは1類土器と共通するが、沈線文の施文手法はより粗雑な感を呈す。口唇上面が平坦な68・69と、尖頭状を示す70・71に大別される。

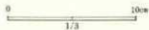
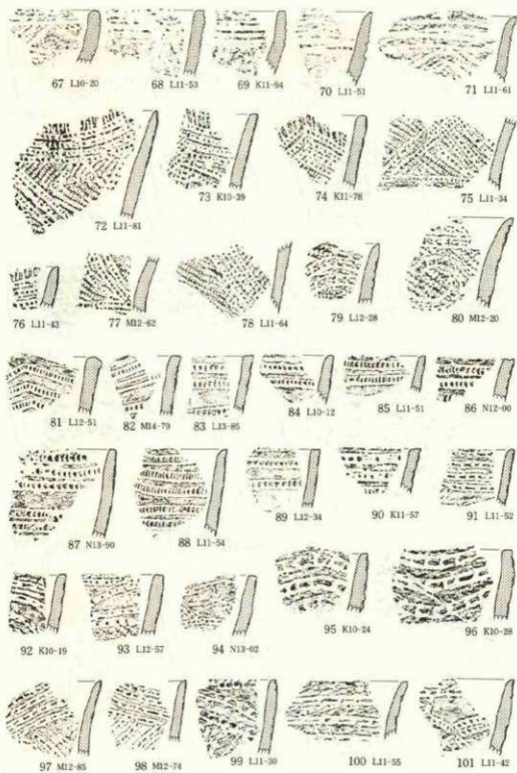
**第4群3類土器 (72~125)：**竹管状施文具による、連続爪形文でモチーフを描くもの。地文に単節縄文を施す72~80・119~125、ナデ整形が卓越した器面に連続爪形文を施す81~99・101~118に大別される。地文の縄文は、単節縄文LRの他に、ループ文を含む0段多条のRLを羽状施文する72等、複雑なものがある。また100は地文に無節縄文Lが施されている。文様モチーフは、口縁部及び頸部に3条前後の連続爪形文を平行に施し、その間を同一施文具による菱形ないしはX字状の直線文か、80・115~118のように更に渦巻状の円形文が加飾される。器形は平縁ないし緩やかな波状口縁を呈する深鉢で、特に口唇部上面が平坦化された例が多い。

**第4群4類土器 (126~156)：**口縁部あるいは頸部に隆帯が加飾されるもの。126~132・134のように、2本1単位の貼付隆帯が頸部に巡るものと、135~155のように、竹管状工具による平行沈線文・連続爪形文と隆帯が併用されるものに大別される。器形は一般的に、外反する深鉢形と思われるが、多くの場合、頸部または胴部上半に強い屈曲を持ち、その部分にも貼付隆帯が加飾される。連続爪形文、沈線文

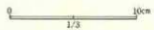
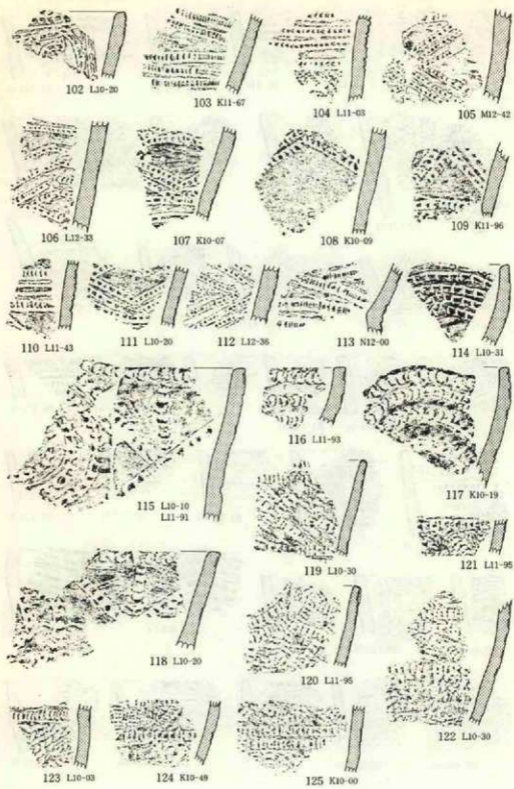


第203図 前期前半の土器 (1)

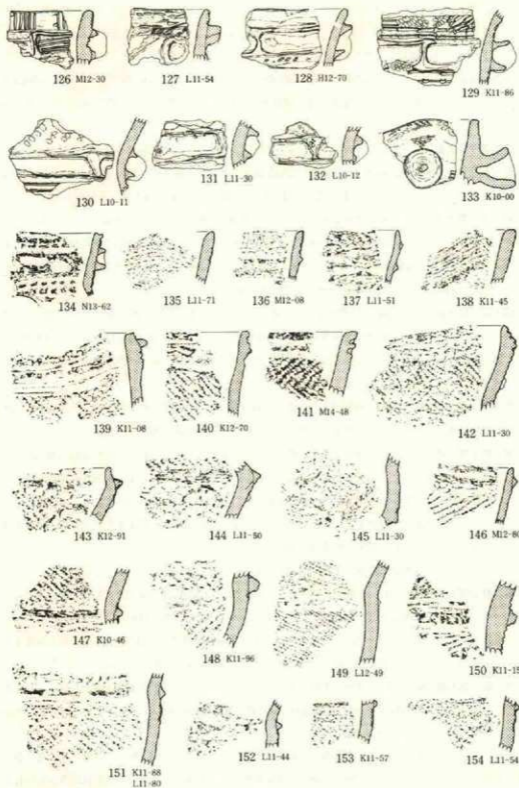




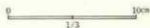
第204図 前期前半の土器 (2)



第205図 前期前半の土器 (3)



第206図 前期前半の土器 (4)





以外の文様要素としては、口唇部直下の短沈線136や、円形刺突文151～154、隆帯上への縄文加飾156等、様々なものがある。また133は、波頂部の下に朝顔状の円形把手が貼付されたもので、所謂注口、あるいは片口土器の一部に通有なものである。

以外の文様要素としては、口唇部直下の短沈線136や、円形刺突文151～154、隆帯上への縄文加飾156等、様々なものがある。また133は、波頂部の下に朝顔状の円形把手が貼付されたもので、所謂注口、或いは片口土器の一部に通有なものである。

**第4群5類土器(157～171)**：竹管状工具による刺突文が施されたもの。横位に連続する刺突文のみが充填された158～163の他、地文に単節縄文・付加条縄文の燃糸文が施された164・165・168、連続爪形文による曲線・直線モチーフ167、貼付文ないしは円形文の169・171と組み合わせられる例がある。

**第4群6類土器(172～194)**：竹管状工具による平行沈線文が施されたもの。沈線文の上に間隔の粗い爪形文を加飾し、地文に単節縄文あるいは付加条縄文を施す172～177、単沈線状の施文効果を表出した178等が含まれる。文様構成は、その多くが先に1類土器として報告した菱形・X字状の直・曲線モチーフをとるが、194のように格子目状モチーフを描くものもある。

**第4群7類土器(195～202)**：竹管状工具によるコンパス文を描く土器。195は刺突文と、201・202は平行沈線文と、各々組み合わせる施文される。いずれも関山Ⅰ・Ⅱ式土器に多用されるコンパス文に比べ、施文技法が著しく乱雑、かつ施文効果も劣る。黒浜式土器古段階（新井分類第Ⅱ段階）の文様要素として重視される資料であるが、出土量は少ない。

**第4群8類土器(203～205)**：竹管状工具による平行沈線により、縦位の綾杉文を描くもの。203～205は同一個体に属し、縦位の区画線を施した後で、その間隔を斜行沈線で充填する。

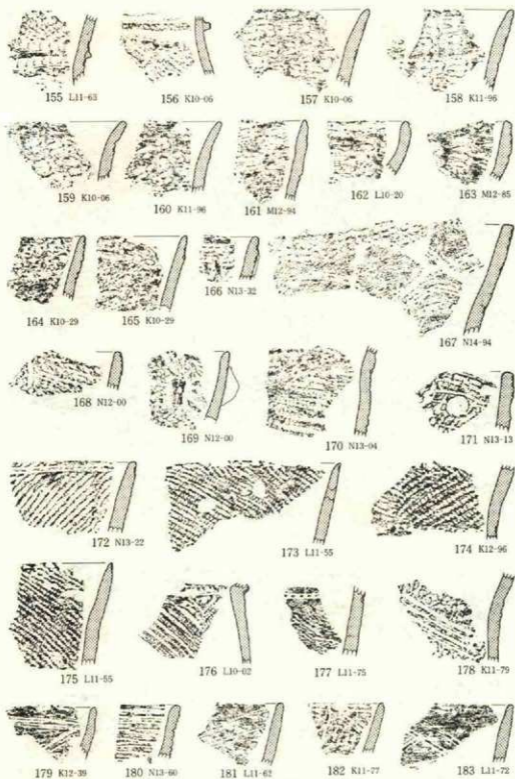
**第4群9類土器(206～242)**：沈線文による格子目文、あるいはそれが崩れた乱雑な文様が施された土器。資料の多くは無文地にナデ整形痕が残るが、212・213・231等、縄文地の上に沈線が施された例を含む。口縁部の形態は、206のような凹状部分が加飾される例や、口唇断面が円頭状の210もあるが、多くのものはやや外反気味で尖頭状を呈し、特徴的である。また238～242は、胴下半部の資料で、縦位の沈線が等間隔で施され、それに数本の斜沈線が加飾される。

一般に、本類の文様構成は、胴下半部に斜縄文を施した朝顔形の深鉢が多いものと思われる。

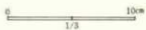
**第4群10類土器(243～261)**：貝殻文が施された土器。243～253は貝殻腹線文が、254～260は貝殻背圧痕文が施される。貝殻腹線文は、施文工具を器面に立てて施した243～246・248～251と、器面に寝かせて、半ば押し引くように施した247・257に分けられる。また貝殻背圧痕文にも261等の押し引き文が含まれる。大宮台地の同時期の土器組成に比べ、当遺跡における貝殻文土器の出土率はかなり低くなっている。

**第4群11類土器(262～266)**：構筒状工具による列点文と、同一工具による平行沈線文が併用された土器。口縁部直下に縦位の列点文が施された262、胴部破片263～265があるが、文様モチーフの類似性から、竹管状工具を用いた266も本類に含めた。

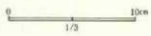
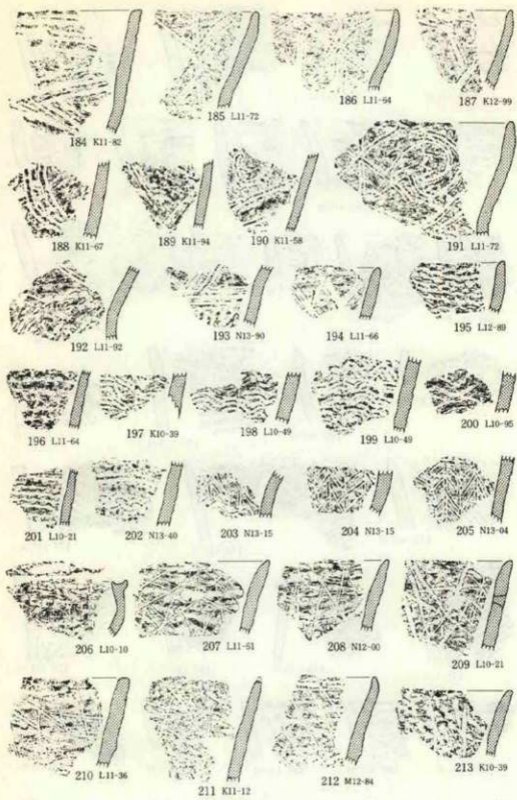
文様モチーフ及び施文工具は、中部地方の有尾式土器に通有なものだが、胎土には他の黒浜式土器同様、繊維の混入が認められる。有尾式土器の文様要素をそのまま導入しながら、成形技法等が在地化している土器と考えることができる。類例は、埼玉県比企丘陵以北、群馬県方面から最近相次いで報告されている。



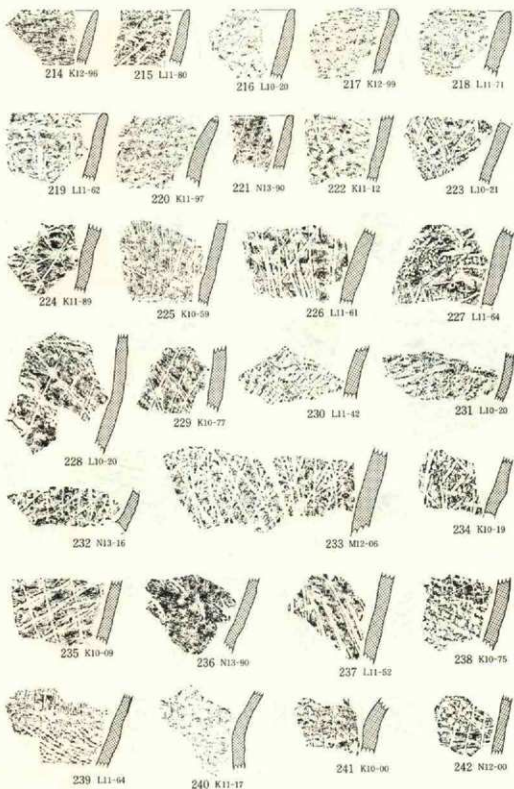
第207図 前期前半の土器 (5)



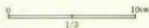
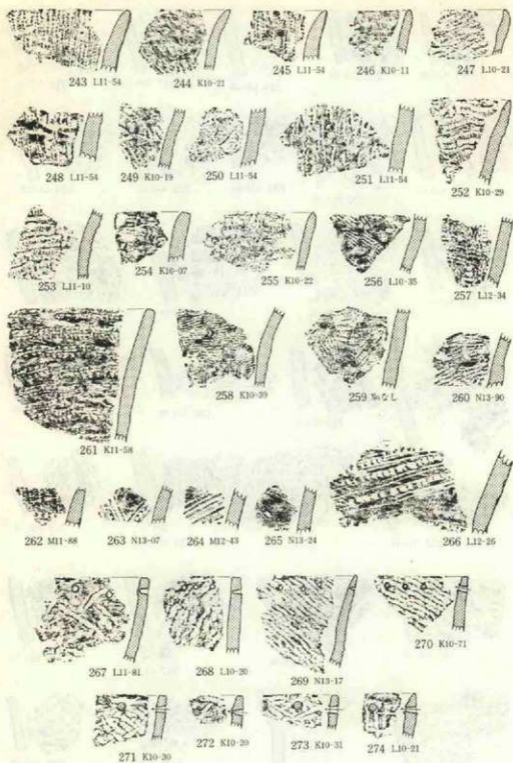




第208図 前期前半の土器 (6)



第209図 前期前半の土器 (7)



第210図 前期前半の土器 (8)

第4群12類土器(267~274):所謂有孔土器を本類とした。口唇部直下に円形刺突孔が巡るが、孔が内面にまで貫通しない267~269と、内面にまで貫通する270~274に大別される。地文に網目状縄文、単節縄文が施されたものが多く、274のように貝殻条痕文が施された例もある。なお267は未貫通の刺突孔の内面が隆起し、所謂「突瘤文」的な施文効果を持っている。出土資料は図示したものがほとんどで、少片が多いが、黒浜式古段階の土器組成中に含まれる1タイプとして注意される。

第4群13類土器(275~317):捻糸文の施文効果が表出されるもの。その大部分は軸縄捻糸文か、捻糸付加条縄文で、付加された捻糸の単位も、2条ないしは3条とバラエティーに富むが、詳細な施文原体の分析は未了。施文手法自体にも、乱雑な羽状・変形モチーフを表出するものや、木目状捻糸文的な効果を出すもの等が含まれる他、施文原体自体も、無節の縄文を結節状に付加した294・295等が含まれる。

第4群14類土器(318~406):単節・無節の縄文、成いはそれを加工した綾縄文、ループ文、網目状縄文等で器面を飾るもの。若葉古遺跡出土の黒浜式土器のうち、量的に最もまとまっている。口縁部直下に縦位の短沈線を加え、以下ループ文が併用される325や、多段のループ文が特徴的な326~328は、より古手の文様要素として注意される。また羽状縄文を持つ土器は、結束の原体を使う329・397がある他、そのほとんどが異方向施文の組み合わせによって表出されたものである。さらに縄文施文部相互の接合点に、ミミズ腫れ状の縦位の微隆起線が残された資料346・351・353もある。器形は330・331に見るように、多くが口縁部が開く所謂朝顔形の深鉢だが、頸部で強くくびれる333・363や、平縁に小突起が付された372も存在する。整理時間の絶対的制約から、施文原体の分析が未了ではあるが、概して整然と施文された単節縄文の土器が量的に多いようである。

第4群土器底部(407~464):いずれも掲げ底状を呈し、底部が外に張り出すものと、張り出さないものに大別される。前者は、所謂「円板貼付技法」による成形工程を示すが、断面に明瞭な接合痕を残す資料は意外に少ない。また底面に縄文が施されたものは407~413のみである。

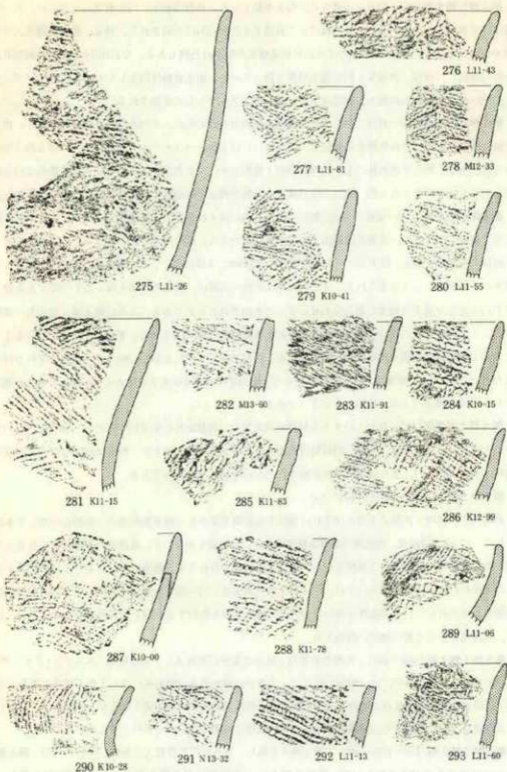
#### 第5群土器(第220~222図:465~510)

前期後半、諸磯・浮島式土器及びそれに後続する前期末葉から一部中期初頭の土器群を一括して本群とした。出土総数310点、当該期の遺構は検出されず、出土量も少ないが、遺跡内の平面分布を見るとN13・N14区の境界付近に、小規模ながら明瞭な集中箇所が存在する。廃棄ブロックとしてはほぼ完結するものと思われるが、このブロックは、第4群土器(黒浜式)の一部とも重複を示すことから、両型式の土器を一部共有している可能性が強い。型式間の推移状況を検討する資料として有効なものである。以下、文様要素から6類に細別、報告する。

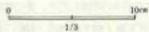
第5群1類土器(465~469):内厚の竹管状工具による平行沈線文で、英国国旗“ユニオン・ジャック”状のモチーフを描くもの。同一個体の破片で、大波状口縁が若干内彎気味に立ち上がる深鉢と思われる。胎土に微量の繊維が含まれるのが特色で、黒浜式土器に類似する成形手法をとるが、文様モチーフはむしろ諸磯式土器に近似する。諸磯a式土器の直前段階に位置づけられる資料と考えておきたい。

第5群2類土器(470~479):細かく密な縄文を施し、さらに円形竹管文を加飾した471~473、縄文地の上に浮線文を貼付する474~479、連続爪形文による幾何学的文様を施した有孔浅鉢470を含む。471~473が諸磯a式の、その他が諸磯b式古・中段階の資料である。

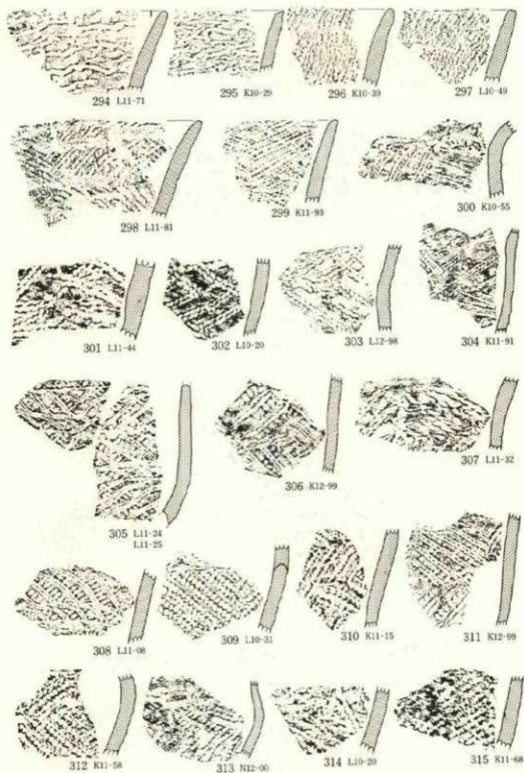
第5群3類土器(480~496):竹管状工具による平行沈線の横位施文を基本に施し、その間を波状沈線



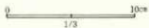
第211区 前期前半の土器 (9)

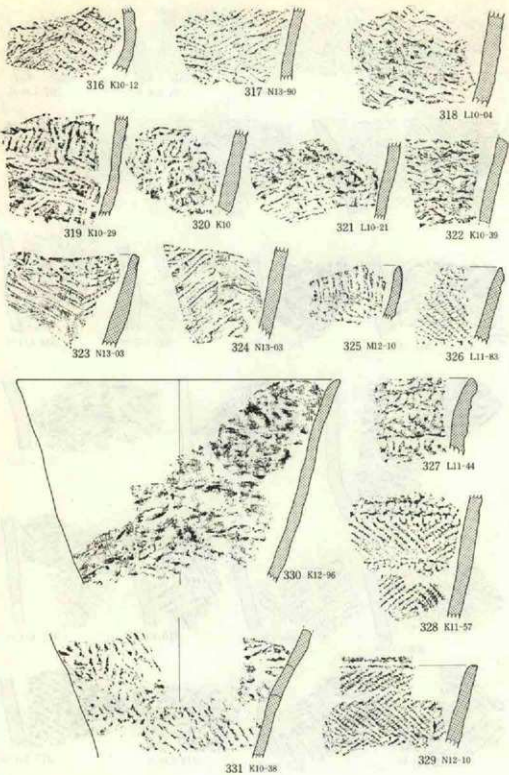




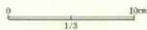


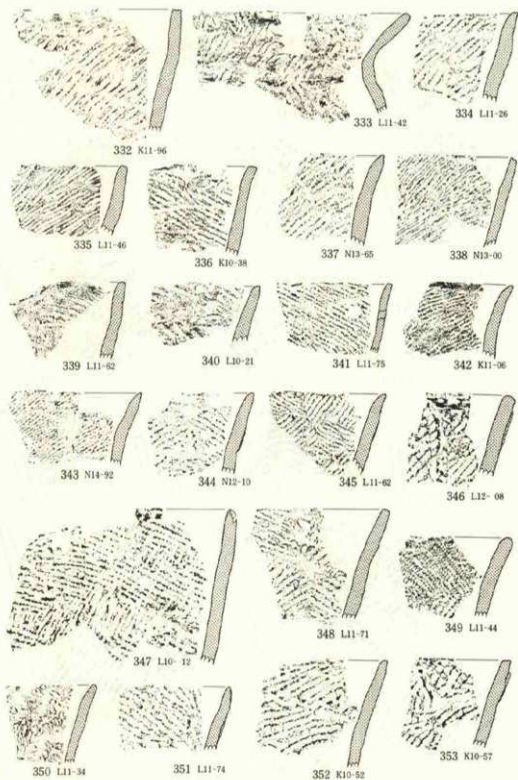
第212図 前期前半の土器 00





第213図 前期前半の土器 (1)

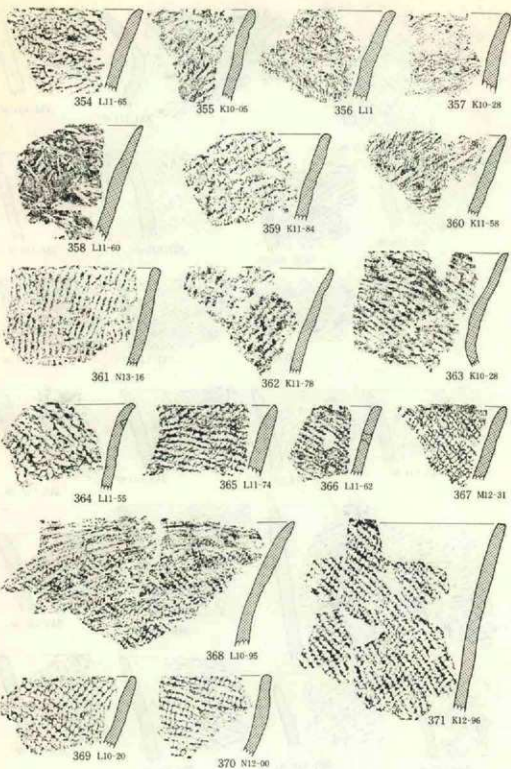




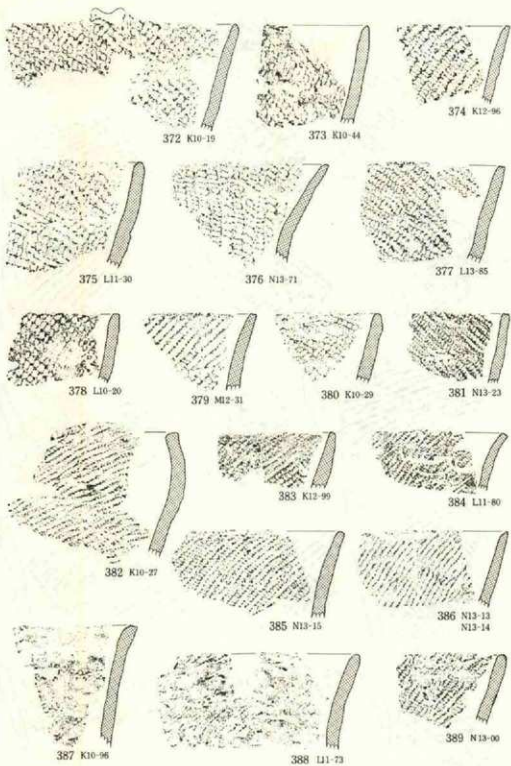
第214図 前期前半の土器 ③



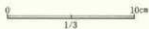


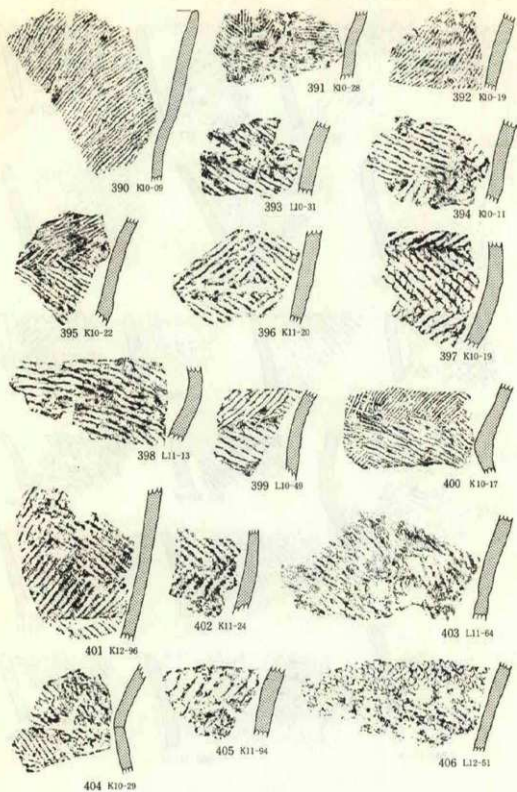


第215図 前期前半の土器 03

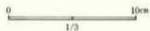


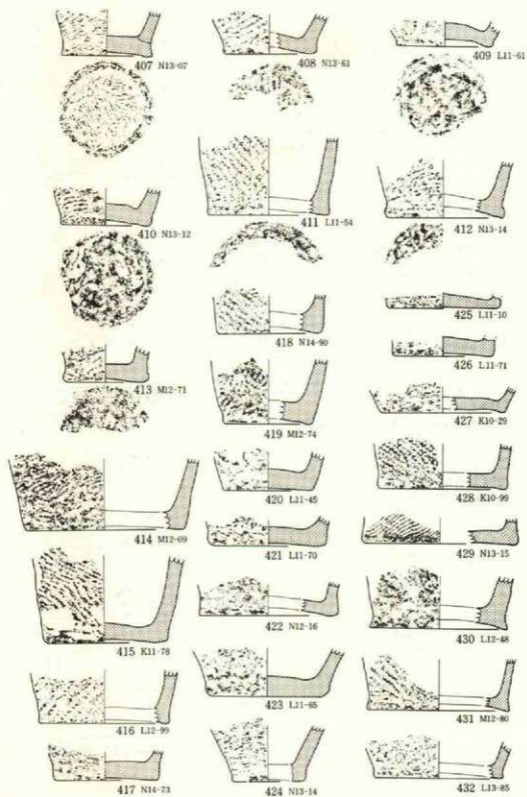
第216図 前期前半の土器 (14)



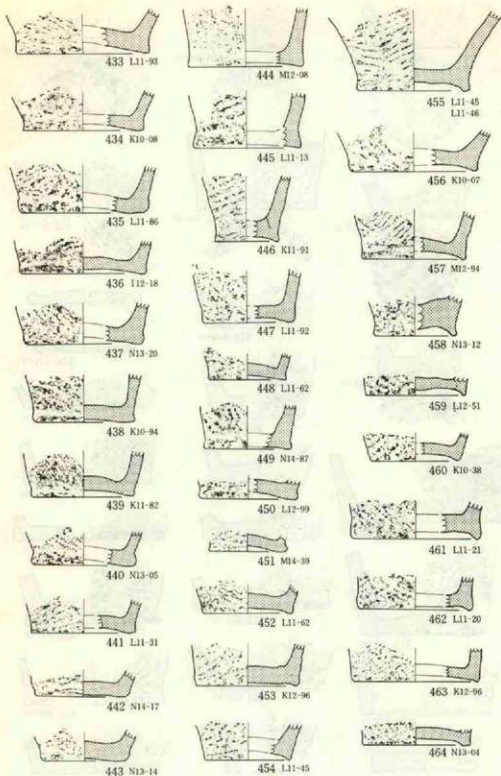


第217図 前期前半の土器 09



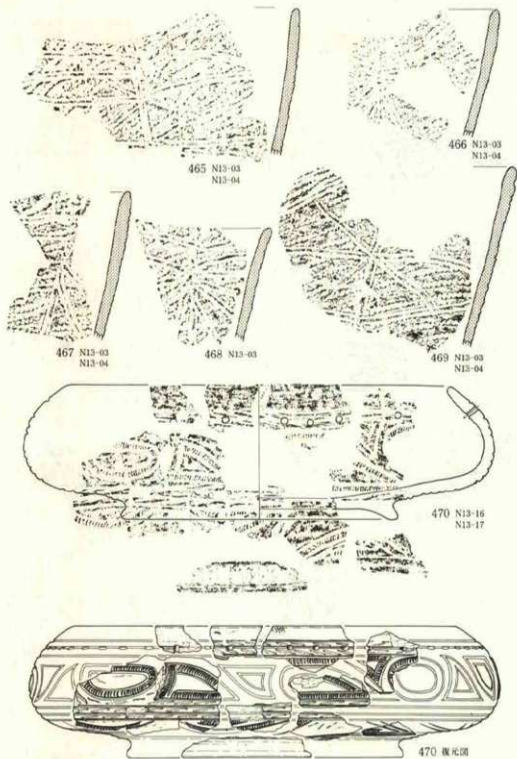


第218図 前期前半の土器 06



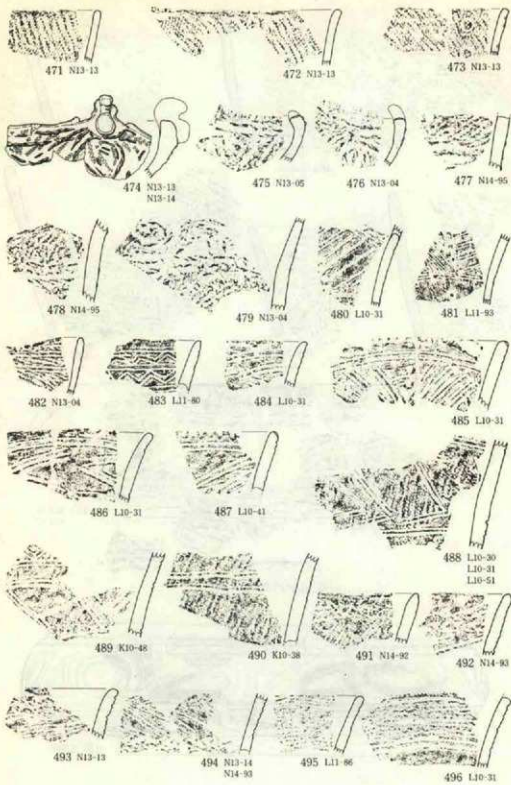
第219図 前期前半の土器 07



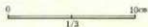


第220図 前期後半の土器 (1)





第221図 前期後半の土器(2)



文、有節沈線文、波状沈線文で埋めるもの。480・481は、地文に燃糸文が施された浮島Ⅰ式土器、482～496は比較的乱雑に竹管文でモチーフが表出され、浮島Ⅱ式土器前後に位置づけられる。器形は、ほぼ全てが朝顔形に口縁部が外反する深鉢である。

**第5群4類土器** (497～501)：前期後半に属する縄文施文の土器を一括した。一部縄文時代中期初頭にまで降る資料も含むものと思われる。いずれの資料も、内外面のミガキ整形が行き届き、堅緻な焼成である。羽状に縄文を施す497、口唇部に刻目、或いは縄文を施す499・500等がある。

**第5群5類土器** (503～505)：貝殻文のみが施された土器を本群とした。貝殻腹縁文を縦位に施す502、貝殻背圧痕文の上に細い沈線文を充填した503、貝殻腹縁による波状文を持つ504・504がある。浮島Ⅱ式、或いはⅢ式土器の範疇で捉えられる。出土量は多くない。

**第5群6類土器** (506～508・510)：密で整然とした貝殻腹縁文上に、平行沈線文或いは有節沈線文を加飾した興津式土器506～508及びボタン状貼付文を特色とする諸磯C式土器510がある。出土量は少ない。

**第5群土器底部** (509)：縄文が施された平底の底部片。細かな縄文と入念な器面整形から、諸磯a式土器に属する可能性が高い。

#### **第6群土器** (第222図：511・512)

中期前半、五箇ヶ台式土器を本群とした。出土点数は2点のみで、いずれも半肉形状の沈線文と、三角形除刻文によって、幾何学的なモチーフを構成する。

#### **第7群土器** (第223図：513～523)

中期前半、阿玉台式土器を本群とした。出土総数47点、結節沈線文による楕円形の文様モチーフを描く513～516、貝殻腹縁文によって胸部にスリット状の刻目を施す517～523がある。いずれも阿玉台Ⅰb式、あるいはⅡ式段階に属するものである。

#### **第8群土器** (第223・224図：524～541)

中期後半、加曾利E式土器を本群とした。出土総数197点、太い隆帯により文様が描かれた、所謂「中峠式」土器に近似する524～527を始め、加曾利EⅠ式・Ⅱ式に属する528～536と、太い曲線的な沈線文と磨消縄文、或るいは微隆起線による文様区画の卓越した加曾利EⅢ式・Ⅳ式537～540に大別される。また、鳥形把手541や、底の中央部に穿孔のある台付鉢542が含まれる。

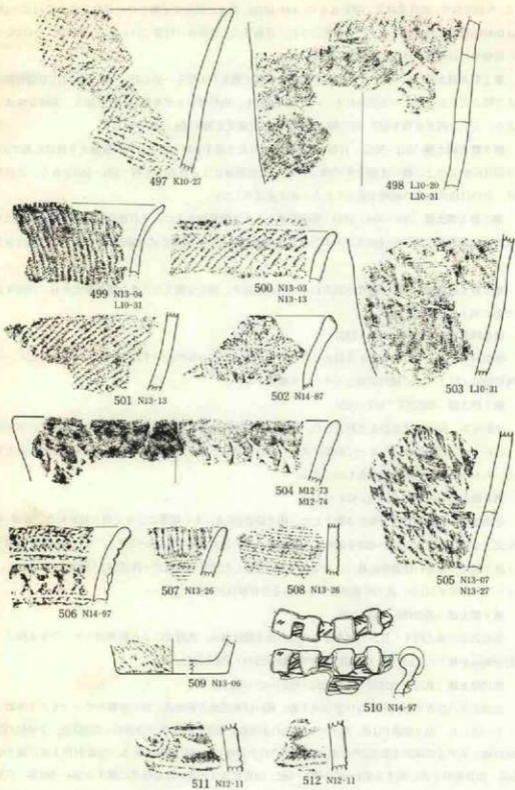
#### **第9群土器** (第224図：543～550)

後期前半の堀之内Ⅰ・Ⅱ式土器をまとめた。出土総数84点。沈線文による曲線のモチーフを主体に、集合条線が施された547や、口縁部突起が特徴的な549・550を含む。

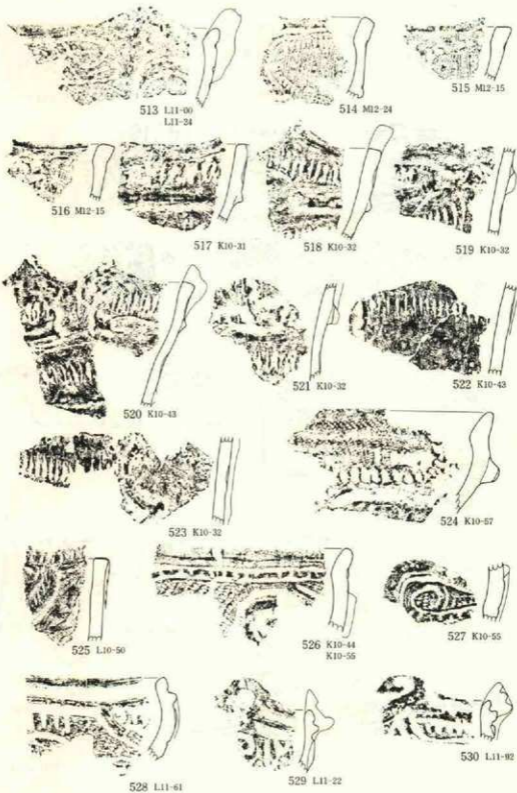
#### **第10群土器** (第225・226図：551～552・556～572=PL, 82)

後期前半の加曾利B式土器及び曾谷式土器、或いは東北地方新地式土器の影響を受けたものを本群として一括した。出土総数193点。無文で7単位の小突起と頸部に段を持つ浅鉢形土器551と、5単位の波状口縁を呈する深鉢形土器552の2個体が復元された以外は、破片資料である。加曾利BⅠ式に属する556、加曾利BⅡ式に属する551・552・557～562、加曾利BⅢ式或いは曾谷式に属する564～567等、各型式を含む。なお、558は、その後の整理作業によって、552の波頂部に接合し、同一個体であることが確認された。

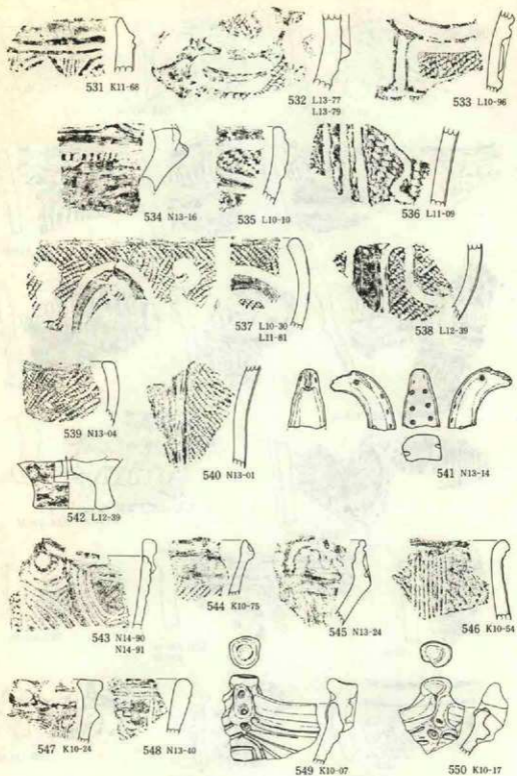




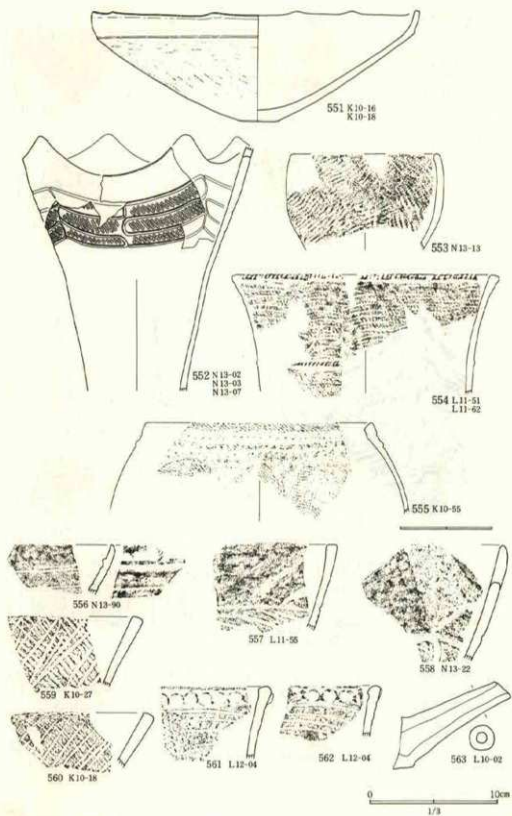
第222図 前期後半の土器 (3)・中期前半の土器



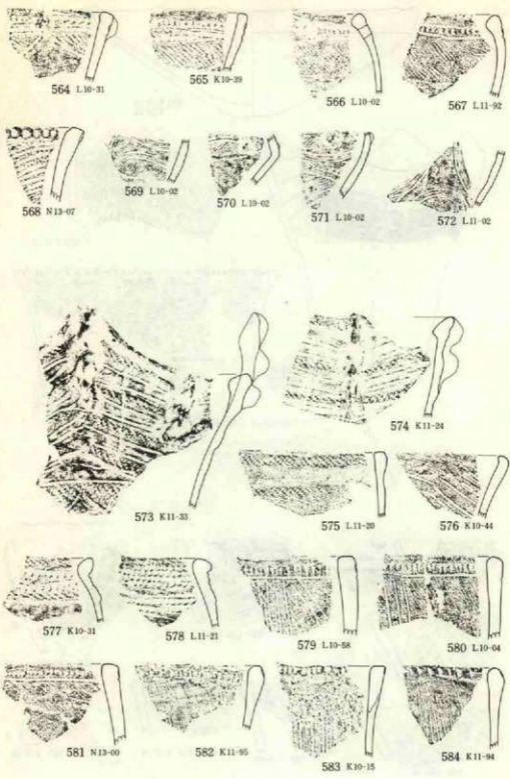
第223図 中期前半~中期後半の土器



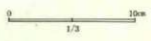
第224図 中期後半～後期前半の土器



第225図 後期後半の土器 (1)

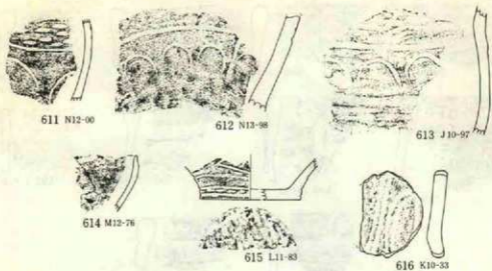


第226図 後期後半の土器 (2)









第228図 晩期の土器・土鉢・土製円板

0 10cm  
1/3

569～562は、東北地方、新地式土器の影響を受けたもの。黒色を呈し、砂粒が多く堅緻な焼成で、他の本群土器とは明らかに異質な感触を持つが、文様施文手法等から搬入品ではなく、在地化した土器と考えられる。

#### 第11群土器 (第225・226図: 553～555・573～584=PL. 82)

後期後半、安行Ⅰ・Ⅱ式土器を本群とした。出土総数18点。大きな瘤状突起がある把手が特徴的な573・574を始め、その大半が安行Ⅰ式土器である。575は帯縄文系の深鉢形土器、579～584は所謂紐線文系土器から変化した粗製深鉢形土器である。なお576は、加曾利B3式として捉えた方が良いかも知れない。

#### 第12群土器 (第227・228図: 585～615)

安行Ⅲa式以降、縄文晩期の土器群をまとめた。出土総数310点。安行Ⅲa式土器に属する585～590、同Ⅲb式土器に属する591・592、東関東地方に分布の主体をおく埴山3式土器に属する593・594があるが、他の大半は、太い沈線で曲線的な文様を描く安行Ⅲc式及びⅢd式土器である。

また、614は薄手の無文土器、615は晩期末、荒海式土器の範疇に属する底部破片である。底面に2本越え、2本潜り、1本送りの網代底が認められる。

#### 土錘・土製円板 (第228図: 616～644=PL. 83)

616は前期後半の土器片を利用した土錘で、長軸の上下に切れ込みを持つ。617～644は同じく前期前半の土器片を利用した土製円板で、周縁が研磨されたものはほとんどなく、既して粗い作りを見せる。土偶等の呪術的用途を持つ遺物は、精力的に探索したが、全く出土していない。(原田)

## F. 石器・石製品

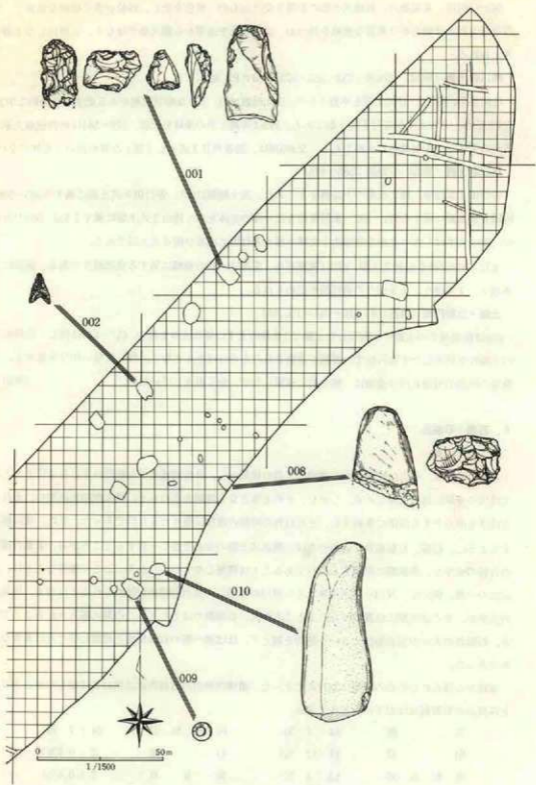
### (1) 概 要

若葉台遺跡は、そこに検出された遺構と土器の様相から、草創期後半から晩期後半に及ぶほとんど縄文時代の全期に亘る遺跡である。しかし、その主体となる時期を求めると、縄文前期黒浜期の、それも古段階を中心とする段階に集約され、それ以外の時期の遺物は微々たるものであった。また、後に検討するように、石器、石製品及び礫の分布は、黒浜式土器の分布と良く一致するところから、若葉台遺跡の石器の大半が、黒浜期に帰属するものであることは理解しやすい。しかも、ここで重要なことは、黒浜式の一部、例えば、N13～14区境界ライン周辺の土器に、後出的様相が認められるとは言え、黒浜式の大半が、その成立期に位置づけられるところから、石器群のほとんどもこの期に編入されることである。石器群の大半が包含層出土という制約を超えて、ほぼ単一期の石器組成を把握し得た点は重要な成果であった。

遺跡から得られた石器の総数は2317点に上った。遺構内検出の石器内訳は第31表に示したが、グリッド採集品の石器組成は以下のとおりである。

石	錘	24 ( 7 % )	円	礫	製	品	24 ( 7 % )
削	器	41 ( 12 % )	石	皿			2 ( 0.6% )
楔	形	石	器	裝	身	具	2 ( 0.6% )
石	錐	1 ( 0.3% )	石	剣			1 ( 0.3% )
尖	頭	器	2 ( 0.6% )	砥	石		1 ( 0.3% )





第229図 若葉台遺跡遺構出土の石器・石製品

剥片	165 (49%)	柱石	2 (0.6%)
石核	32 (10%)	石錘	1 (0.3%)
石斧	19 (6%)	その他	4 (1%)
礫器	1 (0.3%)	礫	1848

## (2) 遺構内の石器

遺構内からの石器の出土は、一般的な傾向として貧弱であった。特に2次加工の認められる石器は僅少で、ほとんどが礫と剥片とによって占められている(表31)。詳しい出土状況は検討していないが、遺留されたものは少なく、土器片と共に廃棄されたものが多いと考えられる。第229図に代表的な石器の遺構別分布を示した。

**001竪穴住居跡** 住居跡としては最も石器の出土が多かった。破砕礫とチャートの小剥片が大半を占めていたが、少量の2次加工のある石器が出土した。第230図はチャート製両面調整の石器。一端を欠損しており全形は不詳である。如何なる石器であるか良く分らない。第235図74はチャート製楔形石器。幅広の剥片の上下両端に被加撃痕がある。第231図38・第235図69は2次加工のある剥片で、削器と分類した。共にチャート製。石斧は第239図95に示した打製石斧が一例のみ検出された。チャート製。板状の河床礫を素材とし、周辺に粗い剝離痕が認められる。刃部は欠損後の再加工と見られる。なお、石器の一面に黒色タール状付着物が斑状に認められる。

**002竪穴住居跡** 礫、剥片以外には、石錘(第230図9)と、凹石破片が1点ずつ検出された。石錘は凹基で、脚端の尖り気味になるもの。チャート製で、表裏に亘り良く調整がゆき届いている。

**003竪穴住居跡** 18点の破砕礫と共に、石錘が1例検出されている(第230図13)。形態、素材共に、002竪穴住居跡のものに近似し、黒浜期の典型的錘形態を示している。

**008竪穴住居跡** 礫片と共に、磨製石斧頭部破片(第238図90)、石核(第236図81)が検出された。石斧は凝灰岩製で、表裏、側面に研磨痕が著しい。図には研磨面の単位と、その研磨方向を示した。石核はチャート製で段三角錐状を呈する両設打面のもの。作出される剥片は、成人の拇指の爪程度の貝殻状剥片である。

**009竪穴住居跡** 7点のチャート製剥片と共に、第245図1に図示した偏平な小玉が出土した。石質は滑石ではないかと思うが、良く分らない。下面は平坦であるが、上面が斜めに研磨を受け、横断面は台形状になっている。上面及び側面に細い線刻が数条ずつ認められる。色調は濃緑色で、光沢を帯びる。床面に近い位置からの出土であり、確実に黒浜期初頭の遺物と捉えられる。

**010竪穴住居跡** 石器と認め得るものは、第243図118に示した乳棒のみである。砂岩の細長い礫の一端に加撃痕が、他端に2面からなる研磨面が看取される。石槌と乳棒との兼用石器である。

**分布状況(第148図)** 包含層中の石器の分布が、黒浜式土器の分布と重なり合うことは既に指摘したとおりであるが、詳しく見ると、石器群は6つのブロックに分かれて分布している。

**ブロック1** N13-N14ライン境界を中心とするブロックである。前期後半期の土器ブロックとの関連が問題であるが、未検討である。径約50mの範囲に、礫片を主体とする遺物の広がりがある。石器には各器種が少量ずつ含まれている。

表 31 若葉台遺跡遺構出土石器一覧

	001	002	003	004	005	007	008	009	010	011	102	208	215	小計
石 鏃	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	4
削 器	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
楔形石器	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2
石 鏃	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
石 斧	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
円形製品	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	3
石 皿	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
軽 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
砥 石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
玉	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
剥 片	10	2	-	2	3	1	-	7	-	7	-	-	1	33
石 核	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	2
礫	27	3	18	7	10	2	4	-	2	8	1	1	1	84
小 計	42	7	19	9	15	5	6	9	3	16	1	1	3	136

片が検出された。礫は少なく、石鏃、削器、楔形石器の検出も多いところから、石器の製作工房が存在した可能性が高い。この場合、ブロックの位置から推して、001・004竪穴住居跡の居住者が製作主体と考えられる。

ブロック 5 K10-11・L10-11区にまたがり、ほぼ100m×100mの範囲から、多量の礫片と共に石器が検出されている。規模から見て、多数の小ブロックの重複が想定されるが、詳細は未検討である。本ブロックは、005・007・008・009・010竪穴住居跡に圍繞された空間に相当しており、上記5基の住居跡との密接な相関が指摘される。先に、ブロック4と001・004竪穴住居跡との関係を指摘したが、集落内における空間利用を考察する上での好資料となろう。

ブロック 6 J10区西北コーナーに位置している。完掘できなかったが、礫を主体とするブロックであり、集石的様相が濃い。やはり黒浜式土器の分布と重複しており、ブロック4、ブロック5のあり方から見て、調査区外に住居跡の存在する可能性が高い。

出土石器解説 包含層検出の335点のうち、代表的な石器について図に従って解説したい。石器は第230図から第244図まで、130点を実測資料として掲げ、1から通し番号を付してある。以下、挿入番号を略し、実測番号に従う。

・石鏃(1-26) 3・9・13・18の4点は遺構内の資料で、その一部は既に記載した。1か柳葉形の形態をとり、側縁に鋸歯状剥離が看取されるなど特異であるが、他は大旨三角鏃の範疇に属する。基部の内彎する均整のとれた例が多いが、24-26の3者は基部の彎曲が弱い。両面調整のゆきとどいたも

ブロック 2 N12ポイントを中心に、径約30mの範囲に破砕礫の集中が認められる。

剥片、石器をほとんど含まず、集石的な性格が指摘される。

ブロック 3 M12ポイント周辺部に、礫片を主体とするブロックが認められる。

分布は散漫であるが、ブロック2と共通した性格のブロックではないか。

ブロック 4 L12-24区を中心として多量の剥

が多い。石質は11・12・15・19・22の5例が黒曜石製である他はチャートとなっている。

・尖頭器(27-29) 27は黒曜石の厚い横長剥片を素材とした石槍である。非対称で腹面側は打痕部にのみ調整が認められる。29は石鐵とも見られるが、厚手で矢柄への装着は難しいであろう。チャート製で、周辺加工の槍の一種としたい。

・削器(30-64) 定型的な石匙、あるいは、つまみ形石器などと呼称されているものは、30-32の3例で、大半のものは剥片に簡単な打欠きを加えた粗製の削器である。粗製のものは不定形であり、分類が難しい。石質は、やはりチャートが一般的であるが、39・45・46は玄武岩、56は黒曜石、61・63は玉髓、64が石英となっている。黒浜期における、このような多くの削器の検出事例は、当該地域においては、ほとんど知られていない。

・石錐(65) チャートの幅のある剥片の一端を尖らせている。加工は錐体部に集中し、腹面から背面へ剥離が施されている。錐体の横断面は三角形となる。

・楔形石器(66-75) 所謂両極石片である。一般に楔形石器には、(1)扁平で作業縁(加撃一被加撃によって生じるハジケにより形成される縁辺)が器体長軸と平行になるもの(2)角柱状を呈し、作業縁が長軸に直交するもの両者があるが、若葉台遺跡前期における様相は、(1)を主体とし、(2)は72の1例が知られているにすぎない。全例チャート。

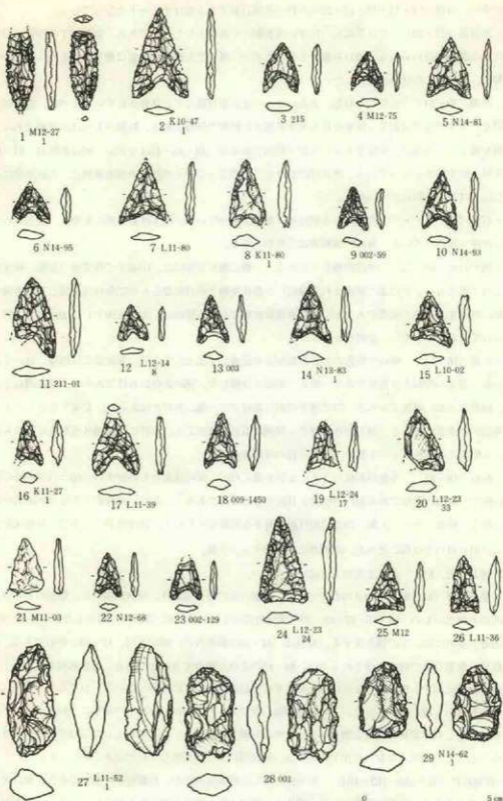
・彫器(76-78) 極めて特色のある石器が3点近接して出土している。集計表では削器に含めておいたが、通常の削器とは異質であり、敢えて彫器と分類した。76の素材は石核であろう。基部調整と共に、極状の刃部に細加工がある。77は厚手の剥片素材で、一端に刻打が加えられ、交叉することによって刃部が形成されている。78も剥片素材で、76例に似た基部加工と、刻打による極状面形成が認められる。3例共に青灰色チャート製で、同一母岩の可能性はある。

・石核(79-81) 多数の石核のうち、3例を選んだが、同巧異曲のものが多い。80は打面転移の著しい例で、削器の素材である剥片の生産を目的としたものであろう。各面に比較的大き目の剥離痕が認められる。粗悪なチャート製。79は平坦打面を有する両設型の石核で、被作出剥片は小型、貝殻状を呈する。81に就いては既に述べた。両例共に良質のチャート製。

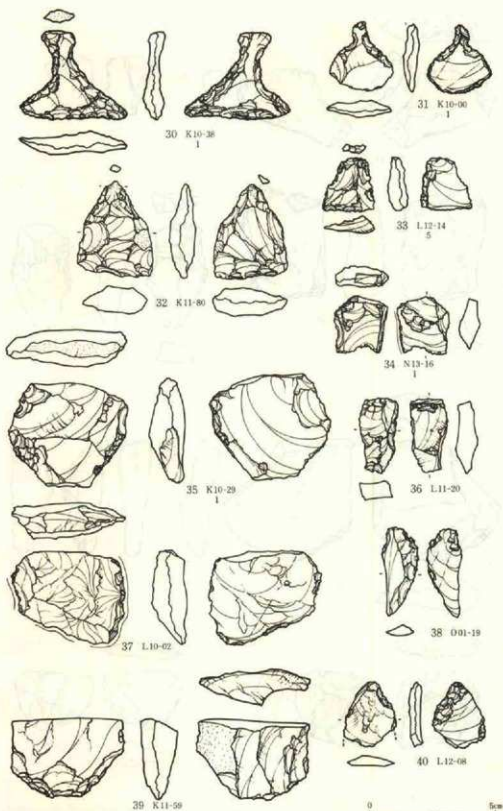
・軽石(82, 83) 共に2次加工は認められない。

・磨製石斧(84-90) 19点の石斧のうち、磨製のものは7点あり、全例実測した。磨製石斧には、(1)所謂乳棒状のもの(84・85・87・88)(2)所謂定角式のもの(86・90)(3)扁平で側稜を有するもの(89)がある。量的には、(1)が他を圧する。石質は、84・85が緑色片岩、86が頁岩、87-89が砂岩である。90は既述。磨製石斧で特に注目されるのは、84・85の2点が接合することである。接合状況を見ると、あたかも石核に剥片が接合するように84と85は平面的に重なるように接合している。おそらく、本来は接合後の形態から窺われるように、1個の乳棒状石斧であったものが、使用中の衝撃に、緑色片岩という、板状に剥離し易い素材の性質も加わって、2枚に分離したものを、各々再加工して(3)類の石斧に再生したものと考えられる。なお、再加工の詳細は、実測図によって判断していただきたい。

・打製石斧(91-100, 102-104) 91-93に示した短冊型石斧が、打製石斧の典型であり、他はその変異と考えられる。一般的特徴として、礫皮を一面に大きく留める礫片を素材としている。この素材剥片は103のようなものであったろうが、剥片というよりも、半割礫と呼んだ方が適切かもしれない。2次

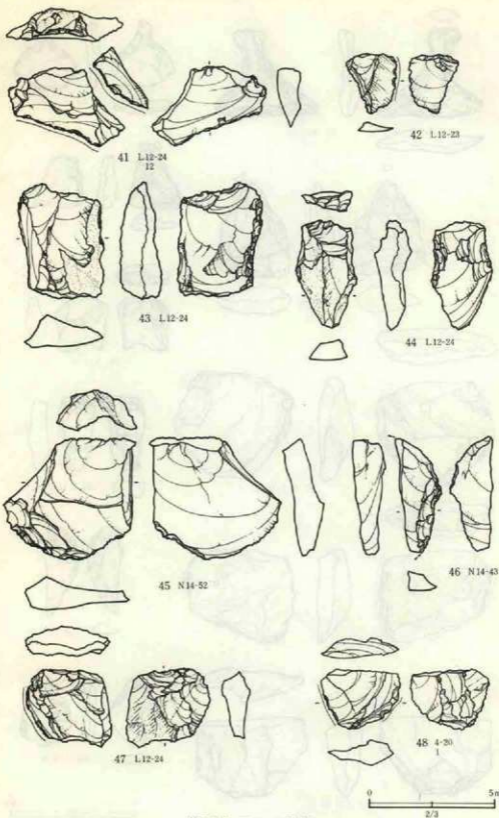


第230图 石 器 (1)

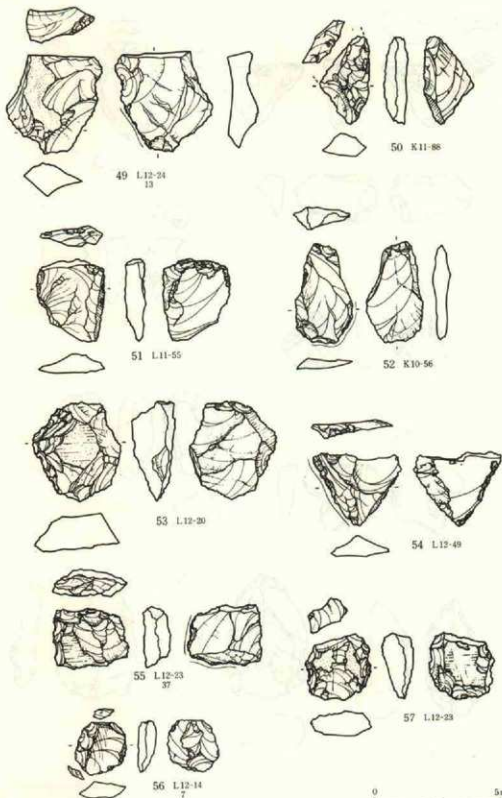


第231圖 石 器 (2)



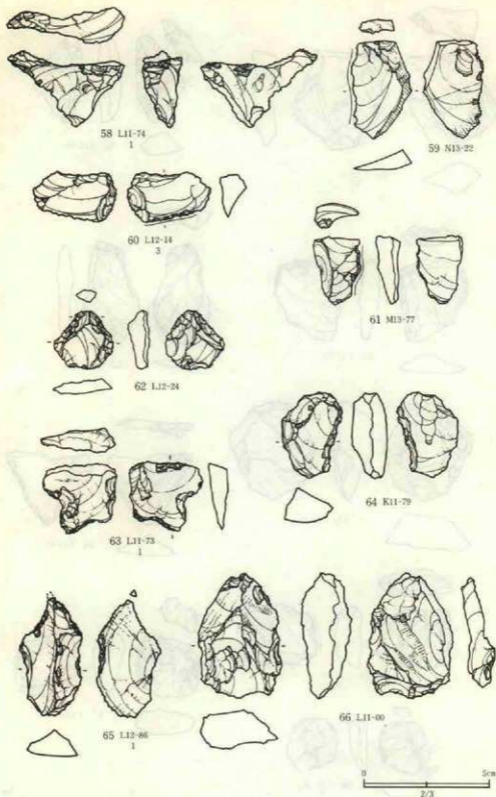


第232圖 石 器 (3)

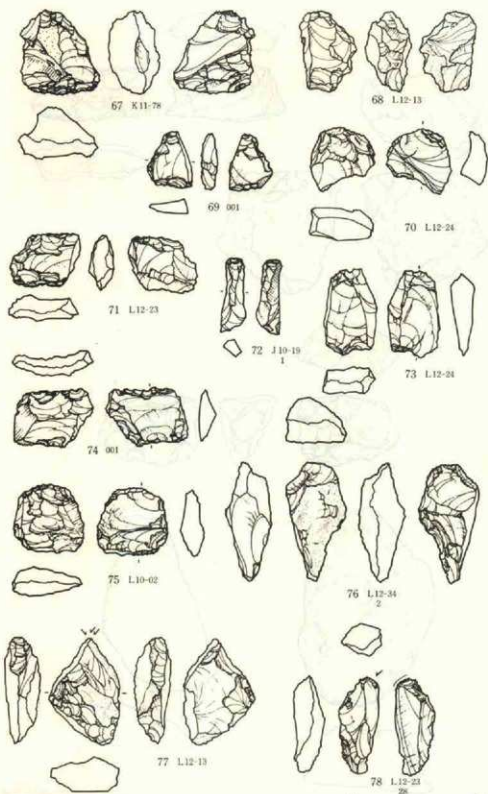


第233圖 石 器 (4)

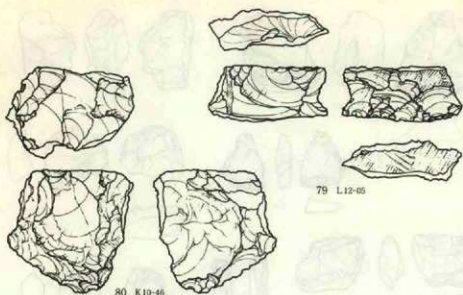




第234圖 石 器 (5)



第235图 石 器 (6)



79 L12-05

80 K10-46  
1

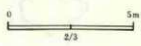


81 O08-40

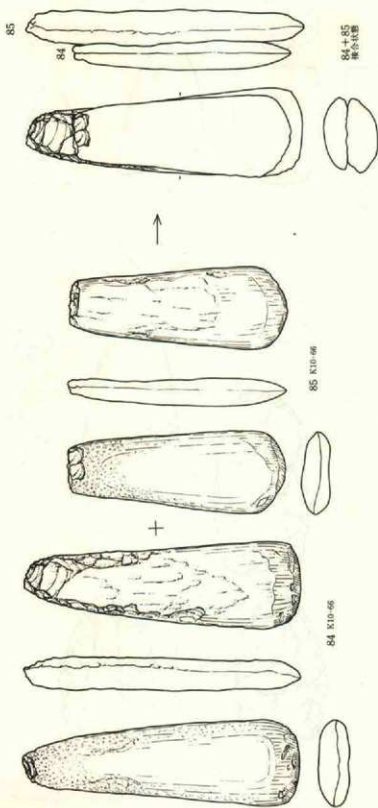


82 N13-02

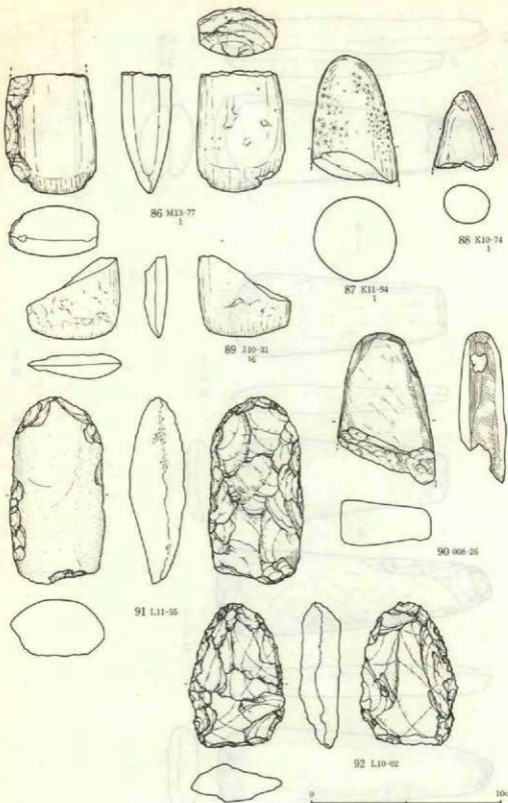
83 No. L



第236图 石 器 (7)



第237圖 石 器 (8)



第238图 石器(9)



94 M12-23  
1



93 N13-23



95 K10-19



96 001-238



97 K11-09  
1

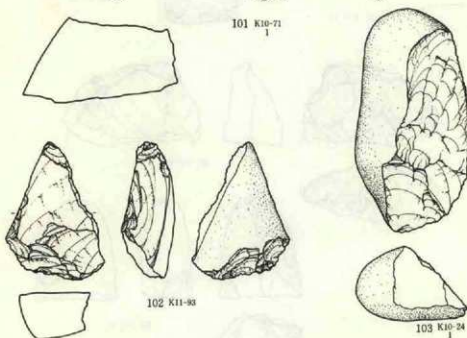
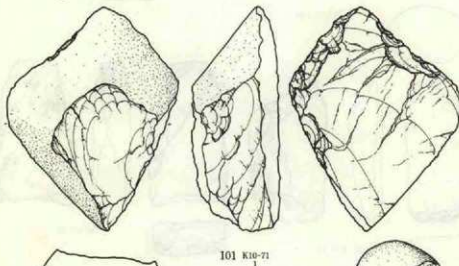
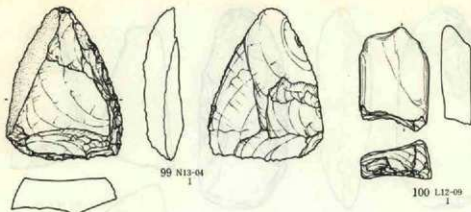


98 J10-23  
7



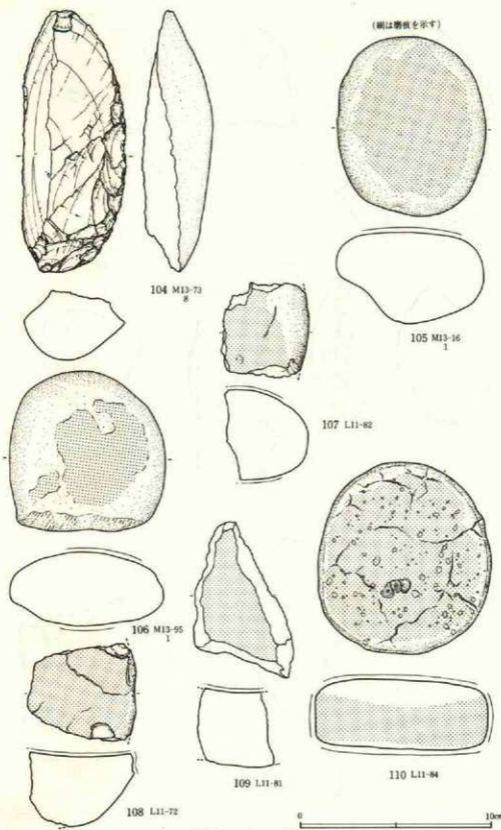
第239图 石器图





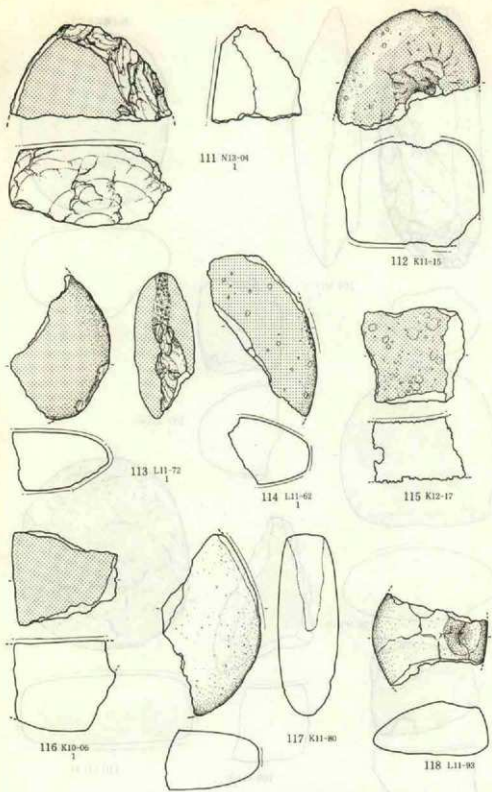
0 2/1 10cm

第240图 石器



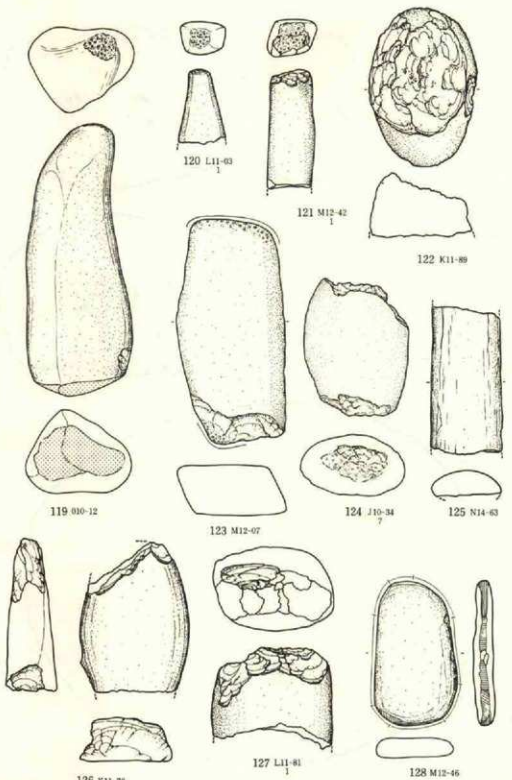
第241図 石 器 02





第242图 石 器 (3)

0 2/1 10cm



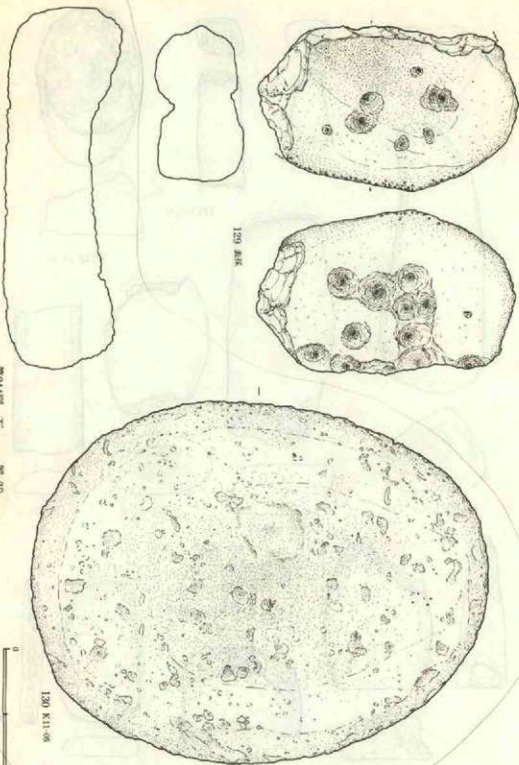
第243图 石器 00

第244圖 石 第09

0  
1/3  
1mm

130 K11-06

129 K11



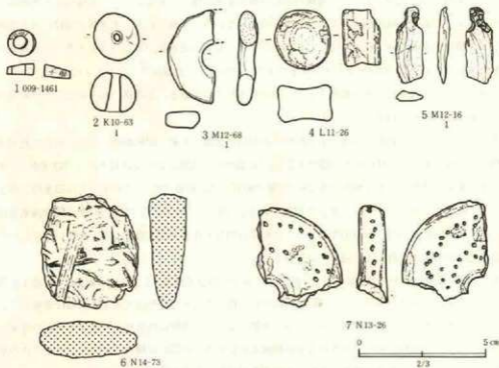
加工は、礫片長軸に平行して行われる連続加撃による場合が多く、石槌による敲打は稀である。そして、側縁への加撃が人念であるのに対して、刃部形成は簡潔で、むしろ、素材の割り放しの縁辺を保持する傾向が強い。なお、短冊型の例の他に、三角形の礫形のものも少数含まれている(99・102)。このような形態組成は、上貝塚遺跡でも認められている。石材としては、砂岩、粘板岩が多用されている。

・礫器(101) 砂岩の礫片に腹面刺離の看取されるものが1例ある。

・礫器を素材とする各種大型石器(105~124・126・127) 上貝塚遺跡と同様の方針に従って、使用痕に基づいて分類しておきたい。(1)礫表に磨痕を留めるもの(105~109・115・116)。このうち107・108・115・116などは石皿の破片であるかもしれない。(2)礫表及び礫側面に磨痕を留めるもの(110)。本例は僅かに敲打痕が認められる。(3)磨痕と共に敲打痕のあるもの(111~113)。112は被加撃痕が点状に集合し、凹部を形成している。113は帯状加撃痕で、一部は礫表がハジケている。(4)敲打痕のみを礫表に留めるもの(117・118)。117は帯状加撃によるもの、118は点状加撃による被敲打痕である。(5)石槌(119~121・123・124・126・127)。細長い棒状の礫の一端、あるいは両端に加撃痕が集中するものである。126・127の両例は、加撃部が稜を形成し、両刃打割器状になる。(6)石砧(122)。礫表が石槌の加撃を受け面的に破れている。

・石刺(125) 緑色片岩製の石刺片と見られる。断面は長円形をしている。第10群土器以降に属する。

・円盤形磨製品(128) 上貝塚遺跡で注目された石器である。偏平な河床礫の側縁部に帯状の研磨痕が認められるが、表裏にも僅かに線状痕があり、研磨を受けているものと見られる。粘板岩製。



第245図 石製品と土製品

・石皿(129・130) 129は破片であり、破損後に、表裏に穴があげられている。安山岩製。副30は完形で、大型品。表裏共に使用されているが、凹みはそれほどなく、ほぼ平坦である。011住居跡に近接しているが、集落の外縁部と思われる地点から単独で検出された。多孔質安山岩製である。

・装身具(第245図2・3・5) 2は硬玉製丸玉である。穿孔直前の類例が上貝塚遺跡にあった(第77図1)。灰緑色を呈し、片側穿孔である。3は珠状耳飾の半欠品。5はチャート製で、一見すると、縦型の石匙に見えるが、加工は薄く偏平な器体の一端に、両側からノッチを作出するに留まり、刃部は形成されていないところから、垂飾の一種かと想像した。(田村)

・土製品(第245図4・6・7) 4は小型な白彩耳飾である。表表面の中央が若干くぼみ、風化による表面の剥落が著しい。縄文時代晩期前半、第12群土器に伴う可能性が高い。6は不整形な焼成粘土塊。着地土には多量の植物質繊維痕が残り、外面にも植物茎の圧痕等が残される。胎土から考えて前期前半、黒浜式土器に伴うものである。7は土製紡錘車の残欠。中央孔を有する偏平な円板状の本体に、刺突文による不規則な装飾がある。黄褐色を呈し、堅緻な焼成である。形態的には、周辺地域で弥生時代後期に多く出土する土製紡錘車と同じであるが、当遺跡からは弥生式土器は出土していない。(原田)

#### (4) 小 結

若葉台遺跡は、縄文前期黒浜式成立期の集落遺跡であり、そこから得られた石器群も、その帰属時期をかなり限定し得るものと考えられる。大旨、前期中葉の集落を支えた石器群を明らかにし得た点に、最大の成果があげられたと評価されるが、最後に若干の問題点を指摘しておきたい。

まず、石器の出土状況であるが、遺構内からの検出事例が僅少であることと、遺構内出土遺物のうち、床面に密着乃至直上層検出のものが、ほとんど存在しない点が指摘される。本遺跡と同様、黒浜期の集落である埼玉県米島貝塚(横川ほか 昭和40年)では、石器の絶対量が少ないことと共に、石器の出土状態にも注意され、「土器が吹上パターンを示すのと対照的で、石器は吹上パターンに該当しない」(報文52頁)ことが指摘され、その要因として、厨房具としての土器と、生産具、加工具としての石器の処遇の差異に求められている。

ところが、やはり、前期の集落である船橋市古和田台遺跡(土肥 昭和48年)では、石器の絶対量、器種共に少ない事は、米島貝塚と同様であるが、「石器の出土状態において注目されるのは床面上、すなわち床面密着の状態の石器が極めて少ない」(報文92頁)点が指摘され、「このあり方は現象的な面を捉えれば、石器の「吹上パターン」として認識される」(同)とされた。その後、船橋市飯山浜東遺跡では、同一集落内において、米島的なあり方と古和田台的なあり方が共存することを明らかにしたが、若葉台遺跡の事例は、古和田台例に近いと言えよう。

もっとも、米島的なあり方と言っても、例えば、「6号住居址北壁寄りに凹石2、石鏝1、石匙1が各々近接して床面にべばりついていた」(報文52頁)という程度であって、やはり大半の石器は遺留していないと見るべきであろう。この問題に関しては、土肥によって、遺跡に残された石器は不要品の廃棄によるものであり、一遺跡において示される石器組成と生活実体との間には隔りがあり、生活実体の全体を明らかにするには、石器の廃棄のあり方への内在が必要であると説かれている。

しかし、この段階までの廃棄論は、住居址内での石器の遺存状況を中心に進められてきた、という限

界を有している。若葉台遺跡の場合、遺構内からの出土量は全体の6%弱であり、石器の大半が遺構外に廃棄されている。これは一般に、遺物包含層と呼ばれているものだが、包含層の実体は、廃棄ブロックの集合であると考えられるから、個体識別と接合関係の追求によるブロックの分離が、包含層研究の基礎となることは明らかである。このような認識の上に、遺構と遺構外ブロックにおける廃棄の具体的検討が必要とされるのであり、遺跡の全体像の復元と、その歴史的位置づけも展望されるであろう。

ところで、本遺跡の場合も、当然、上述の問題意識に基づいて資料を処理しなければならなかったが、残念ながらその余力はなかった。しかし、遺構外に大小6箇所のブロックがあり、その中には、住居跡と関連づけられそうなもの、石器製作址と想定されるもの、集石遺構と考えられそうなもの等が含まれており、さらにそこから検出され石器群が総体として、本地域における前期中葉の石器組成を明示するものであることを呈示し得た点は、大きな成果であった。(田村)

#### G. 遺物分布の特色に見る若葉台遺跡の動態

若葉台遺跡における縄文時代の人々の活動は、竪穴住居跡を含む集落が営まれた前期前半を中心に、早期前半から晩期後半まで、数時期の空白期を挟みながらも、極めて長期に亘ることが判明した。

各時期毎の遺物分布を参考に、遺跡の動態を追ってみると、早期前半、熱水文系土器を主体とした極めて散漫な遺物分布が見られるが、その状況はあくまでも本来的な縄文人の活動領域を外れた様相を呈し、次の早期後半に至っても、この状態に変化は見られない。次の前期前半期、竪穴住居をほぼ台地上全面に構築する集落が出現し、かなりの量の土器が消費、遺留されるが、遺構の切り合いも無く、出土した土器も黒浜式土器の古手(新井分類第1段階)が主体を占めることから、集落の存続期間は、それほど長くないらしい。ただし次の前期後半期、N13・N14区の境界付近に小規模な廃棄ブロックが形成され、それと重複するように前期前半の黒浜式土器が集中している。詳細な分析は未了であるが、集落が廃絶した後、黒浜式の新しい段階から諸磯a・b式にかけての時期に、別の小規模な集団が活動した可能性が高い。

しかし中期以降、若葉台遺跡が主体的に縄文人の活動の場として利用されたことは無かったようだ。中期から晩期に至るまで、調査区内からは少量の遺物が出土しているが、晩期の一時期を除きそれらは最早、平面的な集中等の人間活動の痕跡を示唆する出土状態を示さない。あくまでも、集落地からは離れた外縁部としての様相を呈している。晩期前半の一時期、僅か1基の土坑が築かれ、該期の土器もその周辺から若干出土しているが、その性格を明確に理解するだけの情報は得られなかった。

縄文時代以降、弥生時代、古墳時代を通して、若葉台遺跡の上にはほとんど人間の活動痕跡が見られない。再び当地が利用されるのは、大旨近世以降、大都市江戸の近郊農村として周辺が開拓されてからと考えて良いようである。

なお、当遺跡は、現在の江戸川左岸から、一つ小台地を隔てて南北に伸びる台地上に位置するが、縄文時代前期前半の集落跡は、調査区外にも、まだその一部が「拡がる」ものの、遺構、遺物の分布状態から見る限り、その主要部分は調査されたものと考えられる。一遺跡に構築された住居跡の全てを対象とする狭義の集落論等には、十分な検討資料を提供した遺跡とは言えないが、遺跡総体として出土土器、住居構造等を検討するためには、比較的充実した資料を呈示し得たものと思う。





### 第3章 中近世以降

#### A. 概要

検出した遺構は溝状遺構8条、土域列1条である。いずれも時代を確定し得る資料は出土していないが、すべて近世以降の遺構ではないかと考えられる。また、これらの遺構は調査区の北東端に集中して検出され、101～107溝については互に多くの切り合いが認められた。

#### B. 遺構と各説

##### 101・102溝

東西に平行して延びる2条の溝で、103・104・106溝を切って構築される。両者とも形状、規模は類似しており、平均幅2m、深さ40cmの断面逆台形を呈する溝である。

##### 103溝

南北に走るもので、N14-25グリッドに端部が認められる。最大幅2.3m、深さ40～70cmの断面逆台形を呈する。

##### 104溝

101溝に切られ、南北に走る溝であるが、北端部でやや東に方向が振れる。平均幅2m、溝の底面には円形を呈したピット列が認められた。このピットの規模は大小様々である。

##### 105溝

103溝を切って北西から南東に延びる。北西端は104溝と接するが、両者の新旧関係は不明である。平均幅1.5m、深さ40cmを測る。

##### 106溝

幅70cm前後、深さ25cm程の細く浅い溝である。北東から南西に走り、101溝に切られるが、南西端は101溝内で止まっていたものと考えられる。

##### 107溝

N13-22グリッドに端部を認め、ここから東へ走る溝である。103溝を切っているが、規模は小さく、最大幅80cm、深さ40cm前後を測る。

##### 108溝

J9-35からK9-11グリッドにかけて検出されたもので、217～221土域列とともに、当該期の遺構の中で最南端に位置する。

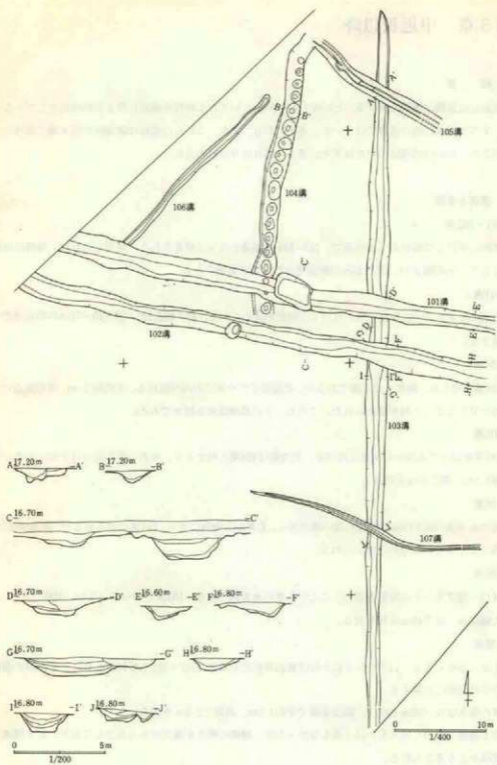
溝の深さは10～20cmと浅く、幅は東側で平均1.5m、西側で2.5mを測る。

出土遺物で図示し得るものは1点もなかったが、蹄鉄の破片が覆土中から出土しており、牧と関連した遺構かとも考えられる。

##### 217～221土域列

108溝の南側2mの地点で、溝と平行して検出された5基の土域である。個々の土域は平面円形を呈し、径は最小の217で80cm、最大の219で1mを測る。深さは217で20cm、221で30cm前後である。各土域





第246图 101~107溝平・断面図



の芯々距離は75cm等間隔となっており、この5基の土壇をもって1遺構と考えられる。また108溝と併走することから、溝とも関係しているかもしれない。

#### 中近世以降の出土遺物

陶磁器と古銭があるが、陶磁器の量は極めて少なく図示していない。

また古銭は、渡来銭1枚、古寛永1枚、新寛永9枚、文久永宝1枚、不明銅銭3枚、不明鉄銭3枚がある。これを上貝塚遺跡出土古銭と比較すると、全体に新しい銭貨が多いようである。

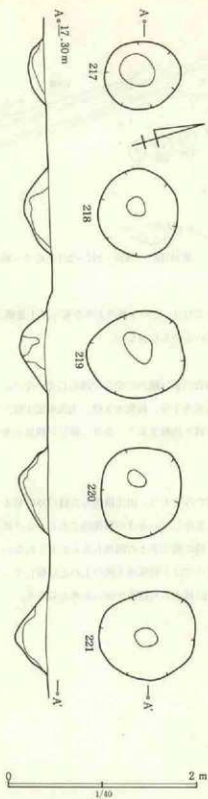
#### C. 小 結

当該期の遺構は溝状と土壇列のみであり、出土遺物も古銭以外に見るべきものはない。

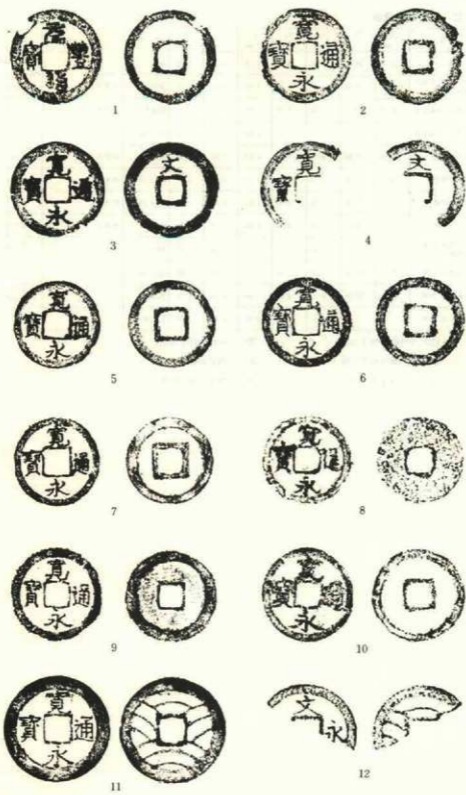
遺構の分布は調査区北端部に集中している点特徴的である。この地点は後述する塚(1)・馬土手(1)と近接しており、これらの遺構、特に馬土手との関連もあるかもしれない。

また出土した古銭から見る限りでは上貝塚出土例のものと比較して、やや新しい時代のものが多く、今回検出した遺構も18世紀以降に属する可能性が強いと考えられる。

(郷畑)



第248圖 217~221土坑平・断面圖



第249圖 若樂台遺跡出土古錢 (1/1)

表 32 錢貨計測值表

番号	錢貨名	OD (mm)	ID (mm)	OG (mm)	IG (mm)	T (mm)	t (mm)	W (g)	出土地点	備考	%	%
1	元豐通宝	24.30	18.65	7.70	6.30	1.14	0.72	2.55	009			
2	香炉銭・正足空内 風寛	24.70	19.90	7.05	5.65	1.10	0.62	2.55	M11-83	古寛永	3.50	1.30
3	大徳銭・磨輪背文	25.00	19.35	7.30	5.50	1.35	0.87	3.45	L12-61	新寛永	3.42	1.24
4	大徳銭・磨輪背文	-	-	-	-	(1.24)	(0.61)	(1.50)	L12-83	新寛永	-	-
5	大徳朝日銭	23.00	18.60	8.05	5.90	1.18	0.85	2.95	L12-34	新寛永	2.86	1.24
6	元禄衣冠厚銭	22.70	19.00	7.25	5.80	1.37	0.95	3.40	N12-22	新寛永	3.27	1.25
7	宝永龜戸銭	23.00	19.00	7.90	6.20	1.03	0.63	2.15	N14-34	新寛永	2.94	1.21
8	元文秋田銭・物字	23.05	19.00	7.05	5.70	1.04	0.77	2.10	K11-04	新寛永	3.27	1.21
9	元文秋田銭・寛文 御手様	24.20	19.45	7.00	5.65	1.26	0.64	2.65	M12-27	新寛永	3.46	1.34
10	寛永通宝(不明)	24.50	20.00	7.25	5.45	0.95	0.75	2.15	M13-89			
11	寛永通宝(不明)	28.10	20.90	8.00	6.50	1.28	0.90	4.25	N13-91			
12	元文永宝(不明)	-	-	-	-	(0.67)	(0.43)	(1.10)	L12-40			

\* OD = 外縁外径平均値

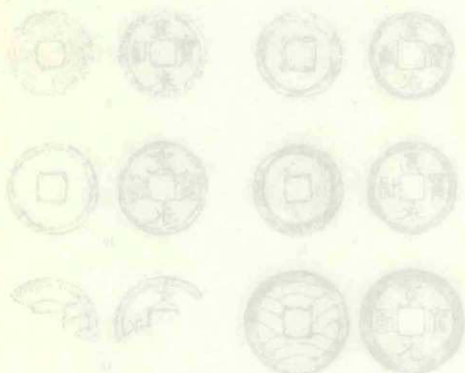
ID = 外縁内径平均値

OG = 内郭外長平均値

IG = 内郭内長平均値

T = 外縁厚平均値

t = 文字面厚平均値



第4篇 塚(1)・塚(2)

## 第1章 塚(1)

流山市西初石2丁目329-1に所在するもので、流山市遺跡分布地図では旧字名を使用し、上新宿新田塚と名称される。

やや偏平な高まりとなる、方形を呈した塚で、長軸23m、短軸20m、現地表面からの高さは1.35mを測る。長軸方位はN-27°-W、塚頂部の標高は22.2mである。

盛土は、旧表土面を基底部として、その上に順次ほぼ水平に土盛り施行している。この盛土にはロームブロックをほとんど含まない黒褐色土・暗褐色土を使用している。

盛土を除去した段階で、塚裾を回る幅1.5m、深さ10cm程の浅い溝を検出した。ただしこの溝は塚裾部を環状に回るものではなく、東辺部と南辺部は閉合せずに、南辺部がやや開き気味に直走している。この溝の性格は不明だが、全体の規模は塚裾部と合致していることから、塚に伴う遺構と考えたい。

なお、塚周辺では盛土のための土を採取した痕跡は認められないが、おそらく周辺の手近かなところから寄せ集めたものと考えられる。

遺物は直交する土層断面のラインを規準に北東側から右回りに四分割し、順次a・b・c・d区と分けて取り上げた。

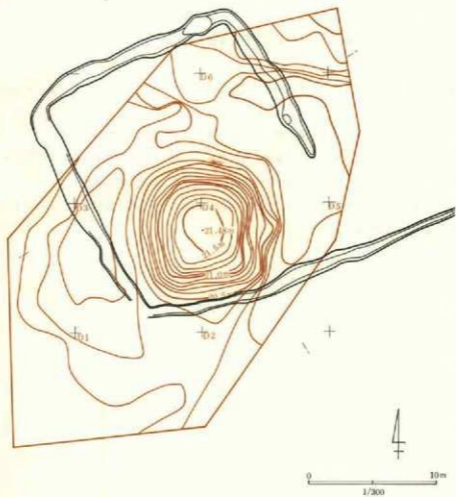
盛土中のa区では洪武通宝1枚、c区では政和通宝1枚、新寛永2枚、表採で古寛永1枚が出土している。

また、旧表土から下層では少量の縄文土器と石器が出土したが、遺構は検出されなかった。

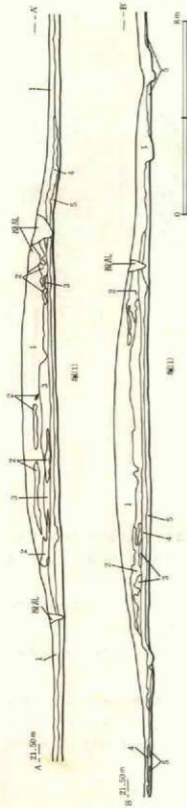
次に、この塚の性格を考える上で参考となる資料がある。c区の現地表面では第252図に示した道標が横転した状態で遺存しており、さらに塚の西約50mの地点には庚申塔が現存していた。

なお、縄文時代の遺物に関しては、第253・254図に掲げたが、第5篇付篇にて、馬土手より出土の縄文時代遺物と共に解説を加えた。



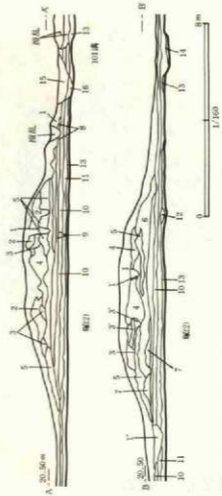


第250图 塚(1)平面图

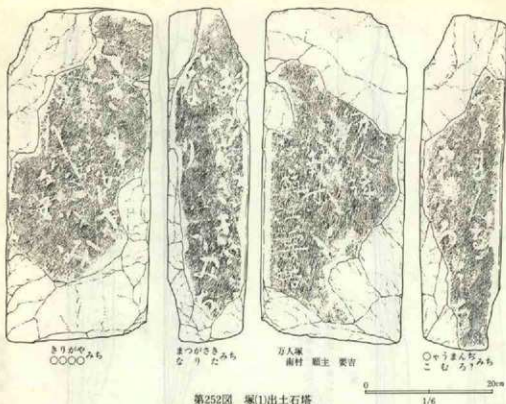


1. 黒褐色土：赤土、1に比べ若干に軟かい。  
 2. 暗褐色土：新羅新羅テラによる盛土  
 3. 暗褐色土：ややしまりあり、粘性なし  
 4. 黒色土：田表土  
 5. 暗褐色土：新羅テラ(目土層)

1. 暗褐色土：黄土  
 2. 暗褐色土：1に比べしまりなし  
 3. 暗褐色土：下に比べ若干にしまりなし  
 4. 暗褐色土：ローム層・しまり・粘性なし  
 5. 暗褐色土：ローム層少量、ややしまりあり  
 6. 暗褐色土：3に比べローム粒多く含む  
 7. 暗褐色土：3に比べローム粒少  
 8. 暗褐色土：ややしまりあり、粘性なし  
 9. 暗褐色土：ローム粒少量、しまり粘性あり  
 10. 黒色土：田表土  
 11. 暗褐色土：ローム粒少量、しまり・粘性あり  
 12. 暗褐色土：新羅テラ(目土層)  
 13. 黒色土：ロームテラ(目土層)  
 14. 暗褐色土：硬くしまる  
 15. 暗褐色土：粘性あり  
 16. 暗褐色土：粘性あり



第251図 塚(1)・塚(2)断面図



第252図 塚(1)出土石塔

## 第2章 塚(2)

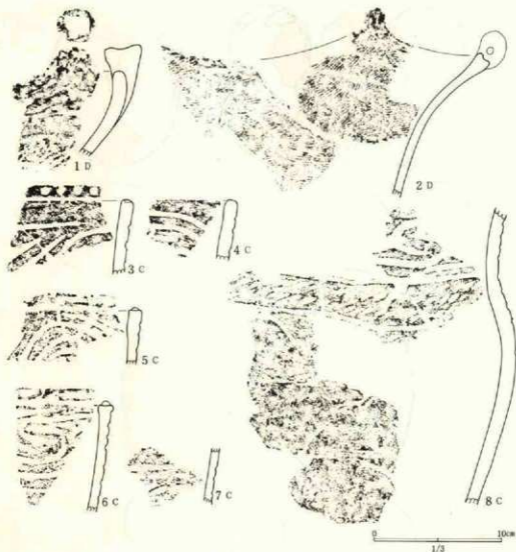
流山市青田69他に所在し、流山市遺跡分布地図では青田第1塚と名称されている。

塚(1)の南東約1.3kmの地点にあり、東西約10m、南北約11mの、ほぼ方形を呈するものである。長軸方位はほぼ真北を向いている。現地表面からの高さは1.5mを測り、塚の頂部は標高20.48mで、3.5×4mの規模で平坦部をなしている。

盛土は黒色を呈する旧土表面を基底部として、その上に塚の外側から中央に向かって順次積み上げている。この盛土には、塚(1)と同様に暗褐色もしくは黒色土を主体としたものを使用し、ロームブロックを含む土層は観察されていない。盛土に利用した土は周辺を浅く削平し、その土を利用したものと考えられる。

塚の基底部である旧表土を除去し、さらに掘り下げた段階で、土塔3基を検出したが、202・204の2基の土塔は掘り込み全体が凹凸に富んでいる。また203土塔は、所謂Tビットで、深さ2.6mを測る。なお、これらの土塔を切る101溝も検出されたが、これは現地表面から掘り込まれたものであり、塚との関連を有しないものである。

また、塚に関連する遺物はなく、縄文土器の細片が数点出土したにとどまる。



第253図 塚(1)出土土器

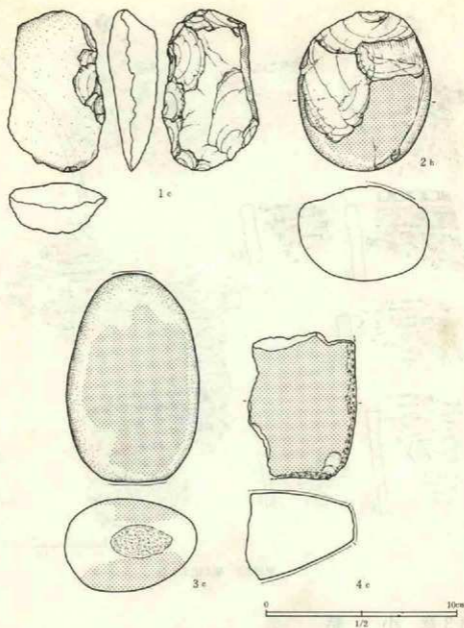
### 第3章 小 結

今回調査した2基の塚については、その性格、構築年代ともに確定し得るような資料が無いために余り多くを語ることはできない。

しかしながら、塚(1)出土の寛永通宝から得られる下限年代のものは元文年間初録のものであり、また周辺にある庚申塔にも「元文二（1737）年十月吉日、願主、無量寺」の銘があることから、構築年代の上限は18世紀前半代に求められるかもしれない。

また2基の塚は、共に馬土手に近接して設けられたもの（塚(1)は馬土手(1)の東側50mの地点、塚(2)は馬土手(3)の南東約60mの地点に位置する）で、立地の条件が類似している。

さらに塚(1)での庚申塔の存在から、この塚が庚申塚として機能していた可能性もあるが、馬土手とい

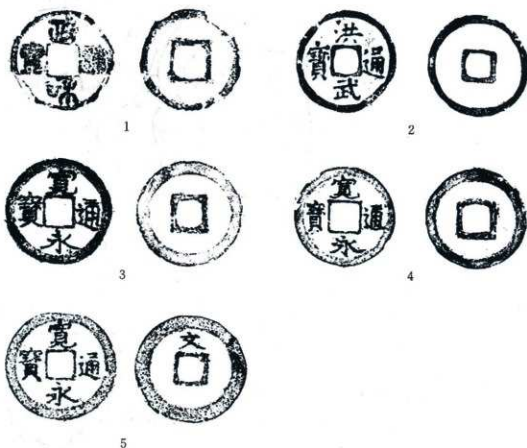


第254図 塚11出土石器

う牧と耕作地とを区画する遺構に隣接し、牧内の新田開発が享保八年（1723年）以降、活発に行われるようになっていたことから、新たな境界を示す境塚の性格をおびていた事も充分考えられる。また新田開発が始まる年代も、先に類推した塚の構築年代にも大きな隔りが無く、この境塚としての性格もありうるのではないかと考えられる。

現在、流山市内で確認されている塚は7地点（内1地点は消滅）あるが、馬土手と隣接する塚は今回報告した2基の他に、流山市長崎五枚割りに所在する長崎塚群（2基）がある。この他の4地点の塚は馬土手から遠く離れ台地の縁辺部に立置するものが多い。このうちの2地点の塚は、庚申塚と名称された

り、頂部に庚申塔を残すもので、塚の立地条件によって、その性格をある程度判断し得るかもしれない。  
塚と馬土手、さらに新田開発との関係は、今後検討を要する課題であろう。(郷堀)



第255図 塚(1)出土古銭 (1/1)

表 33 銭貨計測値表

番号	銭貨名	OD (mm)	ID (mm)	OG (mm)	IG (mm)	T (mm)	t (mm)	W (g)	出土地点	備考	%	%
1	政和通宝	23.30	20.35	8.10	7.10	0.81	0.53	1.10	C区			
2	洪武通宝	23.20	20.00	7.10	5.50	1.62	0.58	2.80	G区			
3	寛谷銭・明暦大字	24.50	19.60	7.80	5.75	1.29	0.79	3.45	表探	古寛永	3.14	1.25
4	元文龜戸銭・細字	23.00	18.80	8.00	6.30	1.06	0.73	2.00	C区	新寛永	2.88	1.22
5	元文秋田銭・細字	25.60	20.30	7.10	5.60	1.47	0.66	3.60	C区	新寛永	3.61	1.26

※ OD = 外縁外径平均値

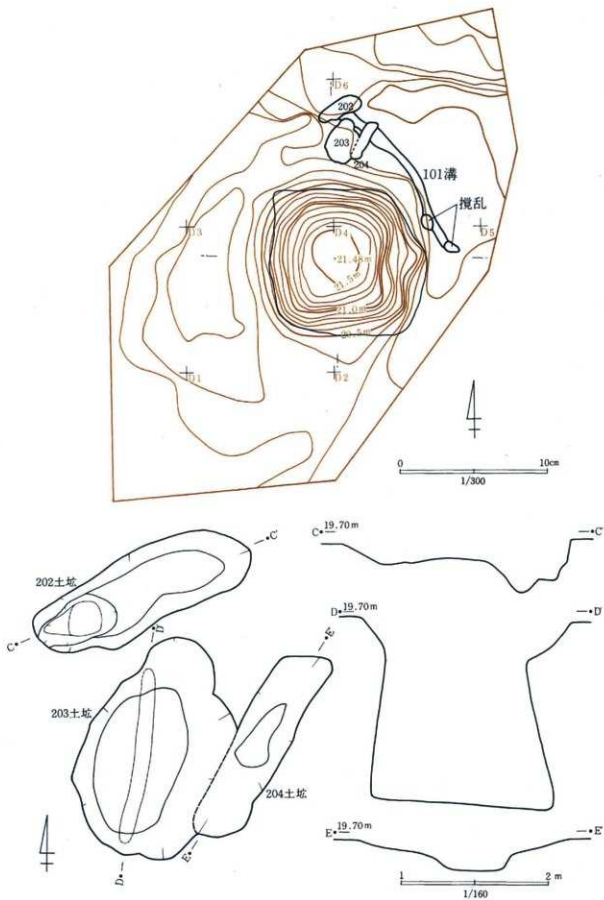
ID = 外縁内径平均値

OG = 内郭外長平均値

IG = 内郭内長平均値

T = 外縁厚平均値

t = 文字面厚平均値



第256図 塚(2)及び土坑群平・断面図

第5篇 馬土手(1)・馬土手(2)・馬土手(3)

付篇 塚・馬土手出土の縄文時代遺物



## 第1章 馬土手(1)

流山市上新宿字宿後333他に所在する。今回の調査対象となった土手部の長さは約40mを測り、現地表面の標高約20mの台地上に築かれたものである。

土手部の現況は調査範囲の北から約25mの地点で、幅8m程を削平され、さらにその削平部から南では土手の高まりを僅かに残す程度である。土手部の南端は現在の市道によって切られているために詳細は不明となるが、土手はさらに南に延びていた可能性がある。

土手の規模は、基底面の幅3～3.6m、旧表土面からの現存高0.8～1.2mを測る。

土手は黒色を呈した旧表土面を基底面として、その上に盛土を行っている。この基底面は、遺存状態の良い部位の土層断面部A-A'・B-B'を見る限り、水平に整形した上に盛土を行ったようである。

盛土にはロームブロックを多量に混入する黄褐色土や暗褐色土が使用され、土手の東側から西に向けて積み上げられている。このような土層と積み上げられる方向から、盛土には土手の東側に検出された溝を掘り上げる際の土を利用したものと考えられる。

次に溝であるが、土手の左右の裾部に、土手と平行して検出された。

西側で検出した溝は幅1～1.5m、深さ30cm前後のもので南側でS字に屈曲して東に延びている。この溝は土手が築かれた後に掘り込まれたものである。

東側で検出された溝は、上端部東側が現市道にまで及ぶため完掘し得なかったが、幅3～3.2m前後を測るものと推定される。下端部は幅0.7～1.0m、深さ約2mの断面逆台形を呈している。溝の南端は大きく擾乱を受けているが、さら南側まで延びていた可能性がある。

遺物は陶磁器類と古銭がある。磁器は伊万里系の染付があり、18世紀後半のものが少量あるだけで、大半は幕末から明治にかけての所産であろう。他に万古焼の急須、美濃・瀬戸系の德利、関東の在地的(埼玉・栃木の製品であろうか)な製品が見られるが、いずれも幕末から明治初頭頃の製品と考えられる。

古銭は新寛永3枚、文久永宝1枚、天保通宝1枚がある。

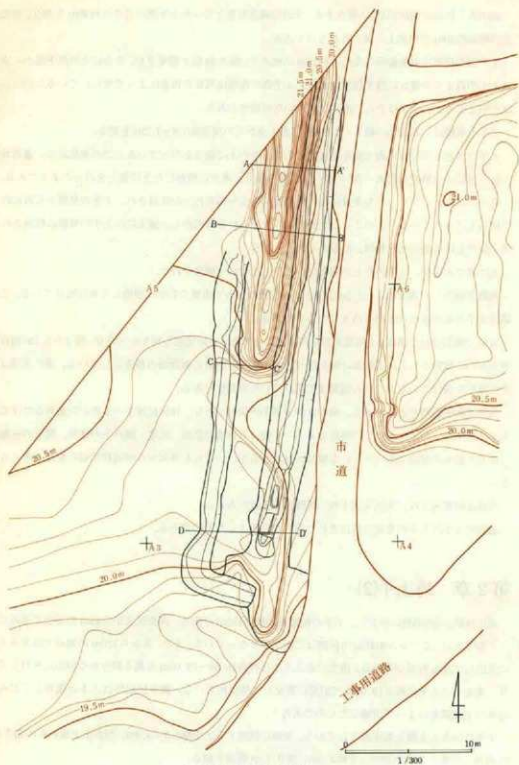
遺物の大半は土手の東側で検出された溝内から出土したものである。

## 第2章 馬土手(2)

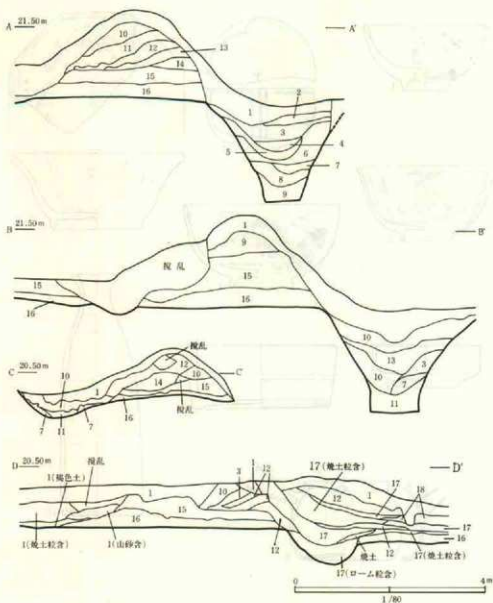
流山市駒木台505他に所在し、土手の総延長距離は150mを測る。調査区北から45mの地点で道路によって削平され、ここから南45mの区間は二重土手となっている。また、北から120mの地点では大きく東に屈曲して30m程延びている。南北に走る土手は標高16.60～18.00mを測る緩やかな斜面に平行しており、東走する土手は標高19.00mで斜面に直交して築かれている。調査区以外は土手は遺存しておらず、近年の宅地開発によって消滅したものであろう。

土手は旧表土面を基底面としており、東側に位置する土手幅4.0～5.0m、旧表土面からの高さ1.5m前後、二重となる西側の土手幅3.5m、高さ1m前後を測る。

東側の土手の盛土はロームブロックを主体にした暗褐色土が西から東へ向って積み上げられ、西側の

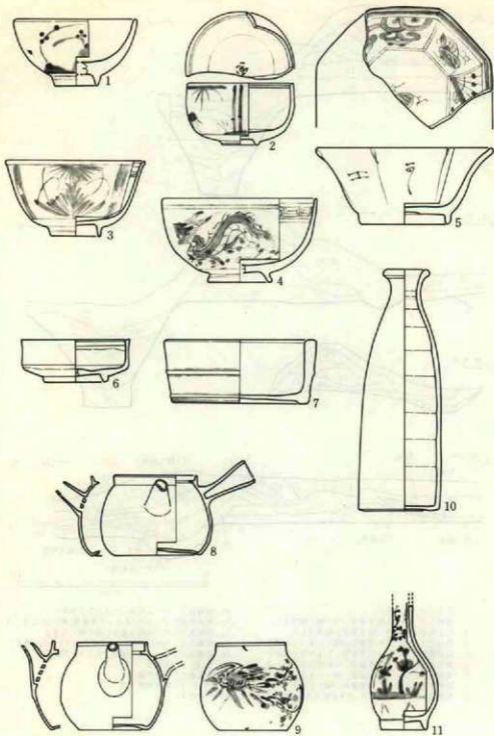


第257图 馬土手(1)平面図

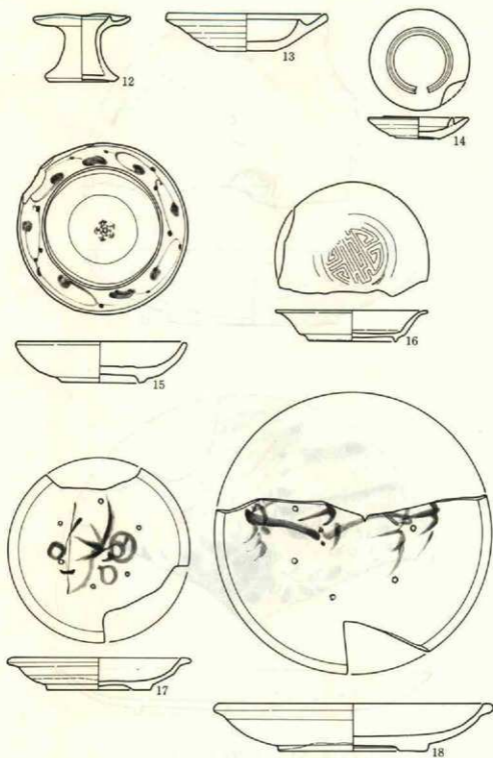


- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1. 黒褐色土：表土                      | 10. 暗褐色土：ローム粒含、しまりなし軟かい          |
| 2. 黄褐色土：ローム粒多量含、やや硬く粘性あり        | 11. 黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含、軟かく、しまりなし  |
| 3. 暗黄褐色土：ローム粒多量含、粘性乏しい          | 12. 暗褐色土：ローム粒少量含、やや硬くしまる         |
| 4. 黄褐色土：ローム粒多量含、硬くしまり、粘性あり      | 13. 黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含、ややしまり、粘性あり |
| 5. 暗黄褐色土：ローム粒多量含、しまりなく軟かい       | 14. 暗褐色土：ローム粒少量含、しまり、粘性あり        |
| 6. 黄褐色土：ローム粒多量含、比較的しまっている       | 15. 黒色土：旧表土                      |
| 7. 黄褐色土：ローム粒多量含、硬くしまる           | 16. 暗褐色土：テフラ層                    |
| 8. 暗黄褐色土：ローム粒多量含、硬くしまる          | 17. 黒色土：炭大粒粒含                    |
| 9. 黄褐色土：ローム粒・ブロック多量含、しまりなし、粘性あり | 18. 黒褐色土                         |

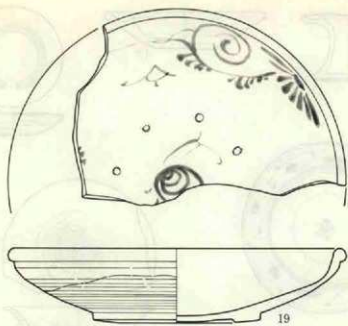
第258図 馬土手(1)断面図



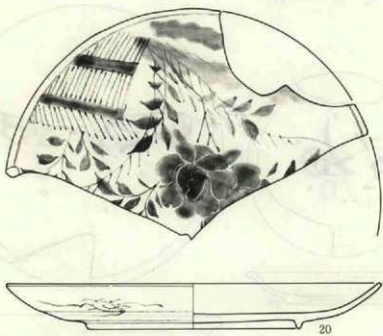
第259图 马士手(1)出土陶磁器(1) (S=1/3)



第260图 馬土手(1)出土陶磁器(2) (S=1/3)

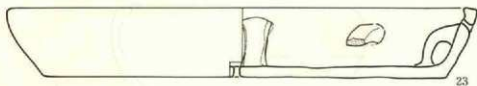
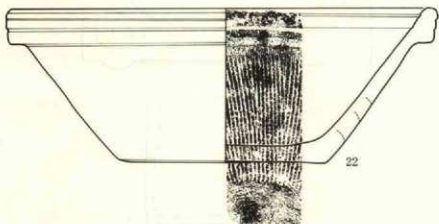
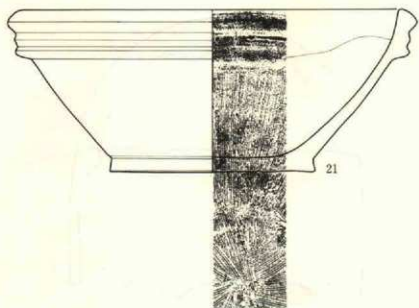


19

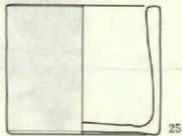
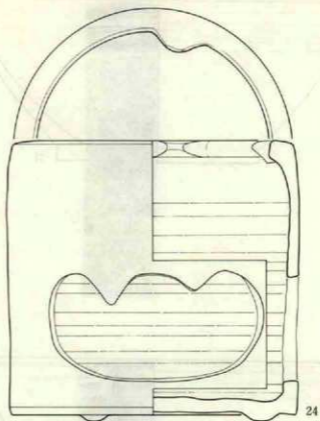


20

第261圖 馬土手(1)出土陶磁器(3) (S=1/3)

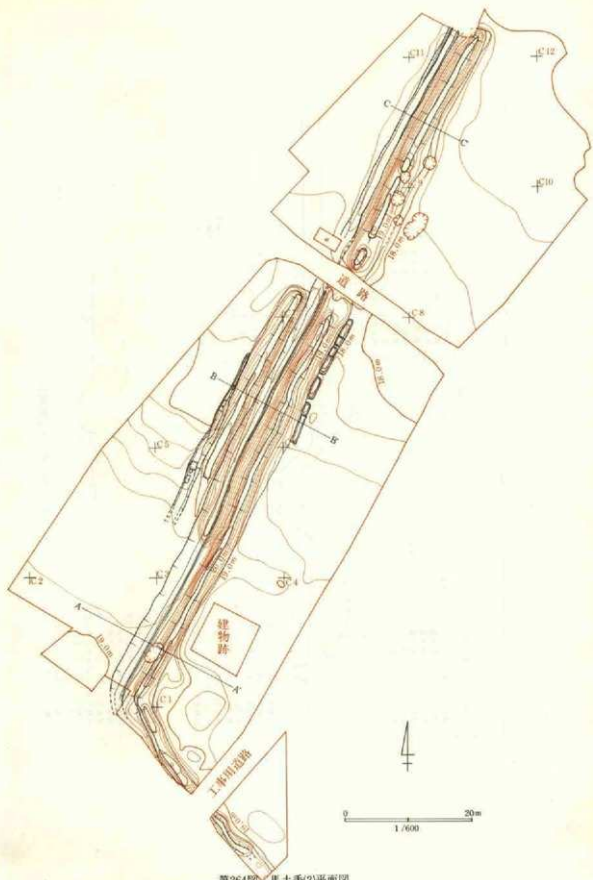


第262図 馬土手(1)出土陶器(1) (S=1/3)



第263圖 馬土手(1)出土陶器(2) (S=1/3)





第264圖 馬上手(2)平面图

A 20.50m



- 1. 黒色土：黄土
- 2. 暗褐色土：腐植土を多く含む
- 3. 黒色土：ロームブロック、ガラス片等を含む
- 4. 暗褐色土：ロームブロック、粘り多層合
- 5. 暗褐色土：ローム粒多層合
- 6. 黒色土：ローム粒多層合
- 7. 暗褐色土：ローム粒少量、ロームブロック多層合
- 8. 暗褐色土：ローム粒少量、ロームブロック多層合
- 9. 黒色土：しまりなし

- 10. 暗褐色土：しまりなし
- 11. ロームブロック
- 12. 暗褐色土：ロームブロック多層合
- 13. 暗褐色土：ロームブロック多層合
- 14. 暗褐色土：ローム粒若干含む
- 15. 暗褐色土：ローム粒多層合
- 16. 暗褐色土：ローム粒少量含む
- 17. 暗褐色土：ローム粒多層合
- 18. 黒色土：田舎土
- 19. 暗褐色土：腐植チカラ(II)

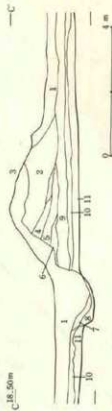
B 19.50m



- 1. 暗褐色土：黄土、ローム粒含む
- 2. 暗褐色土：黄土
- 3. 暗褐色土：黄土
- 4. 暗褐色土：ロームブロック多層合
- 5. 黒色土：ローム粒少量含む
- 6. 暗褐色土：ローム粒少量含む
- 7. ロームブロック
- 8. 暗褐色土：ローム粒多層合

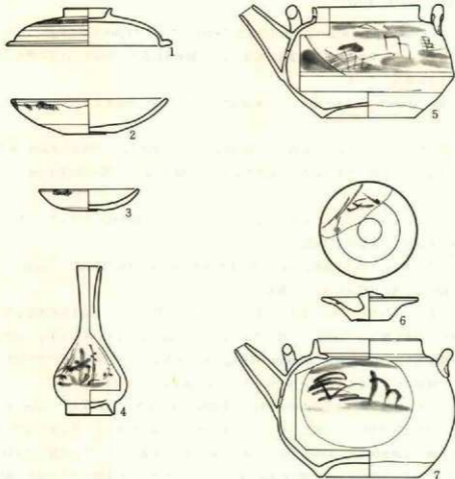
- 9. 黒色土：ローム粒多層合
- 10. 黒色土：田舎土
- 11. 暗褐色土：(IIb)
- 12. 黒色土：しまりなし
- 13. ロームブロック：ローム粒多層合
- 14. 暗褐色土：ロームブロック多層合
- 15. 暗褐色土：ロームブロック多層合

C 18.50m



- 1. 暗褐色土：黄土
- 2. 暗褐色土：粘り少量含む
- 3. 暗褐色土：黄色粘質土粒少量含む、黄土
- 4. 暗褐色土：ローム粒多層合
- 5. 暗褐色土：2に互へばれ砂っぽい
- 6. 暗褐色土：ロームブロック多層合
- 7. 暗褐色土：鉄分を多く含む粘粒状
- 8. 暗褐色土：鉄分を少量含む
- 9. 黒色土：田舎土
- 10. 暗褐色土：腐植チカラ(IIb)
- 11. 暗褐色土：(II)

第265図 馬土手2断面図



第266図 馬土手(2)出土陶磁器 (S=1/3)

土手でもロームブロックを主体した暗褐色土を多く利用するが、積み上げ方は、東の土手と反対に東から西に向っている。このことから東西の土手は、溝を掘り込む際に出る土を東西に投げ分けて土手を構築したものと考えられ、築造当初から二重土手を目的として作られたものであろう。

溝は二重土手の中間にあり、東側の土手の西裾に平行して走っている。幅3.2～3.6m、深さ2 m前後、下端部の幅1 m弱となり、断面逆台形を呈するが、北端部に近い所では、その規模を減じ、幅1.9 m、深さ0.8mの断面L字状を呈するものに変化している。

遺物は溝内から出土したもので、陶磁器と古銭がある。陶磁器は馬土手(1)と同様に幕末から明治にかけてのもので、古銭は新寛永1枚、文久永宝1枚がある。

### 第3章 馬土手(3)

流山市青田69他に所在し、塚2)の北約20mの地点で東西に延びる土手120mを調査範囲としている。標高19m前後のところには構築される。西端部は私道によって削平されるが、そのさらに西の調査区域外には35m程土手が延長している。

西から20mの範囲は二重土手となり、この東端部から北側の土手が直進するように100m程延びている。

二重土手となった南側の土手は、新期テフラ層(IIb層)上面を基底面にして幅5~5.6m、現存高2.2m前後を測る。また北側の土手は旧表土上面を基底面として幅4~5.2m、現存高は約1.1mとなっている。

二重土手の盛土は南土手では北から南へ、北土手では南から北へと投げ込んで積み上げられ、馬土手(2)の二重土手部分と同様な盛土の状態が観察できる。

この両土手に挟まれた溝は上端幅3.5m、下端幅1m前後、深さ約1.8mの断面逆台形を呈し、馬土手(1)・(2)で検出した溝の規模・形状ともに類似している。

次に、1条となった土手部分の盛土は、二重土手の北土手と同様に旧表土上面を基底面としながら、土盛り施行が大きく異なっている。この部分では基底面の幅4.6m、高さ1.6m程の土手が、南によった部分で一端構築され、後に基底面の幅692m、現存高2.9mの大きな土手が前者の土手の北斜面をおおうようにして構築されていることが断面B-B'のセクション図から見てとれる。

またこの土手に伴う溝は土手の南裾に平行して上端幅2.31、深さ1.1mの断面V字70cm、深さ15cm程の円形を呈する皿状のピットが検出され、二重土手に挟まれた溝の形態とも大きく異なっている。

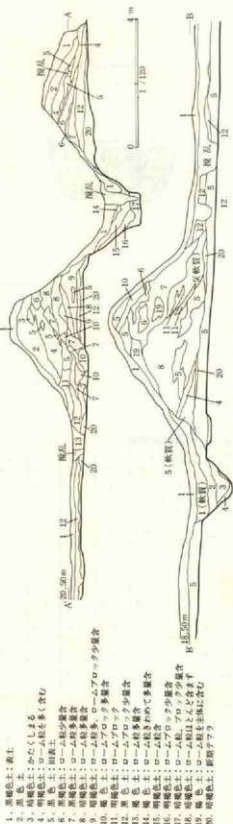
この他の溝では調査区西から約80mの地点で東西に走る溝が、1条となる土手の北裾部に平行して検出された。この溝は上端幅2m、下端部0.8m、深さ1.2m程のもので旧表土面より下の層から掘り込まれたもので、今回検出した溝の中で最も古く構築されたものと考えられる。

この溝の西端部では南北に直交する幅1m、深さ30~50cmの断面箱形を呈する溝と二重土手の南裾に平行する幅1~1.5m、深さ10cm程の浅い溝が検出されたが馬土手との関係は不明である。

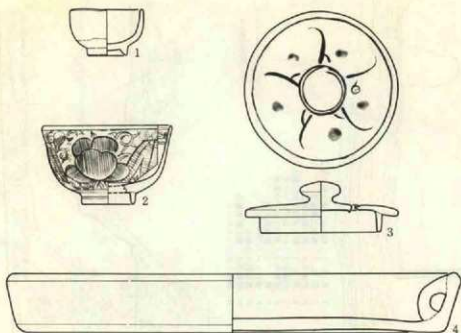
遺物は幕末から明治にかけての陶磁器類の他に新寛永3枚、文久永宝2枚が出土している。

この馬土手(3)の調査では、馬土手の構築が数回に分けて実施されている事が知られるが、これらの事実は、馬土手の補修や改修を示したものと考えられ、古文書に見られる「野馬防土手築立願書」や「野馬除土手修復願書」<sup>註1)</sup>に表わされたものが具体的事実として比較検討される必要があろう。

註1) 柏市史編さん委員会 「柏市史資料編」3・7 1969・1970



第267図 馬土手(3)平・断面図



第268図 馬土手(3)出土陶磁器 (S=1/3)

表 34 鍍貨計測値表

番号	鍍貨名	OD (mm)	ID (mm)	OG (mm)	IG (mm)	T (mm)	t (mm)	W (g)	出土地点	備 考	% <sub>Ca</sub>	% <sub>Mg</sub>
1	寛文亀戸銭・無背	24.55	19.50	7.00	5.90	1.27	0.65	2.50	馬土手 (I)	新寛永	3.51	1.26
2	寛文亀戸銭・無背	24.25	19.40	7.00	5.50	1.25	0.82	2.60	馬土手 (II)	新寛永	3.46	1.25
3	延宝亀戸銭・快水	24.20	19.45	7.00	5.75	1.29	0.57	2.35	馬土手 (III)	新寛永	3.46	1.24
4	元禄直銀屋銭	23.70	19.05	7.10	6.10	1.04	0.63	2.05	馬土手 (I)	新寛永	3.34	1.24
5	元禄丁字屋銭・ 防木	23.00	18.80	7.90	6.50	1.00	0.69	2.05	馬土手 (I)	新寛永	2.91	1.22
6	元禄丁字屋銭・ 防木	23.00	19.00	7.50	6.50	1.29	0.91	2.60	馬土手 (II)	新寛永	3.07	1.21
7	元文十萬坪後打 碁・磐宝上下	23.10	18.70	8.00	6.50	1.08	0.65	2.25	馬土手 (II)	新寛永	2.89	1.24
8	天保通宝・ 大銀縁手	39×22.5 40.75	34×22.3 35.75	10.50	6.80	2.61	1.60	19.1	馬土手 (I)			
9	文久永宝・ 英文縁字快穿	26.60	20.00	8.00	5.80	1.29	1.06	3.75	馬土手 (II)			
10	文久永宝・ 英文縁字	26.50	19.20	7.50	6.00	1.03	0.58	2.70	馬土手 (III)			
11	文久永宝・ 行書縁字	27.00	21.40	9.00	7.20	1.11	0.79	3.30	馬土手			

● OD = 外縁外径平均値

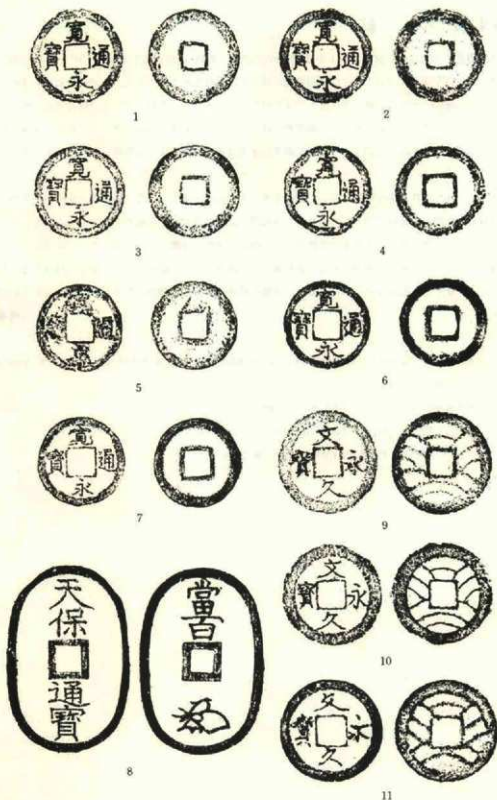
ID = 外縁内径平均値

OG = 内部外長平均値

IG = 内部内長平均値

T = 外縁厚平均値

t = 文字面厚平均値



第269圖 馬土手(1)・(2)・(3)出土古銭 (1/1)



## 第4章 小 結

今回調査を実施した3地点の馬土手は、小金牧内の上野牧・高田台牧を画するものと考えられる。<sup>111)</sup> これらの牧は享保七年(1722年)に新田開発に伴って再整理された牧であり、3地点の牧はいずれも、この時代以降のいわゆる「新土手」として築かれたものであろう。これらの土手は何度となく補修や改修が行われたと考えられる。事実、文献史料には、このための願書が散見できる。これらの文献史料では天明年間や文化年間<sup>112)</sup>のものであり18世紀前半代までは確実に馬土手の必要性があったものと考えられる。

次に、これらの馬土手が機能していた期間を考えるならば、土手に伴う溝の覆土中の出土遺物の大半が幕末から明治にかけてのものであり、この段階では既に溝も埋立し始めていたものと考えられることから、江戸時代末期には馬土手の管理及びその機能は有効には働いていなかったのではないだろうか。

現存する馬土手は除々に開発の波にのまれ始め、築造されていた範囲すらつかめない状態となってきている。少なくとも記録保存の措置を講じ、文献史料研究とともに調査がなされなければならないであらう。(郷増)

註(1) 川根正教監 「千葉縣流山市内原野馬土手」 流山市遺跡調査会 1983 松下邦夫氏筆写 「高田台牧・上野牧図」  
流山市郷土博物館展示物

(2) 柏市史編さん委員会 「柏市史資料編」3 1969

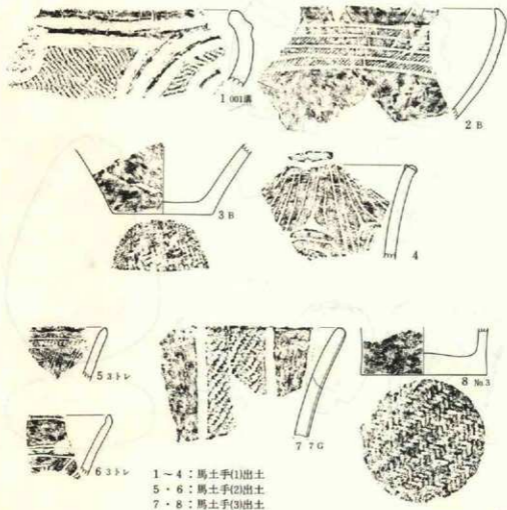
(61) 文化二年 野馬除土手修復願書 232頁

(10) 天明三年 野馬雑込土手修復人足差出之儀 272頁

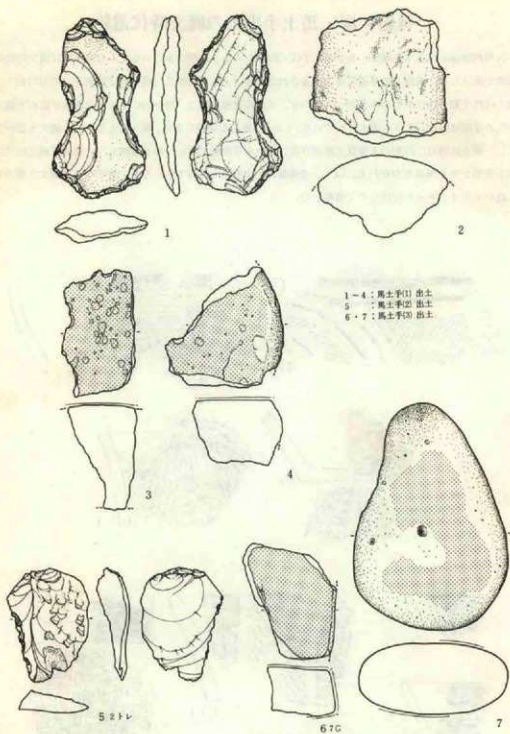


## 付篇 塚・馬土手出土の縄文時代遺物

台地内陸部に位置する塚(1)、及び馬土手(1)・(2)・(3)からも、点数は少ないながらも断片的に縄文時代の遺物が出土した。常磐自動車道関連で調査された遺跡は、江戸川寄りに縄文時代前期の、利根川寄りに縄文時代中期、特に前半の集落跡が目立つが、流山市東部地区は、地形的にも高燥な台地が広がり縄文時代の遺跡は少ないものと考えられている。しかし、狭小な面積ながら、塚・馬土手からも縄文土器が出土し、調査区周辺に該期の未発見遺跡が存在している可能性が高い。出土遺物も、時期的に縄文時代晩期の資料が多く興味を引かれる。以下、遺跡毎に出土遺物を報告する。なお、塚(2)からは縄文土器片細片数片の出土があっただけなので省略した。



第270図 馬土手(1)・(2)・(3)出土土器



第271圖 馬土手(1)・(2)・(3)出土石器

**A. 塚1)出土遺物 (253・254図=PL.86~87)**

前期前半18点、中期後半16点、後期後半3点、同後半4点、及び晩期前半91点の土器片合計132点と、石器4点が出土した。1・2は中期後半、加曾利EIV式の口縁部の破片、3~8は晩期前半、安行IIIc式の深鉢形土器である。また石器は打製石斧1と、磨石片2~4が出土した。調査区近傍に、縄文時代晩期を中心とした遺跡が広がっている可能性が高い。

**B. 馬土手(1)出土遺物 (第270・271図)**

前期前半8点、中期後半6点、後期前半4点、同後半3点、及び晩期前半1点、合計22点の土器片と石器4点が出土した。1は中期後半、加曾利E I式土器の口縁部片、2は後期後半、加曾利B I式、3もその前後に属すると思われる底部片である。4は晩期前半、安行IIIc式土器。石器は1の打製石斧、及び2~4の磨石片である。

**C. 馬土手(2)出土遺物 (第270・271図)**

中期後半2点、後期後半11点、合計13点の土器片と、剥片1点が出土した。5・6は後期後半、塚之内II式の深鉢形土器片、また石器5は流紋岩製の剥片である。

**D. 馬土手(3)出土遺物 (第270・271図)**

前期前半2点、中期後半18点、後期前半1点、合計21点の土器片と、磨石2点が出土した。7は中期後半、加曾利E III式土器片、8は後期前半に属する底部破片と思われる。また石器6・7は磨石である。

(原田)

## 第6篇 自然科学的研究

## 第1章 若葉台遺跡009住居跡出土の貝類、甲殻類

### 1. 資料と方法

#### (a) 採集方法

今回調査した資料は、009号住居跡内に堆積する貝層から採集したものである。住居跡覆土からは黒浜式土器が主体的に出土する。貝層は、北西-南東方向に長軸をもつ本号跡の中央部南東壁寄りには堆積し、平面観では大小7つのブロックに分かれている(第176図、A-Gブロック)。貝層断面から明らかのように貝層底面と住居跡床面との比高差はほとんどなく、各貝層の形成時期は縄文時代前期中葉と考えられる。なお、DブロックとEブロックの貝層中からは大形の土器片が出土しているが、これらは別項で詳述したように新井編年黒浜式第1段階に分類される。

資料の採集方法は、上記の7つの貝層ブロックのうちAとFのブロックを除く5ヶ所のブロックを土塊ごと一括採取し、その内容を弱い流水下で水洗分離する方法を用いた。水洗に用いたフルイは、メッシュ寸法が9.52mm、4.0mm、2.0mm、1.0mmの同規フルイである。各メッシュ面上の分離物はメッシュ寸法別に自然乾燥させたのち、肉眼的に識別可能な資料を採集した。

#### (b) 集計と計測方法

資料は、腹足綱は体層を保存するものを集計したが、ウミミナ属は殻層の $\frac{1}{2}$ 以上を保存するものを集計した。二枚貝綱は、殻板を保存するもの左殻、右殻別にそれぞれを集計した。しかし、側面の大部分が破損していても主歯が残存し、殻の左右が区別できるものは集計対象に加えた。甲殻綱は識別できた殻片をその大きさにかかわらずすべて採集し、その破片数を集計した。最小個体数は腹足綱は資料の集計数を、二枚貝綱は集計数の多い側の殻の集計数を採用した。

計測は、腹足綱は殻高を、二枚貝綱は殻長を計測した。計測部位の保存状態が不良なものは白色紙上に原形を復元し、計測を行った。しかし、計測部位の復元が困難なものは計測の対象から外した。なお、計測には田島製作所製0.1mmダイヤル式カーボンファイバーノギス DIAL-15を使用した。計量は秤量4kg、最小目盛10gの大野度量衡製作所製上皿秤を使用した。

### 2. 同定結果および計測値

各貝層から一括採取したサンプルの同定および計測結果をブロック別に報告する。ただし、上述のように009号住居跡で確認した7ヶ所の貝層ブロックのうち、AブロックとFブロックからは一括サンプルを採取していないので、以下Bブロックの結果から報告する。

#### (a) Bブロック

Bブロックは直径約30cm、厚さ約10cm程度の小さな貝層で、腹足綱1種、二枚貝綱5種、甲殻綱1種が同定されたが、資料数も少なく、貝層を構成する動物遺存体の組成は貧弱である(表37)。同定した6種のうち、最も出現個体数が多いのは殻径15-16mm前後のイボキサゴである。しかし、重量的にはマガキが最も優占し、ハマグリとシオフキガイがそれにつぐ。資料はいずれもチョークが進行し、新しい破損面や剝離面が多くみとめられる。したがって、剝離資料の多くが4.0mmメッシュを通過するか、同定が

表35 009住居跡出土の動物遺存体

## 軟体動物門

## 腹足綱

## 前総亜綱

## 原始腹足目

- スガイ *Lunella coronata corensis* (A. ADAMS)  
イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniferum* (LAMARK)

## 中腹足目

- オオヘビガイ *Serpulorlis (Cladopoma) imbricatus* (DUNKER)  
シマヘナタリガイ *Cerithidea ornata* A. ADAMS  
ツメタガイ *Neverita (Glassaulax) didyma* (RODING)

## 新腹足目

- アカニシ *Rapana*  
アラムシロガイ *Reticunassa festiva* (POWYS)

## 有肺亜綱

## 柄眼目

- オカチョウジガイ? *Allopeas kyotoensis* (PILSBRY & HIRASE)?  
ヒメコハクガイ? *Hawaiiia minuscula* (BINNEY)?

## 二枚貝綱

## 異形目

- ハイガイ *Tegillarca granosa* (LINNAEUS)  
サルボウガイ *Scapharca subcrenata* (LISCHKE)  
マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)

## 異歯目

- ウネナシトマヤガイ *Trapezium (Neotrapezium) liratum* (REEVE)  
アサリ *Ruditapes philippinarum* (ADAMS & REEVE)  
オキシジミガイ *Cyclina sinensis* (GMELIN)  
カガミガイ *Dosinorbis (Phacosoma) japonicus* (REEVE)  
ハマグリ *Mactra veneriformis* REEVE  
シオフキガイ *Solen strictus* GOULD  
マテガイ *Solb Meretrix lusoria* RODING  
無面目 *Mya*  
オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai* MAKIYAMA

## 節足動物門

## 甲殻綱

## 完胸目

- シロスジフジツボ? *Balanus allicosatus* PISBRY?  
ドロフジツボ? *Balanus kondakovi* TARASOV & ZEVINA?

困難になるので、資料重量は相当少なめに出ているものと考えられる。

マガキ：殻表の保存状況は不良で、付着地物の性状は明らかでない。

ハマグリ：殻長50mm前後のものが2点出土したが、それ以外のものは計測不能である。

シオフキガイ：殻長26.8、40.4mmのものが出土したが、それ以外のものは計測できない。

フジツボ：小形の破片資料である。殻表は平滑で、縦走肋はみとめられない。おそらくドロフジツボ *Balanus kondakovi* に由来するものと思われる。

表36 Bブロックにおける同定結果

種名	頻度	最少個体数	最少個体相対値(%)	重量*(10g)
イボキサゴ	18	18	51.43	1
マガキ	右 2 左 6	6	17.14	10
アサリ	右 1 左 1	1	2.86	0
オキシジミ	右 1 左 1	1	2.86	1
ハマグリ	右 4 左 5	5	14.29	3.5
シオフキガイ	右 4 左 4	4	11.43	1.7
合計	14	35	100.01	17
フジツボ	1	1	0	0

\*9.52, 4.0mmメッシュ面上における分離物重量(以下同じ)

表37 Cブロックにおける同定結果

種名	頻度	最少個体数	最少個体相対値(%)	重量(10g)
イボキサゴ	2	2	20	0
マガキ	右 2 左 2	2	20	3.5
アサリ	右 1 左 1	1	10	0.5
ハマグリ	右 1 左 1	1	10	2
シオフキガイ	右 2 左 2	2	20	0
オオノガイ	右 2 左 2	2	20	1
合計	12	10	100	7

## (b) Cブロック

Cブロックは、Bブロックとはほぼ同規模の大きさをもつ貝層で、Bブロックとは約40cmの距離で近接する。腹足綱1種、二枚貝綱5種が同定されたが、Bブロックと同様に出現した資料数は少なく、重量的にはマガキが優占する(表37)。資料は脆く破損が著しいため計測にたえるものはない。

マガキ: 殻表には泥質土が固着する。殻頂付近の保存状態は特に悪く、附着地物の性状は明らかでない。

ハマグリ: 殻長約36mmの資料が出土した。

## (c) Dブロック

Dブロックは長径約1m、厚さ約25cm程度の貝ブロックで、本号跡床面に密着して堆積する。Eブロックと並んで最も規模の大きな貝ブロックである。腹足綱6種、二枚貝綱11種と有肺亜綱3種が同定された(表38)。出現した資料数は多く、個体数ではイボキサゴとハマグリが多いが、重量ではハマグリ、マガキ、シオフキガイが優占する。

イボキサゴ: 殻径13~18mmの範囲のものが出現したが、15~17mmのものの頻度が全体の約65%を占め

表38 Dブロックにおける同定結果

種名	頻度	最少個体数	最少個体相対値(%)	重量(10g)
スガイ	3	3	0.66	0
イボキサゴ	154	154	33.85	10
オオヘビガイ	1	1	0.22	0
ツノタガイ	2	2	0.44	5.5
アカニシ	4	4	0.88	12
アラムシロガイ	2	2	0.44	0
サルボウガイ	右 3 左 3	3	0.66	3
ハイガイ	右 2 左 2	2	0.44	2.5
マガキ	右 20 左 35	35	7.69	74
ウネナシマヤガイ	右 3 左 3	3	0.66	0
アサリ	右 10 左 6	10	2.20	3
オキシジミ	右 7 左 8	8	1.76	6
カガミガイ	右 4 左 4	4	0.88	7
ハマグリ	右 125 左 115	125	27.47	161
シオフキガイ	右 82 左 87	87	19.12	21
マテガイ	右 7 左 10	10	2.20	2
オオノガイ	右 2 左 2	2	0.44	6
合計	703	455	100.01	313
有肺亜綱	3	3	—	—

表39 009住居跡Dブロック出土ハマグリ殻長計測値(定数)

殻長(mm)	頻度	相対頻度(%)	殻長(mm)	頻度	相対頻度(%)
20.0~22.5	1	1.35	47.5~50.0	9	12.16
22.5~25.0	2	2.70	50.0~52.5	5	6.76
25.0~27.5	4	5.41	52.5~55.0	5	6.76
27.5~30.0	1	1.35	55.0~57.5	1	1.35
30.0~32.5	3	4.05	57.5~60.0	7	9.46
32.5~35.0	7	9.46	60.0~62.6	1	1.35
35.0~37.5	3	4.05	62.5~65.0	2	2.70
37.5~40.0	3	4.05	65.0<		
40.0~42.5	9	12.16	合計	74	99.98
42.5~45.0	8	10.81	計測不能	34	
45.0~47.5	3	4.05	総計	108	

表40 009住居跡Dブロック出土シオフキ殻長計測値(定数)

殻長(mm)	頻度	相対頻度(%)	殻長(mm)	頻度	相対頻度(%)
20.0~22.5	2	3.51	40.0~42.5	1	1.75
22.5~25.0	7	12.28	42.5~45.0	1	1.75
25.0~27.5	12	21.05	45.0~47.5	1	1.75
27.5~30.0	9	15.79	57.5~60.0	1	1.75
30.0~32.5	12	21.05			
32.5~35.0	7	12.28	合計	57	99.98
35.0~37.05			破損資料	8	
37.5~40.0	4	7.02	総計	65	

る。

オオヘビガイ：殻口付近は欠損し失なわれるが、細かい螺脈がみとめられること、節状の螺肋があることなどの特徴から本種に同定した。本種は潮間帯の岩礁などに固着するが、出土資料では付着地物の性状は明らかでない。

サルボウガイ：殻長33.0mm、40.1mmの2点が計測可能である。

ハイガイ：殻長37.0mmの資料が1点だけ計測可能である。他3点の資料のうち1点は内外面が灰色を呈し、熱をうけた可能性がある。

マガキ：資料の性状は前出のマガキ資料と酷似する。資料の一部には放射肋が不明瞭で成長脈の状態がスミノエガキ *Crassostrea ariakensis* に似るものが存在する。

カマガイ：殻長約50~55mmの範囲のものが出現した。

ハマグリ：上述のように本ブロックの優占種で、殻長は20~65mmの範囲に広く分布する(表39、第272図)。

シオフキガイ：殻長約20~60mmまでのものが出現したが、その大部分を約23~35mmのものが占める(表40、第273図)。

有肺亜綱：1.0mmメッシュで分離採集された。それぞれ別種であるが、目以下の同定は行っていない。

#### (d) Eブロック

Dサンプルに隣接した直径約90cmの貝ブロックで、床面に密着して堆積し、その一部はピット内に流れこむ。このサンプルからは腹足綱6種、二枚貝綱11種、有肺亜綱2種、甲殻綱1種が同定された(第7表)。出現資料数は多く、個体数、重量ともにマガキとハマグリが優占する。

スガイ：殻径14.6mmのものが1点出土した。

イボキサゴ：殻径14~18mmの範囲のものが出現したが、15~17mmのものの頻度が最も高い。

ツメタガイ、アカニシ：いずれも大形個体に由来する破片資料であるが破損面は新しく、破損が旧来のものであるかどうか明らかでない。

サルボウガイ：殻長46mm前後のものが出土した。加工痕等のみとめられない。

ハイガイ：左殻の破片が1点出土した。計測は困難である。

マガキ：泥質土が殻表に固着する。保存状態は良い。



表40 009住居跡Eブロック出土ハマグリ類長計測値(主観)

殻長(mm)	個数	相対個度(%)	殻長(mm)	個数	相対個度(%)
20.0~22.5	2	2.99	47.5~50.0	6	8.96
22.5~25.0	3	4.48	50.0~52.5	3	4.48
25.0~27.5	4	5.97	52.5~55.0	2	2.99
27.5~30.0	6	8.96	55.0~57.5	1	1.49
30.0~32.5	7	10.45	57.5~60.0	2	2.99
32.5~35.0	3	4.48	60.0~62.5		
35.0~37.5	7	10.45	62.5~65.0		
37.5~40.0	7	10.45	65.0~67.5	2	2.99
40.0~42.5	5	7.46	合計	67	100.04
42.5~45.0	4	5.97	破損資料	16	
45.0~47.5	3	4.48	総計	83	

表42 009住居跡Eブロック出土シオフキ類長計測値(主観)

殻長(mm)	個数	相対個度(%)	殻長(mm)	個数	相対個度(%)
20.0~22.5	4	12.90	35.0~37.5	2	6.45
22.5~25.0	2	6.45	37.5~40.0	1	3.23
25.0~27.5	7	22.58			
27.5~30.0	4	12.90	合計	31	99.99
30.0~32.5	5	16.13	破損資料	8	
32.5~35.0	6	19.35	総計	39	

表43 Eブロックにおける同定結果

種名	個数	最小個体数	最小個体相対個度(%)	重量(10g)
スガイ	1	1	0.31	0
イボキサゴ	60	60	18.58	5
シマヘナタリ	+	1	0.31	0
ツメタガイ	3	3	0.93	6
アカニシ	2	2	0.62	28
アラムシロガイ	1	1	0.31	0
サルボウガイ	2	2	0.62	5
ハイガイ	+	1	0.31	0
マガキ	59	66	20.43	199
ウネナシトマヤガイ	1	1	0.31	0
アサリ	9	9	2.79	1
オキシシミ	5	5	1.55	5
カガミガイ	14	14	4.33	14.5
ハマグリ	67	91	28.17	85
シオフキガイ	53	55	17.03	17
マテガイ	4	4	1.24	2
オオノガイ	7	7	2.17	11
合計	530	523	100.01	378.5
有脚巻網	6	6	—	—
フジツボ	4	1	—	—

ウネナシトマヤガイ:殻長23.4mmのものが出土した。殻表に黒褐色の付着物がある。

アサリ:殻長25mm前後のものが出土した。いずれも殻質は薄く、小形である。

カガミガイ:殻長33~49.7mmの範囲のものが出土した。新しい傷痕や剝離面が多いが、加工痕はみとめられない。

ハマグリ:個体数が最も多く算出された貝類である。保存状態は良く、殻長21~67mmの範囲のものが出現した(表41,第274図)。いずれも加工痕等はみとめられない。

シオフキガイ:殻長20~38mmの範囲のものが出土した(表42,第275図)。殻質は薄い。

マテガイ、オオノガイ:いずれも破損が著しく、原形の復原は困難である。

有脚巻網:2種類で構成される。オカチュウシガイ *Allopeas kyotoensis* とヒメコハクガイ *Hawaii minuscule* に似るが、目以下の同定は行っていない。

フジツボ:小さな破片殻で、いずれも4.0mmメッシュ面上で分離された。殻表に細い縦走肋がみとめられる。おそらく、シロスジフジツボ *Balanus albicostatus* に由来するものと思われる。

#### (e) Gブロック

Eブロックから約20cmほどの距離をおいて堆積する直径約30cm、厚さ約10cmの小規模な貝層である。床面に密着する。腹足網2種、二枚貝網7種、甲殻綱が同定された(表44)。マガキとハマグリが優占する。

ハイガイ:殻長24mmのものが出土した。

マガキ:殻質は厚く、保存状態も良好である。多くの個体が明瞭な放射肋をもつが、スミノエガキに類似する形状の個体も含まれる。

ウネナシトマヤガイ:殻長11mmのものが出土した。

アサリ:殻長41mmのものが出土した。殻質は厚い。

表44 Gブロックにおける同定結果

種名	頻度	最小個体数	最小個体相対値(%)	重量(10g)
スガイ	2	2	5.41	0
イボキサゴ	1	1	2.70	0
ハイガイ	1	1	2.7	0
マガキ	5 10	10	27.02	19.5
ウネノシトマガイ	1 1	1	2.70	0
アサリ	1	1	2.70	0
オキシジミ	2 2	2	5.41	2.5
ハマグリ	12 13	13	35.14	12
シオフキガイ	5 6	6	16.22	3
合計	62	37	100	37
フジツボ	2	1	—	—

オキシジミ：殻長40mm、40.3mmのものが計測可能である。

ハマグリ：マガキと共に優占種となるが、泥質土が内外面に固着する。殻長約35～47mmの範囲のものが出土したが、保存状態はやや悪い。加工痕等はみられない。

シオフキガイ：殻長32.8、40.3mmのものが出土した。

フジツボ：細い縦走肋がみられる小破片である。

### 3. まとめ

今回同定した貝類遺存体の最小個体数の集計結果と計量結果を各ブロック別に示すと表45ようになる。なお、脊椎動物は同定できなかった。各ブロックは009住居跡が廃棄されたあと、まもなくして堆積を開始し、相対的に短時間のうちに堆積を完了したものと考えられるので、形成年代には大きな時間差がないものと推定される。

同定した18種の貝のうち、各ブロックに共通して出現したのは、イボキサゴ、マガキ、アサリ、ハマグリ、シオフキガイの5種にとどまった。このうち、最小個体数が最も多く算出されたのは、イボキサゴとハマグリで、シオフキガイがそれにつぐが、重量別ではマガキとハマグリが圧倒的に優占する。このことは、本号跡の覆土が形成された期間をつうじて上記5種に対する漁獲頻度が相対的に高いこと、また、貝殻重量の多いマガキ、ハマグリが2種の漁獲重量が高かった可能性を示唆する。

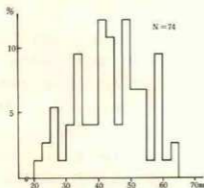
つぎに、同定した貝類組成を生態別にみると、内湾潮間帯の砂泥底に生息するものが多く出現し、またその種数も多いが、マガキ、ハイガイ、オオノガイが占める割合も高いので、採貝漁場は比較的泥底の発達した干潟であったと考えられる。若葉台遺跡の所在する台地から約0.5km西方には広大な東京低地が広がり、また遺跡の西～南には上貝塚地先をへて東京低地に開口する谷底低地が台地を開析する。これらの沖積低地は当時の海進の影響を受け、上記のような環境条件をそなえていた可能性があるが、現状では若葉台に貝類を供給した漁場を特定することは困難である。

なお、柏市花前I遺跡で検出した103号住居跡(5.7m×4.8m、黒浜期)はその全面を貝層が覆っており、その貝類組成が田井(1984)によって検討されている。それによると、個体数では構成貝類全体の約43%をアサリが占め、マガキ、オオノガイの出現頻度は低い。この貝層の堆積時期は、本貝層の堆積時期と大きな時間的ひらきがなかったと考えられるので、両者の組成内容のちがいは環境差にもとづく可能性が高い。(小宮孟)

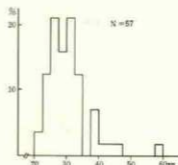
表45 各ブロックにおける出土具類集計結果

具 類	ブ ロ ッ ク 名						合 計	
	B	C	D	E	G	最小個体数	重量 (%)	
ス ガ イ			3 0	1 0	2 0	6( 0.7)	0	
イホキサゴ	18 1	2 0	154 10	60 5	1 0	235( 27.3)	16 ( 2.1)	
オオヘビガイ			1 0	1 0		1( 0.1)	0	
シマヘナリガイ				3 6		1( 0.1)	0	
フメタガイ			2 5.5	2 28		5( 0.6)	11.5( 1.5)	
アカニレ			4 12	1 0		6( 0.7)	40 ( 5.3)	
アラムシロガイ			2 00	1 0		3( 003)	0	
ハイガイ			2 2.5	2 5	1 0	4( 0.5)	2.5( 0.3)	
サルボウガイ			3 3	66 199		5( 0.6)	8 ( 1.1)	
マ ガ キ	6 10	2 3.5	35 74	1 0	10 19.5	119( 3.8)	306 (40.7)	
ウネシトマガイ			3 0	80 1	1 0	5( 0.6)	0	
ア サ リ	1 0	1 0.5	10 3	5 5	1 0	22( 2.6)	4.5( 0.6)	
オキシジミガイ	1 1		8 6	14 14.5	2 2.5	16( 1.9)	14.5( 1.9)	
カガミガイ			4 7	91 85		18( 2.1)	21.5( 2.9)	
ハマグリ	5 3.5	1 2	125 161	55 17	13 12	235( 27.3)	263.5(35.0)	
シオフキガイ	4 1.5	2 0	87 21	4 2	6 3	154( 17.9)	42.5( 5.6)	
マテガイ			10 2	7 11		14( 1.6)	4 ( 0.5)	
オオノガイ		2 1	2 6			11( 1.3)	18 ( 2.4)	
合 計	35 17	10 7	455 313	323 378.5	37 37	860(100 )	752.5(99.9)	

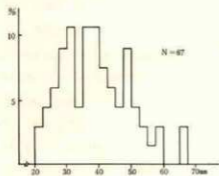
\*数字は左が最小個体数、右が重量(単位g)を示す。



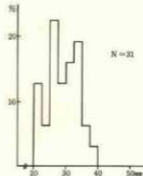
第272図 Dブロック出土ハマグリ殻長分布



第273図 Dブロック出土シオフキ殻長分布



第274図 Eブロック出土ハマグリ殻長分布



第275図 Eブロック出土シオフキ殻長分布

文 献

田井知二 1984 佐野跡出土の動物遺体、千葉県文化財センター「常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書 II」: P111-117

## 第2章 若葉台遺跡の古環境復原

### 第1節 試料

分析に供した試料は、千葉県流山市大字桐ヶ谷字南割44の若葉台遺跡(220-003)の台地上のK11-94グリッドから採取したもので、合計29点であって鉱物分析と花粉分析は同一層準試料である。試料はローム質であり、層準、試料No、色調、花粉、胎子化石産出傾向等をまとめて表46とした。

### 第2節 重鉱物分析

#### A. 試料

第1節試料表による。

#### B. 分析方法

湿試料約60gを秤量→超音波装置を用い粘土分除去→篩を用いて1/4-1/8mm粒度の砂分抽出→重液分離(テトラグロモエタン SG=2.96)→重鉱物秤量→封入→約300個体同定→第276図に結果をまとめる。

#### C. 分析結果

試料の大部分は褐色ロームである。No14、12、11、7の付近で暗褐色を呈する。下半部の試料は粘性がある。

表46 若葉台遺跡分析試料一覧

層序	試料No	色調	花粉・胎子化石産出傾向*
II b	1	暗褐色 7.5 YR 3/3	C
	2	" 7.5 YR 3/3	C
II c	3	" 7.5 YR 3/4	C
	4	" 7.5 YR 3/4	C
III	5	褐色 7.5 YR 4/4	C
	6	" 7.5 YR 4/4	C
V	7	暗褐色 7.5 YR 3/4	R
	8	褐色 7.5 YR 4/4	C
VI	9	" 7.5 YR 4/4	R
	10	" 7.5 YR 4/4	R
VII	11	暗褐色 7.5 YR 3/3	R
	12	" 7.5 YR 3/3	R
	13	褐色 7.5 YR 4/4	R
VIII	14	暗褐色 7.5 YR 3/4	R
	15	褐色 7.5 YR 4/4	RR
	16	" 7.5 YR 4/4	RR
	17	" 7.5 YR 4/4	R
IX	18	" 7.5 YR 4/4	R
	19	" 7.5 YR 4/6	R
	20	" 7.5 YR 4/4	RR
	21	" 7.5 YR 4/5	RR
X	22	" 7.5 YR 4/5	RR
	23	" 7.5 YR 4/6	RR
	24	" 7.5 YR 4/6	RR
	25	" 7.5 YR 4/6	RR
XI	26	" 7.5 YR 4/6	RR
	27	" 7.5 YR 4/6	RR
	28	" 7.5 YR 4/6	RR
層	29	" 7.5 YR 4/6	RR

\*C:普通, R:少ない, RR:非常に少ない

粘土除去後の砂分中には、火山性の鉱物斑晶が多く、外来の礫や砂分はきわめて少ない。褐～赤褐色のスコリア片も1mm程度のが少量含まれる。最上部のNo4～1では炭化物小片(1mm前後)がわずかに含まれる。乾燥試料中における1/4～1/8mm砂分量は数%以下の値をとる。

1/4～1/8mmの砂分中の重鉱物の割合は第276図に示すように特徴的な変化を示す。No25(43.8%)で小さな極大がみられ、No11(76.5%)で最大となり、No6(68.2%)で小さな極大が存在する。これに対し極小はNo21(19.8%)とNo9(57.5%)がみられる。

次に重鉱物組成について以下に述べる。

カンラン石はNo25(44.2%)で極大となった後No21(17.2%)で極少

となる。No20-10ではNo14 (42.7%)の小さい極小をはさんでNo15 (55.1%)とNo12 (51.7%)の2つの極大をもつカンラン石の多産部分を形成している。No9-1では減少して20%前後の値を示すが、No4 (24.4%)付近でわずかに極大部が認められる。No20から下位の試料のカンラン石は、表面が褐色に風化して他形結晶が多い。No19-7付近では比較的新鮮で自形-半自形がみられるが、No6-1では風化したカンラン石がややふえ半自形-他形が多い。

斜方輝石は、No29 (53.0%)、No21 (52.6%)の極大をとり、No17-11では30%前後の平坦な極小部を形成している。No10-1では50%前後の高率で安定した値を保つ。下半部においては半自形の新鮮なものがみられ、一部には柱状-針状結晶も含まれる。No11-1の試料中には固縁に火山ガラスが付着した斜方輝石がみられ、特にNo2-1において多い。

単斜輝石はNo9 (16.8%)を最高とする極大部で10%を超える値を示すが、これ以外の試料では10%未満の低率で産出する。多産部においては、柱状の自形結晶もみられるが、全体に半自形-他形結晶が多い。No14とNo7で火山ガラスの付着した単斜輝石が認められた。

角閃石族は、No28 (11.1%)を最大にして上方に向かって漸減傾向を示す。緑色普通角閃石が一般的に多く、褐色普通角閃石、酸化ホルンブレンド、青緑色を呈するその他の角閃石族がそれぞれ続く。全体に半自形-他形が多く、ごく一部に自形結晶がみられる。

黒雲母緑レン石、ザクロ石等が下半部で検出される。

不透明鉱物は、下半部では10%前後の値を保ち、No17 (4.9%)の最小を境に漸増に転じ、No2 (26.5%)で最大に達する。No28およびNo13-1において周縁に火山ガラスが付着した不透明鉱物が認められ最上部のNo3-1で多い傾向にある。

以上重鉱物について述べたが、次に火山ガラスの産出について簡単に触れる。

No12以下の試料では火山ガラスはほとんど含まれない。No11からバブル型火山ガラスが増え始めNo10-7において多産する。No5-1では、火山ガラスの量はNo10-7に比べて少ないが、バブル型のほかに軽石型、中間型あるいは肉厚の塊状火山ガラス等が混合して産出している。

#### D. 考察

まずNo10-7においてバブル型火山ガラスの多産が認められた。そしてこれはNo9の重鉱物量の極小、すなわち軽鉱物量の極大に一致している。重鉱物組成ではカンラン石の減少部と斜方輝石の増加部に位置し単斜輝石の極大を伴う。さらに暗色を呈するVII層の上位に位置している。以上のことからバブル型火山ガラスの密集層準は始良 Tn 火山灰 (AT) (町田、新井1976) に対比される。

VII層についてみるとATの下位に位置すること、他の資料に比べて暗色であること、重鉱物量の極大およびカンラン石の極大が含まれること等の特徴が認められる。以上のことからVII層は、中山新田I遺跡、花前II-I遺跡のVII層と同様に武蔵野地域の第2黒色帯に対比される。なお中山新田I遺跡、花前II-I遺跡のVII層下部にみられたカンラン石の小さな極小が今回の分析でもNo14で明瞭に認められることから、立川ローム層の対比におけるこの層準の有効性が今後期待される。

ソフトロームとされるIII層のNo4においてカンラン石の小さなピークが存在する。これは武蔵野地域において立川ローム第1部層からソフトローム前後におられるカンラン石の極大 (例えば羽鳥1971) に対応する可能性が考えられる。ただ本地域の場合カンラン石の極大の高さが第2黒色帯付近の極大と比

べて相対的にかなり低い値を示している。

武蔵野台地の第1黒色付近ではカンラン石の極少部と斜方輝石の極大部が存在し、さらに重鉍物量の増加部に位置しているとされる。以上のことと今回の分析や層序関係等から、武蔵野台地の第1黒色帯に対比される層準は、本地域のV層付近に相当するものと考えられる。

本地域のIX層にみられる重鉍物量とカンラン石の極大に対比されると考えられる分析結果が、千葉県下のいくつかの遺跡の武蔵野ローム中において等められる。すなわち、空港地域のNo7(211-005)遺跡、No60(211-006)遺跡、No61(211-011)遺跡のそれぞれX層中、あるいは南二重郷遺跡(201-017)遺跡3A-71グリッドの9~10層中等に認められる。これらの層準はどれも東京軽石層よりも上位である。

今回の分析では、東京軽石層を示すような結果は得られなかった。

しかし上記のことから、もし東京軽石層が保存されているとすれば、それはNo29より下位の砂質粘土~砂層中に見出される可能性が考えられる。

本遺跡の北側斜面においてソフトローム(III層)、「暗褐色土」、および新期テフラ層が明確に層序区分ができるにもかかわらず、遺跡中央部では「暗褐色土」がソフトローム層に酷似して、肉眼による層序区分が困難だとされている。今回の分析においても本地点でIII層にIIb層とを明確に区切れるような結果は得られなかった。III層に完全に包含されるNo4とIIb層に含まれるNo1とははさまれたNo3~2は、各重鉍物の産出割合、重鉍物量、色調、1/4~1/8mm砂分量等に関して、No4とNo1との中間的性質を有しその変化は漸移的である。すなわち明瞭な境界を設定できるような特徴的な変化はみられなかった。

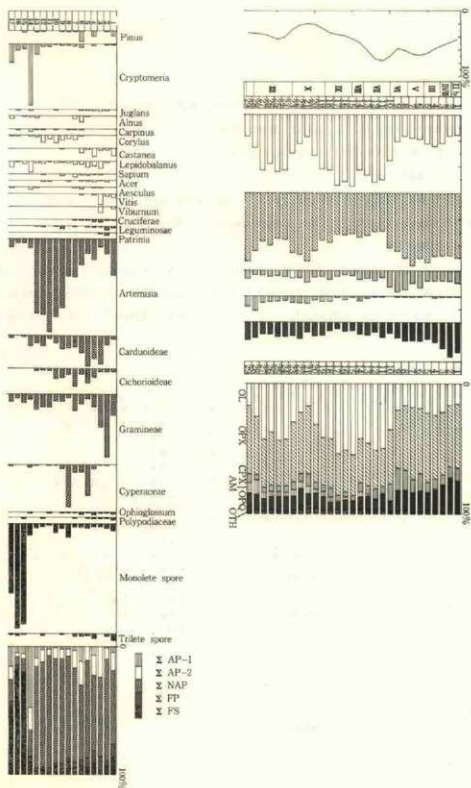
以上のことから本遺跡内における地層の保存条件が、北側斜面部分と中央部とで異っていたものと考えられる。これらは堆積当時の地表の状態や堆積後の物理的、化学的、生物的作用等に影響されるであろう。No3あるいはNo2がIII層とIIb層との漸移的性質を具備していることは、地層間における堆積粒子の移動と混合が行われていたと推定される。堆積粒子の堆積後の移動はATとかTP等のテフラについても関連した問題であろう。

VI層以上の層序区分と重鉍物組成は、中山新田I遺跡と本遺跡とでよく対応している。武蔵野ローム層では、どの遺跡でも認められるとは限らない。例えば花前II-I遺跡でもIX層で重鉍物の極小は認められるが、カンラン石の極小はみられない。重鉍物の極小に関して言えば、両遺跡の層序区分に若干の相違がみられる。

#### 参 考 文 献

- 羽鳥謙三(1971) 標式地域における立川ローム層の層序について供——野川遺跡を中心として  
第四紀研究 Vol.10, P.290~305
- 町田 洋、新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰——給良 Tn 火山灰の発見とその意義  
科学 No.46, P.339~347





第276图 若菜台遺跡重鉱物・花粉分析結果

### 第3節 花粉分析

#### A 試料

表46による。

#### B 分析結果

花粉分析の結果は、検出した花粉・胞子化石の総個体数を基礎とした百分率で第276図に示した。その中で検出個体数が100個に満たない試料は、個体数のみで表示した。

今回の分析で検出された花粉・胞子化石は下記のものがあげられる。

#### AP-1 (針葉樹花粉)

Abies (モミ属)、Tsuga (ツガ属)、Picea (トウヒ属)、Pinus (Diploxylon) (二葉型松)、Pinus (マツ属)、Sciadopitys (コウヤマキ属)、Cryptomeria (スギ属)

#### AP-2 (広葉樹花粉)

Juglans (クルミ属)、Alnus (ハンノキ属)、Betula (カバノキ属)、Carpinus (クマシデ属)、Carylus (ハシバミ属)、Castanea (クリ属)、Fagus (ブナ属)、Lepidobalanus (コナラ亜属)、Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)、Celtis-Aphananthe (エノキ属-ムクノキ属)、Ulmus (ニレ属)、Zelkova (ケヤ

表47 若葉台遺跡花粉分析結果

層	試料	花粉	特徴花粉胞子	付随花粉	
II b	1	W-P-E	草本花粉	イネ科	タンポポ亜科、キク亜科、
2	3			ヨモギ属	ブドウ属、ガマズミ属、クリ属、
II b/III				3	コナラ亜属、クルミ属
4	2			キク亜科	ヨモギ属、イネ科、
5				タンポポ亜科	コナラ亜属
6				カヤツリグサ科	ハンノキ属、ハシバミ属、クリ属
V				7	イネ科、キク亜科
8	1			ヨモギ属	タンポポ亜科
VI				9	ハシバミ属、コナラ亜属
10				スギ属	
VII	11	W-P-D	スギ属	コナラ亜属、トチノキ属、クマシデ属、	
	12	W-P-D	黄花粉胞子	ヨモギ属、キク亜科、イネ科	
	13				
VIII	14	W-P-C	単葉溝型胞子	スギ属、コナラ亜属	
	15			ヨモギ属、キク亜科	
IX	16	W-P-A	黄花粉胞子	イネ科	
	17				
	18				
	19				
X	20	W-P-A	黄花粉胞子		
	21				
	22				
	23				
XI	24	W-P-A	黄花粉胞子		
	25				
	26				
	27				
XII	28	W-P-A	黄花粉胞子		
	29				



キ属、cf. *Viscum* (ヤドリキ属)、*Sapium* (シラキ属)、*Rhus* (ウルシ属)、*Acer* (カエデ属)、*Aesculus* (トチノキ属)、cf. *Parthenocissus* (ツタ属)、*Vitis* (ブドウ属)、*Araliaceae* (ウコギ科)、*Styrax* (エゴノキ属)、*Ligustrum* (イボタノキ属)、*Osmanthus* (ヒソラギ属)、*Viburnum* (ガマズミ属)

#### NAP (草本花粉)

*Fagopyrum* (ソバ属)、*Persicaria* (サナエタデ属)、*Polygonum* (タデ属)、*Portulaca* (スベリヒユ属)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Thalictrum* (カラマツソウ属)、*Ranunculaceae* (キンボウケ科)、*Macleya* (タケニグサ属)、*Cruciferae* (アブラナ科)、*Rosaceae* (バラ科)、*Dunbaria* (ヒメクズ属)、*Leguminosae* (マメ科)、*Geranium* (フウロソウ属)、cf. *Euphorbia* (トウダイグサ属)、*Phyllanthus* (ソミカンソウ属)、*Impatiens* (ツリフネソウ属)、*Haloragis* (アリ、トウグサ属)、*Umbelliferae* (セリ科)、*Rubiaceae* (アカネ科)、*Labiatae* (シソ科)、*Plantago* (オオバコ属)、*Patrinia* (オミナエシ属)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Cichorioideae* (タンポポ科)、*Iridaceae* (アヤメ科)、*Gramineae* (イネ科)、*Typha* (ガマ属)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科)、*Gentianaceae* (リンドウ科)、*Potentilla* (キジムシロ属)

#### FP (形態分類花粉)

Tetrazonoporate pollen (四溝孔型花粉)

Trizonocolpate pollen (三溝型花粉)

Trizonocolpate pollen (三溝孔型花粉)

#### FS (羊歯類花粉)

*Ophioglossum* (ハナヤスリ属)、*Osmundaceae* (ゼンマイ科)、*Pieris* (イノモトソウ属)、*Polypodiaceae* (ウラボシ科)、*Monolete spore* (単条溝型胞子)、*Trilete spore* (三条溝胞子)

次に、下から上へ花粉・胞子化石の産出を述べる。

No29-20は花粉・胞子化石が非常に少ない。従ってダイアグラムには載せなかった。

その少ない中ではスギ属が連続し、比較的多い。その他では、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ケヤキ属、イネ科等が試料によって検出される。

No19-17になるとそれまでよりは、花粉・胞子化石が多くなる。シダ類胞子の単条溝型胞子が非常に多産し優占する。そしてイネ科、ヨモギ属等の草本花粉、スギ属、コナラ亜属等の樹木花粉が比較的良好に検出されるようになる。

No16、15になると再び花粉・胞子化石が非常に少なくなる。スギ属、ヨモギ属、キク亜科、イネ科、単条溝型胞子等が検出される。

No14はスギ属が多くなり、コナラ亜属、トチノキ属、ハシバミ属、クマシデ属、ハンノキ属、クルミ属等の樹木花粉と、ヨモギ属、キク亜科、イネ科、カヤツリグサ科等の草本花粉と、単条溝型胞子のシダ類胞子を伴うようになる。

No13-1は、草本花粉が圧倒的に多くその内容は、各花粉の増減が、すこしずつづつ重なりあっている。また樹木花粉も若干の消長がみられる。この間の各花粉の消長について試料ごとに述べる。

草本花粉では、ヨモギ属がNo13-9にかけて非常に多く優占し、No11において最大値になる。No8-3は次第に減少し、No2、No1と再び増加する。

表48 古植生と古気候の関係

試料番号	花粉帯	古植生	古気候
III層 No.1		クリカシ属、クリ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、マメ属、が主体となった林地。林地の周囲にはキタ科、イネ科、スゲ科等の草本が生育。	暖温帯
III層 No.2 " No.3		キタ科、羊歯類を主体とする草地。この他にイネ科、スゲ科、マメ科、オオバコ属も良好に生育。草地の周囲にはコナラ亜属を主体とする植生が考えられる。	温帯
IV-VI層 No.4 VII層 No.5		マメ科（フジ Type）、キタ科草本から成る草地。草地の周囲にはハシバミ属、ハンノキ属、クマシラ属、クリ属、アカガシ亜属、コナラ亜属も若干生育。	冷温帯
VI層 No.6 " No.7 " No.8 VII層 No.9 " No.10 " No.11		ヨモギ属優占の草地、キタ科、クンボボ亜科、イネ科、羊歯類も良好に生育。又、ハシバミ属も周囲に生育。	温帯 冷温帯
VIII層 No.12 IX層 No.13		羊歯類優占の草地。その他ヨモギ属、キタ科が若干生育。	,
IX層 No.14		花粉・胞子化石が非常に少なく不明。	不明

キタ科は、No.9～3までが多く、とくにヨモギ属の少ないNo.5～3に多くなる。

クンボボ亜科は、ヨモギ属の減少傾向のNo.10～4にかけて多くみられる。この傾向はカヤツリグサ科にもみられる。カヤツリグサ科の場合、No.8とNo.5において急激に多産している。

イネ科は、No.13～8にかけて少しずつ減少し、No.7で再び増加するがその後No.5まで減少する。そしてNo.4、3、2と大きく増加し最大に達し、No.1でNo.2の半分以下に減少する。全体的にはNo.3、2、1において多産している。

一方樹木花粉では、スギ属、クルミ属、ハシバミ属、ハンノキ属、クリ属、コナラ亜属、ブドウ属、ガマズミ属に消長がみられる。

スギ属は、No.13において良好に検出されるものの、その後低率である。

クルミ属は、No.6～1において低率ながら連続してみられる。

ハンノキ属は、No.7～5において、No.6をピークとした消長がみられる。

ハシバミ属は、No.13～6にかけて連続し、No.12～7がその他の試料より比較的が多い。

クリ属は、No.6～1において連続する。

コナラ亜属は、No.13～1まで連続し、No.5～3にかけてその他の試料より比較的多い。

ブドウ属は、No.4～1に連続し、No.3に多い。

ガマズミ属は、No.3、2、1に連続し、No.3に多い。

このような結果から、このたびの試料を花粉帯に分けると次のように考えられる。

#### W-P-A花粉帯 (No.29～20)

花粉・胞子化石が非常に少なく、貧花粉帯ともいえよう。

スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ケヤキ属、イネ科等が産出している。

#### W-P-B花粉帯 (No19-17)

単条溝型胞子の顕著な多産によって特徴付けられる。

スギ属、コナラ亜属、ハンノキ属、ハシバミ属等の樹木花粉と、ヨモギ属、イネ科等の草本花粉を伴なう。

#### W-P-C花粉帯 (No16, 15)

この花粉帯も、花粉・胞子化石が非常に少なく、スギ属、ヨモギ属、キク亜科、イネ科、単条溝型胞子が僅かに検出されるにすぎない。

#### W-P-D花粉帯 (No14)

検出された花粉・胞子化石は100個体と少なかったが、スギ属が優先する。これに付随して、コナラ亜属、クマシテ属、ハンノキ属、トチノキ属等の樹木花粉と、ヨモギ属、キク亜科、イネ科等の草本花粉及び単条溝型胞子のシダ類胞子がみられる。

#### W-P-E花粉帯 (No13-1)

この花粉帯は、草本花粉が優先して検出されることによって特徴付けられる。この草本花粉には、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、イネ科、カヤツリグサ科等があり、これらの産出の消長によって大まかに3つの亜帯にこの花粉帯を細分することができよう。

##### E-1亜帯 (No13-9)

ヨモギ属の顕著な多産によって特徴付けられ、イネ科、キク亜科、タンポポ亜科等の草本花粉を伴なう。また樹木花粉では、スギ属、ハシバミ属、コナラ亜属が連続して検出される。この亜帯から上の亜帯にかけて、ハシバミ属がみられるのも特徴の一つといえよう。

##### E-2亜帯 (No8-4)

ヨモギ属の減少期ともいえて、上位になるにつれ、ヨモギ属が減少する。そして、キク亜科、タンポポ亜科、カヤツリグサ科等が多く産出するようになる。また樹木花粉では、下位でハシバミ属、中位でハンノキ属、上位でクルミ属、クリ属がみられ、下から上へコナラ亜属が若干増加する等の特徴がみられる。

##### E-3亜帯 (No3-1)

ヨモギ属がふたたび増加すると共に、イネ科が急増する。そして、キク亜科、タンポポ亜科、カヤツリグサ科等が減少する。

一方樹木花粉では、E-2亜帯の上位に続いて、クリ属、コナラ亜属、クルミ属がみられ、その他に、ブドウ属、ガマズミ属がみられる。

以上のことをまとめると、第 表のようにならう。

#### C 古植生について

資料によると、No15の中間を境にして、それより上位が立川ローム、下位が武藏野ロームとされ、前者がW-P-D、E花粉帯、後者がW-P-A、C花粉帯に相当する。

武藏野ロームは一般的に花粉・胞子化石の産出が非常に少なく、古環境を推定し難い。今回の試料もやはり花粉・胞子化石が非常に少なかった。なお、一部について単条溝型胞子が多産しているところがW-P-B花粉帯にあった。このことはシダ類の生育を示しているものの、花粉・胞子化石が少ないの

で、シダ類の繁茂は優占とは考え難い。また、W-P-A-C花粉帯の樹木花粉をみると、スギ属が連続している。従って、スギ属の生育が考えられ、古気候として比較的温和な気候といえよう。しかし、どのような植生であったかは判断し難い。

一方、立川ロームでは、比較的良く花粉・胞子化石が検出された。

W-P-D花粉帯では、スギ属が優占し、コナラ亜属、クマシデ属、トチノキ属等から成る疎林、ヨモギ属、キク亜科、イネ科等が下草、または空地に生育していたものと考えられる。古気候は比較的温和といえよう。

W-P-E花粉帯では、草本花粉が多く、草本優占の草地的な環境が推定されたが、花粉の産出もさほど多くなく、裸地に近い状態であったかもしれない。

W-P-E花粉帯は、E-1、2、3に細分され、その植生について述べると次のように考えられよう。

E-1亜帯は、ヨモギ属が優占し、キク亜科、カヤツリグサ科等を伴う裸地的草地在推定される。そして樹木は、スギ属に減少、ハシバミ属に増加が僅かながらみられ、気候が冷涼化していると考えられる。

E-2帯になると、ヨモギ属に減少がみられ、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、カヤツリグサ科等から成る草地在うかがえる。

そして樹木では、下位でハシバミ属、上位でクリ属、クルミ属、コナラ亜属等の生育が推定される。古気候は、下位で冷涼、上位になると若干の温暖化があったかもしれない。

E-3亜帯では、イネ科、ヨモギ属優占の草地と考えられ、キク亜科、タンポポ亜科、オミナエシ属、マメ科、アブラナ科等も一緒に生育していたものといえよう。一方樹木は、クリ属、クルミ属、ブドウ属、ガマズミ属、コナラ亜属が疎林を形成していたかもしれない。古気候は、E-2亜帯の上位と同じといえよう。

添付資料によれば、気候・気温は現在の日本でいえばどの地域に似ているかなどを、具体的に考察するようとなっている。

武蔵野ローム、立川ロームの堆積する時代は、かなりの量の火山灰が、不連続または連続的に降下したのと考えられる。現在の日本において、これほどの量の火山灰が降下している場所は見当たらない。従って、どの地域の植生に似ているかは不明である。気候・気温についても同様である。但し、武蔵野ロームの貧花粉・胞子化石と立川ロームのヨモギ属に代表される草本花粉の多産と、ハードロームでのハシバミ属の産出、上位のクリ属の産出は、千葉県下、東京都下においても同じような傾向を示しており、関東ロームの植生が比較的広域的なものであったかもしれない。

また、今回のソフトロームでのブドウ属の産出は、今での関東ロームでは認められず、地域性によるものかもしれない。

#### 参 考 文 献

- 杉原重夫 1978 房総半島北部の中上部更新統のテフロクロ, ロジー地質学雑誌  
Vol. 84, No10
- 町田 洋、新井房夫 1974 南関東に於ける第四紀中期のテフラの対比とそれに基づく編年地学  
雑誌 Vol. 85(4), P302~338
- 村田明美、袴田和夫

## 第3章 上貝塚遺跡001住居跡の炭化材樹種同定

### 第1節 試料

試料は、Na 1～Na 11の11点をサンプリングしたが、Na 2は草本性と思われる繊維塊であったため、これを除いた10点を同定した。試料はいずれも、古墳時代(鬼高期)のものと考えられる001住居跡より検出されたもので、建築材と考えられている(PL. 97参照)。

### 第2節 方法

試料を乾燥(60℃10時間、Na 1のみ室内で自然乾燥)させたのち、木口、柀目、板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で、観察、同定した。同時に、顕微鏡写真図版(PL. 97～100)も作成した。

### 第3節 結果

同定結果を一覧表で示す(表49)

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて種類ごとに述べる。

#### ・Gramineae (subfamilia Bambusoideae) sp. Na 1

維管束が基本組織中に散在する不斉中心柱をもつ。試料は径約8mmであった。タケ亜科には、タケ、ササ類が含まれるが、解剖学的特徴では区別されない。

#### ・Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. ブナ科 Na 6

環孔材で孔圈部は2～6(8)列、孔圏外で急激に管径を感じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く横断面では円形～楕円形、小道管は管壁に中庸～厚く横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの、複合組織よりなる。柔組織は周回状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ属は、落葉ナラ類(= subgen. *Lepidobalanus*)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica*)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ(*Q. serrata*)ナラガシワ(*Q. aliena*)、カシワ(*Q. denfata*)といくつかの変種、品種を含む。モンゴリナラは、北海道、本州(丹波以北)、ミズナラ、カシワは、北海道、本州、四国、九州に、コナラは、北海道(南部)、本州、四国、九州に、ナラガシワは本州(岩手、秋田県以南)、四国、九州に分布する。このうち、関東地方平野部で普通に見られるのはコナラであり、本試料もコナラである可能性が高い。コナラは、樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具、機械、樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ(*Q. acufissima*)に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもあ

#### ・Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. ブナ科 Na 3～5、7～11

環孔材で孔圏部は1～6列、孔圏外で急激に管径を減少する。大道管は管壁は厚く横断面では円形、

表40 上貝塚遺跡炭化材同定結果

試料番号	種	名
1	Gramineae (subfamilia Bambusoideae) sp.	〔イネ科(タケ亜科)の一種〕
3	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	〔コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種〕
4	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	
5	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	
6	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	〔コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種〕
7	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.	
8	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	
9	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	
10	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	
11	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.	

小道管は中庸～厚く横断面では角張った円形、ともに単列。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間で梯状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同様組織よりなる。柔組織は周回状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、落葉ナラ類の中で、果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ(*Q. variabilis*)の2種が含まれる。クヌギは本州(岩手、山形県以南)、四国、九州に、アベマキは本州(山形、静岡県以西)、四国、九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両種を区別することはできないが、現在の自然分布からみて、試料なクヌギである可能性が高い。クヌギは、樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くより薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多かった。黒炭で知られる佐倉炭、池田炭も本種で作られ、薪炭材としては国産材中一の重用材である。このほかに器具、枕材、櫓木などの用途が知られる。

樹皮、果実はタンニン原料となり、果実は染料、飼料となる。

#### 第4節 考 察

同定された建築材と思われる材9点中、1点はコナラ節(以下コナラ)で、残り8点はクヌギ節(以下クヌギ)であった。Na1のタケ、ササ類とNa2の繊維は、屋根材などに用いたのかも知れない。同定結果からは、クヌギ(コナラ)を建築材とした特に用いたか、身近に大量に生育していたと考えることもできよう。しかし、実際にそうだったのだろうか。

添付された資料をみると、同定試料として大径、長材を選択したようである。また、クヌギやコナラ等の材は、重硬で燃えつきにくい(容易に灰にならない)性質を持っているために、古くから薪炭材として利用されてきた。そこで、本住居跡のように、火災にあった場合でも、クヌギやコナラは、他の樹種より炭化材となって残存する確率は高いものと考えられる。したがって、主要建築材としてのクヌギ



(コナラ)を用いていることは確かであろうが、それだけで一軒の家が作られていたとは言えないだろう。

一般に、台地上の遺跡では炭化していない植物遺体の残存する可能性は極めて少なく、材では、クヌギ、コナラ、クリなどのブナ科植物のものが検出される例が多い(例えば、西田1976、千野1978、1983)。一方、本遺跡の北北西約20kmに位置する埼玉県庄和町尾ヶ崎遺跡では、古墳時代和泉一鬼高期とされるK1号住居跡から検出された材15点中14点はクヌギであるが、残り1点はハンノキ類(*Alnus* sp.)であった(バリノ、サーヴェイ株式会社1984)。また西北西約25kmに位置する大宮市寿能泥炭層跡では、古墳時代の遺物包含層中より検出された材400点余りのうち、加工木ではクヌギが6割を占めるが、ほかにスギ、ナラ類、クリ、モミ、エノキなども用いられ、自然木ではヤナギ、クヌギ、クリ、ハンノキ類、ヤマブツ、ナラ類などが検出されている(鈴木、能城、植田1984)。このように、台地上であっても、クヌギやコナラ以外の樹木が検出されることもあり、また、低湿地では、台地上に比べて多種類の樹木が認められることから、当時、クヌギやコナラだけが身近の林内に生育していたり、またそれらの樹種だけを利用していただけではないと考える。

植生学的にはクリやコナラ、クヌギで代表される林(二次林など)でも、そのほかに多くの種類の樹木が生育しているのが、実際の姿である。今回の同定結果のような極端な組成は、用材の選択と、材の性質(残存性の高さ)、試料の選択方法の相乗効果によるもので、周辺の植生や用材選択を直接反映しているものではないと考える。当時の住居建築の姿をより明らかにするためには、可能な限り多くの試料を同定、検討することが必要であろう。

## 第5節 引用文献

### 参 考 文 献

- 千野裕道(1978) ☆ 炭化材の樹種同定 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI P.192-196。  
千野裕道(1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心に—東京都埋蔵文化財センター研究論集II P.25-42。  
西田 誠(1976) ☆ 船尾白幡遺跡(CN705) 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V P.151-153。  
バリノ、サーヴェイ株式会社(1984) 古墳時代の樹種鑑定 尾ヶ崎遺跡—縄文。古墳時代集落跡の調査—P.159-162。  
鈴木三男、能城修一、植田弥生(1984) 加工木の樹種 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物、総括編—P.699-724。

☆:直接原書を参照できなかったもの。



第7篇 総括・黒浜期の諸問題

# 総括—縄文時代—

## 1. 黒浜式土器について

常磐自動車道関連で調査された流山地区の遺跡で、最も主体的に出土したのは縄文時代前期前半、黒浜期の遺物であった。報文中で述べた通り、上貝塚遺跡では6軒の縄文時代の住居跡中2軒が、若葉台遺跡では11軒の住居跡中10軒が、いずれも黒浜期と判明し、各々の遺構から特徴のある土器群が出土している。本来ならば、住居跡単位に出土土器の文様組成比のみならず、施文原体の分析・データ化が望まれるが、時間的にその余裕を欠く今、とり急ぎ黒浜式土器の型式変遷に照らした出土土器の段階細分について考察し、その位置づけを行っておく。

黒浜式土器は、甲野勇氏・山内清男氏による編年の位置づけを基に研究が進められ、近年の研究で、更に型式変遷の詳細な検討から、幾つかの段階細分案が提出されてきた土器型式である。この型式細分は、大別すると、黒浜式土器を2細分して扱おうという視点(小林 昭和40年)から、更に地域的な型式偏差、文様要素の消長を考慮した5段階細分(新井 昭和58年)が提出され、現在その具体的な検証が行われている。新井氏の5段階細分案は、黒浜式土器に示される地域性を明らかにしながら、隣接型式として中部地方に展開した有尾式土器の型式変遷が、黒浜式土器に及ぼした影響を加味し、関東地方各地域における文様要素の消長を段階細分の指標にしようとしたものである。もとより、文様要素の多様な土器型式であるだけに、それを十分網羅した一括資料に恵まれる機会は多くなく、従ってその細分案についても未だ流動的な部分が残されていることは否めない。しかし、今回報告の2遺跡の資料は、特に黒浜式土器古段階(新井分類第Ⅰ・Ⅱ段階)について充実した情報を提供することとなった。

**上貝塚遺跡出土土器:** まず上貝塚遺跡では、007竪穴住居跡、016竪穴住居跡が黒浜期の所産とされ、両遺構とも多量の遺物を出土した。出土資料は、その多くが縄文のみを施す深鉢形土器であるが、007住居跡では、それを羽状施文し、施文部の間隔にミミズ腫れ状の微隆起を残すもの(第35図3)や菱形に施文されるもの(第36図33)等が含まれる。更に竹管状工具による爪形刺突文が施された土器(第36図19・20)等、総体として新井分類の第Ⅱ段階の様相を良く示している。資料中には(第36図10)に代表されるような、崩れたコンパス文を持つ土器もあるが、これは次の第Ⅲ段階に盛行するコンパス文と違い、未だ文様帯の区画文内に充填されるものとしては定着していないものである。また新井氏によれば、東関東地域では、第Ⅱ段階に至っても、関山式土器からの遺制であるループ文が残存すると言うが、(第37図44)は、その好例であろう。

また016住居跡出土資料は、縄文・捺糸文以外の文様を持つ土器が比較的多く含まれる。具体的には、半沈線による格子目状文を土器外面に広く描き、胴下半に縄文を施した深鉢形土器(第44図1)や、竹管状工具による連続爪形文で曲線状のモチーフを描くもの(第45図8~18)等、第Ⅱ段階に典型的な文様要素を持つ土器と共に、捺糸付加条縄文等の複雑な原体を多用したりループ文の残存する土器が出土しており注目される。

第Ⅱ段階の時期は、充実した資料が出土している大宮台地と対比した時、その地域差が著しい段階とされ、下総台地でもその西・北部では、船橋市飯山溝東遺跡(清藤他 昭和50年)、柏市鴻ノ巣遺跡(古

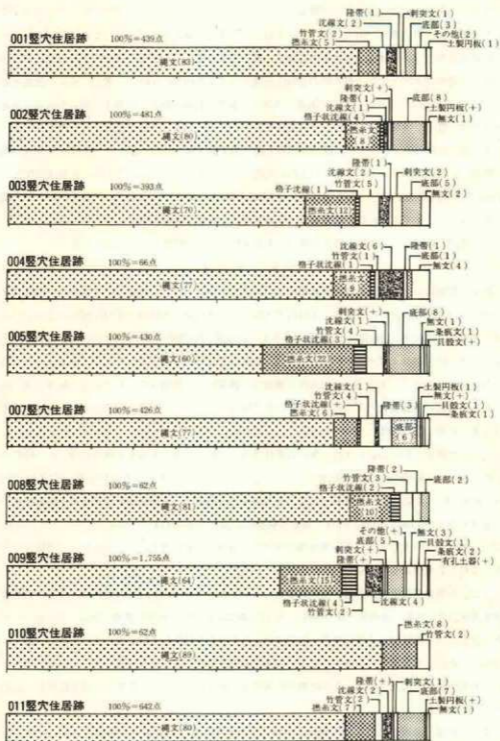
内、昭和49年)の資料から、縄文・燃糸文を地文とする土器が高率で存在することが注意されている。この時期、江戸川を隔てた大宮台地においては、浦和市大谷場貝塚を好例とするように、貝殻文を持つ土器が多用される傾向がある。上貝塚遺跡の土器を見る限り、貝殻文の用例は認められても極く僅かであり、下総台地の一般的様相を良く示しているようだ。

**若葉台遺跡出土土器**：一方、若葉台遺跡の住居跡出土資料は、009住居跡のように、復元可能な土器多数を含む1755点ものまとまった例を筆頭に、その多くから300-600点程度の遺構内出土遺物が得られている。住居跡毎の出土土器に示される文様組成については、第277図に示すようなデータ化を行うことができた。検討の対象とした10基の整った住居跡中には、004・008・010住居跡のように、出土遺物が少なく、必ずしもデータの満足すべき内容を示していない遺構もあるが、周辺の遺構外遺物の様相等から考える限り、10基の住居跡出土土器にはほとんど型式上の段階差を感じさせない。いずれも極めて近接した時期の所産なのであろう。

一般に、黒浜式土器における文様要素は段階細分の指標として注目されるが、土器組成全体における文様要素の組成比については、未だ具体的なデータから言及されたことがないようだ。比較資料を欠く今、積極的な論考は困難だが、燃糸文(燃糸付加糸縄文を含む)を持つ土器が、全組成の最大22%を占める005住居跡出土資料を筆頭として、かなり高率な割合で存在する点は注意すべきであろう。

次に、遺構外出土の資料とあわせ、出土土器を具体的に検討してみよう。報告では、多様な文様要素を持つ黒浜式(第4群)土器を、文様の種類ごとに14類に細別した。各類に特徴的な文様要素は、黒浜式土器の全般を通して共通して見られるものと、出現・盛行する時期がたより、段階細別の指標となるものの2者に分けられる。ここで問題となるのは、後者である。例を挙げて示せば、まず、竹管内面施文による平行沈線で、直線・曲線モチーフを描くもの(第4群1類)がある。001住居跡出土の(第151図2)、003住居跡出土の(第161図1・2)、009住居跡出土の(第184図29)等が遺構出土資料の好例だが、これらは前代の関山Ⅰ・Ⅱ式土器に通有な文様施文の手法とモチーフをそのまま踏襲しながら、地文が組紐文ではなく単節縄文に置換され、黒浜式土器への変容を遂げている。特に、口縁部直下に縦位の短沈線を施す例や、それがループ文を含む縄文と組み合わせられた、001住居跡出土土器(第151図1)の存在は、黒浜式土器古段階(新井分類第Ⅰ段階)中の、関山式土器から残存した文様要素がいかなるものなのかを明確に示すものと考えて良いであろう。また、波状口縁で注口を持つ、002住居跡出土の深鉢(第156図2)も、それに類したより古手の様相を示す土器である。

一方、竹管状施文による連続爪形文で、菱形を基調としたモチーフを描く土器(第4群3類)については、近年、中部地方の有尾式土器との関連性が指摘されている。002住居跡出土の(第156図1)や、005住居跡出土の(第167図1)、更に007住居跡出土の(第173図2)等は、本来、有尾式土器の文様要素として定着した鋸歯状工具による連続刺突文で、菱形モチーフが連続爪形文に置換されながらも黒浜式土器の文様要素として在地化する過程を物語るようで興味深い。特に口縁部に幅の狭い縄文帯を有し、頸部に連続爪形文で文様帯を構成する002住居跡出土の小型深鉢(第156図1)は、口縁部に縄文帯を形成するという点で、中部地方では塩尻市男屋敷遺跡出土土器(小林・直井 昭和57年)の一部に、北関東地方では利根郡昭和村中標遺跡出土土器の一部(黒岩・富澤 昭和60年;原典図版59-938)に類似し、有尾式土器の古手のものと併行関係を辿れる可能性が高い。



● ( )内の数字は%、(+)は極少量の存在を示す。

第277図 若葉台遺跡縄文時代前期黒浜期の竪穴住居跡出土土器の文様組成比

なお、当遺跡からは、僅かながら橢圓状土器による列点文と、同一工具による平行沈線文が併用された土器（第4群11類）が出土している。小片で、全体の文様モチーフが不明なのは惜しまれるが、胎土に繊維を含む点を除けば中部地方の有尾式土器そのものである。在地の黒浜式土器の型式要素からは逸脱する資料であり、近年、群馬県の赤城山西麓から埼玉県西部にかけて、著しい資料の増加を見て「有尾系土器」<sup>(41)</sup>と同類のものである。黒浜式土器の古段階（新井分類第Ⅰ段階）の土器群が意外と隣接型式と盛んな接触を持ちつつ、その文様要素を在地化して行った様相が窺われて興味深い。

その他、口縁部直下にタガ状の隆帯が巡るもの（第4群4類土器の一部）や、半ば押し引き状に施された貝殻文の深鉢で、プロポーションの上から丸底に近い尖底を呈する可能性の高い土器（002住出土：第156図3）の存在、また出土土器を総合的に見た時、口唇部上面が平坦、あるいは若干凹むもの、縄文施文部の継ぎ目にミミズ腫れ状の微隆起（一部の資料には故意に隆線を貼付したのもあると言う）を残すもの等は、いずれも黒浜式土器古段階の、土器成形手法上の特色として注意される。

\* \* \*

以上、雑駁に、上貝塚・若葉台両遺跡出土の黒浜式土器についての位置づけを試みた。黒浜式土器の段階変遷は、新井和之氏によれば、①椀山式土器からの移行期＝古段階（Ⅰ・Ⅱ段階）、②コンパス文多用の土器群＝中段階（Ⅲ段階）、③肋骨文の発生＝新段階（Ⅳ段階）という、3つの文様要素の変化の局面と、それに④踏碇式土器への移行期＝Ⅴ段階）を認識して設定されたものである。これらは、特に第Ⅱ段階における、文様要素の偏在性＝地域性の顕在化と、第Ⅲ段階におけるその解消＝齊一化という目まぐるしい局面変化のギャップをいかにして埋めるか、という視点から組み立てられてきたものと言える（新井、昭和59年）。

こうした研究の動向から見れば、黒浜式第Ⅱ段階の資料を主体とする上貝塚遺跡は、この時期の下総台地における一般的な地域性を追認したこととなる。しかし、東関東地方における「植房式土器」（西村、昭和59年）の存在と、黒浜式土器との相関関係等の問題は、上貝塚遺跡出土資料を見る限り柏市鴻ノ巣遺跡等の同段階の土器と同様、あまり積極的に論究できる材料を見つけ出すことができなかった<sup>(42)</sup>。類似した様相を示す、同一地域圏の中の周辺遺跡との資料対比は、より微視的な着眼点をもって進めて行く必要があるのかも知れない。

また、若葉台遺跡出土土器は、黒浜式第Ⅰ段階を主体とする。この段階の資料は、今まで船橋市飯山満東遺跡21号住居跡（清藤他、昭和50年）、佐倉市諏訪尾余遺跡Ⅰ-1住居跡（新井、昭和59年）や、蓮田市宿上貝塚、港区伊豆子遺跡等の、量的に限られた公表資料から考察が進められてきた（新井、昭和60年）ために、土器組成の総合的な把握や文様要素の種類等、必ずしも明瞭ではない部分が残されていた。若葉台遺跡の出土土器は、この時期の具体的な土器様相について、重要な知見を提供したものである。

なお、最近、黒浜式土器の段階細分について、鈴木素行氏による論考も発表された（鈴木、昭和60年）。黒浜期の、西方からの搬入土器との型式学的クロス・デーティングを基礎にして細別を試み、新井氏とは全く異った視点から、黒浜式土器を4段階に捉え直している。黒浜式土器の型式変遷観については、未だ研究者ごとに流動的な部分もあるが、鈴木論文では、特に第Ⅰ・第Ⅱ段階の認識が、新井分類とは見解を異にする<sup>(43)</sup>。しかしその一方で、研究手法こそ違ふものの、第Ⅲ・第Ⅳ段階の認識は、結果



的には新井分類とほぼ同様のものとなっている。段階細別の根拠とする関西・東海地方との土器型式対比が、関東地方では地域的に限定され、しかも極く客体的にしか出土しない搬入土器に依存している点で、資料的にいささか不安を覚えるところである。

なお、黒浜式土器の細別については、新井和之氏に懇切な御指導及び問題点の指摘をいただいた。ここに記して感謝する次第である。

## 2. 黒浜式期の竪穴住居跡について

上貝塚遺跡・若葉台遺跡からは、前期前半、黒浜式期の竪穴住居跡が、前者では2基、後者では10基検出され、出土土器の段階差とともに該期の竪穴住居構造の変遷を、良く示すものとなっている。一般に縄文時代の竪穴住居は、前期前半、花積下層式期に屋内炉の設置が普遍化し、関山Ⅰ式期に入ると台形状・長方形プラン・6本主柱の住居構造が定型化すると言われている。このあたりの事情については笹森健一氏の論考に詳しい(笹森 昭和57年)が、氏は更に関山式期の住居跡を幾つかに類型化し、典型例の1つを「関山タイプ」と呼称した。しかし関山Ⅱ期を経て、次の黒浜式期に入ると定型化が顕著だった住居形態は再び乱れ、不整形のものを介して次第に変化が現われる。大雑把に言えば、関東地方ではその後、諸磯b式期に過る方形・4本主柱の構造に、また中部地方以西の地域では具体例こそ少ないものの、北白川式土器様式圏と重複するように円形系統のものに移行して行くのである。

今回報告の竪穴住居跡を、その形態・構造面から笹森氏の分類にあてはめれば、黒浜式第Ⅱ段階の上貝塚遺跡では、007住居跡が「無柱穴タイプ」であり、その出自系統が今一つ不明確なものとされるが、016住居跡は、6本主柱の「A<sub>2</sub>類」に属し、周溝を欠くものの第Ⅱ段階期で普遍化する住居形態を追認したのものとなった。

また若葉台遺跡では検出状態の不良な資料が多いが、長方形プランを持つ001・003住居跡と、より方形系統に近い004・010住居跡を両極として、その形態はバラエティーに富む。時期的には、いずれも黒浜式第Ⅰ段階に属し、出土土器からは顕著な段階差が認められない事は前述の通りである。土器自体にも、関山式からの移行期を示す文様要素が多く見られるように、竪穴住居の構造にも、「関山タイプ」に類似した、台形・6本主柱の住居跡「A<sub>0</sub>類」「A<sub>1</sub>類」と共に、方形系統・4本主柱の住居跡「A<sub>3</sub>類」が、混在しているようである。住居跡の形態からも、型式の移行期である様相が窺え、興味深い。

## 3. 収 束

流山市域を含む江戸川に面した開析台地上には、黒浜式期の集落遺跡が、関東地方の他地域に比べて群を抜く密度で集中する。その集中度は、千葉県側の江戸川左岸地域では、前代の関山式期に比べ遺跡数の上で一挙に4倍もの激増を示すという指摘(池田 昭和60年)があり、また埼玉県側の江戸川右岸地域でも、該期の貝塚遺跡の密集から同様な増加傾向が指摘されている(伊藤 昭和59年)<sup>(9)</sup>。こうした遺跡数の増加が、縄文海進の最大期<ヒブシ・サーマル>に於ける、砂泥性・遠浅の奥東京湾沿岸という、自然環境の優越性と表裏一体の関係にあることは多言を要するまでもない。黒浜式土器の型式圏を見た時、その「核地域」が、東葛地域の下総台地上と、大宮台地という2か所に認識できる必然性にも、こうした環境決定論的な要因が大きく作用しているであろう。

千葉県側、東葛地区の黒浜期の遺跡のうち、本報告と対比できる黒浜式古段階（第Ⅰ・Ⅱ段階）の遺跡を瞥見しただけでも、関宿町下根遺跡（石井他、昭和57年）、野田市栢の内遺跡（下津谷・飯塚 昭和56年）から、関山式の遺制を窺える口縁部直下に縦位の短沈線がめぐる土器（若葉台遺跡：第4群1類土器に対比）を含む資料が出土しているし、他にも流山市西初石3丁目遺跡（川根・桑原 昭和56年）等の出土資料を指摘できる<sup>18)</sup>。現在のところ、黒浜式古段階のまとまった資料は、このようにいずれも千葉県側では江戸川左岸地域に集中しているようである。

今後、奥東京湾を隔てた大宮台地との、土器組成自体の総量的な比較や、遺構・集落形態の対比を含めたより視野の広い研究によって、具体的な「黒浜式土器文化」の復元が課題とされることを明示して、まとめて代えさせていただきたい。

（原田）

#### 注

- (1) 胎土に繊維を含む、有尾式類似の土器群は、近年、赤城山西麓を縦断して建設された関越自動車道関連遺跡の調査で、複数の遺跡から良好な資料が出土している。これらは（新井 昭和58年）で指摘されているように、埼玉県西部の類似資料とともに、黒浜式土器、有尾式土器の両型式圏に挟まれた、関東西部～北部に「枯地域」を持つ、一つの土器型式群として位置づけることが可能な資料である。
- (2) 文様要素の面から、「槌房式土器」（西村 昭和59年）を抽出すると、上貝塚遺跡では、第4群3類土器（第54図77～82）、若葉台遺跡では第4群7類土器（第208図195～202）の、崩れたコンパス文が横位に重ねて施されたものが、最も近似した資料となる。しかし、この文様要素を持つ土器群は、2遺跡の資料を見る限り、主体的に1つの文様の“タイプ”として独立するだけの、量的な裏づけには乏しい。槌房式土器自体の型式変遷との絡みで位置づける必要がある土器群だと思われるが、ここでは、むしろ黒浜式土器第Ⅲ段階に盛行した、文様帯の中の区画文を充満するコンパス文の、起源的な意匠を示す土器として考えておきたい。
- (3) 若葉台遺跡の出土土器を、鈴木分類にあてはめると、「黒浜Ⅰ期」の資料に近似しながらも、より新しい要素を多く含む、「黒浜Ⅱ期」との中間的な部分に位置づけざるを得ないようだ。鈴木氏の「黒浜Ⅰ期」には、ボタン状胎付文（鈴木論文：第76図3）や、ループ文の重量で変形モチーフを描出するもの（鈴木論文：第76図6）等、従前からの黒浜式土器の文様要素の概念から外れるものが含まれている。関山式土器の文様要素のうち、果してどれが黒浜式土器古段階にまで残存し、またどれが残存しないのかは、若葉台遺跡出土の土器群を検討すれば、かなり明確に理解できるが、これらの文様要素は、今回の報告資料中には全く含まれていない。どうも、ボタン状の胎付文や、ループ文による変形モチーフの描出は、関山式土器の型式内で消滅し、黒浜式土器の型式要素としては残し得ないものらしい。従って、鈴木氏の「黒浜Ⅰ期」についても、再検討の余地がある。
- (4) 江戸川右岸の近年の調査例では、庄和町尾ヶ崎遺跡（益岡・庄野 昭和59年）から、黒浜式古・中段階（新井分類第Ⅱ・Ⅲ段階）のまとまった資料が出土している。これらは、今回報告の上貝塚遺跡出土土器に一部並行、または後続する段階に位置づけられるものである。
- (5) これまで報告してきた常磐自動車道関連遺跡における、黒浜式期の資料は、利根川右岸に位置する、栢市花前Ⅰ遺跡（田中他 昭和59年）が唯一、量的にまとまったものである。他に栢市中山新田Ⅰ遺跡（『常磐道Ⅳ』収録）等から、断片的な資料は出土しているが、これらはいずれも、胎付文を主要な文様要素に含むもので、黒浜式土器新段階（新井分類第Ⅳ段階）に位置づけられる。黒浜式土器古段階の資料は、今回報告した流山地区の2遺跡以外からはほとんど出土していない。

引用参考文献（五十音順）

- 新井 和之 黒浜式土器（縄文文化の研究3） 昭和57年  
 新井 和之 黒浜式土器小考追録（その2）（土曜考古7） 昭和58年  
 新井 和之ほか 佐倉市鎌木源訪尾余遺跡 昭和59年  
 新井 和之 黒浜式土器研究の現状と今後の課題（土曜考古10） 昭和60年  
 荒井 幹夫 武蔵野台地東部地域の第Ⅱ期の石器群（神奈川考古7） 昭和54年  
 池田 大助 遺跡分布と集落（房総考古学ライブラリー2 縄文時代） 昭和60年  
 石井 穂ほか 下根遺跡 昭和57年  
 伊藤 摩美 埼玉県内の縄文時代早期末葉～前期の主な貝塚分布について（寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—） 昭和59年  
 稲野 裕介ほか 滝ノ沢遺跡（北上市文化財調査報告 第33集） 昭和58年  
 大塚 孝司 習志野市藤崎堀込貝塚 昭和52年  
 小田 静夫ほか 前原遺跡（国際基督教大学考古学研究センター） 昭和51年  
 小田 静夫編 西之台遺跡B地点（東京都埋蔵文化財調査報告7） 昭和55年  
 織笠 昭 鈴木遺跡VI層出土石器群に関する一考察（鈴木遺跡I） 昭和53年  
 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡 昭和58年  
 川根 正教・桑原 護 流山市西初石3丁目遺跡 昭和56年  
 栗島 義明 武蔵野台地東北部（神奈川考古16） 昭和58年  
 黒岩 文夫・富澤 敏弘 中標遺跡・長井坂城跡 昭和60年  
 小林 達雄 土器（米島貝塚） 昭和40年  
 小林 康男・直井 雅尚 舅屋敷 昭和57年  
 相模考古学研究会編 地蔵坂遺跡発掘調査報告書（綾瀬町文化財調査報告2） 昭和49年  
 笹森 健一 縄文時代前期の住居と集落（Ⅱ）（土曜考古5） 昭和57年  
 佐藤 達夫 ナイフ形石器の編年的一考察（日本の先史文化） 昭和53年  
 下津谷 達男・飯塚 博和 野田市楨の内遺跡発掘調査報告書 昭和56年  
 鈴木 次郎 第VI文化層（神奈川県埋蔵文化財調査報告18 寺尾遺跡） 昭和55年  
 鈴木 道之助 木莉峠遺跡（千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ） 昭和50年  
 鈴木 素行 土器に関する問題—関東地方東部における黒浜期の土器編年を考える—（原町西貝塚発掘調査報告書） 昭和60年  
 清藤 一順・古内 茂 飯山満東遺跡 昭和50年  
 石器研究会編 飯山遺跡 昭和57年  
 高杉 尚宏ほか 先土器時代（嘉留多遺跡・粘中学校7号墳） 昭和57年  
 滝澤 浩 埼玉市場坂遺跡（埼玉考古2） 昭和39年  
 田中 豪ほか 花前Ⅰ遺跡（常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ） 昭和50年  
 田村 隆・橋本 勝雄 先土器時代（房総考古学ライブラリー1） 昭和59年



- 土肥 孝 石器（古和田台遺跡） 昭和48年
- 西村 正衛 千葉県香取郡神崎町植房貝塚（石器時代における利根川下流域の研究） 昭和59年
- 橋本 勝雄 旧石器時代（八千代市権現後遺跡） 昭和59年
- 橋本 勝雄 旧石器時代（八千代市北海道遺跡） 昭和60年
- 昼間 孝次・庄野 靖寿 尾ヶ崎遺跡 昭和59年
- 古内 茂ほか 柏市鴻ノ巣遺跡 昭和59年
- 矢島 国雄・鈴木 次郎 相模野台地における先土器時代研究の現状（神奈川考古1） 昭和51年

写 真 图 版



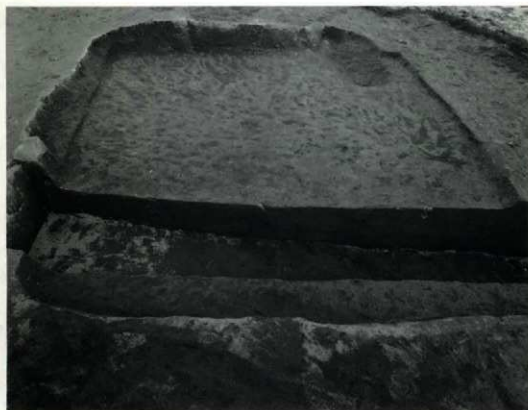
遺跡全景



調査状況



002住居跡



003住居跡



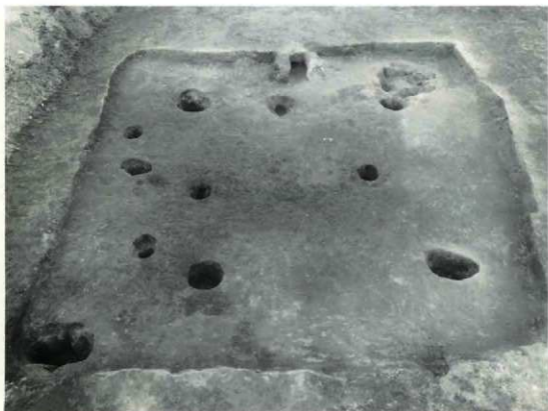
遺跡全景



調査状況



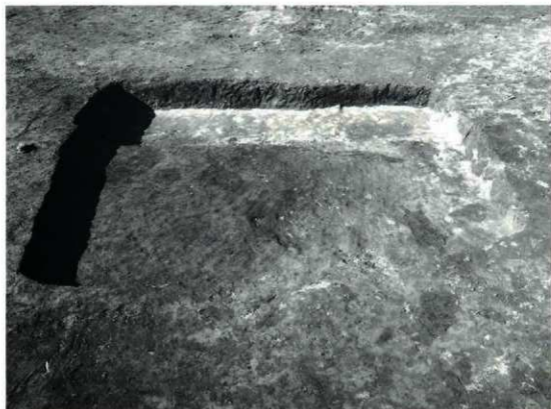
001住居跡



002住居跡

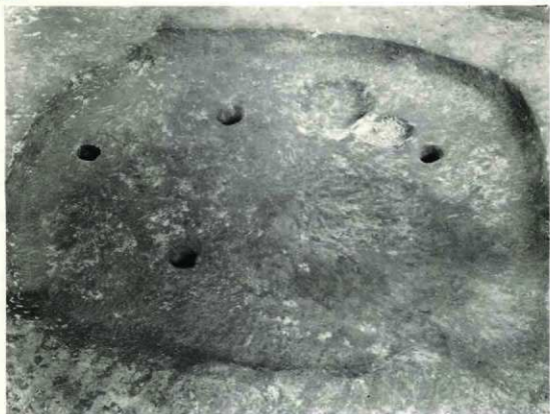


003住居跡

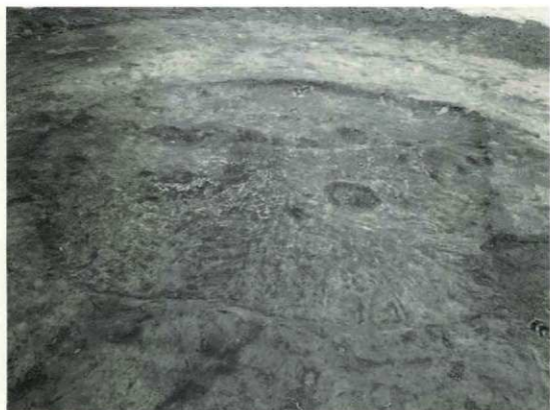


004住居跡





005住居跡。



006住居跡



007住居跡



008住居跡



○ 009住居跡



010住居跡



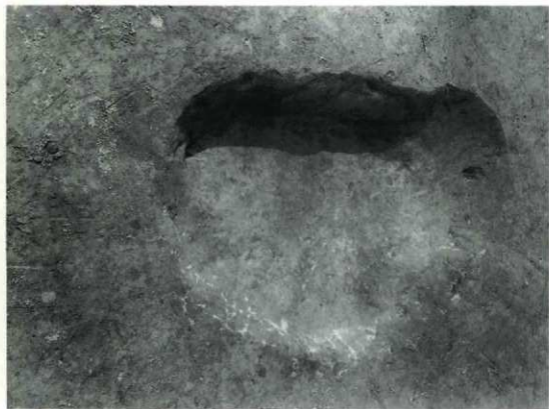
014住居跡



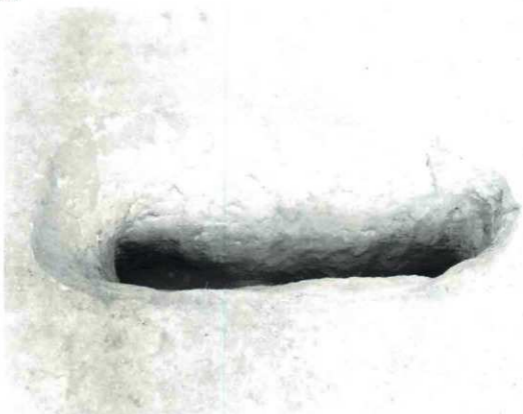
015住居跡



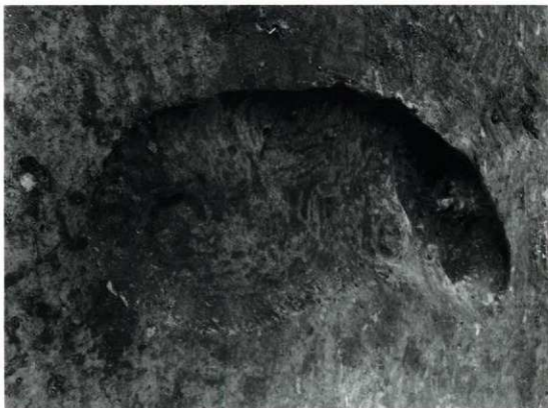
016住居跡



020土坑



203土坑



205土坑



206土坑



208土坑





005



007



007

遺構内出土土器



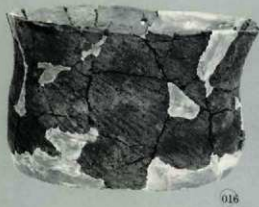
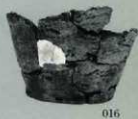
007



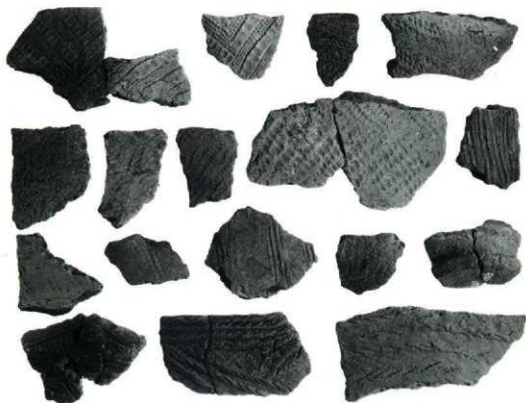
007



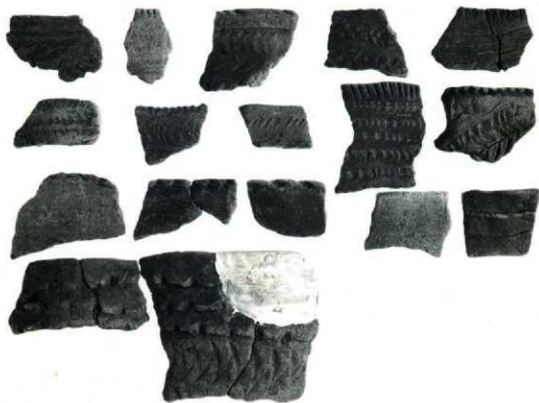
007



遺構内出土土器



005(1)

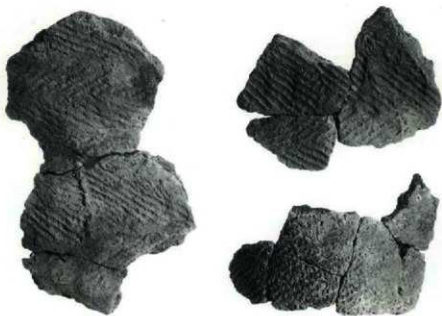


道橋内出土土器

005(2)



006▷

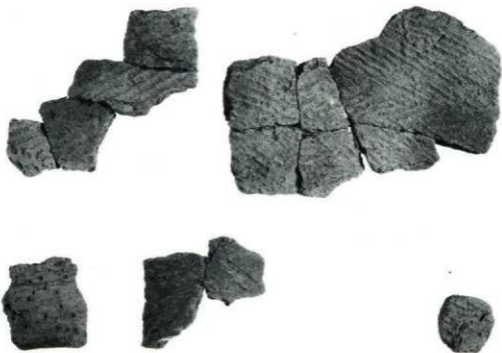


遺構内出土土器

007(1) ◯

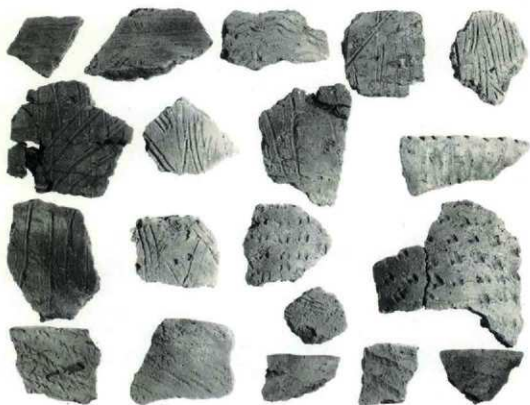


007(2)

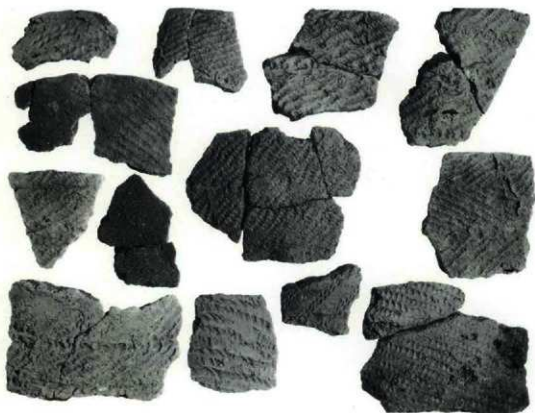


道橋内出土器

007(3)

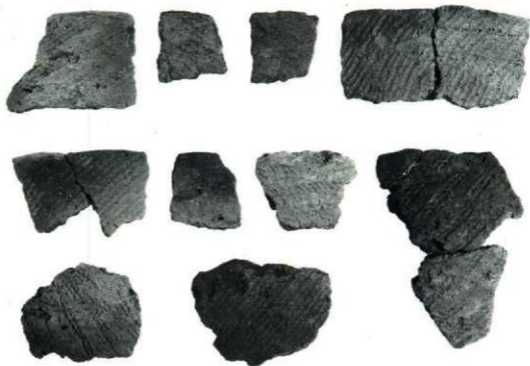


007(4)



遺構内出土土器

007(5)



013(1)



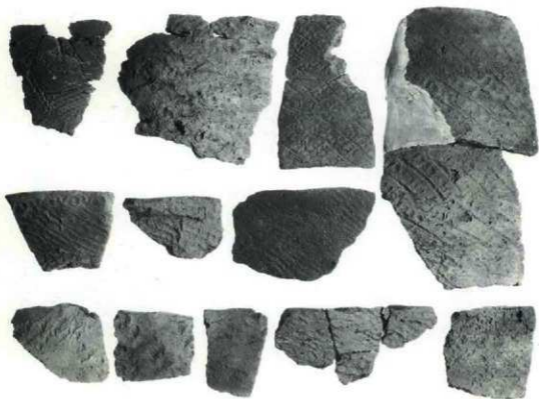
遺構内出土土器

013(2)

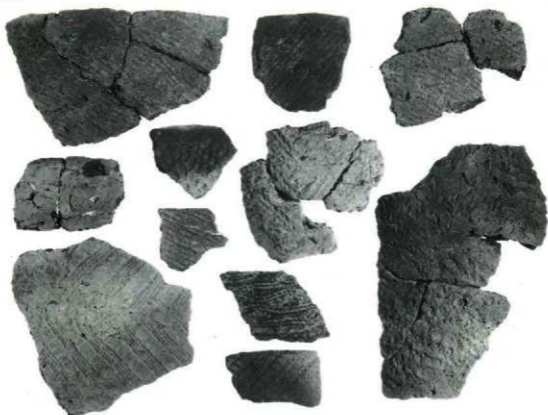




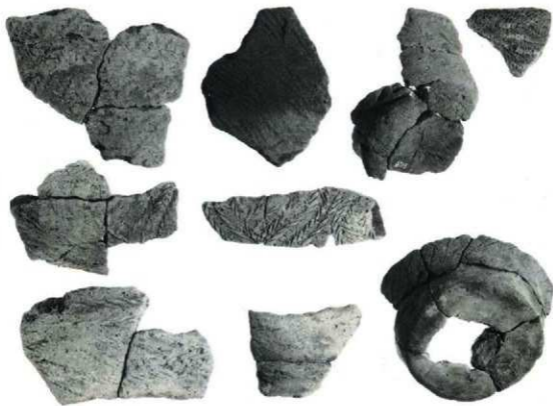
016(1)



016(2)

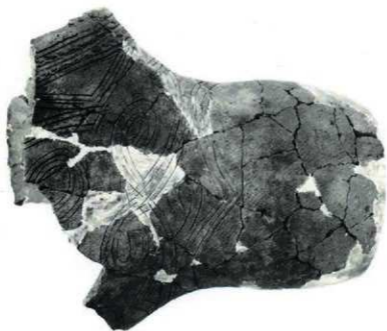


016(3)



遺構内出土土器

016(4)



正面

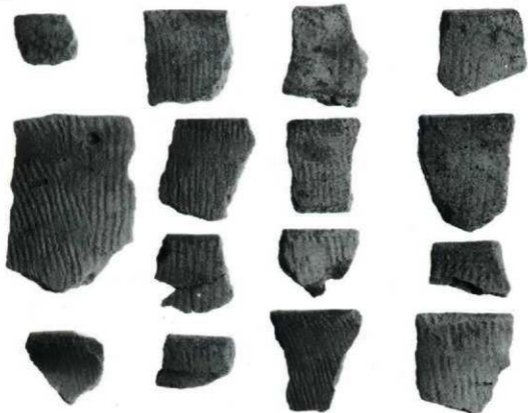


前期後半

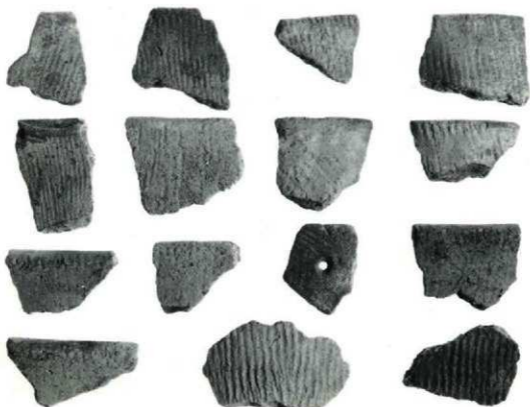
側面



前期前半

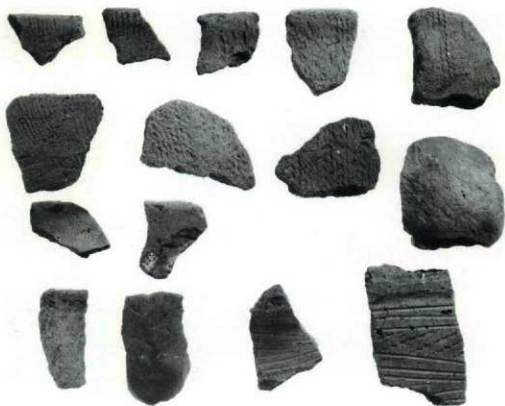


早期前半(1-1)

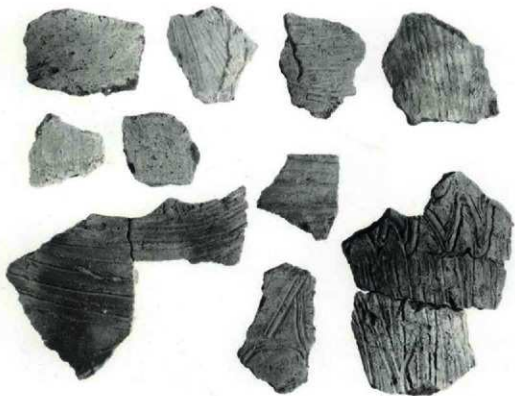


早期前半(1-2)

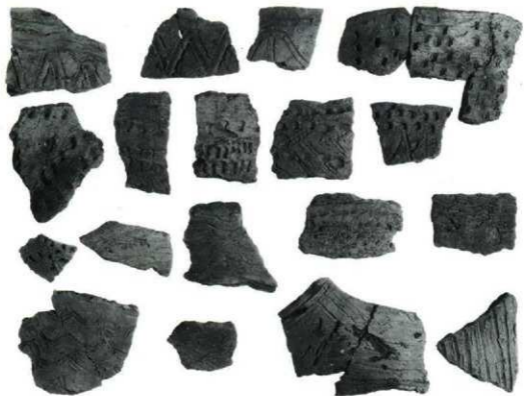
グリッド出土の土器



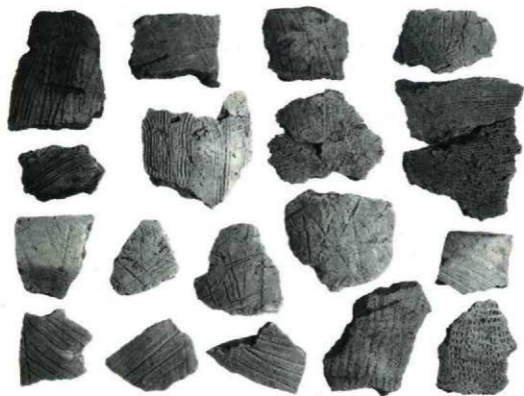
早期前半(2-2)



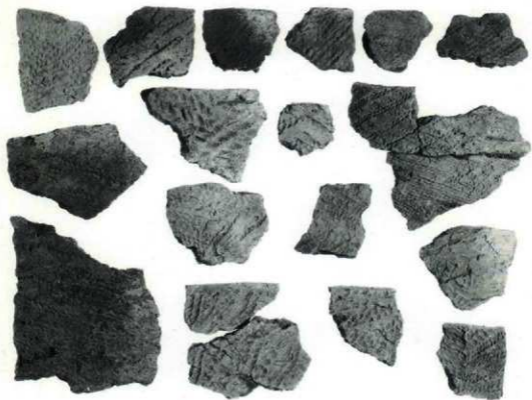
早期後半・前期前半(1-1)



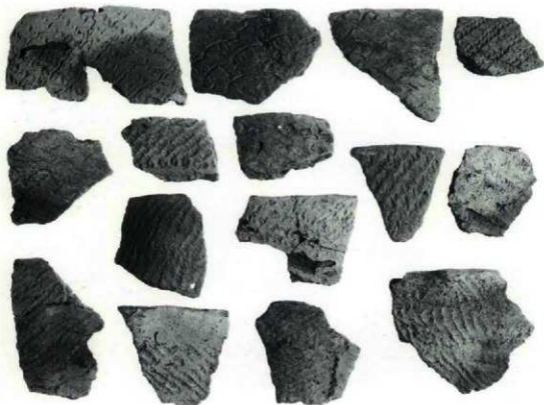
前期前半(1-2)



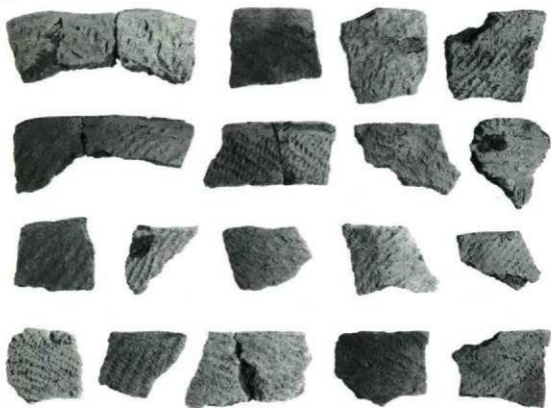
前期前半(2-1)



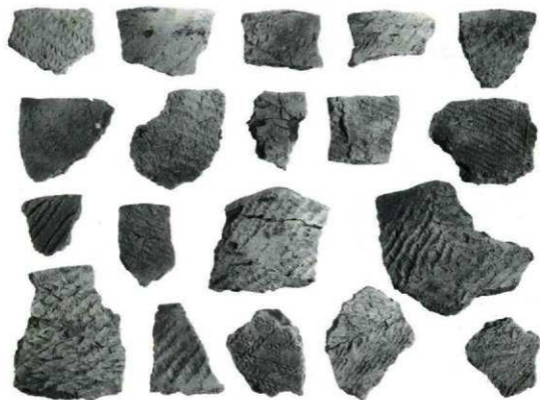
前期前半(2-2)



前期前半(3-1)



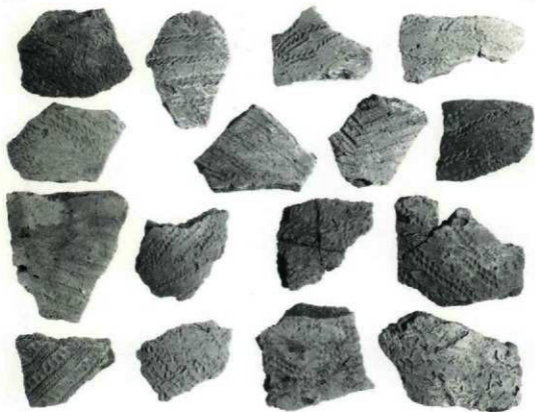
前期前半(3-2)



グリッド出土の土器

前期前半(4-1)



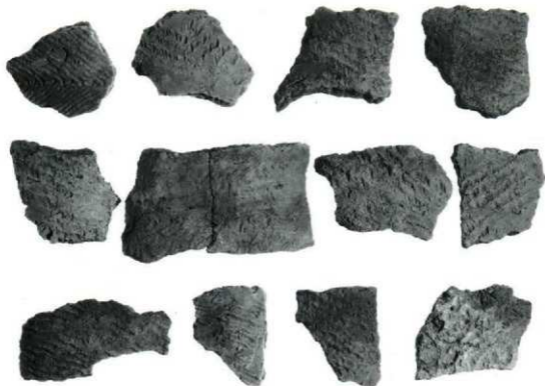


前期前半(4-2)



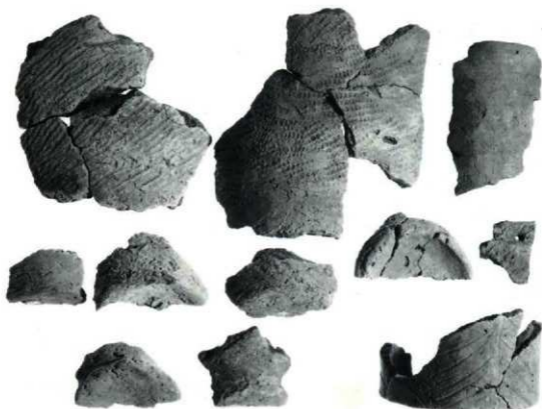
前期前半(5-1)

グリッド出土の土器



前期前半(5-2)

グリッド出土の土器



前期前半(6)



▽ 道跡全景



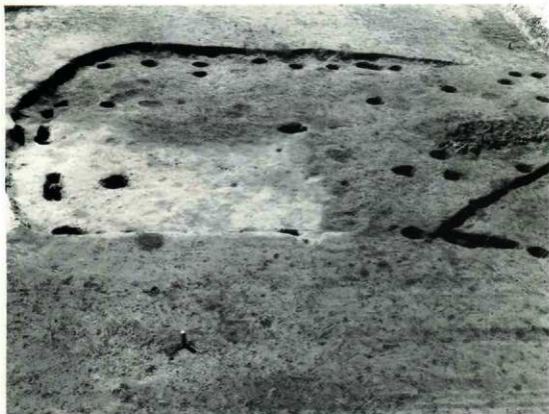
▽ 調査状況



◎先土器No.5ブロック



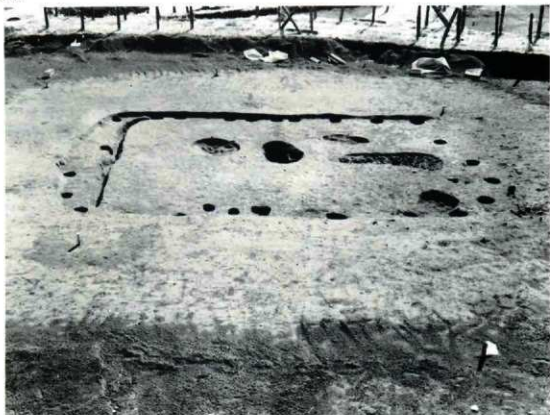
◎先土器No.6ブロック



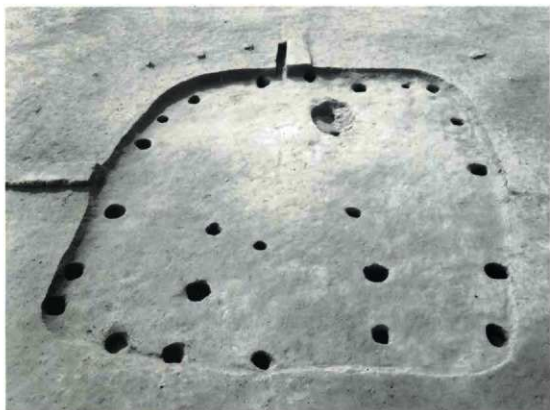
Vo 001住居跡



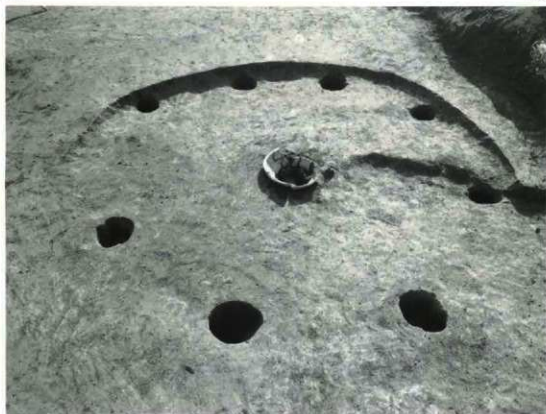
Vo 002住居跡



▽003住居跡



▽005住居跡



006住居跡

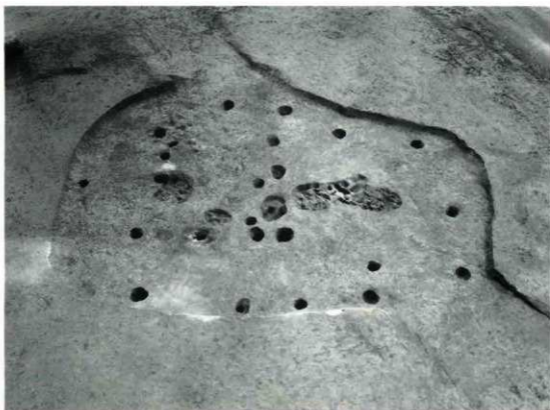


007住居跡



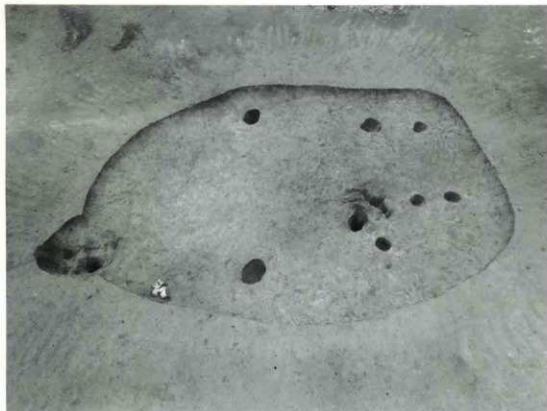


008住居跡

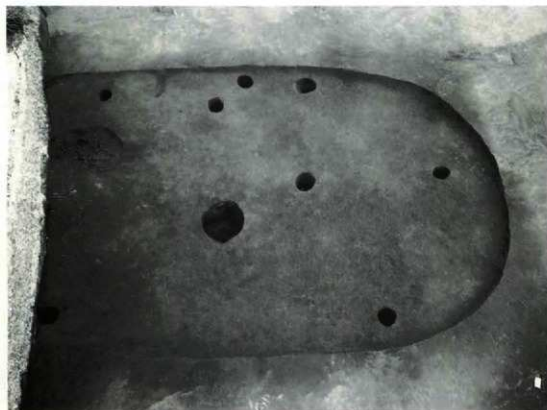


009住居跡

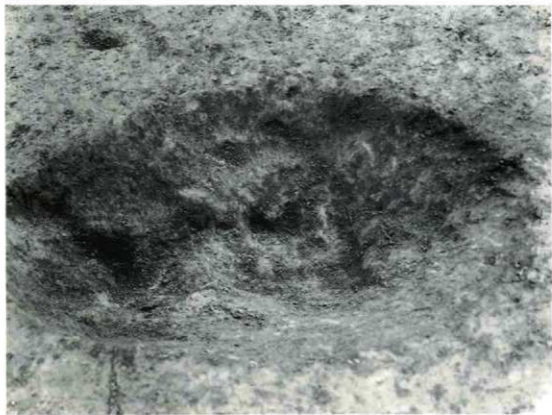




010住居跡



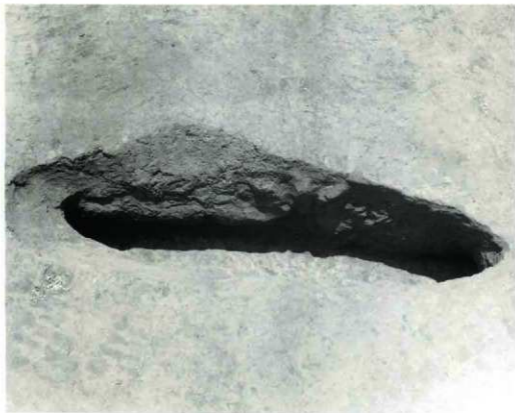
011住居跡



◎ 202土坑



◎ 205土坑



206土坑



207土坑



φ208土坑



φ210土坑



215土坑



216土坑



002



002



002

L.42



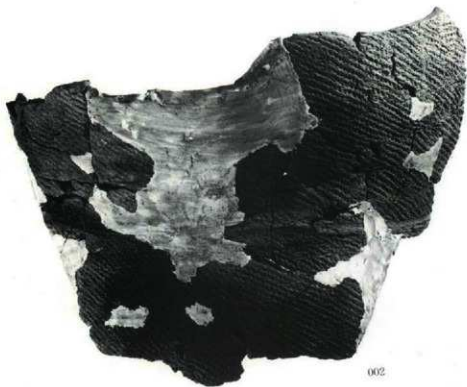
002



002



002



002



005



009

遺構内出土土器



006(如体土器)





009



009



009



009



009



009

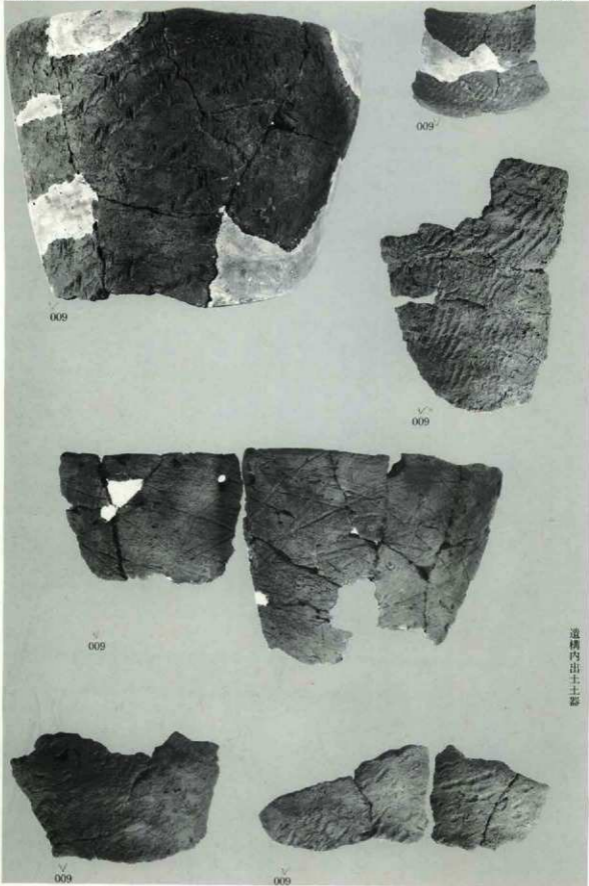


009



009

遺構内出土土器

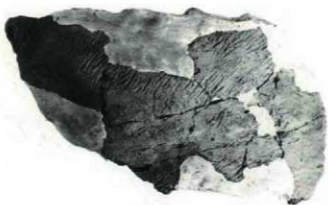


遺構内出土土器



遺構内出土土器

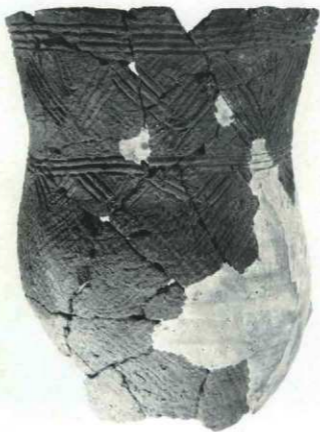




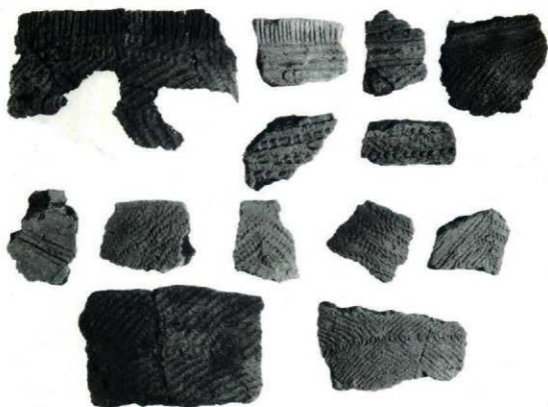
009



009

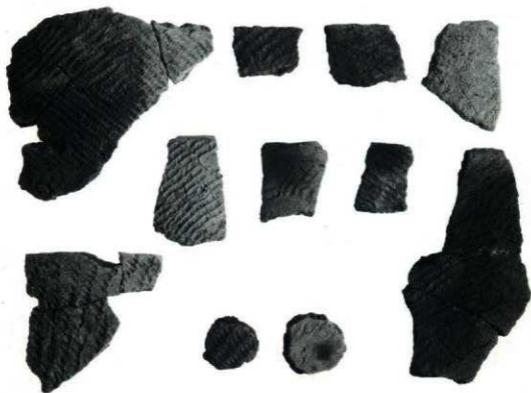


011

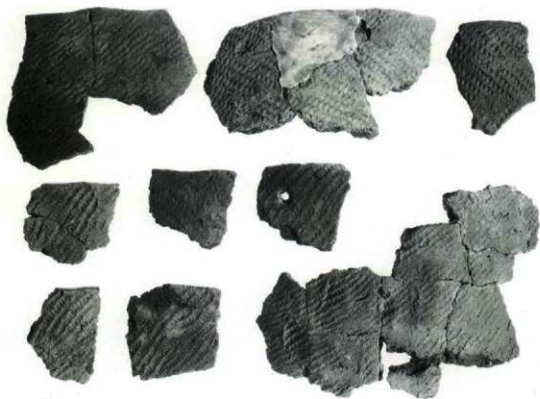


001(1)

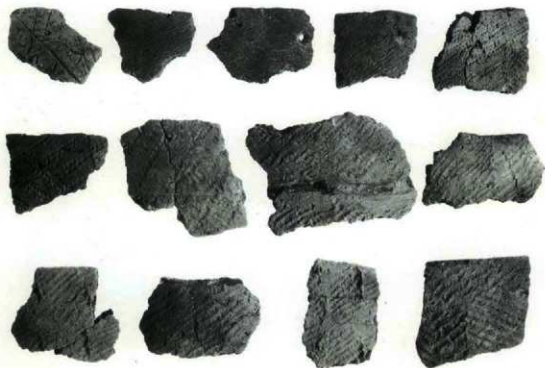
遺構内出土土器



001(2)



▽  
002(1)



▽  
002(2)

遺構内出土土器



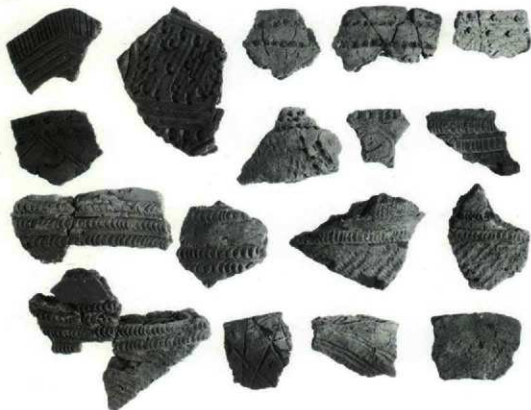
002(3)

✓ 遺構内出土土器

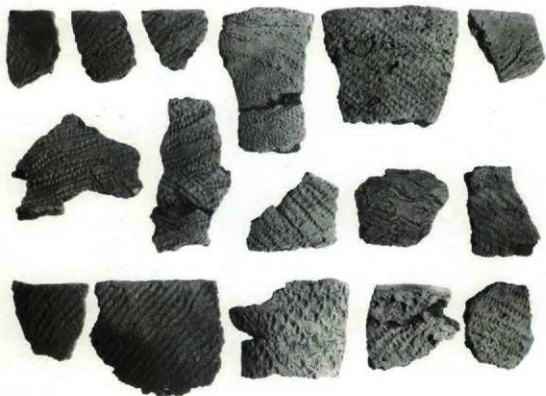


002(4)



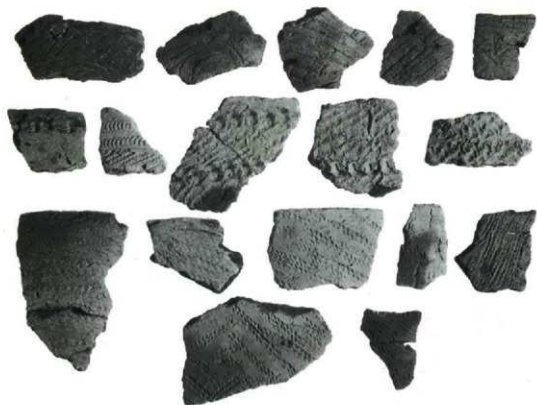


V 003(1)

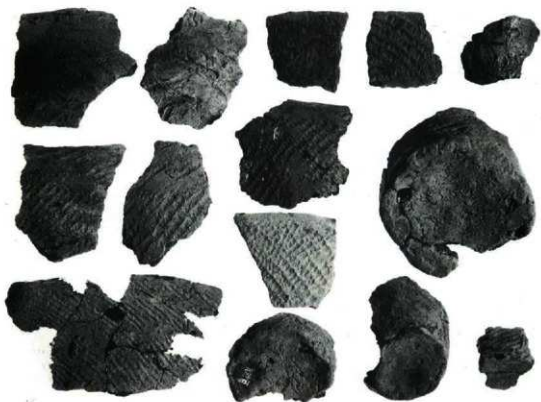


遺構内出土土器

V 003(2)



005(1)

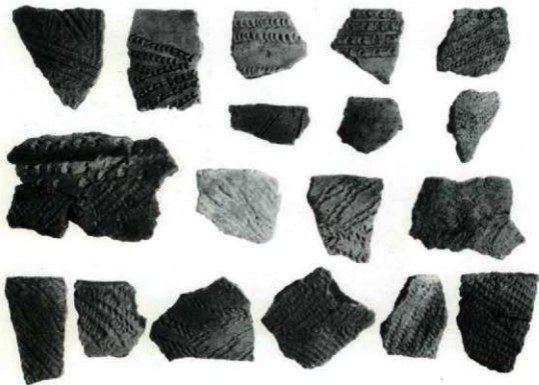


遺構内出土土器

005(2)

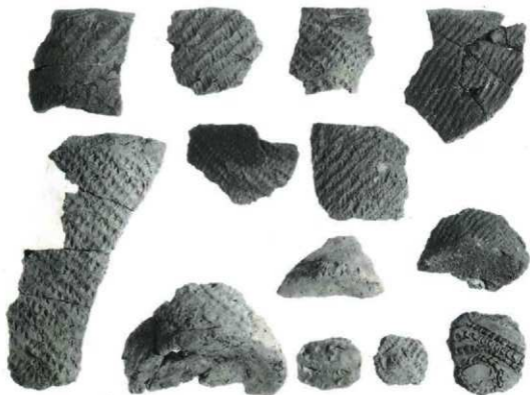


005(3)



007(1)

遺構内出土土器

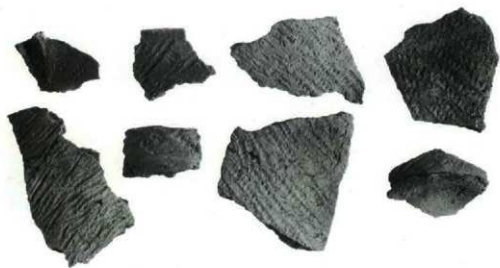


007(2)

遺構内出土土器



008(1)



008(2)



遺構内出土土器

009(1)

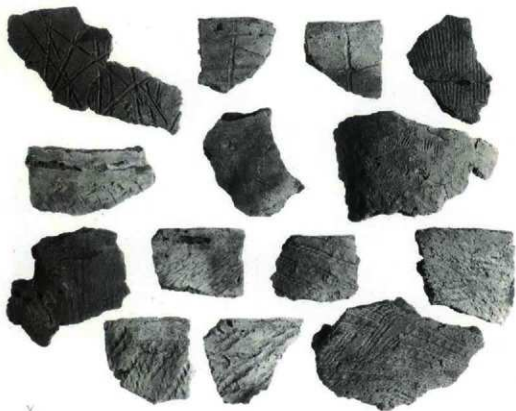


009(2)

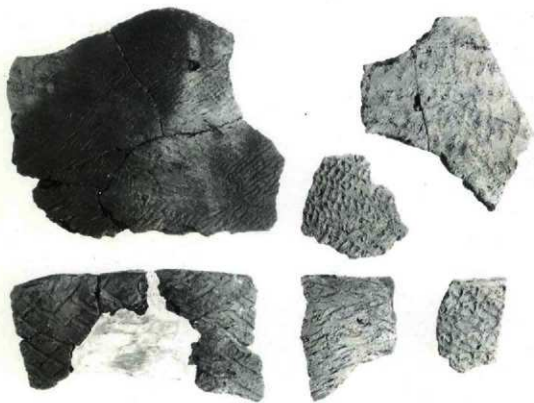


道橋内出土土器

009(3)



009(4)

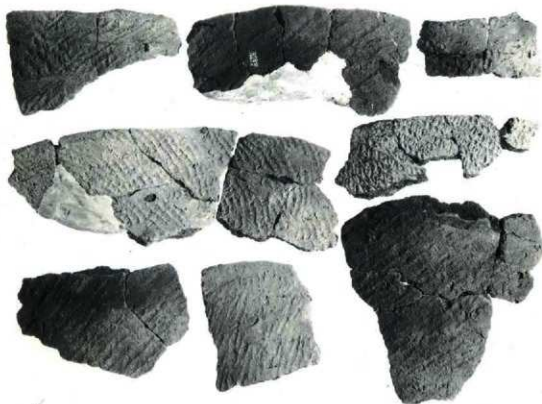


009(5)

遺構内出土土器



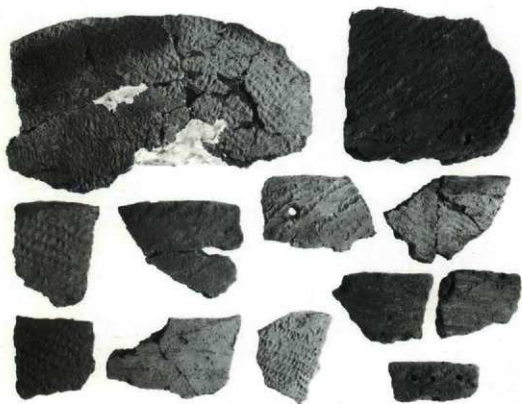
009(6)



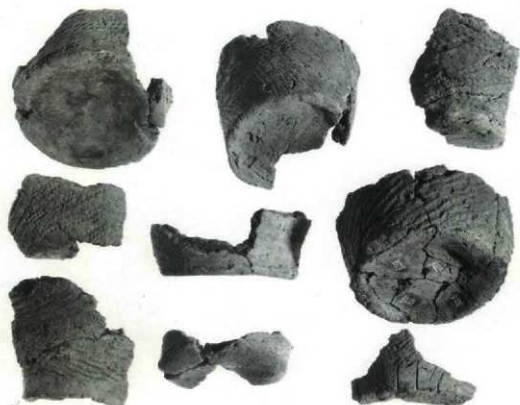
道橋内出土土器

009(7)





009(8)

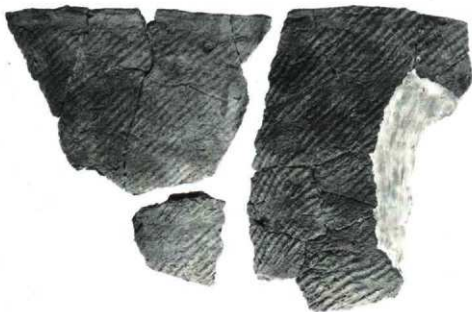


009(9)

遺構内出土土器

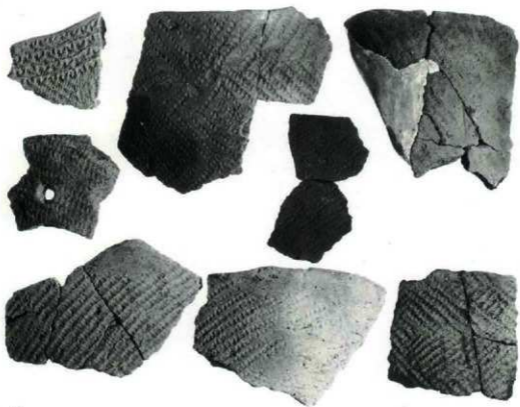


011(1)



遺構内出土器

011(2)

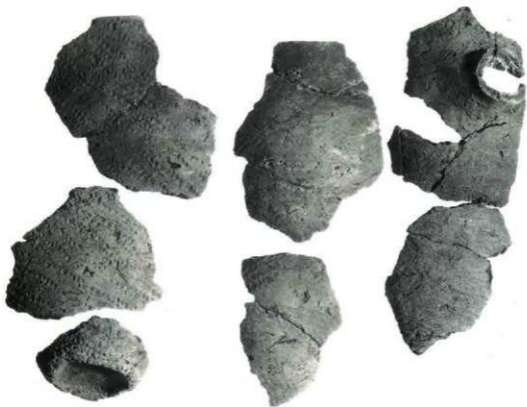


011(3)

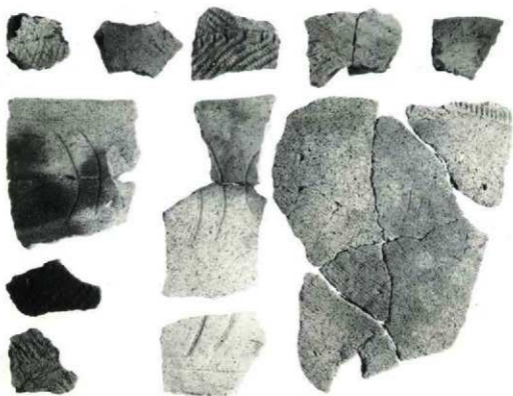


遺構内出土土器

011(4)

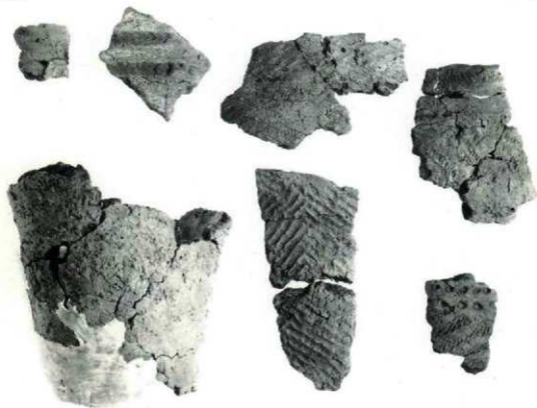


✓  
108



遺構内出土土器

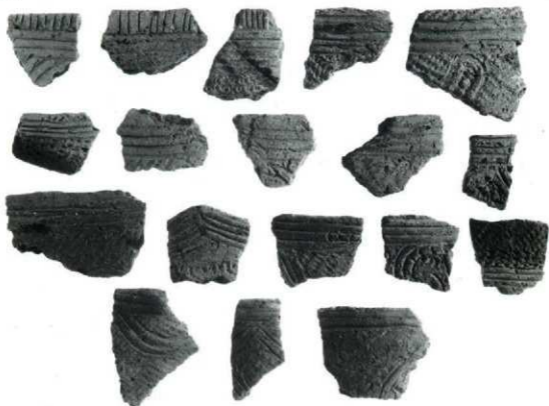
✓  
201-210



✓  
211-214



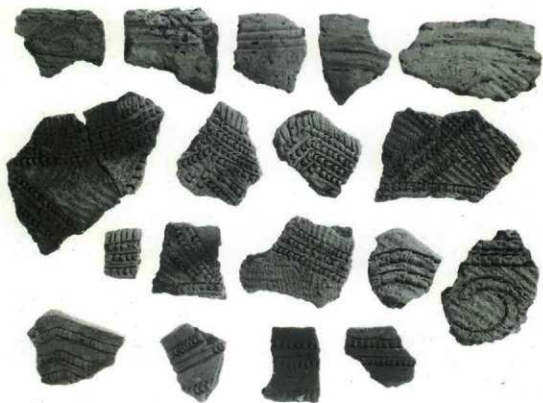
✓  
215



▽  
前期前半(1-1)



▽  
前期前半(1-2)



前期前半(2-1)



前期前半(2-2)



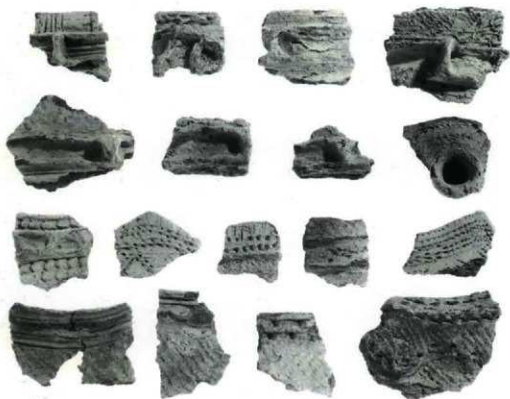
前期前半(3-1)



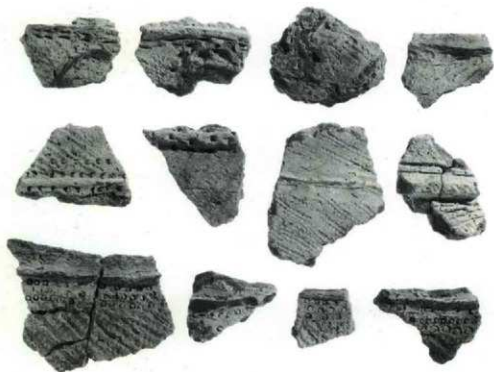
グリッド出土の土器

前期前半(3-2)

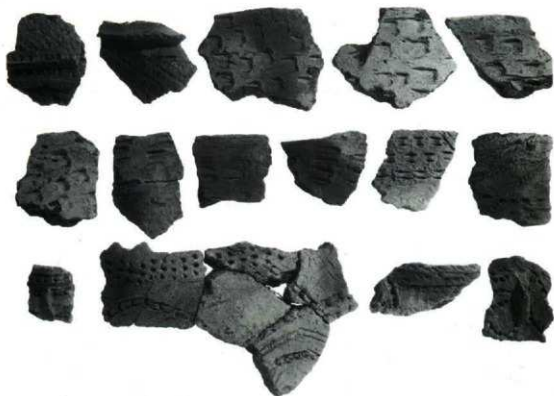




前期前半(4-1)



前期前半(4-2)



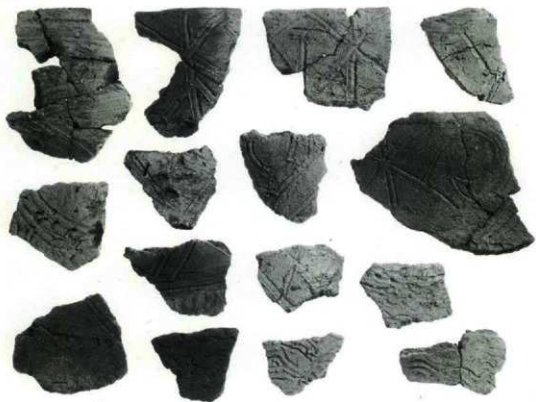
▽  
前期前半(5-1)



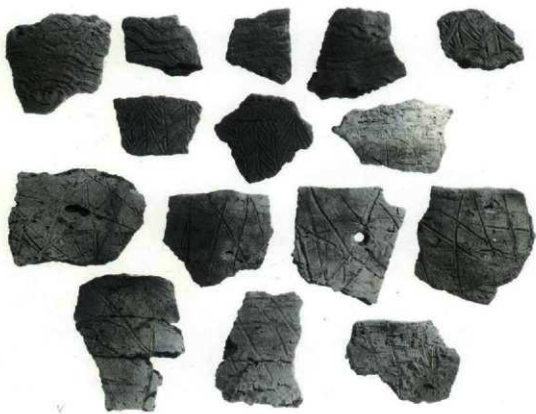
グリッド出土の土器



▽  
前期前半(5-2)



前期前半(6-1)

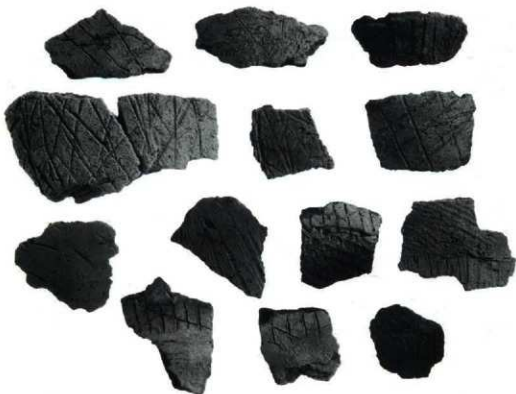


前期前半(6-2)

グリッド出土の土器

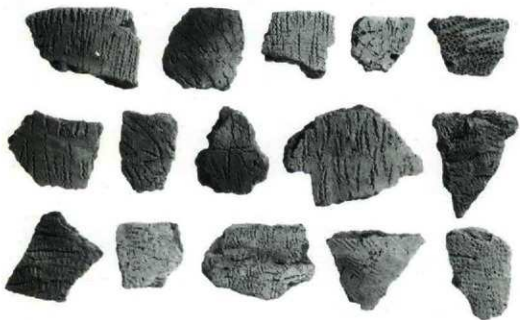


前期前半(7-1)

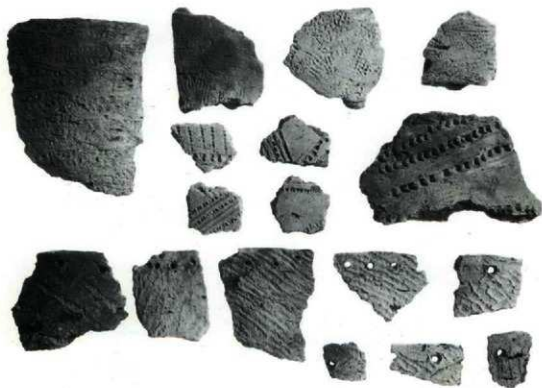


グリッド出土の土器

前期前半(7-2)

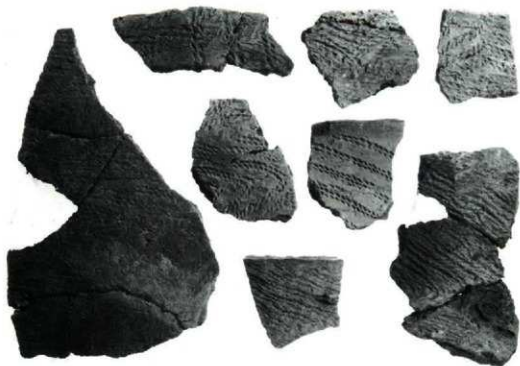


前期前半(8-1)

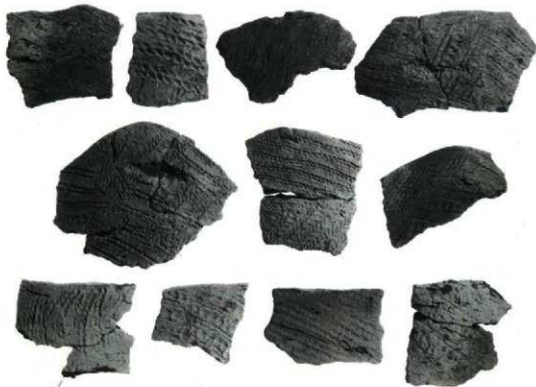


グリッド出土の土器

前期前半(8-2)

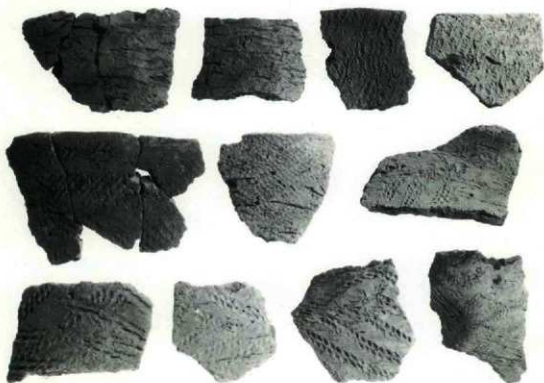


前期前半(9-1)



前期前半(9-2)

グリッド出土の土器

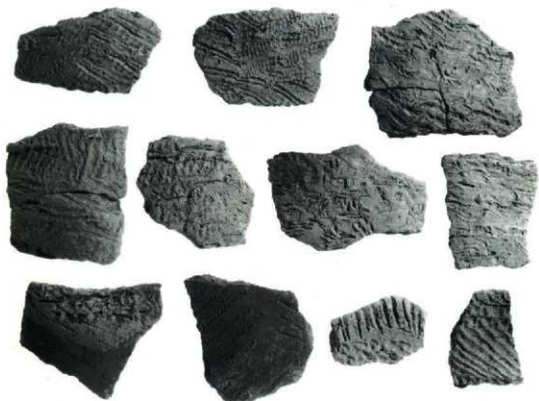


▽  
前期前半(10-1)



グリッド出土の土器

▽  
前期前半(10-2)



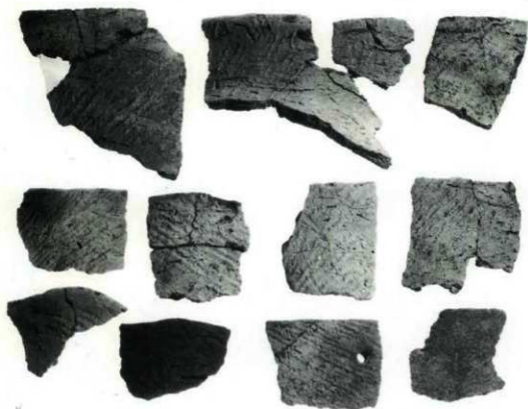
前期前半(11-1)

グリッド出土の土器

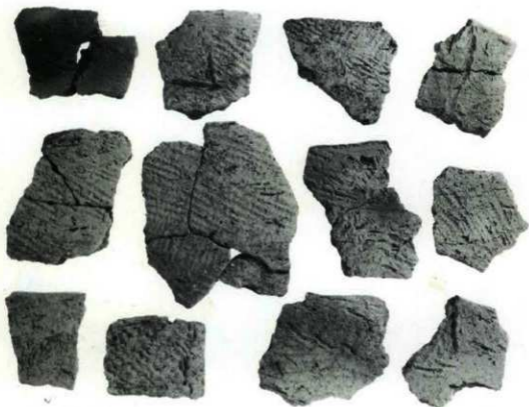


前期前半(11-2)

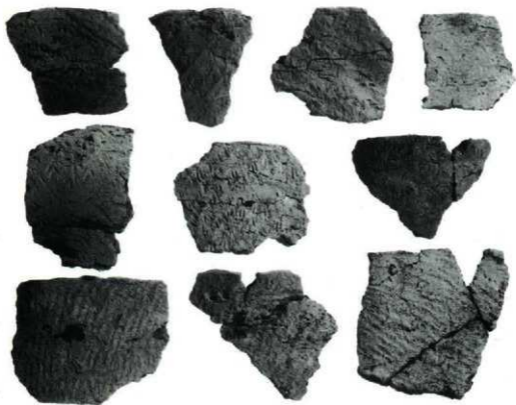




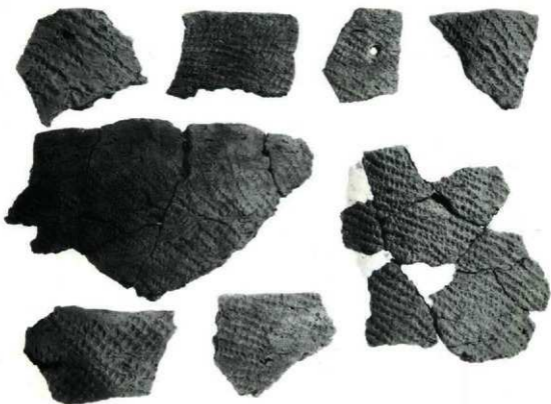
前期前半(12-1)



前期前半(12-2)



前期前半(13-1)

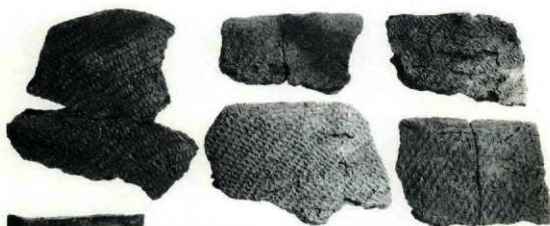


グリッド出土の土器

前期前半(13-2)

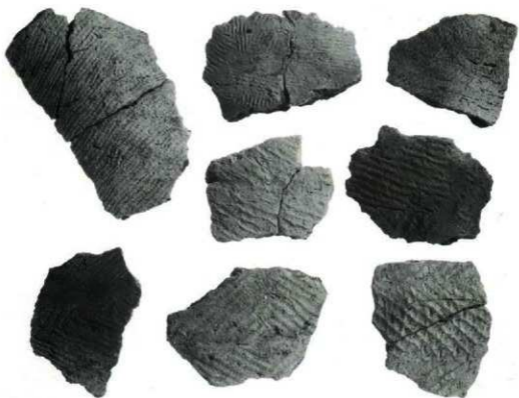


▽  
前期前半(14-1)

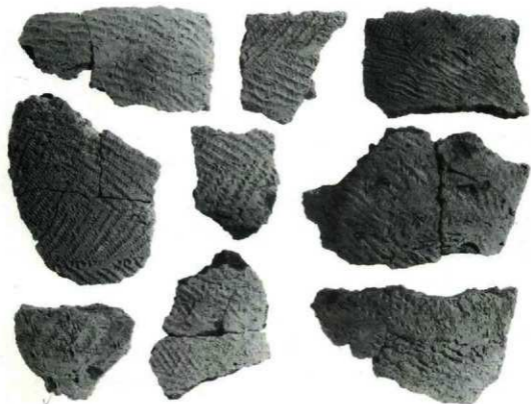


▽  
前期前半(14-2)

グリッド出土の土器

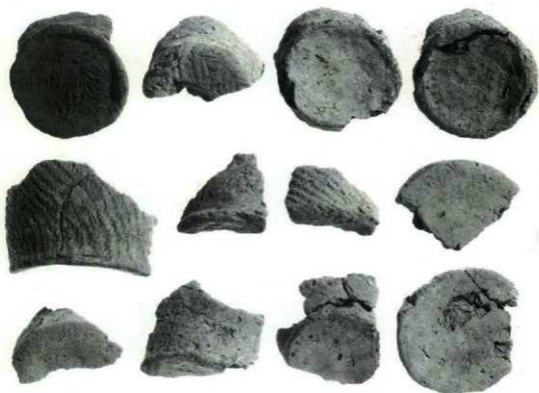


前期前半(15-1)

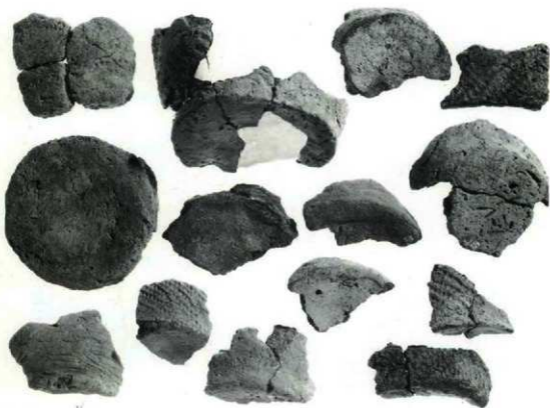


グリッド出土の土器

前期前半(15-2)

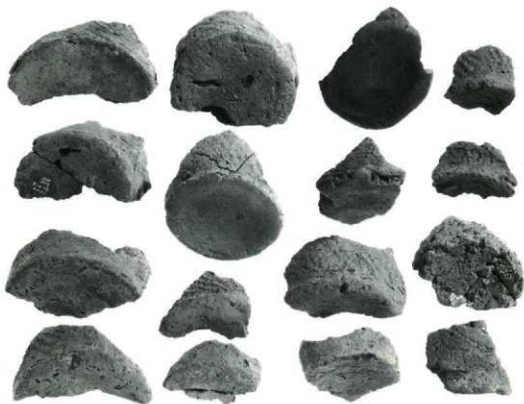


前期前半(16-1)



前期前半(16-2)

グリッド出土の土器



▽  
前期前半(17-1)



▽  
前期前半(17-2)



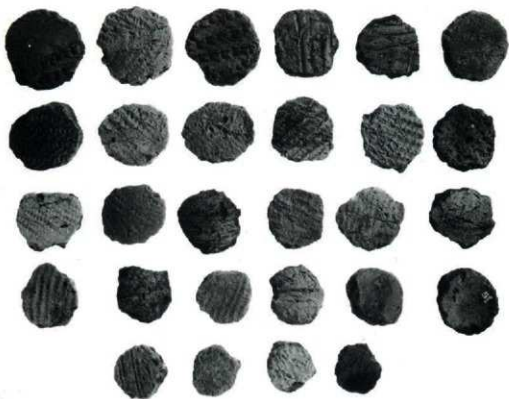
▽後期(1-1)



▽後期(1-2)



▽後期(1-3)



土製円板



グリッド出土の土製品・土器(補遺)



楕円台式(上) 田戸上層式(下)





調査前全景



全景



道しるべ



道しるべ





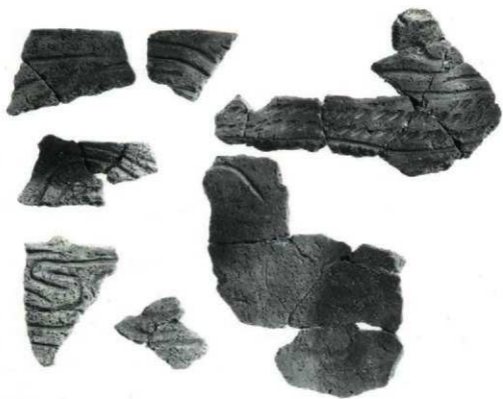
灰中塔



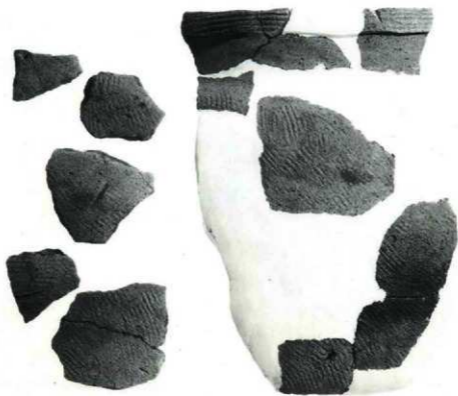
出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)



調査前全景



全景



調査前全景



調査状況 〇



調査前



調査状況



上貝塚  
(F2点)

若葉台



E6-66  
3



F5-42  
42



M13-80 2



M13-83  
3



K10-15  
2



N14-44 2



L12-71 2



L12-72 16



L12-71 24



L12-72  
2



接合資料(第3ブロック)



L12-71  
8



N13-91  
52



N13-91  
109



N13-91  
9



N12-01  
4



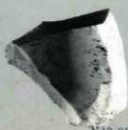
N13-91  
64



N13-91  
42



N13-91  
49

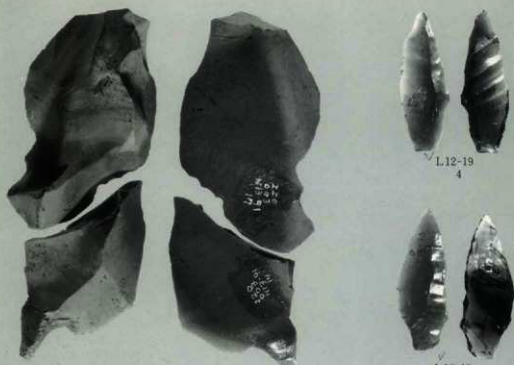


N13-91  
75



N13-91  
8

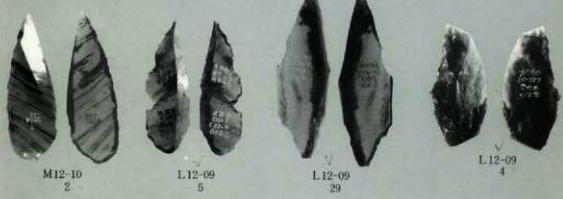




接合資料 √ N13-91 17  
N13-91 74

√ L12-19  
4

√ L12-19  
8

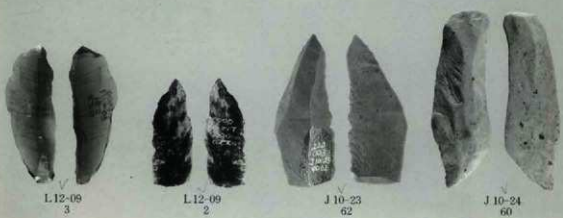


M12-10  
2

√ L12-09  
5

√ L12-09  
29

√ L12-09  
4

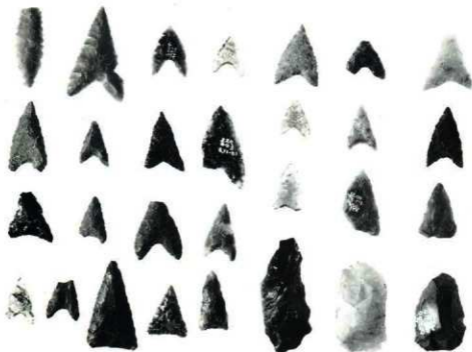


√ L12-09  
3

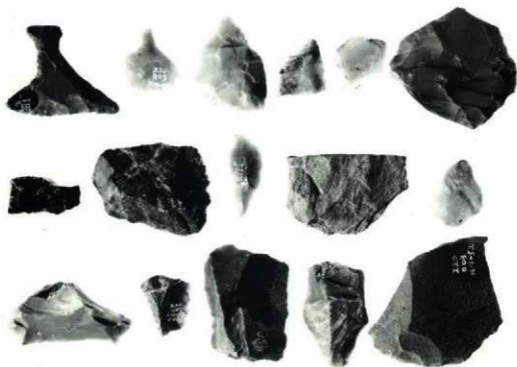
√ L12-09  
2

√ J10-23  
62

√ J10-24  
60



石葉台(縄文-1)



石葉台(縄文-2)



若菜台(縄文-3)

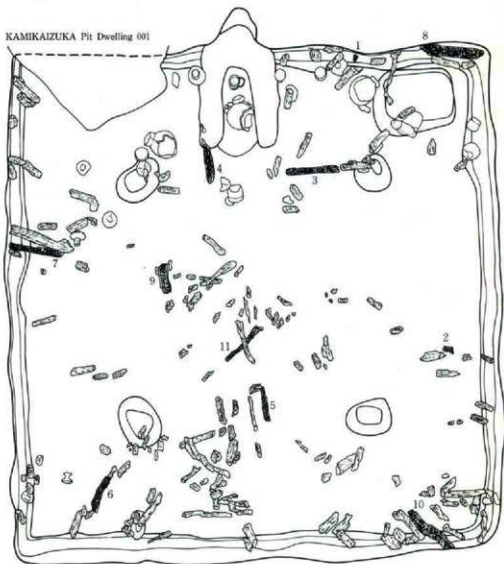


若菜台(縄文-4)



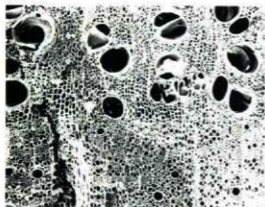
若菜台(縄文-5)

KAMIKAIZUKA Pit Dwelling 001



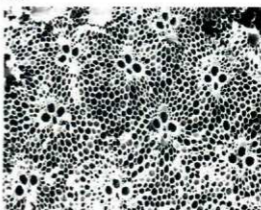
1. Gramineae (subfamilia Bambusoideae) SP.
2. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
3. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
4. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
5. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
6. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
7. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
8. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
9. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
10. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.
11. Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) SP.

No 3



木口×70

No 1



木口×35



柱目×140

Gramineae (subfamilia Bambusoideae) SP.



板目×140

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

No.5



木口×35

No.4



木口×35



柾目×140



柾目×140



板目×140



板目×140

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

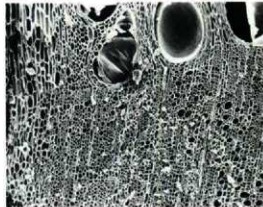
*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

No 7



木口×70

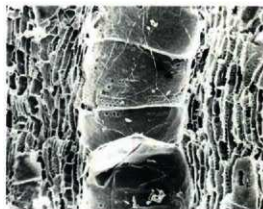
No 6



木口×70



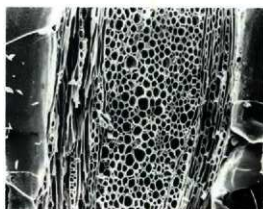
柁目×140



柁目×140



板目×140



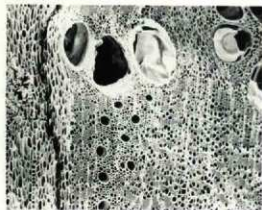
板目×140

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

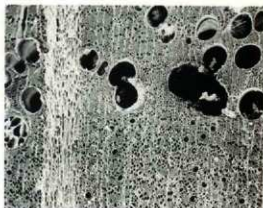


No.9



木口×70

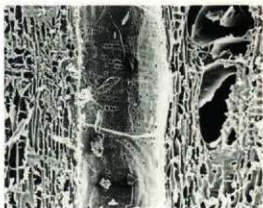
No.8



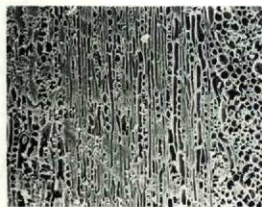
木口×35



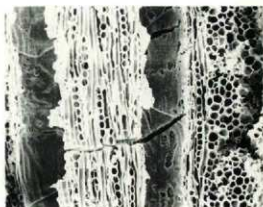
柁目×140



柁目×140



板目×140



板目×140

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

No.11



木口×35

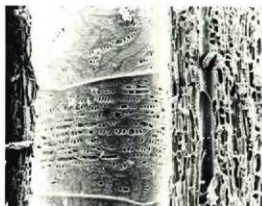
No.10



木口×35



柁目×140



柁目×140



板目×140



板目×140

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

*Quercus*  
(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月31日

---

発行 日本道路公団東京第一建設局  
東京都港区虎ノ門1-18-1 (03) 502-7431代

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478代

印刷 株式会社 弘報社 印刷  
千葉市古市場町474-268 (0472)68-2371代

---